

「早稲田スポーツ」の50年

『早稲田スポーツ』50周年記念書籍刊行委員会

ブローグ

「スポーツ新聞の日」を知っているだろうか。

1946（昭和21）年3月6日、日本初のスポーツ専門紙『日刊スポーツ』が創刊された。タブロイド版4ページ。50銭だった。これを記念して、3月6日が「スポーツ新聞の日」とされている。

創刊号の栄えある一面を飾ったのは、東京六大学野球復活のニュース。1943年から3年間、戦争で中断されていた学生野球が、いよいよ、この春から再開されるという話題をイラスト入りで紹介している。しかし、創刊号のトップ記事が、六大学の話とは……。と、思っているといけない。いかに多くの日本人が六大学野球の再開を待ち望んでいたかということなのだ。とにかく、日本は戦前、花菱アチャコ・横山エンタツが、「ヒット、ヒット、ひとごろし」などという駄洒落をふんだんに盛り込んだ漫才『早慶戦』で、一世を風靡したほど六大学野球の大好きな国柄だった。

これは、1949（昭和24）年の話になるが、時の連合国軍最高司令官、ダグラス・マッカーサー元帥が『早稲田大学新聞』と『三田新聞』合同編集の早慶戦特集号にメッセージを寄せて

いる。

「人間の人格を築く精神的価値のより大いなる源泉は大学対抗の運動競技部門以外に見出し得ない。そのような競技のなかでも最も特色のあるものは日米両国民が深く広い関心を持つ競技即ち野球である。(中略) 子供のころより日本人の間で野球が行われる熱心さと彼等の先輩によって表明された競技に対する異常な関心を見るとき、国家の再建に関係ある重大問題を日本の全国民が解決するのに役立つ偉大な道徳の力を私は野球のなかに見出す。……願わくばより強きチームに幸あらんことを」

マッカーサーは、野球好きで知られていた。そのマッカーサーにしても、学生野球で日本人がこれほど熱狂するとは、思いもつかなかったに違いない。と同時に、早慶戦にメッセージを寄せることの効果も十分計算しただろう。それほど早慶戦の「地位」は高かった。

案の定、復活された六大学野球は大人気。その人気ぶりを見て、学生スポーツ新聞を作れば売れるのではないかと考えた学生がいた。

それを、偶然見つけたのが、早稲田スポーツOBの堤哲(64年一政卒・早大学院)だ(以後、断りなしで登場する人名はすべて早稲田スポーツ新聞会出身者)。

堤は、毎日新聞社会部記者で、写真部長、事業本部長、学生新聞本部長、記事審査委員長から、東日印刷監査役を務めた。また、仕事の傍ら野球文化學會に所属し、野球関連の歴史を研究・発表している。その過程で、『三田スポーツ』の存在を知ることになった。

『証言 太平洋戦争下の慶應義塾』（白井厚・浅羽久美子・翠川紀子編）にこんな証言がある。

「復活第一回の早慶戦がございまして、そこで『三田スポーツ』を出そう、早稲田は『早稲田スポーツ』を出そうということで、共同編集ですけど、題字だけ違うわけです。当時、ちょうど今の『日刊スポーツ』が創刊した当方で、タブロイド版で、題字からスタイルから、全部日刊スポーツさんのまねをしました。それで、『三田スポーツ』というのを売りまして、当時のカネでとにかく八百円か八千円か、それで大いに潤いました」

堤の調べによると、『三田スポーツ』が創刊されたのは、1946（昭和21）年10月28日。しかし、第2号が発行された形跡はなかった。ところが、3年後の1949年6月30日に、『三田スポーツ』創刊号が、もう一度発行されていたという。タブロイド版4ページで5円というのはいかにも高い。これも1号だけで終わっている。

証言には勘違いがある。創刊は、復活早慶戦の春ではなく、その秋の早慶戦のときである。前述したように復活早慶戦の人气を見て、創刊を考えたというほうが自然だろう。

八百円か八千円というのも、『日刊スポーツ』をまねしたというなら、50銭の定価で1万6000部売れて、8000円だったと思われる。

また、証言に、『早稲田スポーツ』も同時に出した」とある。それが事実なら、大発見だ。

堤は、国会図書館で徹底的に調べ、早稲田大学の大学史資料センターにもあたったが、証言を裏づけるものは何も出てこなかった。この話の詳細は、野球文化學會発行『ベースボールジ

6』（2005年）にある。

『三田スポーツ』を日本初の学生スポーツ新聞というには、あまりに短命すぎるだろう。

やはり、学生スポーツ紙の嚆矢^{こうし}は、1953（昭和28）年7月1日、明治大学体育会の機関紙として創刊された『駿台スポーツ』だ。したがって、もし、「学生スポーツ新聞の日」が制定されることになったら、7月1日が妥当といえる。

それから、56年、現在、関東には、二つの大学スポーツ新聞連盟が結成されている。

東京六大学スポーツ新聞連盟には、『明大スポーツ』（53年、『駿台スポーツ』として創刊。『明治大学体育会機関紙』のあと、56年から現紙名に）、『早稲田スポーツ』（59年創刊）、『立教スポーツ』（72年創刊）、『慶應スポーツ』（78年創刊）、『スポーツ法政』（79年創刊）、『東大スポーツ』（71年創刊。現在休刊中）が加盟している。

関東大学スポーツ新聞連盟は、『中大スポーツ』、『スポーツ国土』、『駒大スポーツ』、『スポーツ大東』、『スポーツ東洋』、『青山スポーツ』、『日大スポーツ』（『日大新聞』の最終面。スポーツグラフィ誌『日大スポーツ』年1回）、『専大スポーツ』など。その他、『亜大スポーツ』、『帝京スポーツ』、『東海スポーツ』、『日体スポーツ』が関東に存在している。

関西には、老舗『関学スポーツ』（61年創刊）をはじめ、『関大スポーツ』、『同志社スポーツアトム』、『立命スポーツ』、『京産大アスレチック』、『近大スポーツ』、『龍大スポーツ』などがある。さらに、『学院スポーツ』（東北学院）、『西南スポーツ』、『福大スポーツ』と全国で計28

紙に及ぶ。新聞、雑誌の長期低落傾向に歯止めがからないマスコミの惨状から見れば、大学スポーツ紙は、盛況とっていいだろう。最近では、WEBにシフトする大学、雑誌形式にする大学など、表現手段もバラエティに富んできている。ただ、独立路線で発行しているのが、早大、慶大、法大だけというのは少し寂しい。

学生スポーツ紙が多数誕生した背景には、1987（昭和62）年から始まった箱根駅伝のテレビ放映の影響もある。この大会で初出場、最下位に沈んだ山梨学院が1992（平成4）年、初優勝すると、その名は全国区に。さらに、93年、94年は早大との一騎打ちとなつて、山梨株は一気に上昇。受験者数と偏差値が上がったとさえいわれた。これに目をつけた大学が駅伝に力を入れ始めた。戦後、続々と創設される大学を皮肉つて、評論家の大宅壮一は「駅弁大学」と命名した。大宅にならえば、「駅伝大学」の誕生といえる。それに伴い、スポーツ新聞の需要が生まれたのは当然のなりゆきだろう。山梨学院にスポーツ新聞がないのが不思議なくらいだ。

「駅伝ばかりでなく、少子化による学生の減少、定員割れなどを危惧した大学がスポーツに注目し始めたのです。運動部の強化を進める一方で、将来の可能性があり、学生にも人気のある体育系の学部や学科を新設して、スポーツビジネスの世界に学生を送り込もうとしています。そして、その活動を広報するために、スポーツ新聞の必要性が高まったといえるのではないのでしょうか」

というのは、阿部佳代子（81年教育卒・湘南高）だ。

阿部はプレジデント社に入り、『プレジデント』編集長を経て、現在、企画編集部長。大学のスポーツ戦略に関するムックを編集した関係から大学のスポーツ事情をよく知る。

また、作家・黒木亮（本名・金山雅之。80年法卒・深川西高Ⅱ79、80年箱根駅伝出場）が書いた小説『冬の喝采』のなかに、彼が、駅伝出場の記念に『早稲田スポーツ』をもらおうと、新聞会の部室を訪ねる場面がある。阿部は黒木の担当だったこともあり、部室の様子などを黒木から細かく取材された。

大学の運動部員が脚光を浴び、学生スポーツ新聞が隆盛を迎えていることは、アマチュアスポーツファンにとって、とても喜ばしいことだ。

しかし、一方で、私たちはどれだけ多くの運動部員による不祥事を耳に、目にしてきただろうか。ラグビーファンのみならず、スポーツを愛する多くのファンに失望と衝撃を与えた関東学院大ラグビー部員による大麻事件。08年暮れの東洋大陸上部員による強制わいせつも箱根駅伝直前だっただけに波紋を広げた。そのわずか3ヵ月後には日体大陸上部員による大麻、にせ札事件。このほか、2009年だけでも、天理大ホッケー部員の窃盗、京都教育大学体育会運動部員の集団準強姦、近畿大学ボクシング部員の強姦、関西大硬式野球部員の恐喝、日体大レスリング部員の強姦致傷、などが報道された。過去をたどれば、さらに多くの大学の運動部員が事件を起こしている。早大とて無縁ではない。

「運動部員を優遇しすぎ、甘やかすから」などという批判も多方面から聞かれた。

こうした問題に、学生スポーツ紙がどう取り組み、どう報道していくのか。防止のために何ができるのか。これからの大きな課題といえるかもしれない。たどりつくところは、学生スポーツ選手はどうあるべきか――。

早大のスポーツ全般が低迷といわれていた時代の新年、ラグビーの大西鐵之祐（95年没）は『早稲田スポーツ』を通してこんな檄を飛ばしている。

「年頭にあたって、部員諸君にいたいことは、アマチュアスポーツ選手はアマチュアスポーツ選手らしくやれということである。アマチュアとプロフェッショナルとはおのずから内容を異にしている。第一に諸君が考えることはアマチュアスポーツとは一体何かということ。又どうしてアマチュアスポーツを自分がやるのかという二点である。これを充分考慮する必要がある。これをはっきりと自覚してからスポーツを始めるべきだろうと思うのだ。アマチュアスポーツは、何よりも自分自身を作りあげることが第一義であろう。結局、自分の心との闘いということがいえる。人間形成はなまはんな気持ちでやっているのではマイナスである。やる以上は何よりも真剣さが肝要である。現在の部員諸君へいたいことは君らのアマスポーツに対する考え方の甘さへの警告である。人はどうでもいい、自分だけ強くなればそれでいいのだという考え、そして必要以上に勝負に執着する態度、それらはすべて排撃すべきものである。そんな小さな考え方ではスポーツそのものを深く理解することはできない。もっと、大きく広

い態度を養われなければならないと思うのだ。具体的に申せば、こういうことである。それは伝統ある早稲田スポーツ全体の歩みをしっかりと見つめること、自分のおかれている立場をしっかりとふまえることだ。多くの先輩達が偉大な努力をはらってきた。その事実を認めること、早稲田スポーツという長い歴史を担い、橋渡しをする継承者なのだという自覚、過去から伝えられたものをさらに高め、未来の人々へ継承させていくのだという自覚、これさえ持っていれば学生スポーツを至上のものとする事が出来るよう。学生スポーツの良さはそこにある。歴史の中の継承者としての自覚。これこそ大切なことである（談）（1962年1月号）

スポーツの世界で、アマチュアリズムなどは過去の遺物にすぎないという人もいる。しかし、学生スポーツから、その精神を払拭したら、何が残るのだろうか。

「いままでのアマチュア規定は、骨董品になるかもしれないが、骨董品というものは、後世にきわめて高い価値を残すものだ」（『アマチュアリズム200年』鈴木良徳著）

体協のアマチュア委員会委員長、JOC常任委員だった鈴木と言葉には含蓄がある。

アマチュアの語源は、ラテン語のアマトール（amator）、愛する人、といわれる。

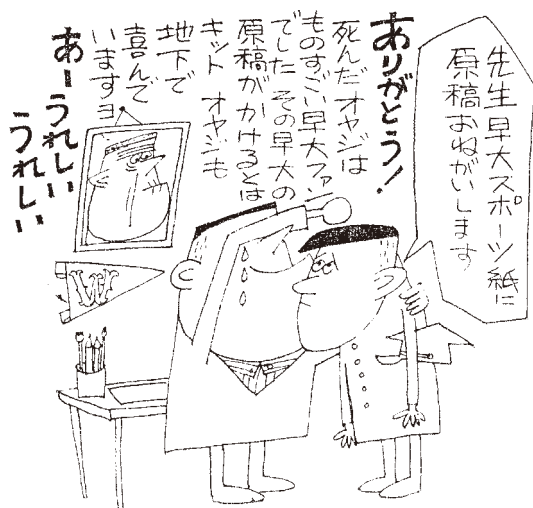
まず、スポーツそのものを愛し、学校を愛し、チームメートを愛し、自分を愛し、さらに愛される人間を目指す。そこに学生スポーツ選手の方々が凝縮されるような気がする。そのためには、大西のいうように、歴史を踏まえることは意義のあることだろう。

ここまで、アマチュアリズムを強調しながら、最後はプロ野球の話になる。09年、セ・リー

グでV3という新たな歴史をつくった巨人軍・原辰徳監督は好んで歴史小説を読むそうだ。その原には、名言がある。「歴史を学ばなければ、歴史をつくれない」。

ということ、『早稲田スポーツ』の歴史を半世紀さかのぼってみることにする。

なお、第一部は、年度を交錯させた書き方になっているため、時代感覚がないとわかりにくいかもしれない。第三部の年表を参照しながら読むことをお勧めしたい。



作家・開高健、山口瞳らとサントリー宣伝部で活躍し、当時、最も著名なイラストレーターだった柳原良平に早慶戦特集号用のカットを依頼したところ、こんなイラストを（63年6月号）。

目次

プロローグ

2

第一部 草創の頃、その青春群像

二つの「なぜ」から始まった「無謀なる冒険」／部員の下宿で、明スポ編集長に「教
えを請う」／こんなみつももない新聞は早稲田の恥だ／選手たちの協力と激励が推
進力になった／早慶戦特集号を巡って取っ組み合いのケンカ／古橋のあとに山中あ
り、山中のあとに山中なし／そして、神宮の森に「神風」が吹いた／山が呼んでい
る！ 新入生の先陣争い／アマチュアボクシングが輝いていた頃／「受験生特集号」
の効果で？ 運動部はホクホク／3年間に凝縮された黄金と暗黒／学生野球はピンチ
に立っている／どうしたらいいのか、石井監督の進退問題／東京オリンピックと『早
稲田スポーツ』／休刊の危機を救った11万円の借金は「埋蔵金」に／出すべきか、
出さざるべきか『スポーツ年鑑』の苦悩／全大学を相手に勝った無敵の水泳部／は
たして、あれが「スト破り」だったのか／3回で終わったのが惜しまれる早稲田スポー
ツ賞／当らずといえども遠からず、身内的人物寸評／伝統とは何か？ 丘を越え、年
代を超えたもの

15

第二部 早スポ「クロニクル」栄光と挫折とともに

第1章 星野、田淵、谷沢たちが活躍した六大学野球の隆盛

【コラム①】芸能面は楽し

第2章 早大スポーツ事件史

【早スポOB特別寄稿①】卒業アルバムの〴〵岡チャン

第3章 江川に立ち向かった岡田世代

【早スポOB特別寄稿②】創刊22年目の転換点

第4章 ラグビー再興 堀越入学で10年ぶりの日本一へ

【コラム②】早スポ25周年を祝福した「箱根駅伝V」

第5章 スポーツ選手入試事情の変遷

【コラム③】「桑田 早大進学」のスクープ!?

【コラム④】所沢新キャンパス誕生

第6章 平成の時代——早スポ拡大期

【コラム⑤】なでしこワセダの活躍

【早スポOB特別寄稿③】楽しいと感じた場所に身を置いて

第7章 平成の時代——新技術と躍進

第三部 早スポと早稲田大学体育各部の50年「記録集」

エピローグ

早稲田大学
制服
ターナー・タカタ

早稲田スポーツ

SPORTS GOODS
セプター
早稲田大学学生用品
昭和34年11月17日

発行によせて
大佐竹やち
私学とスポーツ

春秋慶応を連破！ 早慶戦



惜しくも二連覇逸す
学園ナインの健闘空し

寄稿
学生と熱情

祝 祝賀
KY商店
(株) K490
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1

時の人
木次文夫

寄稿の募集
早稲田大学学生用品

祝 祝賀
永田運動具店
文学部
スポーツバス
1000-0001

玉沢スキーの魅力！
スキー・スケート 売出し
W 玉沢
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1

生活整備の心機
アクティ
生活整備の心機
生活整備の心機
生活整備の心機

生活整備の心機
生活整備の心機
生活整備の心機
生活整備の心機

スキーシーズン来る！
学園「早大生」サービス
スキー・スケート用品
W 玉沢
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1

早稲田大学御用
スポーツ用品
W 玉沢
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1

『早稲田スポーツ』創刊号(1959年11月17日)の第1面

第一部 草創の頃、その青春群像

二つの「なぜ」から始まった「無謀なる冒険」

ニュートンのりんごを例示するまでもなく、「なぜ」を突き詰めていくと、思いもかけぬ発見や創造にぶつかることがよくある。

『早稲田スポーツ』も、一人の新入生が抱いた二つの「なぜ」が誕生の萌芽となった。

1959（昭和34）年4月、早稲田大学教育学部に入學した松井盈（横浜緑ヶ丘高）は、学内事情を知ろうとして買った『早稲田大学新聞』を読んで、強い違和感を覚えた。

朝日、毎日、読売といった一般紙でさえ、充実したスポーツ面があるのに、目覚ましい活躍をしている運動部がいくつもあり、学生たちのスポーツへの関心度も高い早大の新聞に、スポーツ記事がないのは「なぜ」だろう。

思い立つとすぐに行動を起こすのが、松井の性向だった。

さっそく、大学新聞会の部室を訪ねると、出てきた部員に率直に質問した。

「早稲田の学生ほど、スポーツに興味を持っている学生はいないと思いますが、どうして運動部の活動を記事にしないのですか」

突然の訪問者に対し、相手は小バカにしたような態度で、こう答えた。

「書かなければならない問題はたくさんある。そんなことに割くスペースはないよ」
けんもほろろ。取りつく島もなかった。松井は侮辱された思いで、部室を出た。

「早稲田の学生は人情味あふれる人ばかり」と、高校時代に聞いていた話とあまりにも違う対応だったので、怒りさえこみ上げてきた。

一方、高校時代に軟式庭球部で一緒だった海老塚敬子が、『明大スポーツ』に入ったことを知った。話を聞いてみると、取材や記事作りなど、実に楽しそうで、充実した学園生活を送っていることがわかった。

ここでまた、松井の頭にクエスチョンマークが浮かんだ。

スポーツ新聞が、明治にあつて、早稲田にないのは、「なぜ」だろう。

59年4月は、「世紀の結婚」といわれた皇太子・美智子妃のご成婚で日本中が湧いていた。10日、ご成婚パレードが行われた沿道は、53万もの人で埋めつくされた。この中継を見たがために、テレビを購入した家庭も多かった。テレビの受信契約数は58年、100万件の大体に乗ったばかりなのに、4月には一気に200万件に達していた。

また、前年12月23日には、東京タワーが完成（設計者は耐震構造理論の世界的権威・内藤多仲早大理工学部名誉教授）していた。電波事情も格段によくなり、2月に、日本教育テレビ（現テレビ朝日）、3月に、富士テレビ（現フジテレビ）が開局した。すでに開局していたNHK、日本テレビ、東京テレビ（現TBSテレビ）と合わせて、59年はテレビが総体として巨大メディアに成長していくための第一歩を踏み出した年である。

雑誌の世界では、『朝日ジャーナル』、『週刊文春』、『週刊現代』、『少年マガジン』、『少年サンデー』などが相次いで創刊され、週刊誌競争の幕開けを告げていた。前年に創刊された『女性自身』は『ミッチーブーム』に乗って大幅に部数を伸ばしていった。

マスメディアの華やかな活況とは裏腹に、大学のキャンパスは翌年に控えた日米安全保障条約改定の阻止運動で騒然としていた。大隈銅像周辺で毎日のように行われていたデモ行進の列に、積極的に飛び込んでいく新入生もいたが、戸惑う学生も多かった。松井と同じクラスの西川昌衛（独協高）もその一人だった。入学早々、デモの渦に巻き込まれていくことには抵抗があった。

5月の終わり、松井は、野球の早慶戦を大きく扱った『早稲田大学新聞』がキャンパスで販売されているのを見て、驚くと同時に怒りが再燃した。

「スポーツに割く紙面はない」といつておきながら、人気のある野球なら特集記事にするのか。ここで、松井は、二つの「なぜ」に、自ら答えを出すしかないと決意した。

ほぼ同時期に、第18回オリンピック（1964年）の開催地が東京に決まった（5月26日）ことも、松井の「やる気脳」を刺激した。

「クラスメートを誘って、スポーツ新聞を出そう」

6月に入って、松井は、親しくなっていた西川にスポーツ新聞の創刊計画を打ち明けた。ほかのクラスメートにも声をかけていたが、当然ながら反応は鈍かった。

しかし、大学での「行き場」に悩んでいた西川には、魅力的な提案に映った。

「大好きな野球の取材ができる！」

文学青年だった西川は、文章が書けるという点でも心が動いた。

まず、西川が松井の指に止まり、しばらくして、原田貞雄（日大高）、山崎茂（志村高）が手を挙げてきた。

松井の母親が神奈川新聞にコネがあるというので、とりあえず、印刷代を調べてもらった。3000部印刷すると、5万円はかかるという。広告料や販売収入を見込んだとしても、創刊までに、最低4万円は確保しなければならない。

そこで、夏休みは資金稼ぎに集中することにした。1ヵ月で2万円稼いだ。時給50円程度が相場だったから、4人で、400時間ほど働いたことになる。

西川は、中央郵便局の仕分け作業、小学館の倉庫業務などをして「ノルマ」を果たした。

アルバイト期間中も、4人は仕事が終わると、毎日、お茶の水の喫茶店に集まって、編集方針を議論した。

「一般紙は野球など人気スポーツこそ大きく扱うが、そのほかのスポーツには、あまり力を入れてないように見える。そこが、われわれのつけ入るところではないか」

まだ、どんな新聞になるかも煮詰まらないうちに、一般紙をライバル視して意気込んでいるところが、学生の純粹さだ。議論の末におおまかな編集方針が決まった。

創刊号の「発刊の言葉」にこうある。

「このたび私達は学内全体の一層のスポーツ精神昂揚を図るために月刊新聞『早稲田スポーツ』を発刊することになりました。これによつて学生時代における運動生活の有意義さを知つていただきスポーツ自体やスポーツ精神というものを更に深く理解していただければ幸いです。又我々はあくまでも限られた部だけでなく学内のすべてのスポーツを広く学内外に紹介していきたいと思ひます」

ずいぶんと要約されているが、議論のなかで確認されたのは3点だ。

①野球など、人気のスポーツに偏らず、すべての運動部の記録を公平に扱う。

②ヒーロー主義に陥らず、努力している多くの選手たちの姿を紹介する。

③スポーツの教育的側面、学業と運動との両立の問題などを積極的に取り上げる。

アマチュアリズムが厳格に生きていた時代だからこそその指針といえるだろう。

初期の記事には、「勉強との両立はうまくいっているか」というような質問や問題提起が、かなりの頻度で入っている。

話が逸れた。資金の話に戻ろう。

創刊にあたり、最大の「後押し」をしてくれたのが、軟式庭球部の板野寿夫監督だった。

松井は体育実技で軟式庭球を選択。実技講師をしていた板野の人柄にほれ込んだ松井は、板野にテニスの指導を仰ぐばかりでなく、創刊にあたつての相談もしていた。

その板野に、松井はアルバイト代では足りなかった残り2万円の「融資」を申し出た。創刊の意義を理解していた板野は快く引き受けてくれたうえ、広告主をいくつも紹介してくれた。板野は、(株)ウララネオンの創業社長でもあり、人脈も広がったのだ。松井と西川は、目黒区緑ヶ丘にあった板野の自宅にうかがって、借用书を書いた。

資金のメドがついた9月、いよいよ4人は創刊準備に入った。この頃、さらに福山龍介（三池高）、本多統（丸岡高）が加わり、部員は6人になっていた。

印刷所も横浜馬車道にある神奈川新聞社に決まった。横浜は1870（明治3）年、日本初の日刊紙『横浜毎日新聞』が発刊された新聞発祥の地である。早稲田からの道のりは遠く、不便だったが、『早稲田スポーツ』のスタート地点としては、うってつけの場所だったといえるかもしれない。

神奈川新聞（1890年創業。創業時の紙名は、『横浜貿易新聞』。1942年、現紙名に）は県下の高校新聞を何紙か印刷、指導もしていた学校新聞に理解のある新聞社だった。しかし、学校の保証がない『早稲田スポーツ』の印刷を請け負うことには、難色を示した。それでも、簡単には引き下らない松井の熱意に負けて、①母親を保証人にする、②印刷代は前金で支払う、という条件で、「取引先」として、認めてくれたのだ。

それからは、広告取りに忙殺された。二人一組になって、大学周辺と早稲田通りの店に片っ端から飛び込んでいった。多くの店は門前払いだったが、興味を示した店では、見本紙を見せ

てくれといわれた。誰もが、創刊前に見本紙を作ることなど思いもつかなかった。

結果として、大学界隈だけで20の店が、創刊号に広告を出してくれた。KY商店、前野書店、金城庵本館など、いまでもおつきあいのある店が何店かある。実にありがたいことだ。

ほかには、板野が紹介してくれた会社と運動部OBのいる会社を手分けして回った。

こうして、傍から見れば「無謀」としかいいようのない冒険は始まったのである。

部員の下宿で、明スポ編集長に「教えを請う」

資金は集まった。編集部員もどうにかそろった。しかし、部室がない。

体育局にかけあつて、「体育館事務所の一角を使わせてほしい」と交渉したが、「入り口近くの大机が空いているときには使ってもいいが、自分たちの机を置いてはいけない」と断られた。当初は、喫茶店「クレバス」で打ち合わせをしたり、体育館事務所の隅で、小さくなくては会議をしたりしていた。しかし、具体的な編集作業に入ると、どうしても部屋が必要だ。

学校にいちばん近かった福山の下宿（新宿区諏訪町）が主たる編集室になった。

さらに難問は、誰も、新聞製作の知識、経験がないということだった。

そこで、松井は、海老塚を介して、『明大スポーツ』の編集長だった鈴木宏（国立高）を訪ねることにした。松井は、鈴木に、「早稲田にもスポーツ新聞を作りたいので、いろいろ教えてほしい」と頼み込んだ。

その頃、『明大スポーツ』は、めばしい大学にスポーツ新聞の創刊を働きかけ、やがては全日本学生スポーツ新聞連盟を結成しようという構想を持っていた。そこで、鈴木は全面的にバックアップすることを約束した。

6人は、授業が終わると、ほとんど毎日、福山の下宿に集合し、ときには朝までプラン案や割り付け案を練った。そこには、明スポの鈴木も参加して、熱心に「講義」をした。

まず、鈴木は、「体育会の機関紙ではなく、独立路線で創刊したほうがいい」と、アドバイスした。機関紙では制約が多く、自由な報道活動ができないと、鈴木自身が感じていたからだ。『明大スポーツ』には、いつの時代も、脱機関紙志向が細々だが、脈々と流れていた。そして、2008年からは、いよいよ独立の方向で検討を進めているという。

鈴木は、自主的運営を説いたのだが、松井は、すでに体育局に資金援助を打診して、すげなく断られていた。運営の議論はしたが、実際には、議論の余地はなかったのである。

「学ぶ」は「まねぶ」つまり「まねる」からきている。松井はまず、明スポをまねするところから始めて、早スポらしさはそのあと出していけばいいと考え、鈴木から徹底的に「明スポメソッド」を学んでいた。創刊号が『明大スポーツ』によく似ているのは、その現れである。「スポーツランキング」も明スポが年初の目玉企画にしているというので、まねをした。しかし、ランキングの評価基準は両校でかなり違っていた。

59年度の明スポランキングは、①明大②中大③早大④日大。早スポでは、①日大②明大③中

大④早大となっている。60年度は、明スポ、①明大②中大③日大④早大。早スポ、①早大②明大③中大④日大の順だ。これだけ差があつては意味がないと、早スポは61年度、ランキングを中断した。62年度に一度復活したが、このときは、偶然？ 明スポ、早スポともに、①明大②中大③早大④日大の順になったが、翌年からは再び中断された。本格的に復活したのは、児玉恵司（82年社学卒・藤島高）編集長の80年である。担当の中本顕二（83年法卒・広大附高）が、新たな基準を作つて現在に至つてゐる。

児玉は日刊スポーツに入社し、現在、経営企画室。中本は講談社に入社、『FRIDAY』編集長を経て、現在は書籍担当部長。ちなみに89年の全日本で舵手なレクオドルブルを制して小野梓賞を受賞した吉田健二（92年教卒・膳所高）は、現在『FRIDAY』デスク。アメリカンフットボール部でディフェンスコーディネーター補佐を務める木原進治（93年一文卒・池田高）も『FRIDAY』を経て、現在は書籍担当の副部長。写真誌は意外に早大のスポーツと縁があるのだ。

明スポのランキングでは、ずっと首位の座を保ってきた明大も、66年度、①日大②明大③中大④早大、67年度、①日大②中大③明大④早大、と順位を落とし始めた。そのためではないだろうが、明スポも70年代から10大ニュースに変えている。いずれにせよ、学生スポーツ界は、古豪といわれた早大と明大、新興といわれた中大と日大の4校が牽引してきたことは、このランキングからも明らかだ。

10月1日、会長・文学部教授清原健司、顧問・板野寿夫、北島勝之助（体育局講師）と記入された文系サークルの申請書が認可され、同好会「早稲田スポーツ新聞会」が発足した。常識的にいえば、1年生ばかり6人のサークルに教授が名を連ねることは、まずない（会長が教授でないと同好会として承認されない）。しかし、板野が清原教授を紹介してくれたのだ。失礼ない方だが、板野の人選は確かだった。清原はスポーツに深い理解と造詣を持っていた。60年5月からは、連載コラム【勝負心理考】を書き、スポーツ選手が試合に臨み、ゲンを担いだり、緊張したり、不安がったりする心理的要因を軽妙な文章で説明してくれた。

スポーツ新聞会発足直前の9月26日、台風15号（伊勢湾台風）が尾張地方を襲い、史上最大の台風禍をもたらした。死者は5000人を超え、家屋の全半壊、流失15万1618戸。その傷痕に日本中が慄然となった。自然の前で、人間がいかに無力かを思い知らされた「猛威」だった。部員も、このときばかりは新聞のことより、被害状況のほうに気がなったほどだ。

こんなみつもない新聞は早稲田の恥だ

編集の基礎知識を鈴木から、学んだものの、実際、入稿準備に入ると、わからないことばかりだった。割付用紙があることも知らず、模造紙を新聞大に切って、見出しの位置、写真の位置などを鉛筆で書き込み、神奈川新聞に持っていた。それを見た担当者は、吹き出しそうな

顔をして、「何だね、これは。きちんと行数計算をして、このなかに収めてくれないと活字が組めないよ」と、割付用紙を出してきた。それを持ち帰り、徹夜で割付をやり直し、翌朝ようやく入稿することができた。

一面には、早慶戦の結果をメインに、大浜信泉総長の随想「私学とスポーツ」を載せた。

しかし、これは、西川が取材したものだ。取材にあたっては、秘書課長だった大西鐵之祐が、すべて手はずを整えてくれた。西川は、「あとにも先にも、このときほど緊張したことはない」というが、1年生が総長の取材をしたのだから、緊張するのは当然だろう。

総長が「得体の知れぬ」スポーツ新聞の記者に会ったという噂を聞き込んだ大学新聞が、「うちに無断で総長の取材をするとは、どういうつもりか」と抗議にきた一幕もあった。

11月17日、創刊号は刷り上った。松井がクラスメートに声をかけ始めてから、わずか6ヵ月半である。しかし、印刷代は全額前払いの約束だった。「創業資金」の4万円だけでは足りないことは最初から、わかっていた。広告と販売で十分埋め合わせができると思い、前払いのことをすっかり忘れていたのだ。

「とにかく広告の出ている部数だけください。お金を集めてきます」

松井は、そういつて35部（広告主は33だった）を受け取り、学校に戻った。それから、全員で、自分の担当を集金して回った。冷静に考えればわかることだが、新聞を見て、その場で支払ってくれたところは、ごくわずかだった。やむをえず、かき集めたお金を持つて神奈川新聞

に行き、「このお金の分だけ新聞をください」と、松井は懇願した。これまでに、部員たちの熱意と誠実な態度を見てきた担当者は、「わかった。残りは新聞が売れてからでいいよ」といつて全部渡してくれた。

こうして、ようやく手にした3000部。6人は、インクの匂いを格別な思いで嗅いでいた。ささやかな祝宴を開き、創刊の喜びに浸ったあとで、冷水を浴びせられるような「知らせ」があった。

安井俊雄教育学部教授が、創刊号を見て立腹しているというのだ。朝日新聞出身の安井は教育学部で新聞学を教えていた（のちに体育局長・83年没）。専門家としての安井は、『早稲田スポーツ』の稚拙な紙面に我慢ならなかったのだ。

教授室に駆けつけた松井と西川に向かって、安井は、早スポの創刊号を手にしながら、大変な剣幕でまくしたてた。

「こんなみっともない新聞は早稲田の恥になる。こんなものは2、3号でつぶれると思うが、どうしても新聞をつづきたいのなら、これから1週間、毎日俺の家にこい。新聞作りをイロハから教えてやる」

それから、松井、西川による連夜の吉祥寺通いが始まった。

新聞論、ジャーナリストの心構えから始まり、紙面構成、見出しのつけ方、記事の書き方、割り付けの基本、はては学生スポーツのあり方まで、安井は真剣に二人を指導した。

安井は、1時間ほどまじめに教えてくれたものの、そのあとは、奥さんに「お酒を」といって、毎晩3人の宴会になった。いかにも新聞人らしい安井の「もてなし」だった。大学教授と差し向かいで話し合った1週間は、二人にとつて、4年間の学生生活で最も充実した日々となった。安井は、水泳部の部長でもあった。創刊2号には、自ら「学生スポーツマン」という随想を書いた。まとめの部分を紹介してみよう。

〔前略〕スポーツ選手は一面から眺めると、学問と運動の併行というサンドウィッチ的存在で可哀そうだとも思うが、一面スポーツによって培われた闘志で物の見事に学問とスポーツの併行を実現している学生が相当多いのを見て快哉を叫びたくなるのである。

勝つということは尋常一様の手段では達せられない。猛練習、闘志、頭のひらめき、体力の養成などいろいろの条件が伴わねば栄冠は輝かない。

私の縁者の一人が博士の学位を獲得した時、親類一同で祝賀会を開くことをきいて彼は強くこれを拒絶して『学位をとるには尿の色は変らんが、ボートに優勝するまでは尿の色が変ったくらい物すごかった。ボートの優勝祝いだったら結構だが、学位くらいで……』と言ったことを想い出すのである。(中略)学生スポーツ選手の責任は重大である。マスコミの波にのせられて、スター的な有頂天になったら選手とは言えない。学生スポーツの真髄は何か、それは最後まで敢闘するファイトの発揮である。最後の一秒まで捨てない猛進、デッドヒートである。この精神が勉学にも、社会生活にも現れるであろう。やがては社会人として巣立つ若人にはま

たとないい好機ともいえよう。（後略）

選手たちの協力と激励が推進力になった

安井の「特別授業」を受けたあとに作った創刊2号は、トップ記事が箱根駅伝の展望だった。当時は、いまと違って箱根駅伝はメジャーな「行事」ではなかった。それが、創刊されたばかりの学内新聞のトップを飾ったのだから、長距離チームからは、大変喜ばれた。それを物語るエピソードがある。

この年の駅伝チームには、監督もコーチもいなかった。主将の藤井忠彦（60年教育卒・宇部高）が監督、コーチ、主将、選手の4役を一人でこなしていた。

その藤井が、2月、紙包みを胸いっぱい抱えて、体育館事務所にやってきた。

「大変そうだから、これを使ってよ」

包みの中身は、何十冊もの原稿用紙だった。1年生が大学の援助も受けずに新聞を発行するのだから、原稿用紙にも事欠いているだろうとおもんぱかった藤井の苦労人らしい心くばりだった。感謝の気持ちもこめていたに違いない。

藤井は、1年で、インカレの5000^リ、1万^リの2冠に輝き、2年のときには、5000^リで村社講平が持っていた日本記録を21年ぶりに書き換えていた（14分29秒8）。そんな日本を代表する大選手から、思いもかけない「差し入れ」があったので、受け取った西川は感激の

あまり、お礼の言葉に詰まったほどだ。

藤井を、苦労人と書いたが、異色の選手でもあった。少し、紹介しておこう。

これほどの選手が、なんとインターハイに出場した経験がない。藤井が陸上競技を始めたのは、高校3年生。もともと音楽の世界で生きていこうと、小さな頃からピアノを習っていて、県のピアノコンクールで3位入賞という結果も出していた。それが、いやいや出場した校内マラソンに優勝してしまい、陸上部に勧誘されたのだ。そして、藤井の力で、宇部高校は高校駅伝の山口県予選を勝ち、第3回全国高校駅伝に出場してしまった。そのうえ、陸上界では、まったく無名だった藤井が花の1区（1区が10^{キロ}になったのは、この大会から）で区間賞を獲ったのだ。その記録31分37秒は10^{キロ}ロードの戦後最高記録だった。

陸上で快挙を成し遂げたにもかかわらず、藤井の音楽への情熱は冷めず、国立音楽大学を受験して合格した。ところが、不幸なことに（早稲田にとっては幸いというべきか）家庭の事情で、入学を断念せざるをえなくなってしまった。

音楽の道を断たれた藤井は地元の子部興産に就職。しかし、仕事の合間に走っているうち、憧れの早稲田で陸上をやってみたいと思うようになり、学資の貯まった3年後に、受験。合格して、自ら競走部の門を叩いたという経歴の持ち主だった。

ところで、箱根駅伝の結果は5位。藤井は、「中大、日大、教育大（現筑波大）の3強に食い込むのが目標」と語っていたから、やや不本意な結果だった。5区を走ったインカレ20^{キロ}の

覇者、黒川澄夫（60年一商卒・逗子開成高）の区間10位が誤算といえたが、翌日、黒川は、6区を走る弟・輝夫（61年二商卒・鶴見工）の伴走を買って出た（当時、山の上り、下りは伴走が認められていた）。箱根駅伝史上ただ一人、山の上り、下りで区間賞を獲っている澄夫だからできた離れ業だ（1年のとき、5区で区間賞、前年、6区で区間新）。

早スポの創刊を、喜んでいたのは藤井だけではない。とくに歓迎してくれたのは、ア式蹴球部の主将だった川淵三郎（61年二商卒・三国丘高。現日本サッカー協会名誉会長）と副将の宮本征勝（61年二商卒・日立一高。78〜82年、早大監督・故人）だった。二人とも、すでに日本代表選手として活躍していた。

松井が創刊号の取材のため、東伏見のグラウンドに行ったところ、練習中にもかかわらず、二人は部員を集めて、「今度、早稲田スポーツ新聞が創刊されるようになったので、みんなで協力していこう」と伝え、「応援するから、がんばってよ」と激励してくれた。

それが、外交辞令ではなかったことは、川淵が、いまでも、当時の編集部員の名前を何人も覚えていてことで証明されている。また、川淵の指示が部員に浸透していたことは、63年に早スポに入った斉藤禎（67年一文卒・小石川高）が経験している。斉藤はホッケー部の担当で、ホッケーの試合記録をもらいに東伏見に行った。その帰途、ア式の主将、西山孝朗（64年二政卒・熱田高・故人）に突然、声をかけられた。西山は、川淵主将のとき、1年生だった。

「キミは早稲田スポーツだよ。毎号読んでいるよ。困ったことがあったら、いつでも相談に乗るから、とにかく、がんばっていい新聞をつくってよ」

入学当初、漠然とだが、学者になりたいと思っていた斉藤は、西山の親身の言葉に、「こんなに人に喜ばれ、大事にされるのなら、マスコミの仕事も悪くない」と、考えるようになった。西山のおかげで(?) 斉藤はマスコミの道をめざし、文芸春秋社に入った。『ナンバー』『クレア』などの編集長、常務取締役を経て、現在、日本経済新聞出版社会長。人との出会いが人生を変えた好例である。

一方、皮肉な因縁もあった。斉藤と同期の白根義幸(67年一商卒・小石川高)は卒業後、住友金属に入社。94年、常務取締役として鹿島アントラーズに出向すると同時に、早スポの恩人、宮本征勝に勇退を促すという「苦しい」仕事をした。宮本は、人望も厚く、鹿島にとっては、チームをJリーグ初代チャンピオンに導いた最大の功労者だった。その宮本を退任させたのだから、白根は、ファン、マスコミに散々叩かれた。しかし、白根はいう。

「前任者がエドゥーを連れてきて、私が行ったときは、たまたま悪い状況になっていたのです。当時、ジーコと兄のエドゥーが、監督の宮本さんを差し置いて練習を仕切り、スタメンまで決めていました。エドゥーに『キミはコーチなんだ』といっても、まったく聞き入れませんでした。采配をふるうのは、エドゥーで、試合後の戦評も彼がしていました。そのうち、外国人選手は宮本さんを軽視するようになり、チームがぎくしゃくするようになっていきました。私は、

宮本さん自身のステータスや誇りが傷つけられていると感じて、心が痛みました」

状況打破のため、白根は宮本と何度も話し合った。そして、しぶしぶだが、宮本は白根の説得に応じた。

アントラーズといえば、現社長の大東和美（71年教卒・報徳学園）は早大ラグビー蹴球部の出身。現役時代は主将として、70年度、大学日本一。日本選手権でも新日鉄釜石を30―16で破り、5年ぶり2度目の日本一に輝いている。また、76年には、早大監督として、大学日本一になった。アントラーズも、大東社長就任の翌07年からJリーグ初の連覇を達成している。勝ち運の強い男といえるだろう。早稲田スポーツの縁は、時を超えて、不思議な結びつきをしている。

野球部のマネジャーだった黒須陸男（61年二文卒・浦和高）も、「早稲田にこういう新聞は必要だ。いいことを考えたな」と部員に、おほめの言葉^ををくれた。

黒須は、選手たちの取材に対して厳しかった石井連蔵監督を説得して、取材の機会を何度も作ってくれた。

黒須の次女は小宮山悟（90年教育卒・芝浦工大柏高↓ロッテ）と結婚している。黒須、小宮山ともに石井連蔵の教え子という「縁」でもあった。

創刊した早スポを、積極的に応援してくれた選手の多くは上級生だった。しかし、創刊メンバーと同じ1年生で、密かに大歓迎していた選手がいる。

卓球部の木村興治（63年二法卒・秋田高）だ。木村は男子選手として、卓球部史上唯一の世界選手権出場経験者で、61年の北京大会は、星野展弥と組んで男子ダブルス優勝。団体戦でも、8勝1敗と好成績を残した。全日本選手権では61年シングルス、62年混合ダブルスでそれぞれ優勝。卒業した年の63年、世界選手権ブラハ大会では、伊藤和子と組んで混合ダブル스에優勝している。その木村は、早スポ30周年企画（89年5月号）の取材に対して、こう語っている。

「入学した年に創刊したとあって、とくに感慨深い。当時の思いとしては、世界選手権の取材が印象に残っている。開催地の中国は当時、国交が回復していなかったので、試合のこと以外に、中国の様子も話した。写真は万里の長城で撮ったものを載せてもらった。取材は卓球部の部室。同学年が相手でも、駆け出しの新聞記者のようにまじめに聞いてきたので、私も真剣に答えた。一般紙からの取材も受けたが、卓球をやりたくて入った早稲田。その大学の新聞に卓球で掲載されたことは、本当にうれしかった」

木村は「今年のホープ」として、1年生のときから取材されているが、2年生のときに世界卓球の話を取材した堀健雄（64年一商卒・板橋高）は、当時、こんな木村の喜びまでは知らなかった。堀は卒業後、日本水産に入社。財務畑を歩み、現在、中部水産社長。

こうした運動部員たちの協力と激励がなかったら、いくら部員に熱意があったとしても、新聞発行は長くつづかなかっただろう。

むろん、すべての運動部員が最初から『早稲田スポーツ』の創刊を知っていたわけではない。

これが機関紙と独立路線との違いだ。機関紙なら体育局が正式に創刊を告知し、協力体制を作っただろうが、自主的に発行しているのだから、自分たちで取材しながら、広めていかなければならない。

米式蹴球部の練習風景を撮ろうと、伊藤昌俊（後出）が、東伏見にカメラを提げていったところ、対戦校のスパイと間違えられて、^{すいか}誰何されたこともあった。そこで、腕章を作ったほうがいいと、エンジンに白のフェルト地で早稲田スポーツと縫いつけられた腕章をオーダーした。しかし、早スポの認知度はすぐに高まり、腕章を使用することはほとんどなかった。

早慶戦特集号を巡って取っ組み合いのケンカ

新聞の販売は、午前9時から、夜の8時まで11時間にも及んだ。運動部には第二学部の学生が多かったから、夜の販売が重要だったのだ。販売できる部員が誰もいないときには、200円ほど出してアルバイトを雇った。現在は、野球の早慶戦特集号しか販売していないが、66年までは、すべての号をキャンパスの3カ所で売っていた。12月号や1月号の夜間販売は寒くて誰もがいやがった。しかし、66年には第二学部も二文だけになり、学生運動が激化していくなかで、キャンパスは落ち着いて販売できる環境ではなくなっていた。そんな事情もあり、67年からは早慶戦特集号以外の販売を止めている。販売しなくてもやっていける基盤ができたからともいえる。

さて、創刊して、学内で販売するようになると、入部希望者も増えてきた。

荏澤元康（61年一政卒・室蘭栄高）や伊藤昌俊（61年教卒・浪商高）の上級生もやってきた。さらに、1年生では、津本信博（63年教卒・桜井高）、下本地實（63年教卒・甲南高）、浅野展行（63年一文卒・修道高）などが入部して、ようやく同好会としての体制が整ってきた。津本は卒業後、大学院に進み、のちに教育学部長を務めた。02年には総長選挙に立候補し、白井克彦現総長に敗れている。早スポ出身の総長が誕生していたらと思うと、ちょっと残念な気もする。

津本は、07年7月に亡くなったが、生前、「キャンパスで早稲田スポーツの学生が活動している姿を見ると、昔を思い出して、ジーンときた」といつていた。

亡き津本ととくに親しかった西川は今年（2009年）8月、不思議な再会をした。西川は、早スポ50周年パーティの打ち合わせのため早大に行く途中、古書店で講談社学術文庫を買った。レジで、なにげなくページを繰ってみたら、「津本信博」のゴム印が押してあったのだ。

津本が、「俺もパーティに参加させてくれ」と訴えているようで、西川は胸が熱くなった。

西川は卒業後、証券会社に入ったが、営業先の日本信販にスカウトされ、クレジット業界の最盛期に専務取締役として腕を振るった。「早稲田カード」を西原春夫総長（82～90年）に提案し、大学提携カードを創出したのは、西川にとって思い出深い仕事である。

創刊から5ヵ月経った4月、2年生と新生が入り編集部員は一気に増えた。

2年生では、宇野英雄（理工・こゝろ母高）、中野邦観（一政・日大三高）が、1年生では、堤哲（前出）、堀健雄（前出）、山崎英夫（一法・春日部高）、少し遅れて佐々木勝衛（一法・野沢北高）が入部してきた。キャンパスには立て看板が林立し、前年にも増して激しいデモが繰り広げられていた。

このなかに、運動部断念組が二人いる。中野は1年のとき軟式野球部に所属していた。しかし、レベルの高さについていけず、「投げる・打つ」をあきらめ、「見る・書く」に転向。山崎はハンマー投げでインターハイに出場したあと、腰痛が治らず、大学では競技をつづける気がなかった。しかし、競走部員に見つかり、合宿所まで連れて行かれた。入部を断ったものの陸上には関わっていたという未練もあった。そこに、合宿所にあった『早稲田スポーツ』が目飛び込んできた。「これだ」と、即座に入部を決めたという。

宇野の出身地である挙母市はトヨタの「城下町」だが、59年、豊田市に市名変更されている。だから、早スポと豊田市は同年齢だ。このとき、トヨタが欧米の自動車メーカーを追いつき、世界のトップ企業になろうとは、誰が想像しただろうか。同じように、『早稲田スポーツ』が50年も継続し、大学スポーツ新聞を代表するまでに成長するとは、部員の誰も考えていなかったに違いない。

1年生が入ってきた時点で、教育学部の学生だけで創刊した『早稲田スポーツ』も部員が全学部にわたるようになった。

そこで、「部員も増えてきたことだし、このへんで野球の早慶戦特集号を出したらどうか」と提案した西川に対して、松井が激怒した。

「あんなに議論して、特定のスポーツに肩入れはしないと決めたじゃないか。それを無視するのか」

「とはいっても、新聞が売れなきゃ、赤字は解消されないよ。早慶戦特集号なら確実に売れるよ」

原則論の松井と現実論の西川。ともに譲らず、激論は、取っ組み合いにまでエスカレートした。周囲にいた部員は、あっけにとられて見守るばかりだった。

いまではとても考えられない歴史の一コマだ。

結局は、松井が折れて、4ページの早慶戦特集号を発行することになった。

歴史に「もし」はないというが、「もし」編集長の松井が頑として譲らなかつたら、早スポがその後も継続していたか、微妙なところだ。なぜなら、青息吐息で進めていた新聞発行を一気に黒字に転換させたのは、この秋の早慶6連戦だったからだ。

部員は増えたが、相変わらず部室がない。締め切りのときには、困ったあげく、新大久保の連れ込み宿（いまでいえば和風のラブホ）「山水」を利用したこともある。

「山水」では、隣の部屋から、「うるさい！」と怒鳴り込まれました。「集中」できなかったカッブル（その頃はアベックといった）は気の毒というべきだが、それほど白熱した議論をしてい

たという証でもある。

晴れて体育館3階に部室を与えられたのは、創刊から2年5ヵ月後の62年4月。体育局が、ようやく、早スポを一人前だと認めてくれたということだ。編集長は3代目の堤哲になっていた。

初の早慶戦特集号では、4年生の荳澤が文で、伊藤が写真で活躍した。

荳澤は、「早慶戦物語」など、400字で28枚もの原稿を書いた。おそらく、早スポ史上、一人が1ページで書いた最高の枚数ではないだろうか。挿し絵入りの紙面は、まるで古き時代の講談雑誌のようだ。

伊藤は早スポに写真の強さを知らしめた。トップページを飾った早慶の主将、徳武定之と渡海昇二（ともに後出）の写真は、部員に十分なインパクトを与えた。

荳澤は、ナラサキスタックス副社長のあと、樋崎産業常勤監査役に。伊藤は設立間もない関西テレビに入社。報道局などを経て、考査室部長を務めた。

この号で、慶大担当になった堤と伊藤は、日吉の慶大グラウンドに取材に出かけた。

そこで、二人は、早大では「ありえない光景」を目にした。練習が終わったばかりで、まだ下級生がトンボを持ってグラウンドをならしている最中に、上級生が何人もタバコを吹かしていたのだ。

「吸っていいんですか」と聞いた伊藤に、エースの清沢忠彦（後出）は独特の岐阜なまりで、「野球は楽しくなくっちゃ、やってられんのよ」と答えた。

さらに、翌年秋の早慶戦特集号の話になるが、堤は、日吉から神宮球場まで、慶大野球部のバスに乗って【同乗記】を書いた。そこには、「神宮球場に近づくにつれ、のんびりした内にも緊張感が高まり、タバコの煙が処々であがる」と記されている。実際には、タバコの煙でモウモウとしていたそうだ。

同じ号では、堀が、「野球は精神の修養」とする早大と「楽しんでするのが野球」とする慶大の対比を描いている。初めて取材した慶大野球部員の言動が早スポの新人記者に与えた衝撃はかなり強かったとみえる。

取っ組み合いの末に発行した、早慶戦特集号は初の黒字となった。

ゴム印で「早慶戦特集号」と赤く押された新聞を、声をからしながら売った「ごほうび」としての黒字である。「恥ずかしさより、誇らしい気持ちのほうが強かった」と堤は述懐する。

ところで、松井や西川にとって、新聞はあくまで記事が中心で、写真は二の次だった。創刊時、カメラは1台もなく、「新聞社や部から借りればいいよ」という認識だったのだ。それだけ活字の信頼性が高かった時代だったともいえる。

創刊してからは、さすがにカメラなしではやれないことがわかった。あわてて月賦（分割払

い)で買ったのが、ミノルタユニオマツト。1万6000円だった。誰でも撮れる自動露光とあるので、当時よく売っていたカメラだ。しかし、45ミリのレンズのため、顔写真やスナップ写真を撮る分にはいいが、スポーツ写真を撮るにはまったく不向きな機種。創刊メンバーはそれほどまでに、カメラには無知だった。

そこに、写真部に所属していた伊藤が、「スポーツ写真を撮る人がいなくて困っているようだ」という話を聞き込み、キヤノン6Lと135ミリの交換レンズを引っさげて、「入れてくれないか」とやってきたのだ。

伊藤は写真部とかけ持ちで活動していたが、当時の写真部は「スポーツ写真など芸術からほど遠い」といって、暗室を使わせてくれなかった。そこで、伊藤は下宿の雨戸を閉め、押入れに黒いカーテンを張り、暗室代わりにした。夏の暗室は、素っ裸で現像していても、体中から汗が流れ落ちた。

キヤノンが初の一眼レフカメラを発売してから、今年で、早スポと同じ50年になる。

さらに、宇野は、200ミリレンズ付きのアサヒペンタックスS2を持っていた。ここに新聞会は、文武両道ならぬ文写両道が整った。

宇野のカメラは、私物だったが、望遠レンズを装着したカメラが部になかったため、いつの間にか、部の備品同然になった。卒業に際して、宇野は「太っ腹」にも、ペンタックスを後輩たちのために寄贈していった。宇野は積水プラントシステム取締役名古屋支店長を務めた。

早スポにとって、カメラは撮影する道具というだけではなく、格好の「質草」になった。広告主でもあった質店「スズヤ」や「タカノ」には、当座の支払いのため、しばしばカメラが「入庫」された。個人が麻雀の負けを清算するために、入れることも珍しくなかった。

19世紀、スケートのアマチュア規定に、「もらった賞品を売ったり、質入れしたりしてはいけない」という条項があったという。早スポ部員の行為には、アマ規定違反の疑いも？

ペンタックスの末路は不明だが、質屋で「流れた」のではないかという。ならば、カメラは、部のため、部員のため、最後まで貢献したことになる。ペンタックスにとって、それが本望だったのか……どうかはわからない。

古橋のあとに山中あり、山中のあとに山中なし

60年夏のローマオリンピックには、早大から、現役7名、OB6名の13選手が出場した。『早稲田スポーツ』は、選手に現地の様子を、はがきか手紙で送ってくれるよう依頼した。

そんな難題をよく頼んだものだが、引き受けた選手も選手だ。律儀りちぎにも、水泳の山中毅（教4・輪島高）、ボクシングの伊東靖倅（二商4・江北高）らがはがきを出した。OBのウエイトリフティング、大沼賢治（52年一政卒）の手紙はさすがと思わせる文章。ホッケーの木原征治（二政2・山陽高）からの手紙がわかりやすい。

「（前略）……四時に選手村を出発。切れることのない人垣から、日本選手団に向けられる声は、

やはり山中選手が一番多かったようです。会場のサブトラックで一時休憩しましたが、暑いため、選手団は涼を求めて大乱雑。この大理石競技場は、大理石の立像が五、六十もあり明日から、我々ホッケーチームの試合場です。ここの芝は本当に美しく、さすが太陽の国と感心しました。そのサブトラックより、地下道を通りいよいよ本会場へ。明るい光と、歓声と、拍手の中に立った時、何か体が引締まるように感じました。（中略）聖火入場の後、祝砲の響き渡る中、数千羽の鳩が放たれ、太陽も沈み、本当に美しかったのはこの時だったでしょう。このメインスタジアムは、約十万人収容できますが、国立競技場を少し大きくした位です。我々の想像が大きすぎたのか、暑いので簡単にしたためか、とにかく何か物足りなく感じました。マスゲームもないためか、日本選手団が退場する頃には、観客もうんと少なくなりました。退場して、また人垣を分けて、村に帰ったら皆クタクタで、いそいで食堂へ行く人が多くいました。いよいよ明日から試合開始、プレイボールです。今夜は明日から試合のため、早い消燈です。では頑張ります」

試合前日の夜に、これほどの手紙をしたためた木原の責任感の強さがうかがわれる。

戦後初の出場だったホッケーチームは3戦3敗で、予選を突破できなかった。

木原も書いているが、伊東、大沼も山中の人氣に驚いている。

伊東は、苦戦を予想されたライト級で3回戦まで進み、その健闘は賞賛された。

山中は、すでに高校3年生でメルボルンオリンピック（1956年）に出場。400メートル

1500^{メートル}自由形で二つの銀メダルを取っていた。メルボルン前から、山中は泳ぐたびに記録を伸ばし、今年（09年）、ローマで行われた世界水泳選手権開催中に客死した国際水泳連盟副会長・古橋広之進が持っていた400^{メートル}から1500^{メートル}までの日本記録を次々に塗り替えたうえ、200^{メートル}の日本記録まで破っていた。

山中の出した世界記録は28。古橋に匹敵する実績だが、全盛期の古橋が無敵だったのに比べ、山中には強力なライバルがいた。オーストラリアのローズとコンラツズ。山中の世界記録は、出すとすぐ二人のどちらかに破られるという「不運」の連鎖が起こった。いや、よきライバルに恵まれたというべきであろう。

ローマに入る前、山中は絶好調といわれ、金を期待された。しかし、宿敵マレー・ローズにまたも敗れて銀。1500^{メートル}では、4位に終わった。早スポには、「山中は不世出の名スプリンターである。今後日本に山中の如きスプリンターが現れるのは何時のことであろうか」と書いてある。スプリンターかどうかは別にして、このときから50年になろうとしている現在まで、世界に通用する自由形の選手はいまだに現れていない。

山中は、スター意識もなく、取材にはいつも気楽に応じてくれた。

ローマから届いたはがきには、いかにも山中らしく、「ローマの飛行場に着いておどろいた事は、美人の多い事でした」と書かれていた。

山中敗戦の真相は、早スポ25周年企画（84年7月）で、石黒秀樹（86年政経卒・倉吉東）の

取材に応じた山中が率直に語っている。石黒は中日新聞から東京新聞整理部デスクに。

すでに書いたように山中は絶対好調だった。それを見ている記者たちは、「金メダル」と書き
たて、取材攻勢は尋常ではなかった。

「選手への配慮もなかった。何度イヤと思ったかもしれないが、失礼なこともできなし、意外
と神経質な私は自分でも落ち込んでいくのがわかった」

この裏には、山中の人にいけない苦悩があったのだ。

「ピークがレースの一週間前にきてしまった。レースが近づくにつれ下降線。一日にオレンジ
1個しかノドに通らないこともあり、ベスト体重70〜72^キグラが、66^キグラまで落ち込み400^メ
決勝を迎えた。試合前のウォーミングアップで自分の調子のよくないのを感じていた。全身が
ガタガタする。水をかいても水に手がかからない。最悪とやっていい状態だった」

350^メを6位で折り返した。そこで、「我に返った」。山中の本能的闘争心というのだろう
か。ソマーズ、コンラッツを抜き去り、2位でゴール。1500^メのときは「もう抜け殻」だっ
たそうだ。

平泳ぎの大崎剛彦（二商3・金沢泉丘高）も200^メで銀メダル。また、山中は800^メリ
レーで銀、大崎は400^メドレーリレーで銅。それぞれ二つのメダルを獲得した。

水泳競技で決勝に進出した日本選手は、わずか5人。そのうち4人が早大生だった。

200^メバタフライ決勝で、吉無田春男（教3・九州学院）が5位、井筒賢造（二商1・輪島高）

が8位だった。

60年は、安保条約阻止運動で、1月から騒然としていたが、5月20日、衆議院本会議で承認の強行採決が行われた。これに抗議しようと6月15日、全学連主流派のデモ隊7000人以上が国会周辺で警官隊と衝突。東大生、樺美智子が死亡する事態になった。7月15日には、岸内閣総辞職。19日に、池田勇人内閣が発足した。こうした状況下でのオリンピックだった。しかし、夏を境に、日本の世情は回り舞台のようにガラリと変わった。

この年の暮れに、池田内閣は、10年で国民所得を倍にするという「所得倍増計画」を決定。日本は高度成長の道を歩み始めた。1970（昭和45）年まで、ほぼ10%台の成長をつづけ、69年には、GDP（国民総生産）は世界第2位にまでなっていく。

そして、神宮の森に「神風」が吹いた

60年秋、早スポにとっては「救いの神」となった早慶戦（伝説の6連戦）を迎えた。

この様子は、6連戦のとき、マネジャーだった黒須睦男（熊谷組、前出）が、61年春、早スポの早慶戦特集号に寄稿した文から伝えてみる（注・名前、学部、学年、出身校を付け加え、誤字など一部訂正した）。

対明大戦に不覚の負星を得て（それも10対0の大差）、全員がこれではいかんという反省の時期があったのが、あの早慶六連戦の勝利を握る一因となったのであろう。（中略）

昭和三十五年秋季の最後を飾る早慶戦は、十一月六日午後一時三十二分から、久し振りに優勝のかかった一戦（早大は連勝すれば優勝。2勝1敗で優勝決定戦。慶大は勝ち点さえ上げれば優勝）というので、神宮狭しとばかりに集まった大観衆（6万人）の中で開始された。

早大は安藤元博（教3・坂出商・故人）、慶大は清沢忠彦（政3・岐阜商）と両エースをマウンドに送り、必勝を期した。この試合は、末次義久（二商2・済々黌高）、村瀬栄治（教育4・岐阜商）の好打で、2―1と先勝、明日の二回戦に勝てば優勝と優位に立ったが、二回戦は金沢宏（二商4・岩国高）三浦清（政3・秋田商）で始まり、一、二回に一点、二点、計三点を取られ、早大必死の反撃も、三浦から角谷隆（文3・宇治山田高）と好投手リレーに押さえられ、4―1と無念の涙をのんだ。第三戦は安藤、清沢という一回戦と同じ投手。この試合は結局3―0で勝ったが、徳武定之（二商4・早実高）の本塁突入をめぐってもめ、守備についての機知（三塁側慶大応援席をにらみつけ、徳武をかばうかのように三塁コーチボックスに立った。これで物の投入はピタリと止まった）で無事おさまった。

で、いよいよ優勝決定戦となったのであるが、慶大生の意気込みはすごく、応援の学生が前日の夕方から神宮の周りを取りまき、スリーピングバッグや毛布で防寒し、なかにはローソク

灯で麻雀をし、秋の夜長を過す人がだいたいの。その陽気な慶大側に比べて、一塁側は、人数五、六十名、ローソクもつけず、もう早くから眠りについていたらしく、しんとして声一つなかった。

そして、迎えた決定戦の第一は、二回に取られた一点を追って、最終回一死後、代打・鈴木恵夫（教2・清水東）の右中間を抜く三塁打、続く石黒行彦（二政3・仙台一高）の右前安打で同点とし、延長十一回の末引分けに終わった。投手は最後まで安藤と角谷。

再試合は、切符を徹夜で刷らせても間に合わない等々があり、中一日を置いた十一日、安藤、角谷という同じ投手を送って始った。これは両投手の力投でどうしても点がとれず、又延長に入り、十一回の裏、慶大に無死満塁、三塁走者安藤統夫（政3・土浦一高）打者は渡海昇二（商4・芦屋高）という一打サヨナラの場面がきた。

早大は、ここで外野手を強肩の鈴木勝夫（二商3・戸畑高）を左翼に、（肩の弱い）伊田保生（二政3・明星高）を右翼にと入れ替え、安藤の右腕に任せた。渡海は第一球インコースのシュートボールを強振、打球は入れ替えた伊田への浅い飛球。球は伊田から野村徹（二政4・北野高）へ、走者安藤は回り込んだが、タッチのほうが一瞬早くアウト。そして又満塁にして、代打田中勝芳（商4・沼津東）を三振に打取り、絶体絶命のピンチを切り抜け、又もや引分けに終わった。そして、六回戦という前代未聞の試合になった。

投手は五たび登板の安藤。角谷も連投で始った。そして、二回、二塁失で生きた二走者を置いて、所正美（教4・岐阜商）の左越三塁打で二点。五回にも一点を取り、疲れを見せぬ安藤

の右腕もますますさえをみせて、3―1で押切った。そして、三シーズン振りに、あの天皇杯を早稲田の杜に持ち帰る事が出来たのである。

試合前夜の球場周辺を観察しているところは、さすがマネジャーである。当時、神宮球場には、照明がなかった。そのため、日没引き分けが2試合もあったのだ。2年後にはナイター設備ができて、6連戦の可能性はほとんどなくなった。

6連戦の延べ入場者数は、36万5000人とも39万人ともいわれている。いまでは、「神宮球場にそんな観客が入れたのか」といぶかる人が多いかもしれない。

『慶応義塾大学新聞』（57年6月15、25日号、および10月25日号）に、おもしろい記事がある。六大学野球連盟の公称切符数と実際の入場者数が合わないのは、なにか裏があるのではないかと、『早稲田大学新聞』、『慶応義塾大学新聞』、『三田新聞』の3紙が合同声明を出したという。早慶戦の切符（当時、チケットとはいわなかった）が学生の間で入手困難になっていたのを憂いての「抗議」といつてもいいだろう。3紙の言い分はこうだ。

「われわれの調査では、神宮球場が満員になったときの入場者数は6万5000人。しかし、連盟発行の公称切符数は5万6000枚。9000という差の切符がどこかに流れているのではないのか」



大観衆の前で、歓喜の記念撮影。後列中央の背広姿が外岡野球部長。
右へ、飛田穂洲、石井監督、徳武主将。



2戦目には初のチアリーダーが登場。慶
応女子高の高山藍子は学生チアガール
第1号。指導者としても草分け。

6連戦の入場券。外野席
50円、内野席100円、学
生席30円。写真は、最終
戦(上)と2回戦(実際は初
戦)のもの。



これに対し、連盟は、「早慶戦の切符数は、招待券も含めて、1試合あたり5万6522枚。神宮球場には、それ以上、入らない。6万5000人入れるというのは、計算の間違いだ」と返答している。しかし、当時の新聞は、連日6万を超える大観衆と書いているのだ。また、昭和20年代の『三田新聞』には7万人とある。外野の芝生席は詰め込もうとすれば、いくらでも詰め込めたのだ。

6連戦の記録映画も製作され、毎年、新入生のために大隈講堂で上映された。そして、鈴木恵夫が3塁に滑り込むシーンでは、必ず拍手が沸き起こった。

早慶6連戦については、同時代を生きたノンフィクション作家・長尾三郎（故人）の『神宮の森の伝説 六〇年秋、早慶六連戦』（文春文庫）に詳しい。

そのなかに、『早稲田スポーツ』からの引用が何カ所がある。飛田穂洲の話のほか、大浜信泉総長と高村象平塾長の談話も、出典を明示していないが、60年秋の早慶戦特集号の巻頭「私の観戦」から引用したものだ。

6連戦の伝説は『早稲田スポーツ』にもある。印刷した1万部があつという間に売り切れ、増刷に次ぐ増刷で、6万部以上も売れたという。試合が終わると、神奈川新聞に増刷分を取りに行き、信濃町駅前にある葬儀社・帝都典礼まで運んだ。「車庫に置かせてください」と頼み込んだのだ。

しかし、部数は少々誇張されて伝えられてきたようだ。50周年を機に検証してみたところ、

2万部前後ではないかという結論になった（ちなみに、4年後の春に優勝したときの販売部数は記録が残っていて、5488部、2位だった秋は3115部）。2万部としても、20万円。大卒新入社員ボーナスを含めた年収を上回る売上額である。100円硬貨や紙幣も混じっていたと思うが、仮に、すべて10円硬貨だとすると、90キログラムにもなる。まさに、「大判小判がザックザク」状態だった。

早スポ創刊の59年、1円を除き、硬貨がすべて新デザインになった。10円硬貨は縁のギザギザがなくなった。50円硬貨は100円と紛らわしいというので、穴が開けられた。100円硬貨の絵柄は、鳳凰から「稲穂」に変わった。これが僥倖の予兆だったのかもしれない。そういえば、明治維新後、新通貨として、「円」を提案したのは、大隈重信。6連戦の奮闘を讃えて、円の縁が巡ってきた……というのは、ムリなこじつけである。

6連戦は、まさに「神風」だった。おかげで、すべての借金を返済し、余剰金も出た。翌年夏には、東山温泉（福島県）で、自己負担なしの合宿を行った。

六大学の伝説が生まれたこの年は、プロ野球でも早大OBによる伝説が生まれている。

前年まで、西鉄ライオンズの監督として日本シリーズ3連覇を達成していた知将・三原脩が、早大の先輩、森茂雄（31年商卒、大洋球団代表、元早大野球部監督）の誘いに応じて、大洋ホエールズの監督に就任。6年連続最下位だったホエールズをセ・リーグ優勝に導いたばかりで

なく、「ミサイル打線」を誇る大毎オリオンズに4連勝して、日本一に。日本シリーズのMVPはこの春、早大を卒業した近藤昭仁。近頃、〇〇マジックという言葉が安易に使われているが、60年の流行語になった「三原魔術」が元祖だ。

また、日本シリーズの第2戦が行われた10月12日、日本中を震撼させた事件が起きた。日本社会党委員長・浅沼稻次郎（24年政経卒）が演説中の日比谷公会堂で、右翼少年に刺殺されたのだ。

浅沼は、早大在学中、相撲部、漕艇部、弁論部に入っていた。相撲部では副将だったという説もあるが、当時の相撲部はかなり強く、「早稲田は大将以下5人の選手が誰でも他大学では大将になれる力を持っていた。山口二矢少年に刺殺された浅沼稻次郎は、このため他大学では十分選手になれるのに、万年補欠だった」（浅岡信夫）という話のほうに信憑性がある。この談話は、宇野、中野、西川、松井、山崎が4年になったとき、体育局の依頼で編集した『輝く早稲田スポーツ 60年のグラフィック』に掲載されている。浅岡は大正末期に活躍した万能選手。相撲、ラ式蹴球、水泳、競走、柔道部に属し、それぞれ第一人者だったというから驚く。

山は呼んでいる！ 新入生の先陣争い

さて、1961（昭和36）年に入ってきた部員は、従来と、やや雰囲気違っていった。

中津海光夫（65年一政卒・札幌西高）、高橋清輝（65年文卒・富士森高）、奥本和通（66年一

法卒・広尾高）、逸見素子（65年一文卒・日女大附高）らだ。逸見は女子部員の第1号。しかし、同期のバンカラ男たちのなかで、徹夜することがはばかられた。当時、どここの家庭も厳しかった。簡単に徹夜を許してくれるはずもなく、1年足らずで退部してしまった。逸見（現姓・上）は、卒業後、早大職員として、教務部事務部長を務めた。

逸見と入れ替わるように3年生の大熊千種（64年一文卒・東洋英和）が入ってきた（62年のこと）。大熊（現姓・岡田）は、当時、学生では無敵だった黒松和子（64年二商卒・金城学院）を擁する女子庭球部を担当。カメラを片手にコートサイドを動き回っていたが、彼女も創刊メンバーと同じメカ音痴。撮った写真はほとんどボツになった。人当たりがよく、広告の新規開拓では力を発揮した。

この年代のキーワードは「山」といいかもしれない。

中津海は、入学早々、山岳部に入ろうと思っていた。実際、山岳部の部室まで何回か行っただが、いつも閉まっていた。聞いてみると、富士山で遭難事故を起こしたため、部活動を自粛しているという。そこで、体育会はあきらめ、同好会「山の会」に入部した。

また、中津海は、新聞学科だったから、何かの機会に見た『早稲田スポーツ』に興味を覚え、こちらにも籍をおいて、しばらく、二足のわらじをはいていた。しかし、早スポのほうが、新人を大事にしてくれると感じ、新聞会に「わらじを脱ぐ」ことにした。

高橋の出身校、富士森高校は、八王子という場所に恵まれていることもあり、登山が盛んな

学校。高橋は、そこで山岳部に所属していた。

二人は、山に関してライバルとなった。お互い、若武者の先陣争いのように、山のプランを提出していた。むろん、すべてが採用されたわけではない。

高橋が最初に通したプランは、なんと【晩秋の一日を紅葉の山で】（61年11月）という秋のハイキング案内（なぜ、こんな企画が通ったかは、第一部の最後の項を読めば納得）。

中津海は、ワンダーフォーゲル部の春合宿（3泊4日）に同行して【奥秩父乙女高原ワンデル新人合宿同行記】（62年6月号）を書いた。

この間、【山は呼んでいる】（62年3月号）というフォトエッセイがある。中央アルプスの写真を配し、山の魅力をセンチメンタルに綴ったものだ。紙面で異彩を放っている。

特集として、【山岳部とワンゲル部はどちらがう】（63年11月）で、両部の違いを詳細に比較している。挑戦（山岳）と楽しむ（ワンゲル）、放浪するワンゲル、山岳の目的は「雪と岩」といった具合だ。そのほか、「山の会」や女性だけの山岳同好会の紹介、【山岳部春山合宿】、【冬山と遭難】など、山関連企画は枚挙にいとまがない。

二人が入部してから、部員有志とはいえ、八ヶ岳、三ツ峠、乾徳山など毎年のように「登山活動」があった。この影響もあってか、64年度夏合宿の最終日には、奥入瀬溪流14^キロハイクが組み込まれている。

高橋は、卒業して、立川女子高教員に。山岳部顧問として、高校生による海外登山の先駆的

役割を果たした（ヒマラヤの高峰・チュルルの登頂、コングールⅣ峰世界初登頂など）。また、数々の山岳活動の功績が認められ、95年度、都民文化栄誉賞を受賞した。現在、立川女子高校長。中津海は大成建設で総務系を歩み、営業管理部長、総務部長、執行役員秘書部長などの要職を務め、大成ロテックの副社長で現役を退いた。

中津海の周りには、人が集まった。面倒見がいいのと「裕福そう」だったからだ。

中津海が編集長になってから、西武新宿線下落合駅近くにあった彼の下宿は、さながら梁山泊。まじめに割り付け作業もしたが、家に帰りそびれた部員がよく寝泊まりした。中津海の実家から仕送りがあったのを嗅ぎつけた（一部）後輩は、ハイエナまではいかなくとも、ハエのようにたかっていた。

部員たちの交流は、卒業後もつづいた。中津海が広報予算を差配できる地位に就いたことを知った講談社の江口拓（後出）は、ほどなくムックの広告をお願いにいった。前出の文芸春秋、斉藤禎も単発の新企画があったとき、中津海に広告の依頼をしている。堤哲も毎日新聞事業本部長のときには、ずいぶんと中津海を頼りにした。

また、中津海は、早稲田スポーツOB倶楽部の設立に尽力。長年にわたり会長を務めた。

中津海の場合だけでなく、初期の早スポ部員たちの絆は、社会人になっても、いたるところで有効に機能していた。高橋は、生徒たちとヒマラヤをめざすに際して、自衛隊にいた3年後輩の佐瀬正弘（後出）の世話になった。高橋は、佐瀬を通して、風速、風圧、低酸素訓練に自

衛隊の施設を使わせてもらったのだ。

アマチュアボクシングが輝いていた頃

みなさんは、次の文章を読んでどう思われるだろうか。

「私の選手生活は噂で作られた私と、現実の私の間に横たわる冷たい事実を見つめなければならぬ。私の世界は噂で作られた私と、現実の私の間に横たわる冷たい事実を見つめなければならぬ。ボクシングの世界でほとんど伝説的な人を父に持った私は、その冷たい事実はこの世界が常に英雄の出現を待ち続けている事によって生まれる事なのを知った。その結果、早稲田に入学すると外部の人達は闘えば必ず勝つ一人のヒーローが体育館三階で満を持しているということを何の疑いもなく信じていた。その様な外部の状況は私にとって、試合に負ける事は即背任であるかの様な悲しい錯覚をさせた。それは勝負を決する試合を恐怖そのものにした。私はボクシングが苦痛になり、道場に出る事も少なくなった。その様な私を父の名声を鼻にかけた思い上った態度とする人もあり、ますます私は苦しくなった。そんな中で私は二年になり、堤に勧められて初めて試合に出場した。幸い私は試合に勝つ事が出来たが、試合中に感じる惨めさには勝てなかった。四角なキャンパスの中の私の苦痛は人々の好奇の対象でしかなかった。その中で試合終了後、勝者（それは常に私でなければならなかった）の右手を挙げる時までのやりきれない長さ、私はそれを約束される程才能に恵まれてもいなかったし、それ程運の強い私でもなかった。

それを充分知らされた二十分間でボクシングに別れる決心をした。その年、リーグ戦に不参加した私は退部させられた。一抹の寂しさの中で救われた様な気持ちの私を、その夏、堤はわざわざ茅ヶ崎まで来てくれて部に復帰する様に勧めてくれた。もし彼の友情と市原（康允）先生の、その折から今日までの温情がなければ、私の選手生活は無かつたらう」

これは、『早稲田大学スポーツ年鑑』61年度版にボクシング部主将だった堀口昌信（62年二商卒・逗子開成）が卒業にあたって書いたもの。堀口の父は「拳聖」といわれたピストン堀口（恒雄）。昌信の息子・昌彰（人科・茅ヶ崎高）も87年に早稲田に入学し、ボクシング部に入っている。偉大すぎる父親の下に生まれ育ってきた子どもが、親と同じ世界で生きていくことの辛さ、苦しみを率直につづった堀口の文は、早スポの歴史にあつて、最も心を打たれるものの一つだ。アマチュアボクシングが注目されていた時代ゆえに、堀口が受けた「ストレス」は強かつたといえる。

堀口は立ち直り、勝ったり負けたりしながら部生活をまっとうした。これには、同僚堤五郎の支えが大きく寄与している。堀口は、のちに父の興した「ピストン堀口ジム」を継ぎ、昌彰はじめ、現在、日本ミドル級第1位・鈴木典史など、多くのプロボクサーを育てている。

スポーツファンはヒーローを求める。しかし、それが過度になったとき、どういふことが起きるのか。先に書いた山中毅のローマでの取材攻勢と堀口の記事は、取材する側、応援する側に大きな示唆を与えてくれる。

60年代のボクシング部からは、堤五郎（62年二商卒・高輪商）、柄沢正夫（64年二商卒・北豊島高）、白鳥金丸（65年二商卒・北斗高）、益田弘二（66年二商卒・中央商高）、高山将孝（68年二商卒・中央商高）という5人の日本チャンピオンが生まれている。

この頃の状況は、中本顕二（前出）が書いた【再建の道は険し、昨年春には解散の危機】というボクシング部の歴史を紹介した囲み記事にある。

「（前略）昭和二十四年からは、現在の監督である出原万三、石丸利人（ヘルシンキ、メルボルンオリンピック代表）らを擁し、昭和二十六年の関東大学リーグを制し、全日本大学王座決定戦でも優勝。また四十年前後は白鳥金丸、益田弘二、高山将孝ら東京オリンピック代表を三人も輩出。この時期まで早大選手は毎年全日本選手権者に名を連ねていた。当時は、大学リーグ戦の最盛期であり、会場には連日四千人の観客が詰めかけたという。

ところが、昭和四十八年、新入部員が一人もいないという異常事態が起きる。そのため、ボクシング部は一部から二部に転落。さらに翌年、三部にまで落ちた。五十二年には二部に復帰するが、一部に帰り咲けないまま現在に至る（後略）」（81年6月号）

中本が書いているように、当時のアマチュアボクシング界は確かに活気があった。

リーグ戦には、ボクシング担当者だけでなく、空いている早スポ部員がこぞって（といっても5、6人だが）応援にいくようなこともしばしばあった。

当初、ボクシング部の練習場は早スポと同じ体育館3階にあった。そこで、部員は選手と言

葉を交わす機会が多かった。

奥本和通（前出）は、「おもしろいから、体育実技でやってみたら」と、マネジャーだった宇野千里（65年一商卒・船橋高）に「そそのかされて」ボクシングを選択した。「実技だから、たいしたことない」と高をくくって授業に出た。そして、グローブをはめて「1分間」シャドーボクシングただけで、腕が上がらなくなった。ボクシングがいかに過酷なスポーツであるかを思い知らされ、実技の出席率は極端に悪くなった。しかし、応援に「尊敬の念」が入るようになった。

奥本は、同期より1年多く勉学を重ね、奥村印刷に入社。のち、常務取締役営業本部長として営業部門を統括した。

受験生特集号の効果で？ 運動部はホクホク

1962（昭和37）年3月には、受験生特集号を発行した。なぜか、この号だけ奥付が日刊スポーツ印刷となっている。その経緯を、編集長だった西川も覚えていない。

現在は、新入生歓迎号を4月に発行しているが、この当時は、新入生にではなく、受験生に對して、運動部のアピールをしている。それほど、部員獲得が大変な時代だったのだ。

この号に「運動部員の生活白書」が掲載されている。中野が取材して、手記の形でまとめたものだ。中野は、63年、読売新聞に入社。政治部を経て、調査研究本部で憲法問題を担当し、「読

売新聞憲法改正試案」作成に参画した。現在、尚美学園大学総合政策部教授。

登場するのは競走部主将・蒲田勝（教4・田辺高）。蒲田は、インターハイ1000^{メートル}で、2連覇、3年のときには、2000^{メートル}と2冠。57年に出した10秒5の高校記録は、あの飯島秀雄（67年教卒・目黒高）でも破れなかった（タイ記録）。しかも、75年に正式記録は電動計時に変ったため、手動の高校記録として「永遠」に残った。大学に入ると、関東インカレ1000^{メートル}連覇と順調だったが、3年時は、故障で走れず、4年のインカレで1000^{メートル}優勝。62年からつづく「短距離王国」の礎となった。彼が語る合宿生活の一部をのぞいてみよう。

朝食は、毎日玉子一個、みそ汁、おしんこ、佃煮、それにめしはドンブリ一杯。ドンブリ一杯では足りないだろうと心配する人がいるかもしれないが、これは一ヵ月五千円の合宿費の中からひねり出すのだから容易ではない。一日の予算は百五十円。したがって、足りないものは、近くのギョーザ屋、ソバ屋、パン屋などに行って補食する。

今日は受験生十人ばかりをカンヅメにして、十時半から一時まで、みっちり英語の講習会である。他の大学の運動部員が近くをうろうろしているから、ちょっと目を離して外に出ようものなら、日本全国行脚のトラの子を失うことになる。入学が決まるまで何かにつけて気苦労が多いマネジャーの渡辺（定恭Ⅱ教4・秋田高）も大変だろう。

（選手の獲得合戦の凄さを感じる）

今日の練習はジョグ（軽く四百一周）、アップ（二千―千五百）を流して、柔軟体操十五分、ハドル八十回、五台で十五回ほど、腹筋練習三十回を五セット、計百五十回、腕立て伏せを二十回、四セット、計八十回、三百メートルダッシュを三回、バーベル四十キロを十回、五セット計五十回、懸垂七回四セット計二十一回、最後にダウン（軽く一周）、整理体操で終わり。これだけやれば、どんなやつでもだいぶこたえる。受験生の中には青い顔をして、故障を訴える者もいたが、無理にやらせる。三味線も多いからだ。

（受験生も大変だ。三味線＝うそをつく。ごまかす。慣用句としては、三味線を弾く）

シーズン中は、まず全員四十名で準備体操、続いて投擲ブロック、跳躍ブロック、短距離ブロック、長距離ブロックの四つに分かれてそれぞれに指導者がつく。私は短距離なので、四百一周のジョグで軽く流し、十分間体操、千二百―千五百のアップで調子をうけて、百五十を八分の力で六、七本流して、アップシューズをスパイクに替える。あとはめいめいスタートダッシュの練習。短距離はスタートが生命なので気が入る。まず三十メートル五回、それから、五十メートル三回、七十メートル二回、百メートル一回やって終わり。つぎに百五十メートルを全速で三本。これで仕上げができたわけ、あとは各自ハイジャンプをやったり、砲丸をやったり、幅跳びをやったり。恒例の部員全員の千六百リレーが終わったら、整理ダウン、整理体操で解散。以上で約三時間かかる。

夕食―今日はオムレツにもやしいため、みそ汁、漬物。一日百五十円でよくこんなうまいものが食べられるものだ。いつもおばさんの腕に感心する。

さて、この合宿に入っている者は家から大体一万五千円ぐらい仕送りしてもらっている。

内わけは、五千円の合宿費、食べ物や栄養剤に三千円、交通費千円、通信費千円、二、三千円の交際費。これで足りないものは実技の助手で月四、五千円はかせげる。ついでにいうと、部費を一カ月百円とっている。

（管理栄養士から見たら、当時の食事はどうなのだろうか）

私は教育学部だが、午後の授業には出られない。しかし、語学だけは練習を休んでも出るようにしている。こんどの学期末試験でも運動部員は出席数からして足らないので、実に苦しかった。それでも競走部で留年して卒業をおくらせた人はいまだかつて出ていないそうだ。

（ここまですべて、受験生の参考になるように中野が、取材している）

「受験生特集号の効果は絶大だった」といいたくなるほど、有望新人が、かつてないほど多く合格した。運動部のマネジャーたちは、この成果に大満足。蒲田の記事が影響を及ぼしたわけではないだろうが、とくに競走部の合格率、合格数が群を抜いていた。

早スポ62年4月号には、「各部に逸材がずらり」、「質量とも充分」という見出しが並んだ。とりわけ、高校時代に200^{メートル}平泳ぎで世界記録をマークしていた松本健次郎（教・佐伯鶴城高）と甲子園の優勝捕手、大塚弥寿男（教・浪商学園）の入学は一般学生からも大歓迎された

(二人とも故人)。

山崎英夫(前出)の解説記事を見てみよう。山崎は王子製紙で人事を担当。米子工場長のあと、(株)永昌源の専務取締役を務めた。

「ことしは、OBと現役のチームワークがオリンピックピクムードと相俟って、各部推薦者総数(各部十五名まで推薦できる)二八六名に対し、一九二名合格という割合にして67・1パーセントの好成績を残した。(昭和)34年が44・4、35年が50・7、36年が54・7パーセントで、次第に入学率が良くなっているのは、運動選手でも勉強しなければだめだ、という自覚と、ますます盛んになるスポーツに対する学校当局の深い理解の表れであろう。

そのなかでも、最も多数の有望選手を集めたのは競走部である。推薦十五名のうち十三名がパスし、その他、五名で計十八名が入部している。しかも、オリンピック候補選手の小野田晃(教・小田原高)、七沢英次(二政・桜ヶ丘高)や障害の斉藤忠(教・日大二高)、短距離の和田哲(二商・桜ヶ丘高)など高校トップクラス(インターハイ優勝)が目白押しで、競走部三年計画は幸先よい幕開けといえる……(後略)」

松本と大塚は、62年入学組のビッグ2といわれた。翌63年のビッグ2は、甲子園の優勝投手、八木沢莊六(教育・作新学院)と日本最速の男・飯島秀雄(教・目黒高)だ。

大塚は66年、八木沢は67年、それぞれロツテオリオンズにドラフト1位で入団した。ここまでは、普通の話だが、69年、ドラフト9位で、飯島秀雄がロツテに入団したのだ。早大ビッ

グ4の3人までが、ロッテに「集結」したのもまた何かの縁だろう。

ドラフト指名直後の早スポ（68年11月号）には、インタビュー記事がある。

「野球は中学でやった程度で、プロでは」と語っているが、掲載されているキャッチボールの写真をみると、なかなかサマになっている。飯島は、世界初の代走専門プロ野球選手だ。

早稲田スポーツには、江口拓（66年一政卒・都立西高）、小黒哲夫（66年教卒・大田原高）らが入ってきたが、自転車部の推薦で入ったはずの（早スポの新人紹介に載っていた）Kも入部してきた。聞いてみると、自転車競技の経験はないという。出身校が自転車競技の名門校だったため、早稲田の自転車部にいた先輩が、推薦してくれたということだった。推薦といっても厳格な審査があったわけではないのである。そもそも、15人も推薦できる部はそう多くなかった。

小黒は剣道部担当で、早慶剣道の予想などを書いていたが、卒業後、稲門会で知り合った現大田原稲門会会長・岩上総一郎（70年社学卒・大田原高）は、奇しくも剣道部出身だった。69年の早慶戦で5人抜きをして、最優秀選手に選ばれたという（小黒の卒業後のこと）。大田原高出身の選手では、競走部の現監督・磯繁雄の実績が光る。81、82年、インカレ110マイル障害で2連覇している。

小黒は、大田原市役所に入り、オウム真理教が大田原に拠点を設けた際、企画課長として立ち退き交渉の先頭に立ち、苦勞した。その後、企画調整室室長、民生部長などを歴任した。

62年入学組は、2年になるとき、小黑と江口の二人しかいなくなった。春に編集長になった中津海は、新会員募集に力を入れ、新人のほか、2年生の宮坂祐次（二商・諏訪清陵高）、宮田博子（教・新居浜西高）、中島勝男（理工・早大学院・故人）らが入っている。

中島は66年、東京電力に入社早々、研修中に感電死するという不幸に見舞われた。彼の事例は、東電のリスクマネジメントマニュアルにいまでもあるという話だ。

62年6月25日には、『早稲田キャンパス』が創刊された。創刊前には、早スポの販売拠点にやってきて、販売時間、場所、売り上げなどを熱心に聞いていた。そして、『早稲田大学新聞』に対抗して、公正、公平な視点で紙面を作ると意気込んでいた。

これで、大学には、『早稲田大学新聞』（1922年創刊）、英字新聞『ワセダガーディアン』（1936年創刊）、『早稲田スポーツ』、『早稲田キャンパス』の4紙がそろった。

民主党衆議院議員の山田正彦はキャンパス紙の初代編集長である。

早スポ同様、『早稲田キャンパス』創刊号にも、大浜総長のインタビュー記事がある。その内容は、①医学部新設が悲願、②第二学部を縮小して、第一学部を拡大する、③借金をしても第二学生会館を建設するなどあり、大学の考え方がよく出ている。

運動各部からは、「第二学部の縮小は、運動選手の入学を圧倒的に厳しくする」と、不安や不満の声が聞かれた。

キャンパス紙創刊には、作家・干刈あがたも関わっており、その体験は長編小説『ウォーク

inチャコールグレー』に描かれた。しかし、1990年の上梓から間もない92年、胃がんで亡くなった。49歳の若さだった。

早スポにも、「一瞬」だけのちの作家がいた。栗本薫（中島梓）だ。栗本（独身時代の本名・山田純代）は、71年、文学部に入学してほどなく、友人と連れ立って早スポの編集部にやってきた。編集長の豊田和夫（73年教卒・印旛高）が不在だったので、後藤洋一（73年商卒・津高）と島崎潤一郎（74年社学卒・龍野高）が面接した。ちょうどそのとき、早慶戦特集号の進行中で、当時、女性に圧倒的人気だった俳優・山口崇（59年教中退・戸山高）の取材をすることになっていた。彼女は山口の大ファンだということで、取材に同行したという。しかし、それっきり部室に顔を出すことはなかった。栗本は今年（09年）5月、すい臓がんのため56歳で逝去。蛇足だが、1984年、早スポ秋の早慶戦特集号には、栗本薫の青春ミステリー3部作『ぼくらの世界』の広告が掲載されている。

豊田はスポーツニッポン新聞に入り、写真部次長、レース部長などを務めた。カメラマンとして、78年、東京写真記者協会賞グランプリを受賞している。

現在も行われている「本庄・早稲田100^キハイク」を企画したのは、『早稲田キャンパス』だ。早稲田精神昂揚会、自動車倶楽部と共催していたが、いまはキャンパスも自動車倶楽部もなく、昂揚会の主催になっている。日本ウオーキング協会の設立に関与し、専務理事を長年務めた木谷道宣（現ウオーキング協会副会長）は、キャンパスの出身。

しかし、『早稲田キャンパス』は、80年7月1日号（240号）をもって休刊した。

この年、早稲田大学は創立80周年を迎え、秋にはさまざまなイベントが催された。

早稲田スポーツが関係したものには、渋谷の東横百貨店（現東急百貨店東横店）で体育局が主催した「早稲田スポーツ展」がある。

各部から、優勝記念のカップなどを提供してもらい、カップ類139点、写真149点、メダル33個、ペナント25点、資料130点が展示された。慶大からも賛助出品が50点近くあった。早スポは10月号を80周年記念号として、「早稲田スポーツ展」を特集した。この号は、出展目録として会場で配布された。

また、すでに紹介したが、4年生部員は、体育局の要請により、体育局創立60周年記念アルバム『輝く早稲田スポーツ 60年のグラフィック』を編集した。

応援部は10月14日に催された「稲穂祭」で、新応援歌『燃ゆる太陽』を発表。作詞・佐伯孝夫、作曲・吉田正は、当時、歌謡曲界の黄金コンビだった。

運動部の記念行事としては、ワンダーフォーゲル部が念願の台湾遠征を果たし、自動車部は一般学生参加のラリーを初めて開催。成功を収めた。

3年間に凝縮された黄金と暗黒

ここで、クイズを一つ。

『早稲田スポーツ』の創刊メンバーが編集に携わっていた3年間（59年～61年）、部の歴史上最も輝かしい戦績を残していた運動部と史上最大のピンチに陥っていた運動部があった。それぞれ、何部と何部だろうか？

これに答えられたら、よほどの早大スポーツ通といえる。

答えは、相撲部とラ式蹴球部（68年からラグビー蹴球部）だ。

早稲田の相撲部は現在まで、4人の学生横綱を輩出している。そのうち、1929（昭和4）年の学生横綱・豊平悠三（第11代）と33年の貝藤勝美（第15代）は昭和初期の選手だ。戦後、学生横綱は出ていなかった。それが、わずか3年の間に2人の学生横綱が生まれたのだ。

59年の第37回全国学生相撲選手権大会で、小谷修一（60年二商卒・鳥取西高）は、大会3連覇確実といわれていた大本命、立命館大の田畑外登雄を破って優勝。早大に26年ぶりの学生横綱が誕生した（松井盈が取材）。

60年の第38回大会は、団体戦をノーシードから勝ち上がり、決勝で、日大を3―2で退け、実に30年ぶりの日本一になった（堀健雄が取材）。この年の学生横綱は、のちの大関・豊山、内田勝男（東農大）だ。

61年には、2年生の新保茂（64年二商卒・東筑高・故人）が、学生横綱になっている。新保は2年生で綱を取ったので、連覇が期待されたが、それ以降は不思議に勝てなかった。

師範の豊平悠三は、横綱披露会で、「あえて君の欠点を言えば、それは君があまりにも早く強くなってしまったということだ。まだ二年生なので卒業まで三年連続横綱になれるよう努力しなさい」（62年1月号）と激励しているが、新保が勝てなかったことを知って読むと、予言のようにも思えてくる。

相撲部にとって、奇跡のような、夢のような3年間。まさに黄金時代だった。

体育局が編集した『早稲田スポーツ百周年記念誌』には、当時の早スポの相撲記事がたっぷりと引用されている。

豊平は相撲普及のためにさまざまなアイデアを出した。相撲パンツの導入もその一つ。相撲パンツには賛否両論あるが、2004年、日本相撲連盟は、小中学生の大会では「原則パンツ着用」を決めた。時代が豊平の思想に追いついてきたといえるかもしれない。

関本進（82年政経卒・甲府一高）が、早スポ（79年10月号）に書いた【相撲パンツに見る近代相撲の夜明け】というコラムには、「相撲を世界に普及、発展させるにはパンツ着用が不可欠だ」とある。

なお、上田守英（80年一文卒・早大本庄）は、早スポ編集長を務め終えた4年時、相撲部に入り、大会に出場した経験がある。当時、早大は2部で、団体戦は7人必要だった。相撲部は上田を入れて7人しかいなかった。晴れの初戦、身長177^{センチ}、体重85^{キログラム}の上田は、国士館の選手に一発で吹き飛ばされた。それでも、リーグ戦で1勝した。

卒業までに、学生時代にしかできないスポーツを何かしたかった。高校の後輩が相撲部にいた。2年のときに、体育実技で相撲を選択した。それだけの理由で相撲部に入ったというのだから、これも「無謀なる冒険」の挑戦者だったといえる。

上田は、毎日広告社に入社。業務推進部長を経て、現在、毎日新聞社に出向し、ビジネスソリューション本部で、社会啓発事業の企画・営業・运营管理に携わっている。

しかし、相撲部の黄金時代は、3年で終わりを告げる。相撲部が再び脚光を浴びるには、1989年6月4日、井上太（教4・明大中野）が東日本学生相撲大会で優勝するまで、28年間待たなければならなかった。

相撲部が黄金なら、ラ式蹴球部は、暗黒ともいうべき3年だった。

59年、Aブロック4位。このときは、まだ「不振」といわれただけだった。

60年、創部以来初の5位。早慶戦は0―0の引き分け。当時の早スポには、「凡戦……両校とも得点能力が極端に低く、0―0の引分けとは全くふがない」と書かれている。

この年、早明戦の入場者数は1235人と記録され、「凋落」といわれ始めた。

61年には、部員数が一時、三十数人になったという。そして、Aブロック最下位で、Bブロックに転落。なぜだか、この年、早スポにラグビー記事は1行もない。この頃の早明戦は2000人の観客を呼ぶのがやっとだった。

しかし、ここから早稲田ラグビーの真骨頂を見せた。大西鐵之祐監督、そして横井久監督はじめ現役・OBが一体となった建て直しは見事だった。

62年4月の早スポに、大西監督のインタビュー記事がある。大西は抱負を聞かれて、「抱負も何もない。とにかく元のように強くせねばならんだろう」と答え、不退転の決意がうかがえる。具体的には、おおむねこんなことを語った。

「練習時間を正確にして、一部と二部、各部間の調整をうまくやる必要がある。練習時間、環境、選手の質・量、他大学のスポーツ振興策などすべてが不振の原因だ。選手自体は昔と変わっていないが、一般学生の無関心、冷淡さが目立つ。昔は、全学生が運動部を盛り立てていたが、いまの学生は運動部に偏見をもっているんじゃないか。一般学生には暖かい声援を、選手には卑屈にならず、プライドを持ってほしい」

62年度の主将は、のちに鬼のキモケンといわれた木本建治（教・新田高・故人）。

Bブロックで全勝優勝。1年でAブロックに復帰した。さらに、Aブロック優勝の明大に17―8で勝つという異例の結果も生んだ。参考までに、Bブロック校は、防衛大、成蹊大、専大、東大、青山学院、教育大（現筑波大）だった。

そして、インタビューで大西が「一部、二部の調整が大事だ」といっている意味は、こういうことだ。当時、運動部のレギュラー選手は、多くが第二学部か教育学部に在籍していた。

しかし、63年度主将、小俣忠彦（64年一政卒・神戸高）、65年度主将、矢部達三（66年一政卒・浦和高）はじめ、ラ式は、一部の選手がチームの要にいた。とくにバックスは、横井章（65年一政卒・大手前高）、片山英雄（65年一商卒・早大学院）、宮沢隆雄（66年理工卒・早大学院）に加えて、63年度は1年生に藤本（のち蒲原）忠正、犬伏一誠（ともに67年教卒・天理高）らが出た。練習時間の調整が問題だったのだ。藤本は、スタンドオフのほか、フルバック、セブンス、フラインブエースをこなし、その存在は、戦術の幅を広げた。

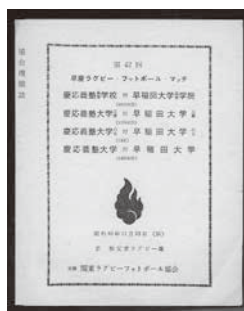
この頃は、集散の早い、ミスと反則の少ない、実に「端正」なチームだったといえる。

小俣のときに、6勝2敗。翌年、佐藤紘司（65年二商卒・秋田市立）主将で、Bグループ優勝。確実に復活の道を歩んでいた。しかし、この2年、法大には敵わなかった。このときの法大は史上最強チーム。早大のさらに上をいくスピードラグビーを展開し、学生界では、敵なしだった。

そんななかで、64年12月27日、全早大はOB3人を含めた布陣で、カンタベリー大を破っている（13―11）。先行逃げ切り。攻守ともに完璧といっているゲームだった。

日本のチームがニュージーランドの一流チームに勝ったのは、この試合が初めて。早大が、このレベルの外国チームに勝ったのも史上初という快挙だった。

11年後の早スポに「カ大、世界の壁厚し」のタイトルがある。OB6人をメンバーに入れた全早大はカンタベリー大と対戦して、10―20で敗れている。64年の勝利がいかに価値あるもの



早慶ラグビーは、朝から高校戦、二軍戦、OB戦、対抗戦と4試合楽しむことができたときもあった。65年のプログラム。

64年の早明ラグビー。スタンドの寂しいこと、写真には2人しか写っていない。ボールを持つ横井とWTB片山。



だったのかがわかる。

注意深く読んでいた人は気づいたかもしれないが、Bブロックと書いたり、Bグループと書いたりしている。これは誤植ではない。早大の暗黒時代は、大学ラグビーの混乱期だったのだ。説明がいるだろう。

1957（昭和32）年、新興大学の台頭もあり、関東の14大学を、AクラスとBクラスの二つに分けて、2部制を採用した。Aブロックが1部、Bブロックが2部というわけだ。これによって力の拮抗したチーム同士の対戦が多くなり、観客も増えるという目算だった。しかし、ファンは増えないばかりか、61年には慶大、62年には、早大、それぞれBブロックの優勝校が、Aブロック優勝の明大に勝つという矛盾した結果を生んでいた。そこで、63年にはABク

ラス方式を崩し、14大学を一本化した。これがまた複雑。

「二校は必ず七試合以上行わなければならない。前年の一―七位、八―十四位校に大別し、その中で監督会の指定する四試合をして、残り三試合は各校が相手校を選んです。これでは当然、順位や優勝校は決められないので、シーズン終了後、監督会議で最優秀校を選考して、優勝に準ずる扱いにする」（早スポ63年6月号）

この年、早大が対戦したのは、成蹊大、中大、法大、東大、日体大、立大、慶大、明大の8校。中大、法大に負けて6勝2敗だった。

さらにまた、64年は、Aグループ、Bグループ（早大、東大、専大、日大、立大、慶大、明大）に分割。12月にはA B代表決定戦を行って、関東のNo.1を決めた（法大12―6早大）。翌年1月、関西代表の同大、関大、関東代表の法大、早大がトーナメント方式で日本一を争った。この第1回東西大学選手権（法大14―6早大）が実質的な大学選手権の始まり。

65年度には、とうとう法大を完封して大学日本一（早大16―0法大）、その勢いのまま日本選手権でも八幡製鉄を、12―9で破った。9―9のまま引き分けかと思われたノーサイド直前、ペナルティーゴールのチャンスをもたらった早大は、山本巖（二文1・新田高）が見事に決めて、劇的勝利となった。

ラ式は、一時、部員が三十数人になったと、前に述べた。

60年代初頭のラ式蹴球部の部員数を卓球部と比較してみよう。

1960年度 卓球部99(8)、ラ式45、61年度 卓球111(11)、ラ式51、62年度卓球78(7)、ラ式63、63年度卓球86(16)、ラ式65。この構図が逆転するのは、67年度、卓球46(7)、ラ式52(1)からだ。2009年度では、卓球47(16)、ラグビー125(12)となっている(体育局への登録部員数。いずれも『早稲田大学スポーツ年鑑』より。しかし、退部する部員もあり、実数はさらに少ない。カッコ内の数字は、内女子部員数)。

この数字が何を意味するかといえば、部員数はそのスポーツの人気と部の実力を反映しやすいということだ。

昭和30年代(1955年)は、日本が卓球ブームにあった。昭和31年に東京で世界卓球選手権が行われ、男子団体(3連覇)、男子、女子シングルス、男子ダブルスの4種目で優勝すると、ブームは加熱し、小中学生はこぞってラケットを握ったほどだ。59年度には、リーグ戦で最下位だったにもかかわらず、「120人以上の卓球部員がいた」と、主将の佐々木岩男が早スポ創刊3号に書いている(選手は20人、一般が100余人)。選手になれなくても、卓球を楽しむみたいという部員がいかに多かったかがわかる。

卓球は65年あたりから、ブームにかげりが見え始め、ラ式は復活の兆しが見えた65年から、注目され始めたということを部員数が物語っている。

早スポにも、62年から66年にかけて、卓球ブームがあった。それも「賭け卓球」だ。賭けたのはお金ではなく、昼メシや晩メシ。卓球部の練習の合間を縫って、目の色を変えて卓球に打

ち込んだ。自己申告のハンデ戦だったため、誰でも参加できた。

卓球部の練習が終わると、すぐに早スポ「卓球大会」が始まるのを知っていた女子部の藤瀬活子（66年二政卒・賀茂高）、竹島祥子（66年一文卒・東洋英和）、木村孝子（67年教卒・都立西高）らは、しばしば「もうすぐ練習終わりますよ」と、部室に知らせにきてくれた。こんな「お人よし」が災いしたか、女子卓球部は65年、二部に落ちてしまう。

一方、早スポ部員の成果は如実に現れた。

宮坂祐次が、早スポ40周年記念誌に書いている。

「卒業旅行と称して東北の温泉を旅したが、温泉宿でやる卓球のラリーを見て、周りのおばさん達が『あの人たちオリンピックの選手かも』と言われたのが昨日のように思い出されます」
このとき、宮坂と江口はダブルスで、自称？ 東山温泉チャンピオン組を破った。

宮坂は、卒業後、地元に戻り、信濃毎日新聞に入った。ところが、叔父から、銀座一丁目にオープンする東京セントラル美術館を手伝ってくれと頼まれ、美術の世界に転職。これが天職と思ったのか、自ら「画廊宮坂」を銀座で立ち上げた。宮坂の長男は、いまをときめく作家・伊坂幸太郎だ。

宮坂はしばしば辛辣な記事を書いた。64年の秋季リーグから、神宮の学生席券が30円から50円に値上げされた。部員の多くが「しょうがない」という反応だったが、宮坂は「許されない」と『主張』に書いて、しばらく神宮には足を運ばなかった。宮坂ほどではないが、斉藤禎も性

格からは想像できないほど辛口だった。

現在、刊行中の『大庭みな子全集』5巻の月報に作家・黒井千次が書いている。

「ある日、某紙夕刊の文化面に、絵画の小さな写真をのせた短い記事の掲載されているのが目にとまった。二匹の大きな犬と裸婦とが横たわる油彩らしい絵だった。大庭みな子さんの絵画作品が出て来たので、『大庭みな子全集』の刊行を記念し、没後二年に当るこの時期に銀座の画廊で展覧会が開かれることを紹介する記事だった。（後略）」

ここにある画廊が「画廊宮坂」だ。大庭全集が日本経済新聞出版社の発行ということ、斉藤が宮坂に働きかけて実現した早スポOBによるコラボレーション企画だった。会場には早スポの1期生から5期生が何人も駆けつけ盛況だった。しかし、宮坂にいわせると、「早スポOBには、絵を理解する人がいない!」。辛辣さは相変わらずだった。

学生野球はピンチに立っている

早慶6連戦以降、早大野球部は「勝ち」を忘れてしまったかのようなだった。

61年春、4位（優勝・明大）、秋、4位（優勝・法大）、62年春、4位（優勝・法大）、秋、5位（優勝・慶大）、63年春、5位（優勝・慶大）、秋5位（優勝・法大）と6シーズン連続Bクラスに甘んじていた。この間、一度の優勝もない立大に、64年春まで、引き分けを挟んで10連敗という不名誉な記録も残している。

昭和の初期に9シーズン優勝しなかったことはあったが、戦後、4年間の大学生活で野球の優勝を味わえずに卒業した早大生はいなかった。

野球部に対する批判めいた記事は、早くも62年11月号に現れた。

【史上3度目の五位 問題点はどこに】

「低迷の最大の原因は選手の伸び悩みだろう。入学試験がきびしくなったという声も聞かれるが、それはいいのがれである。現に優秀なプレーヤーが、沢山入学しているので、問題にならない。『型にはめこむ早稲田式バッテリーングが悪い』、『4年生を使わない石井監督の起用法が悪い』、『選手がのびのびしていない』などと堤がかなり厳しい評を書いている。

しかし、このときはまだ、4シーズンBクラスにすぎなかった。

63年の春は、秋につき連続5位。

早スポ部員の落胆も大きかった。

この年入った新入部員は、斉藤禎（前出）、藤澤俊（一商・呉三津田）、山本隆一（理工・北園高）、高木貞男（理工・小石川高）、白根義幸（前出）、飯島田鶴子（教・高崎女子高）、畑中宗治（二政・津高）、文屋隆夫（一法・札幌南）らだ。斉藤が、高校の同級生に呼びかけたので、斉藤、高木、白根と三人の小石川高トリオができていた。翌年、斉藤は、後輩の佐瀬正弘（後出）を勧誘し、小石川は一大派閥を形成？ いまなら、民主党政権（鳩山、小沢は小石川高出身）のようだといわれたかもしれない。もっとも、白根は早く退部し、4人そろったというこ

とはなかった。高木は、卒業後、日本IBMなどで、プログラミング、SEを経験し、フランスの国営コンピュータ会社・ブルで事業開発部長を務めた。

この年代は、まだ、6連戦伝説が身近なものだったから、神宮球場では、試合が終わるたびに、失望のためいきが漏れた。

藤澤は、早稲田の野球を見たいがために、早大入学をめざしたから、落胆の色がとくに濃かった。藤澤の文が40周年記念誌にある。

「大学に行くなら絶対に早稲田しかないと確信に変わったのは、高校1年の秋。あの早慶6連戦に連日、興奮したからだ。38年春、喜び勇んで入学。さっそく神宮に駆けつけ、見たのは対立大戦の完敗、東大にやっと勝つという状況で、完璧の5位、秋もしかり。ボクの強いワセダはどこに行ったの……」

藤澤は、講談社で販売のプロとして、とくに大型企画で力を発揮した。書籍販売局次長、販売促進局次長などを経て、現在、講談社ロジコム取締役。藤澤の長女は、知る人ぞ知る人気少女漫画家・池山田剛だ。講談社とはライバルの小学館『少女コミック』を中心に活躍している。早慶戦での1年生の販売力には、すさまじいものがあった。野球の人気は上がらないのに、新聞の売り上げは上がった。1年生に煽られて、2、3年も真剣に「売らざるをえなかった」からだ。とくに山本の売り方は凄く、あまりのしつこさに、「君は理工学部のかせに、なんでそんなくだらないことしているの」と軽蔑の声を返された。当時は全員学生服姿で襟には、学

部名の入った襟章（バッジ）をつけていたので、学部がすぐにわかったのだ。山本は、技術より、こうした素質を見込まれたのか、卒業後、山武ハネウエルで営業部長として活躍した。

春の早慶戦は慶大に1勝して意地をみせたが、またもや5位。慶大の胸上げを目の前で見ることになった。

早慶戦のあと、くすぶりつづけていた神宮球場を巡るプロ・アマの確執が本格化した。

かいつまんで説明しよう。

この確執は、59年秋、東芝が神宮球場にナイター設備を寄付するという話から始まった。

このときは、「設立の趣旨や学生野球の本筋から見て、ナイター設備は不要」という結論でナイター設備の導入は見送られた。しかし、60年7月、神宮側は一方的な規約改正を行って、これまでの民主的運営を転換させた。これが、両者のミゾを決定的にした。

神宮外苑は国有地だったが、戦後、明治神宮に払い下げになった。その際、大学野球連盟は、資金援助をした。そのため、施設の管理・運営は神宮側と体育団体（大学野球連盟、水泳連盟、陸上連盟）などによる運営委員会があたることになった。ところが、規約改正により神宮の権限を拡大。骨抜きになった体育団体側を無視して、球場の改装、東映との契約などを神宮側が独断で進めるようになった。恩を忘れ、無断でプロに門戸を開くとは、何事かというのがアマ側の怒りの原因だった。神宮側は、このままでは維持できない。アマ優先を約束するから、プ

口の進出を認めてほしいという主張だった。

東映フライヤーズは本拠地にしていた駒沢球場が、オリンピック施設建設のために取り壊されることになり、なんとしても神宮球場をフランチャイズにしたかった。また、国鉄スワローズ（現ヤクルト）が神宮第二球場進出を狙っているという噂も立っていた。

「俺は絶対、プロの神宮進出に反対だ」

そういつて、編集長の中津海が論陣を張った。

【学生野球はピンチに立っている 神宮問題をつく】（63年6月号）の最後は、強烈なアジテーションになっていく。

「外苑が明治天皇の御遺徳をしのんで全国民の『奉賛』（賛助金）によってつくられたこと、さらに神宮球場の建設趣旨や戦後の接収解除に果たした役割という諸事情を無視して、神宮側が一方的に規約を改正し、実権を握ってプロ進出に拍車をかけた運営態度は断じて許されるものではない。たとえ、学生野球の人氣が落ちようと、戦争という最悪の条件をのり越えてなお存在した神宮の森が、時勢とか、一神社の金銭的な理由のために圧迫されていいものだろうか。いかなる事情があるにせよ、学生野球の殿堂として栄えたものが昔日の面影であってはいらない」

いまの人には、なぜこんなことで紛糾していたのか、とても想像が及ばないだろう。この頃、連盟だけでなく大学野球ファンにも神宮球場は大学野球の「聖地」であるという根強い「信仰」

があったのだ。

『明大スポーツ』も同じ月に、【神宮問題 創設精神は何処に】という特集を組んでいる。

そのなかで、明大野球部監督の島岡吉郎は、「どんなことがあるうと、私は神宮を守るために丸腰になっても戦う」と語っている。

この問題は国会の場にまで持ち込まれた。結果は、共存共栄。現在の運営に見るとおりだ。

どうしたらいいのか、石井監督の進退問題

秋のリーグ戦が始まる前に、益子保夫（一法・大田原高）が入部してきた。益子は『早稲田大学新聞』にいた。夏休み前、構内で大学新聞を売っている益子を、小黒が見つけた。小黒と益子は同級生だったが、一浪した益子は入学したばかり。大学新聞では1年生は記事を書かせてもらえず、もっぱら販売をさせられていた。

「うちにくれば、すぐ原稿が書けるよ。販売より、取材のほうがおもしろいよ」

小黒が話しかけたが、すぐには「うん」といわなかった。そこで、「くどき上手」の山本を呼んで、説得してもらった。その結果、夏休み明けから「移籍」することになったのだ。

益子は、卒業して、リコーで営業をしているうちに、「独立してやったほうが儲かる」とひらめき、30前に退職。下野事務機を立ち上げた。早スポ初の社長誕生だ。

そして、迎えた63年秋の早慶戦。

慶應義塾大学新聞増刊『早慶戦特集号』（B5版 40円）の巻頭が、なんと【ガンバレ ワセダ】。しかも、11ページの特集だ。タイトルをカタカナにしたところが、なんともイヤ味。

石井監督批判がいたるところに出てくる。

「六大学のなかで、甲子園出場者が最も多い。真紅の国旗をもった人もいる。それが、入部以来、学年を増すごとに自信を失っていくように思う」、「監督が悪い。頭が悪い」、「監督のいう通りに動かないとユニフォームを脱がされるといふ恐怖心がある」、「監督はまだ若いのだから、一度外に行つて勉強し直せばいい」などなど。

ファンのたわごとではない。野球通の作家、早慶野球部出身の評論家がいつているのだ。

この秋も慶大に破れ、3シーズン連続の5位。渡辺泰輔（政3・慶応高）をまったく打てず、0―6（1安打）、0―8（3安打）と連続完封（2回戦は林邦彦が余裕のリリーフ）された。早慶戦でのふがいなさは、応援していた学生からもブーイング（当時、そんな言葉はなかった）が出るありさま。

そして、とうとう異常な事態が起こった。

12月5日、稲門クラブ（野球部OB会）臨時総会の決議で、外岡茂十郎野球部長と石井連蔵監督に勇退勧告が出されたのだ。

これに対して、外岡部長は、猛反発。「外部の圧力で辞めたら、将来に悪例を残す」として、勧告拒否の姿勢を示した。新聞は連日、この動向を報道していた。

早スポとしても取り上げないわけにはいかない。

かつて、似たようなことが明大にも起こっていた。

57年春のリーグ戦で、明大は、東大にも勝てず最下位に転落した。すかさず、元応援団長だった素人監督・島岡吉郎の采配に批判が出て、退任を要求する声が出た。

そのとき、『明大スポーツ』は徹底して、島岡擁護にまわった。

「勝敗は時の運。とりわけアマチュアでは、勝ち負けよりもその過程が大切といわれるが、(明大スポーツの) 島岡擁護の紙面づくりは、体育会というより大学当局の意向を体したものだ。島岡の監督就任は野球部OB会『駿台クラブ』の反対を押し切って、大学当局が決めた経緯があったからだ」(『大学スポーツ新聞事始め ベースボロジ―6』堤哲)

機関紙では、議論の余地がなかっただろうと思う。

早スポは、石井監督の去就を巡って議論に熱が入った。3年生の高橋は強い石井擁護論をぶつた。編集長の中津海は弱い援護論だった。野球担当だった江口は「退任やむなし」であった。高橋と江口の議論はかみ合わず、「中津海裁定」によって、記事の内容は江口に一任されることになった。

長嶋茂雄には及ばないにしても、石井は早大野球部の至宝といわれた人だ。問題はデリケートだった。それより、一学生が偉大な先輩の批判記事を書いていいものなのか。

しかし、江口は石井が統投して、またBクラスだったら、誰も救われなかった。中

部長、監督勇退勧告は連日新聞紙上を賑わせた。「アマチュア野球の監督とは何か」を問われたともいえる。



外岡部長 早大 勇退勧告を拒否

将来に悪例残す

稲門クラブへ正式回答

【本紙記者東京二十日電】日本アマチュア野球連盟（連盟）の田嶋正三会長は二十日、早稲田大学野球部監督の稲門クラブに正式回答した。稲門は連盟から「監督としての責任を放棄し、選手を指導する立場を失った」として、監督職を剥奪し、選手を指導する立場を失ったと通告していた。田嶋会長は「監督としての責任を放棄し、選手を指導する立場を失った」として、監督職を剥奪し、選手を指導する立場を失ったと通告していた。田嶋会長は「監督としての責任を放棄し、選手を指導する立場を失った」として、監督職を剥奪し、選手を指導する立場を失ったと通告していた。

石井監督は態度を保留

外岡部長の留任要望に

【本紙記者東京二十日電】日本アマチュア野球連盟（連盟）の田嶋正三会長は二十日、早稲田大学野球部監督の稲門クラブに正式回答した。稲門は連盟から「監督としての責任を放棄し、選手を指導する立場を失った」として、監督職を剥奪し、選手を指導する立場を失ったと通告していた。田嶋会長は「監督としての責任を放棄し、選手を指導する立場を失った」として、監督職を剥奪し、選手を指導する立場を失ったと通告していた。田嶋会長は「監督としての責任を放棄し、選手を指導する立場を失った」として、監督職を剥奪し、選手を指導する立場を失ったと通告していた。

【本紙記者東京二十日電】日本アマチュア野球連盟（連盟）の田嶋正三会長は二十日、早稲田大学野球部監督の稲門クラブに正式回答した。稲門は連盟から「監督としての責任を放棄し、選手を指導する立場を失った」として、監督職を剥奪し、選手を指導する立場を失ったと通告していた。田嶋会長は「監督としての責任を放棄し、選手を指導する立場を失った」として、監督職を剥奪し、選手を指導する立場を失ったと通告していた。田嶋会長は「監督としての責任を放棄し、選手を指導する立場を失った」として、監督職を剥奪し、選手を指導する立場を失ったと通告していた。

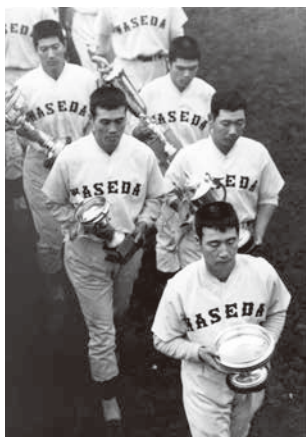


63年秋の早慶戦で2試合完封負けを喫し、応援団の前でうなだれる早大ナイン。ひときわ頭を垂れている3番目の選手が、09年夏の甲子園で新潟県勢初の決勝進出を果たした日本文理高の監督・大井道夫だ。



東京六大学野球史上最大の「歴史的瞬間」。64年5月17日、対立大2回戦で慶大・渡辺泰輔が完全試合を達成した。

65年秋、優勝した早大ナイン。先頭は主将の大塚弥寿男。その右後ろ2人目が飯田修。



これもラグビーの歴史的ゲーム。65年12月27日、全早大がカンタベリー大を13-11で破る大殊勲をあげた。

津海が書いた神宮球場問題でも、「早稲田が弱いから、観客が減り、球場側につけ入るスキを与えたのだ」という声が少なからずあった。学生たちが、これ以上神宮から遠のいたら本当のピンチになる。江口は、野球を毎試合見てきた2年生の宮田、1年生の藤沢、山本、斉藤らを呼んでこういった。

「みんなは、いまから早スポの記者じゃない。一般学生として、思ったことをなんでもいってくれ。あとは、俺が責任を持つ」

そうしてまとめた【野球部は立直るか】。気負ったわりには無難な記事に収まった。

江口は、講談社に入り、『週刊現代』などの編集長、人事部長、編集局長のあと、講談社エディトリアル社長を務めた。

結局、石井連蔵監督は退任し、石井藤吉郎が監督に就任した。

そして、待っていたこの日！

64年春、6回の「冬」に耐えて、とうとう野球部にも春がやってきた。

早慶戦は、早大が2勝すれば優勝、2勝1敗で優勝決定戦。あの6連戦とまったく同じ条件で迎えた。しかし、本音では、早スポ部員の誰も慶大に勝てるとは思っていなかった。

完膚なきまでにやられた昨秋の記憶が、頭にこびりついていたらだ。そのうえ、渡辺は絶対好調だった。対立大2回戦では、東京六大学史上初のパーフェクトを達成していた。

この偉業はいまだに誰も達成していない。

しかし、早大は「思いがけず」2連勝。昨秋、1安打、3安打だった貧打線が、14安打、16安打の猛打線に変わっていた。2試合で、9打数6安打と打ちまくり、首位打者になった小淵進（66年二文卒・早実高）でさえ、渡辺を打ち崩せるとは思っていなかった。08年、同期だった大塚弥寿男（前出）の葬儀でしみじみ語っている。

「大塚もそうだったと思うが、試合前まで、渡辺さんを打てるとまったく思わなかった。それが、打席に立ったたら、不思議とバットがうまく出た」

早スポ部員の全員が、初の優勝経験だった。その騒ぎようは、書くのがはばかられる。

東京オリンピックと『早稲田スポーツ』

09年10月3日、2016年のオリンピック開催地に立候補していた東京が、落選した。

松井が早スポの創刊を決意した時期と1964年のオリンピック開催地が東京に決まったときと同じだったとは、すでに書いた。

東京オリンピックの開催決定後、とくに日本中が沸き立ったわけでもない。国民には、こんな貧乏な国で開催できるのかという不安もあった。熱狂したのは、開会式が始まってからだ。その点では、今回、国民の関心度が低いとマイナス評価された状況と少し似ている。

オリンピック関連記事が、早スポに登場するのは、61年6月号から。

【東京オリンピックの問題点】という4回の連載だった。

1回目は、資金の問題を取り上げた。担当は、松井盈。2回、3回は施設の問題。最終回は、選手強化の課題。これは、奥本和通が担当した。

東京都知事・東龍太郎は、ローマオリンピックを視察した際、イタリアで人気のあったサッカーくじ（トトカルチョ）に目をつけ、これを資金源の一つにしたいと語った。当時、日本にはプロサッカーリーグはなかったから、プロ野球を対象として考えたのだ。

しかし、ギャンブルを財源にするとはなにごとか、とマスコミから、さんざん叩かれた。

そこで、資金は大丈夫なのかという議論がわいてきたのだ。細かな事情は省略する。

施設問題はさらに複雑だった。説明すると長くなりすぎるので、これも省略。

このへんの事情は、今年（09年）出版された『ワシントンハイツ』（新潮社・秋尾紗戸子著）を読むとよくわかる。

秩父宮ラグビー場が、体育館建設の候補地に上がっているのを知ったラグビー協会は、「聖地」を守るため、会長が先頭に立って、土地問題解決に動いたということもあった。秩父宮ラグビー場はサッカーの予選に使用された。また、早大記念会堂は、フェンシング会場となった。

オリンピックの開催1年前からは、入場券が発売された。現在のようにチケット販売網が整備されていなかったため、まず、整理券が必要だった。早スポ部員も、整理券を発行する国立競技場に徹夜して並んだ。朝一番で並ぼうと、暗いうちに家を出た高木は、不審者として職務

質問されたという。一般的に人気が高かったのは、女子バレーと柔道。それに体操だった。

開・閉会式ははがきでの応募で、応募総数は500万通を超えた。早スポで当選したのは、益子だけだった（閉会式）。

63年から、早スポの1月号は、オリンピック出場が確実で、メダルを獲れそうな選手を一面に載せることにした。63年1月号には、三段跳びの下哲（教3・近大附高）が登場。写真説明には「東京オリンピックでメインスタジアムに日章旗を期待される」とある。

しかし、下は、この年以降、調子がいっそうに上がらず、代表になれなかった。

オリンピックキヤーを迎えた64年1月号は、ボクシングの白鳥金丸（前出）が一面を飾った。中津海は、「絶対メダルを獲るから、写真をでっかくする」と自ら割り付けをした。

前年、63年11月号の早スポは、出場選手の予想をしている。

全日本で2連覇していたボクシングトリオ（柄沢、白鳥、益田）は絶対。三段跳びの下哲は確実。ボートでは、すでに大西恵弘（二政3・奈良女大付高）、松田征男（一文3・文京高）がエイトの候補選手に選ばれていた。ボートではこの二人だけだろうと思っていたが、最終的には、9人も代表に選出された。これは予想外のことだった。

大西はエイトの日本代表クルーに、松田（大西と松田はこの時点では4年生）と芳野法一（一商3・早大学院）はかじつきフォアの日本代表クルーに入った。かじなしフォアは、三木俊介（二商3・舟入高）、本間康二（一政2・札幌東）、塚本公樹（一政4・長野高、故人）、木村文

三（一商3・早大学院・故人）が早大クルーとして選出された。

大番狂わせといわれたのが、ダブルスカルの村瀬康（一商4・駒場東邦）・細谷進（二法4・文京高）だ。ダブルスカルは慶大が圧倒的に強く、代表は間違いないといわれていた。事実、早大は、早慶対抗、全日本小艇選手権では、慶大にまったく歯が立たなかった。それが、一発勝負の代表決定戦で勝ったのだ。コースレコードというおまけまでついた。

64年の春、細谷の弟・正勝（教・城北高）が、早スポに入部してきた。しかし、運動がしたいと、6月には、漕艇部に移っていった。まだ、選考会の前だった。

「あの兄貴ができるなら、自分にもできる」という自信があったからだ。これまで、何回も応援にいった、兄が勝ったのを一度も見ることがなかった。ところが、正勝が入部するや、いきなりオリンピック代表の座に！ 兄も驚いただろうが、弟はもつとびくりした。

正勝は66年に、全日本エイトで優勝している。だから、正勝は自分のほうが、兄より、絶対潜力は上だと自負している。だが、いまでも、「ああ、あのオリンピックに出た細谷さんの弟さんですか」といわれるのが悔しいという。

ボクシングでは、逆の番狂わせがあった。すでに卒業していた柄沢が代表選考会で負けたのだ。その代わりのように、予想時点では入学していなかった高山将孝（前出）が選出された。3人が出場した五輪は、高山、益田が2回戦敗退。白鳥も3回戦で敗れた。

陸上の飯島秀雄（教2・目黒高）は、ドイツで10秒1の快記録を出して、決勝進出を期待



日本代表のジャージ、金メダル、表彰台すべて本物。表彰台は1年生が国立からリアカーで運んできた。

オリンピック展の様子。よくもそろったというもののばかりだった。



水泳日本は最終日の800メートルリレーで、やっと銅メダルを獲得するという惨敗だった。前から2人目が早大から出場の岩崎。

されたが、予選のゴール後、転倒したのが響き、準決勝で敗退した。

レスリングで金メダルを獲得した上武洋次郎（二商・館林高）は2年で休部し、オクラホマ大に留学していたため、その存在を早スポ部員の誰も知らなかった。新聞で、早大と書かれているのを見て、間違っているのではないかと、レスリング部に問い合わせたほどだ。

ただし、早スポの直前予想では、「金の期待十分」と書いている。

ホッケーでは、橋本征治（二商3・山陽高）、吉村実（教2・星光学院）、サッカーでは、釜本邦茂（二商2・山城高）、森孝慈（一政2・修道高）が代表になったが、それぞれ5、6位決定予備戦で敗れている。

水泳は、水球の竹内和也（教4・鴨沂高）、飛び込みの土佐忠雄（二商4・天理高）、競泳の松本健次郎（教3・佐伯鶴城高）、伊藤圭祐（教3・中京商）、岩崎邦宏（教2・佐伯鶴城高）、藤島祥三（一政2・柳井商工Ⅱ競技に出ず）が出場した。岩崎が800メートルリレーで銅メダルを獲った以外、成績は振るわなかった。

現役選手の出場は、以上24名。このほか、聖火最終ランナーに坂井義則（教1・三次高）が選ばれた。これは、特筆すべきことだ。坂井はのち、競走部の主将を務め、66年の関東インカレと日本選手権では、400メートルに優勝している。卒業後はフジテレビに入社、スポーツと報道の部門で活躍した。

『明大スポーツ』は派手なオリムピック特集号を組んでいた。しかし、早スポはわずか2ペー

ジの号外扱い。体制が整わなかったのと金銭的不安があったからだ。

オリンピック号外はささやかなものだったが、早稲田祭での「早稲田スポーツ五輪展Ⅱ

美と力の祭典」は、大人気だった。前年の早稲田祭は、最中にケネディ暗殺のニュースが入り、落ち着かない雰囲気だった。しかし、オリンピック後の早稲田祭には活気があった。

宮田博子（現姓・小松崎）が、模造紙6、7枚を使つて墨跡も鮮やかに、「オリンピック史に印せる早稲田大学の足跡」を書いて掲示した。

宮田は緻密な取材で、『女子運動部の現状』（64年6月号）をまとめていた。当時の女子部員は、19部で116名。フィギュアスケートの福原美和（67年二文卒・森村学園）の実績が飛び抜けていた。福原は、のち八木沼純子のコーチ。庭球部では、黒松のあとを継ぎ、北村淳子、鯨井芳江（ともに68年二商卒・金城学院）が活躍。とくにダブルスは4年間、学生No.1の座を譲らなかった。宮田は現在、エンゼルゆめ保育園園長。

東京オリンピックの写真パネルは朝日新聞が提供してくれた。掲示の下には、写真、トロフィー、メダルなどを展示した。とくに、ベルリンオリンピックの棒高跳びで2、3位を分け合った大江季雄、西田修平の「友情のメダル」には注目が集まった。

また、体協から借りた金メダルを掛け、国立競技場から1年生の佐瀬と野中辰美（後出）が運んできた表彰台に乗って、写真撮影ができるという企画は話題を呼んだ。しかし、金メダルの帯は汚れ、返却にいった畑中宗治は大目玉をくらった。いま考えると、貴重な品々をなぜ貸

してくれたのか、とても理解できない。展示物はただ机の上に置いただけ。セキユリティーなどまったく考えていなかった。それだけ平和な時代だったということかもしれない。

休刊の危機を救った11万円の借金は「埋蔵金」に

早スポは順風満帆で航海していたわけではない。部員が、一時的に授業料をつぎ込んだりしながら、なんとか持ちこたえてきたといったほうがいいだろう。

しかし、存亡の危機が、とうとう、64年にやってきた。創刊した59年は、岩戸景気といわれ、世の中は活気にあふれていた。その後も、オリンピック需要などで、日本経済は順調に成長してきた。ところが、64年、景気が急に後退する。金融引き締めもあって、倒産企業数は過去最大の4122社。広告業界はオリンピック関連企画があり、プラス成長だったが、他の業界には不況感が漂っていた。それでも、実質経済成長率は11%を超えていたため、ネーミングに困り、まるでインフルエンザのように「新型不況」などと呼ばれた。認知度の低い学生スポーツ紙に広告を出す企業は極端に減ってきた。危機の原因である。

ここに、『早稲田スポーツ』最古と思われる資料がある。宮坂祐次が作成したガリ版刷りの「1964年度第二期決算報告書」（4月から12月まで）と山本隆一が作成した「昭和40年度前期決算報告書」（4月と早慶戦特集号の2号分）だ。このときの編集長はそれぞれ江口拓と斉藤禎だ。当時の具体的な財政状況がわかるので、写真もあわせて紹介しておこう。

64 年、65 年の決算資料(下は実物)

64年度12月まで	広告収入	販売収入	印刷代	部数
4月(42号)	69,400	17,060	101,000	4,000
早慶戦特集号	157,200	54,880	166,950	8,000
6月(44号)	29,100	6,900	59,600	2,000
7月(45号)	40,200	8,790	61,800	2,000
号外五輪特集号	30,700	0	30,300	1,500
早慶戦特集号	105,600	31,150	147,500	8,000
12月(47号)	22,400	1,000	26,500	1,000
1月(48号)	記録なし			
65年度/2号分				
4月号(49号)	68,800	9,530	64,900	2,000
早慶戦特集号	146,700	17,700	146,800	8,000

江口が早スポ40周年記念誌に書いている。
「11月の終わり、神奈川新聞から『滞納している印刷代を完済しない限り、今後、原稿は受

報告書には新潟大地震に2105円の寄付をしたことまで記載されている。1000円にも事欠く時代だったのに。

1964年度第二回決算報告 (1964~12月)

宇部田村2期組会

(55歳)

今年も順調に

収入	収入	支出
678,580	71,186	849,766

(収入と支出)

収入合計 678,580円
支出合計 849,766円
収入超過額 17,186円
収入超過率 2.53%

収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	収入	
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	--

「取れない」と、目の覚めるようなお達しがあった。OBまでわずらわせて、緊急対策会議を開くも解決策浮かばず、お手上げ」

江口は、日本橋丸善に勤めていた姉に11万円を借りて、未払い金を清算。次年度の新聞発行を許された。

しかし、資料を見ると、広告収入は、18万円減だが、販売収入は3万5000円増、ページ数を4ページ減らして、最終赤字予測が、4万1235円となっている。それも協力金などで埋められそうだとある。どうして、11万円近くもの滞納金が出たのだろうか。その秘密を解くカギが山本の報告書にあった。

「未集金が10万近くあるので、担当のものは自覚をもってそれに処すること」

要するに、前年から集金していない額が、10万円あったということだ。江口がなぜそのことに気づかなかったか不思議だが、厳しい催促や休刊の危機から一刻も早く逃れたかったのは確かだ。借金で清算した結果、未集金分は、はやりの言葉でいえば、「埋蔵金」となったのである。65年度は、その埋蔵金を掘り起こしながら、激減していく広告収入を補って新聞発行をどうにかつづけていた。埋蔵金がなかったら、おそらくこの年代で、「会更生法」の申請をしていただろう（そんなものはないが）。

それでも、最終的には1万円ほどの赤字になった。4年になってから、山本は、学校から近かった講談社に行き、江口から1万円を借りて、65年度の収支をトントンにした。そして、1

年後、山本は初任給手取り2万2000円のうちから、1万円を江口に返済した。

65年は、さらに景気が悪化していた。実質経済成長率は5%台に落ち込み、倒産企業は前年を2000社も上回った。840億円の負債を抱えた山陽特殊製鋼の破綻は、戦後最大の倒産だった。山一証券への特別融資もあって、「証券不況」、あるいは「40年不況」、「オリンピック不況」とも呼ばれた。

山本のやりくりもあって、なんとか、年8回の新聞発行はしたが、問題は、『スポーツ年鑑』の発行だった。

斉藤、山本、藤沢、益子、飯島の5人は、話し合った。広告の見通しも検討した。その結果、「後世に誇られようとも、年鑑の発行はやめよう。後輩に赤字を引き継がせるわけにいかない」という結論になった。

初期の早スポを、不況の波が襲ったのは、この2年足らずの間だけ。つづく65年11月から70年7月までの4年9カ月は、その名も「いざなぎ景気」。日本中が、空前の好景気を謳歌した。江口、斉藤の代は運が悪かったとしかいいようがない。

出すべきか出さざるべきか、『スポーツ年鑑』の苦悩

スポーツ年鑑の話が出てきた。現在、運動部の実行委員が編集し、競技スポーツセンターから発行されている『早稲田大学スポーツ年鑑』（1984年創刊）ではない。早スポが独自に

製作していたものだ。

そもそも、年鑑を作ろうといったのは、初代編集長の松井である。60年の夏合宿は清原会長
の軽井沢の別荘で行われた。そこで、突然、松井が、「年鑑を出そう」と提案した。

「運動部の記録は各部ごとにあるが、1冊にまとめたものはない。年鑑を残しておけば、将来、
必ず価値が出てくるはずだ」

松井は熱弁をふるったが、「新聞を作るのがやっとなのに、年鑑なんてムリだ」という意見
が主流、というか全員の反対で否決された。しかし、この提案は、松井の思いつきではない。
明大はすでに、1955年度から、『明治大学体育会誌』という年鑑を発行していた。すべて
において、早く明スポに追いつきたいと思っていた松井にとって、年鑑は絶対作らなければな
らないものだったのだ。

部員が年鑑のことなど、すっかり忘れていた61年2月、松井は一人で、年鑑の準備を始めた。
これを、他の部員が黙って見ているわけにはいかなかった。結局、年鑑製作に引きずり込まれた。
実は、松井には、体育局が、新聞発行の実績を評価して、資金援助をしてくれるのではない
かという期待があった。そこで、体育局に借金を願い出たが、またもや断られた。目算は狂っ
た。しかし、そんなことで怯む松井ではない。

「授業料を出せる人は出してほしい。必ず黒字にしてみせるから」と、部員に呼びかけた。
宇野は、「返してくれるならいいよ」と「抛出」することにした。ところが、実家に督促状

が届いてしまい、親が驚いて、「なぜ、そんなにお金がいるのか」と連絡してきたという。

年鑑の定価は100円に決めたが、販売収入はほとんどあてにできない。部員たちは運動部のOB名簿を頼りに片っ端から、電話をかけた。広告取りは新聞よりはるかに大変だった。最終的には、78社の協力が得られて、年鑑の第1号（B5判・216ページ）は、7月1日に完成した。松井が書いた編集後記に、年鑑発行の意図がある。

「年鑑は、これを契機として、毎年度（三月）にその年度の体育局各部の記録を中心に刊行する予定であります。これも単に記録の蒐集にとどまらず、校友諸兄の運動部生活を通して得られた、数々の貴重な体験を掲載することによって、この年鑑が早稲田大学のスポーツ史として残るだけでなく、学生スポーツの意義を少しでも多くの人に理解して戴ければ、我々の意図は十分に果たせるものと信じます」

「毎年発行する」と宣言しているから、年鑑発行を引き継いだ部員には、相当なプレッシャーがかかった。

それでも、62年6月1日に発行した第2号には、89社もの広告が入って、ページ数は、284と大幅に増えた。定価は200円。この号を担当したのは、宇野英雄だ。宇野は編集してみて初めて、松井の意図が間違っていないことに気づいた。こう書いている。

「各運動部に一年間の記録の提供を頼んだところ、記録を取っていない部の多いのに驚くと共に、永く残る記録集『スポーツ年鑑』の存在意義を痛切に感じた。この年鑑、決して面白い『読

み物」ではないが、現在運動部で活躍している友の名前や出身校を知り親交を深め、或いは何十年後、学生時代を思い出す絶好の資料になるものと確信している」

第3号（63年6月1日発行）は、堀健雄が担当した。広告取りは相変わらず苦労の連続だったが、2年間の積み重ねもあって、理解してくれる企業も増えてきた。

「資金の裏付けゼンゼンなし。頼りは広告費だけ。だから自然と広告は多くなる。件数にして九十あまり。この他、断られた会社数を含めれば有にこの三倍。趣味で会社廻りなら楽しいが、本誌の浮沈がかかっていると足取も重い。先輩、後輩だけの「関係」で押しかけられるんだから会社もいい迷惑だろう。だがたいてい、結果は「有難きは先輩なり」である」

高橋清輝が編集した第4号（64年3月29日発行）あたりから、発行の是非が真剣に議論されるようになる。

「本会の恒例行事として年度の末尾を飾って発行されるわけだが、時間的にも経済的にも、その負担は、ともすると学生の自分の範囲（わく）を越えてしまい、発行のたびに問題になる。今年度版もその例外でなく、『犠牲』をめぐる議論した」

不況のまったなかで第5号（65年7月20日発行）を担当した宮坂祐次は、年鑑発行を前にして、部員に悲痛な訴えをしている。

「現在の様な大不況の時に年鑑を発行することは大変なことです、三年生は敢えてこの荒波に立ち向かうことを決意しました。一、二年生もどうか三年生について来てください。発行

が遅れても絶対年鑑は出します。誓約」

その宮坂が編集後記に表したボヤキともイラダチともつかない真情。

「二つこらでじっくり考えてみる必要があると思う。『何故作るか』を。学生だから、本分は勉強である。その本分を遂行せず、広告取りや、編集に熱中するのも考えものである。何も我々は好きこのんで年鑑を作っているのではない。今年の場合も相当な赤字である。その赤字を埋めるために、発行した後でも、就職や卒論を後まわしにして、金策に懸命になる我々は、他人の目から見れば、何とおろかに見えることだろう。体育局はこうした我々の努力を見向きもせず、依然として無関心の立場をとっている。もう少し温かい目で見てくれれば、やりがいがあるのだが……」(実際は、ページ数を174に減らし、少し黒字が出た)。

第6号(67年6月10日発行)の担当は、野中辰美(68年教卒・榛原高)。

「午前中から広告廻り、一日中、歩きどおし、7社廻ったが5社ダメ、2社返事まち。こんな調子で年鑑ができるだろうか。我々の唯一の収入源である広告。これが思うように取れない時、何度やめたくなったかわからない。授業をさぼってまで何でやらなければと」

野中は、卒業後、専門学校に入り直し、税理士の資格を取得。現在、静岡県島田市で野中辰美税理士事務所を経営している。

最終刊となった7号(68年3月23日発行)は西村敏洋(69年教卒・福知山高、故人)が編集した。西村は、日本電子計算から富士通にすすみ、最年少で営業担当取締役となったが、惜し

くも急逝した。

「年鑑編集は、『広告に始まって広告に終る。』と言っても過言ではない程広告は重要なものになってくる。最近、どの会社でも『学生さんはお断り。』という所が圧倒的に多く、現実の壁はなかなか厚い。自然と足取りも重く、どうしてこんなに取れないのかと何度止めたくなつたことかわからない」

ここには、紹介していないが、年鑑担当者の誰もが完成の喜びを率直に吐露している。産みの苦しみが大きいだけに、喜びもまた格別のものがあつたのだ。

広告は、宇野のときの89社から、86社、76社、71社、63社と年々減少し、1968年度から発行を断念した。そして、『早稲田大学スポーツ年鑑』は現在、競技スポーツセンターから発行されていることは冒頭に書いた。

今回、50年史を作成するにあたって、この年鑑の存在は、実がありがたかった。先に「誰も50年つづくと思わなかったに違いない」と書いたが、年鑑の価値をいち早く見抜いていた松井だけは、50年どころか、100年も200年もつづくと思じていたのではないかと思う。

全大学を相手に勝った無敵の水泳部

水泳部の黄金時代は、スーパリエースの山中毅が卒業してから始まった。

1961（昭和36）年、ローマ五輪代表の吉無田、大崎、井筒のほか、梅本利三（教3・五条高）、

中川清（二政3・愛知学院高）らを擁して6年ぶりにインカレを制した。これ以降、6連勝。
65（昭和40）年の5連勝目が圧巻だ。

早スポ1月号で、主将の松本健次郎が、65年の夢と抱負を語っている。

「五輪の惨敗をよい経験として、今年のはんの一部分でも水泳界の立て直しをやりたい。僕の一つの夢は、早大対全日本とまではいかなくても、全大学とやってみたい」

それに、杉本紘一が、「早大が勝つことはわかってるけどね」と、受けている。

松本の語った夢は、インカレで、実際になえられた（校名のない人名はすべて早大）。

100メートル自由形 ①岩崎邦宏（教育3・佐伯鶴城高）、②田代信一（二商4・八代東高）

200メートル自由形 ①岩崎邦宏、③大池巖（二商3・愛知学院）

400メートル自由形 ①藤島祥三（二政3・柳井商工）、②岩本和行（教育1・柳井商工）、③中

野悟（教育1・桜宮高）

1500メートル自由形 ①藤島祥三、②中野悟

1000メートル平泳ぎ ①山南宏一（教育3・佐伯鶴城高）、②松本健次郎（教育4・佐伯鶴城高）

2000メートル平泳ぎ ①松本健次郎、②山南宏一

1000メートル背泳ぎ ①伊藤圭祐（教育4・中京商）、③田中広征（二商4・伝習館）、④田中毅

司雄（二文1・柳井商工）、⑤角間光雄（二商4・輪島高）

2000メートル背泳ぎ ①林（中大）、②田中毅司雄、③伊藤圭祐、④角間光雄、⑤田中広征

200^ポ バタフライ ①門永吉典（二文1・柳井商工）、②杉本紘一（教育4・法政三高）

400^ポ 個人メドレー ①山影（明大）、②田中毅司雄、③岩本和行

400^ポ リレー ①早大（田代、三杉庄治Ⅱ二政3・天理高、大池、岩崎）

800^ポ リレー ①早大（岩崎、大池、中野、藤島）

400^ポ メドレーリレー ①早大（伊藤、松本、門永、岩崎）

この結果を見れば、早大の凄さがわかる。1000^ポ バタフライの記録がない。これは、門永が召集時間に遅れて、出場できないという「うっかり」があつたからだ。出場していれば優勝したのは間違いなかつただろう。

門永が見つからないと聞いたマネジャーの土川俊雄（一政・甲府一高）は、なんとか進行を遅らせようとしつつ、門永を探させたが、間に合わなかつた。なんと、上級生に連れられて、食事にいつていたのだ。土川は、大会前、「全種目優勝できるはず」と豪語していた。しかし、門永の棄権がわかると、「まいった」と頭を抱えた。

大学対抗の得点は、①早大156点、②日大57点、③中大37点。早大対全大学は、156対149だった。杉本の予想が当たったことになる。

しかし、オリンピックの翌年ということもあり、記録的には低調だった。

水泳部は、翌66年、最終日の最終レース、800^ポ リレーで日大を破り、105対104の1点差で逆転優勝。劇的6連勝を飾った。そのときのマネジャーの心境が痛いように伝わって

くる文章が『スポーツ年鑑』67年度版にある。

「わが部も今年ほど苦難な年はなかったのではなからうか。その苦難の最大の原因は学園紛争による練習不足であり、選手層の薄さからくる一選手の酷使、必然的に選手の疲労と云った事であった様に思う。(中略) インカレの予想として早稲田は日大に対して幾分有利というのが一般的な見方であった。しかしながら、その予想に反しわが校の選手の疲労からくる不振は甚だしく、監督、コーチ達は一、二度と連勝をあきらめたくらいだ。競泳に於いて、大会最終日前日の総合点は宿敵日大に8点リードを許す破目となり、逆転優勝も殆んど無理とされたものだった。(中略) 最終日、主将と云う重責にある山南、短距離の岩崎らの活躍は特に目覚しく、前日までの劣勢を一举に挽回。最終種目の八百リレーで劇的とも云うべき一点差逆転優勝をもたらしたのであった。(中略) 苦戦しながらも得た勝利の裏には、山南主将の沈着冷静な好リード。そして、合宿生活に、練習時に培われた部員相互の信頼感がチームワークとなり、伝統の天皇盃を早稲田の杜に護り得たものと確信する。私は最上級生になって初めて天皇盃の重さを、勝つ事の險しさを、そして勝つ事の尊さを知ったが、遅すぎたであろうか」(66年度主務・塩山健二)

これ以降、昭和の23年間、水泳部のインカレ優勝はなかった。

ところが、平成(1989年)に入るや、いきなり2連覇を遂げている。

水泳部を追いかけるようにインカレ連覇をつづけていたのがスキー部だ。

スキー部もインカレの連覇がスタートしたのは、水泳部と同じ61年度。

アルペンの早大、飛躍の明大、距離の日大といわれていた時代、早大は青森県・酸ヶ湯温泉で夏季合宿を行った。これが、日本で初の高地トレーニングとなり、距離陣の成績がてきめんに上がった。また、藤沢隆（二商・余市高）が4年間、複合とジャンプで得点を稼いだのが大きい。とくに複合は他を寄せつけない強さで4連覇を果たした。

63年度は、7種目中5種目に優勝する圧勝だった。

5連覇を目指した65年度は、複合ジャンプと純ジャンプが猛吹雪のため、3月に延期された。そのため、ジャンプで確実に上位を狙えた杉本政徳（二商2・小樽潮陵高）が調子を落とし、得点できず、3点差で日大に逆転優勝された。66年度は、同じ3点差で優勝しているから、前年の日程変更がなかったら、水泳部同様、6連覇だったところだ。

スキー部の次なるインカレ優勝は、ここから40年経った06年のことである。

連覇が始まったのが、北海道出身（といっても東京からの転校生）の中津海が、担当になったときだ。これまで、長野出身の佐々木を除けば、早スポは、スキーなど見たことも、やったこともない部員ばかりだった。中津海は曲がりなりにもスキーの経験があった。藤沢隆とも親しくなり、主力選手が情報源となつて、スキー記事が充実してきた。当時、スキー部と山岳部員の一部は、チロリアンシューズという池田靴店でオーダーする高価な靴をはいていた。中津

海は、それを購入して、スキー部員を気取ってキャンパスを闊歩していた。歩きやすくカッコよかったが、他の早スポ部員には、ほしくても手が出ない値段だった。

はたして、あれがスト破りだったのか？

09年6月に発売された『ナンバー』729号【早稲田力。】に、ラグビー蹴球部OBのスポーツライター・藤島大がさりげなく書いている。

「学生運動といえば、つい体育会猛者による『スト破り』のイメージが浮かぶ。早稲田にも似た事態はあったらしい。ただし筆者は東伏見のラグビー部寮近くに暮らす老人に聞いたことがある。『あのころラグビー部有志が駅前でスト破りに出かける他の部の学生を止めていた』」
藤島は「あったらしい」とオブラートに包んでいる。だが、実際にあったのだ。

まず、65年11月、学生会館の自治権獲得、学費値上げ反対を掲げて早大全共闘会議ができたところから話は始まる。

そして、ラ式蹴球部が、八幡製鉄を破り、日本一になった66年1月15日の3日後から、ストライキという具体的な行動に移った。

18日、一法、教育学部がストに入ると、20日、一政、一商、一文、二文、21日、理工と全学部がストに突入した。24日、学校側は、4年生を除く試験延期を発表。29日には、4年生の試験阻止の抗議デモ。2月4日、総長説明会が記念会堂で行われたが、2月10日交渉決裂。その

後、300人の全共闘会議学生が大学本部を占拠した。

それまで、全共闘会議を支持していた学生からも、「学部ストは、クラス決議で決まったものだ。しかし、本部占拠には根拠がない」という疑問が出され始めた。とはいっても、表立って異議を唱えるには勇気がいった。

そこで、運動部のマネジャー会議が動き出した。マネジャー会議というのは、37年に入学した運動部マネジャーが3年のときに、発足させた親睦会だ。

そのマネジャー会議を代表して、水泳部の土川俊雄（前出）、合気道部の清水秀紀（一政・多摩高）、航空部の沢登太平（一商・早大学院）、スケート部の芦沢輝彦（二商・軽井沢高）は、学生会館に封鎖解除の説得に行った。いきなり何百人かの学生に取り囲まれたが、責任者に会いたいというと、議長の大口昭彦（一政・長田高）と革マル派委員長だった成岡庸治が出てきた。大口は、1年のとき、ラ式蹴球部と剣道部に所属していた。そのことを知る運動部員のなかには、「スポーツを暴力的学生運動のために利用しようとしたのではないか、けしからんやつだ」と不快感をあらわにする者もいたのだ。

このとき、成岡はびっくりした顔をした。運動部の代表がやってきたと聞いて、それこそ、藤島が書いた「猛者」がきたと思ったらしい。しかし、4人ともが、165^{センチ}あるかないかの小柄、そのうえ少年顔である。構えて出てきたのに、拍子抜けした感があった。4人は、こう求めた。

「あれはどういう権限があつてやっているのか。本部が封鎖されると運動部の活動にも影響が出てくるし、不便でしょうがない。すぐにバリケードを解いてもらいたい。われわれだけでなく、多くの学生がそう思っているよ」

しかし、「そっちのいい分はわかったが、こっちにも主義主張がある。封鎖を解くわけにはいかない」と突っぱねられた。

これでは埒が明かないと考えた4人は、各部マネジャーに、「このままで学園がよくなるとは思わない。正常化するために、バリケードをわれわれの手で排除しよう」と訴えた。そして、それぞれの部を持ち帰って、共感してくれる部員を集めてほしいと要請した。絶対に強制してはいけないと念を押した。新聞によつては、学校の指示で動いたようなニュアンスで書いたところもあった。しかし、学生の自発的な行動で、強制力もなかったことは確かだ。マネジャー会議に出ていなかった部への徹底もなく、全共闘側についていたマネジャーもいたくらいだ。

マネジャーが体育局に集まっていることを知って、偵察にきた男がいた。つかまえて裸にして返したため、体育局にはその報復だといって、角材を持った学生が大挙押しかけてきた。運動部員はホースの水や消火器で応戦したと書いた新聞もあるが、嘘である。危険を察知して、全員が逃げた。2月11日のことだ。

翌朝、本部前に集まった運動部員は、「こんなことやめよう」といって、小競り合いをしながらバリケードを撤去した。総長室に入ったら、メチャメチャに荒らされていて、見るに耐え

ない惨状だった。秩序を重んじる運動部員には、こんなことを平気でする早大生がいることが信じられなかった。

バリケードを取り除いたことによって、所期の目的は達成できた。しかし、この代償は大きかった。まず、全共闘側の情宣活動に完全に負けた。いつの間にか暴力学生に仕立て上げられていた。角材を振り回していたのは全共闘側だった。それを取り上げたところを写真に撮られ、あたかも運動部員が持っていたかのように報道された。

ホースや消火器で応戦したというのもリークだったろう。

運動部員はバリケードを取り払って引き上げた。しかし、すぐにバリケードは築かれた。

しかし、「彼らには何をいってもわからない。もうわれわれのやれることではない」といって、運動部はいつさい手を引いた。

「いまから思うと、非常に危険な行為だった。でも、そのときは同じ早大生なのだから、話せばわかると思って、交渉にいった。スト破りなんて考えはまったくなく、一般学生の声をまったく無視して、なんでもやれると思ってるのはおかしいという感覚だけだった。実際、表に出なかったが、一般学生もそう思っていた」

清水たちは、話せばわかると考えたが、そう甘い相手ではなかった。それは、その後の彼の行動を見ればよくわかる。

3 回で終わったのが惜しまれる早稲田スポーツ賞

66年度、早稲田スポーツ新聞会は「早稲田スポーツ新聞会賞」を制定した。現在、早稲田スポーツ大賞があるが、それとは趣きがかなり違っている。

早稲田にも体育名誉賞、小野梓記念賞などがあるが、それに該当しなくとも、学生として立派な活躍をしている選手がいる。そんな選手を顕彰したい。これが、制定の趣旨だ。

選考基準は、かなり厳しい。

①早稲田大学に在学する4年生（これは、より長い間その部に貢献したかが、選考のうえで、すべてに優先させる趣旨から）。

②学力優秀であること（学生選手であること自体に価値があり、学問を切り離しては学生選手を考えることはできない）。

③行い正しきこと（スポーツマンの必須条件である）。

④力量が1年から、明らかな成長を示していること（これで、日々の精進を問う）。

⑤その力量が少なくとも、学生選手権レベルで相当の活躍を収めた者。

⑥新人をよく指導し、かつ慕われる者（これは部の将来に貢献したと認められる）。

⑦あまり世のジャーナリズムに登場しなかったが、真の實力とスポーツマンシップを身につけた者。

第1回の受賞者は、バスケットボール部主将の木村勲（67年二政卒・江北高）、ボクシング部の白石輝之（67年二商卒・長崎東高）、馬術部の久米浩（67年一政卒・早大学院）。

木村は全日本総合バスケットボール選手権の決勝リーグ進出の立役者となった。

後年（88年）、木村は、女子バスケットボール部を率い、3年間で、3部から、1部に昇格させた。白石は、リーグ戦5戦5勝、久米は全日本馬術大会中障碍優勝。全日本学生王座選手権大会で最優秀選手に選ばれた。それぞれに、盾と賞状が贈られた。

白石、久米はともにマネジャーと選手の二役をこなしての活躍だけに価値がある。

第2回は、女子弓道部4年が受賞した。しかし、このときの4年生は2名しかおらず、女子弓道部全体に与えられた賞といってもいいだろう。4年生、柳川節子（68年教卒・横浜双葉高）、谷美恵子（68年一文卒・学芸大附高）を中心にしたチームは、1年間すべての団体戦で優勝というすばらしい成績を残した。

第3回は、該当者なし。これ以降、早稲田スポーツ新聞会賞は「自然消滅」してしまった。惜しまれる賞ではある。この賞を制定したのは、佐瀬正弘（68年一商卒・小石川高）、野中辰美（68年教卒・榛原高）、久能正巳（68年文卒・静岡富士高）らだ。

なぜか、佐瀬編集長と高橋晃（69年一政卒・高崎高）編集長時代の『早稲田スポーツ』のバックナンバーがない。

しかし、この時代はなんといっても、釜本邦茂（67年二商卒・山城高）と森孝慈（67年一政

卒・修道高)のいたア式蹴球部だろう。二人は、高木貞男(前出)がア式を担当していた63年に入學すると、すぐに新人戦で優勝。リーグ戦でも全勝優勝し、東西大学の王座決定戦でも関学を2-0で破って大学日本一に。日立製作所を破って天皇杯でも優勝した。元日本サッカー協会副会長、現チチャス会長の野村尊敬(64年二政卒・広大附高)もBKで活躍した。

釜本らは3、4年で、リーグ戦2連覇。66年度には、3年ぶりの天皇杯に輝いている。

早大では、ここしばらく女子フィギュアが注目されている。しかし、この時代は、男子だった。高校時代からライバルとしてしのぎを削ってきた小塚嗣彦(70年教卒・愛知高)、田村正人(70年一政卒・横浜翠嵐)が二人とも早大に入り、インカレ、日本選手権では常に1、2位を分け合っていた。小塚の長男は、現在、フィギュア界で活躍している小塚崇彦。

バスケットボール部には、変わり種がいた。横山邦彦(70年教卒・和歌山桐蔭)だ。野球部の大型一塁手(197^セ)として期待されていたが、2年からはバスケットに転向。2、3年時には、とても一流選手になれるとは思えなかった。しかし、徐々に力をつけ、住友金属に入ってから素質が開花。72年、ミュンヘンオリンピックの日本代表として活躍した。ミュンヘン大会のバスケットボールチームは谷口正朋(日本鋼管)、阿部成章(日本鋳業)ら、名選手がいて、史上最強といわれていた。しかし、結果は、史上2番目に悪い14位に終わった。

佐瀬は、何を思ったのか、日刊スポーツの内定を蹴って、ノンキャリアで海上自衛隊に入隊した。しかし、これは、「無謀なる冒険」ではなかった。水を得た魚のように奮迅の活躍をして「日

本国」を防護した（ほどではないが）。2等海佐、昔でいえば中佐で任務を終えた。

自衛隊は優秀な隊員の不足が悩みだった。佐瀬は、教育隊にいたこともあり、「防衛大だけでは限界がある。大学運動部の優秀な人材を確保したいので、早大のしかるべき人を招待して、自衛隊の実態を見てもらいたい。誰かいらないか」と、上司から相談された。とっさに思い浮かんだのが大西鐵之祐だった。佐瀬は同期だったラグビー部OBの後川光夫（68年教卒・天理高）に連絡を取り、交渉を依頼した。75年夏のことだ。

大西は、意外にあっさりと引き受けてくれた。招待といっても、北部方面自衛隊（北海道）を視察して、自衛隊の魅力を運動部にアピールしてほしいというのが、自衛隊の思惑だった。ところが、大西にとって、これは視察ではなく、コーチの仕事になった。

自衛隊は、善通寺、松戸、中部、帯広部隊などが全国社会人大会に地区代表で出場するほどラグビーが強く、盛んだった。また、防衛大も、早大がBブロックで優勝したとき、2位になったくらいに力があつた。

大西は、千歳、旭川、帯広など行く先々で、「ラグビー隊員」の大歓迎を受けた。大西がくることを、前もって知らされていた隊員は「ラグビーの神様」から指導を受けようと、心待ちにしていたのだ。

佐瀬の人選は自衛隊にとって大きなプラスになったといえる。しかし、その後、早大の運動部から自衛隊に入隊した者は誰もいない。この視察は佐瀬の管轄外の行事だったため、佐瀬は、

残念なことに同行できなかった。航空自衛隊のC1輸送機で、大西が入間から飛び立つのを見送っただけだった。

現競技スポーツセンター所長、スキー部長で早稲田スポーツ新聞会会長の宮内孝知は、64年に、ほんの少し早スポに在籍している。入部してみても、「アルバイトが忙しくて、とても活動できないと思った」のが、退部の理由という。不思議な巡り合わせによって、早スポに戻ってきた。これも一つの縁だろう。

高橋の編集長時代で特筆すべきは、ホッケー部の全日本選手権4連覇だろう。

64年に、全早大として、36（昭和11）年以来、28年ぶりの優勝を遂げた。それから3連覇したあとの67年、現役だけで臨んだ天理大との決勝戦は、まさに死闘だった。

前半 0—0 後半 0—0

（延長）

前半 0—0 後半 0—0

（再延長）

前半 0—0 後半 0—0

（再々延長）

0—0

再々延長を戦っても決着がつかず、両校優勝となった。早大のホッケー部はいつの時代も少数精鋭。いや精鋭とはいえないかもしれない。鍛え上げて、チーム力を一流に仕上げるというのが常だった。そのことは、大学からホッケーを始め、4年生になって、レギュラーの座を掴んだ掛井千史（69年一政卒・早大学院）の言葉でよくわかる。

「大学に入ってからホッケーを始めたため、高校時代からやってきた人達には体力・技術とにもかないませんでした。監督、諸先輩、いわゆる指導者層の方々がホッケーというスポーツに対して、進歩的かつ合理的な考え方を持っておられたため、ここまで上達できたのだと思っております。（中略）我が部は部員総数が最も少ない大学の一つですが、それでもなんとか、毎年秋季リーグ戦頃にはかなりの成績をおさめ、各自持てる力を存分に発揮できるところまでこぎつけております。この背景には監督並びに諸先輩の叱咤、激励があり、各部員の強い自覚があります。そして、この自覚こそ、早稲田大学ホッケー部の長い伝統がもたらしたものだと思います」（『スポーツ年鑑』68年度版）

ホッケー部は、この年、秋季リーグ戦も制している。

少数は現在も同じ、20名にも満たない部員で、09年春、男子は13年ぶりに関東リーグで優勝した。女子ホッケー（91年創設）も、09年秋には、東日本学生選手権で創部以来初のタイトルを獲得した。これも指導者、選手が一体となった伝統の力だといえよう。

67年11月の早稲田祭では、横山勉（69年一政卒・早大学院）が中心になって企画した「体力

テスト」は、連日大入り満員。肺活量（6500^{トリ}）、握力（65^{キログラム}）、背筋力（210^{キログラム}）、垂直跳び（70^{センチ}）の4種目だけのものだったが、列が途切れることはなかったという（カッコ内は、最高記録）。

横山は内田洋行から、オフィス・ブレイン常務取締役。

高橋は、ユニバーシアード東京大会（67年8月26日～9月4日）の閉会式に早大の校旗を持つて参加したというのが、自慢の種だ。現在、京都で音楽喫茶「ZACO」を経営している。

ユニバーシアードの前には、大隈庭園で、外国選手と日本の学生（主として早大生）の交歓会を兼ねた歓迎会が開かれ、大いに盛り上がった。

この歓迎会は、バレーボール部・古市英（68年教卒・北野高・故人）、応援部・菊地哲栄（68年理工卒・千葉高）らの運動部4年生主務と佐瀬ら早スポ4年生が企画・運営したもの。

歓迎会の費用は、7月に、「ユニバーシアードの夕べ」と銘打ったコンサートの利益と寄付金によってまかなわれた。

当たらずといえども遠からず、身内的人物寸評

第一部のタイトルを「草創の頃、その青春群像」としたものの部員たちの姿、像など少しも浮かび上がってこない。そこで、『スポーツ年鑑』の巻末にある部員紹介を抜き出してみた。そこにあるのは、虚像か実像か判断しかねるが、その当時の「青春像」だったのは間違いない

だろう。書いたのは、その年度の年鑑担当者（なお、65年度は年鑑を発行していないので、64年度の年鑑から引いた）。

61年度Ⅱ西川昌衛「全会員の陣頭に立ち、編集長でありながら取材は勿論のこと、広告取りにも率先するという、まさに超人的な活躍ぶりだった」、山崎茂「親分肌では群を抜き、彼女には常にやさしいと評判」宇野英雄「真実一路、この年鑑の写真を独りで引き受け、最後までネを上げなかった」、中野邦観「彼は一日おきに夕方六時から朝八時まで（途中三時間睡眠）ラジオプレスに勤務している。それでも、授業、取材、広告と誰にも引けをとらないという驚異の人物」。

62年度Ⅱ堤哲「卓抜な識見と正確な事務能力で会の推進力になっている。又すべてにおける節度という点でも群れを抜いている」、山崎英夫「一言でいいつくせないが、天才的頭の切れ、健康そのものの体格、一見アラン・ドロンの日本版ともいえる風貌の持ち主」、堀健雄「当会きつて、と断言できる根性の持ち主。内に秘めた闘志と真面目さ、真剣な生活態度は、彼と接することによって誰彼問わず感服するだろう」、佐々木勝衛「無口であるところが他の会員と違っている。彼の健全な精神と比類ない実行力は、何事も最後までやり通す。又彼が非常な人情家であり、低音であることも彼の魅力の一端であろう」。

以上は、初代編集長の松井盈が書いたもの。松井は、通称、ナポレ松井。「世の辞書に不可能という文字はない」のナポレオンからきている。それほど行動力に富んでいた。

通信簿のような寸評でもわかるとおり、実直で、曲がったことが大嫌いだった。早スポの記事に誤りがあり、河野洋平（前衆議院議長）からクレームがついたことがある。松井は丸坊主になって謝りに行った。それが縁となったのか、松井は、河野が社長だった日本糧穀（のちニチリヨウ）に入社し、仲人までお願いした。クレームやケンカから、強い絆ができるという例は珍しくない。しかし、凡人にはなかなかできないことだ。

63年度Ⅱ中津海光夫「異人、馬賊、迷人など幾種の間がある部内をまとめることのできる唯一人の男。親分肌。なにごとにも、強い」、奥本和通「部で経済的、時間的に最も犠牲をよめる業務の大役を見事一人でやってのけた」、高橋清輝「大隈候の意思を受け継ぎ早稲田精神を守る数少ない、野人の一人。情熱家」。

64年度Ⅱ江口拓「編集長として、一年間大いに活躍した。目が悪いが不思議と写真はうまくとる。初恋の人が未だ忘れられない純情家。この世の中で知らないことがない物知り」、小黒哲夫「常に冷静な態度で事を運ぶ。あまり興奮することなく、歓喜することも少ない。食べることが生きること」を信条としている」、宮坂祐次「もくもく仕事をやる。すべての面で部生活の先達の役割を果たした。勉強家で、ややペシミスト的傾向があるのが欠点だが、はじめな生活態度に定評がある」、宮田博子「部きつての努力家。男顔負けの大活躍をした。責任感が強い。趣味はお茶を入れるという女性らしい一面を持っている。最近、野球狂から抜け出した」。

65年度Ⅱ飯島田鶴子「女性の身ながらよくやった。スポーツ観戦が好きで毎日どこかに出ていく。読書家。手芸をたしなむ」、斉藤禎「常に生きていることの意味を探索している思索家。詩が好きで、ドイツ語の詩集を座右の書としているという噂」、畑中宗治「地味ながら、仕事熱心。最近めきめき頭角をあらわしてきた」、藤沢俊「典型的現代っ子。さびしやがり屋でロマンチスト。野球が好きで高校の選手のクセまで知っている」、文屋隆夫「マージャンとパチンコが大好き。高校時代水泳で鍛えたわりに体がよわい」、益子保夫「都会なれして、うるさくなつたが、まじめ。ガールフレンドの多いことで名をなす」、山本隆一「人生に対する態度はふまじめだが、部生活へは常に前向きな姿勢。おこるとこわいファイター」。

66年度Ⅱ佐瀬正弘「小さな事にはこだわらない大陸的性格の持ち主だが、女性の前に出ると、意外におとなしい。授業には出ないが、哲学、文学の博識は相当なもの」、久能正巳「真面目な性格だが、ややおとなしすぎる感もある。誰からも好かれる男で、特にサッカーで鍛えた太く、毛深い足はクロート女性をひきつける。同僚中で優の数がもつとも多いのが、彼の自慢である」、野中辰美「責任感が強く、部に対する貢献は下級生の模範である。物事に対する態度にソツがなく言行一致の人で、質実剛健を地でゆくワセダマン。スポーツ万能で高校時代は野球選手として静岡で活躍した」。

67年度Ⅱ高橋晃「群馬県人特有のどろくささも、最近都会なれして、だんだんアカ抜けしてきた。だが、都会なれといつても、まだまだ。そこが彼の良さであり、仕事に対するファイト

は抜群である」、西村敏洋「バカでかい声も持ち主。コンパ等で、歌を歌わせても、調子の狂った『福知山音頭』しかでてこない。最近、責任感が身につき、頼りになる男と成長した」、横山勉「東京出身だけにセンスは他の部員よりはわずかだが良い。細かい仕事をよくこなしいな事でも率先してやるのでマネジャーにうってつけ」。

68年度Ⅱ宮坂康夫（教育・諏訪清陵高）「野良仕事とボートできたえた、たくましい体が売り物。しかし、ボートをやっていたにしては、水泳はうまくない」、藤原武彦（教育・高田高）「独特の笑顔で常に部室を明るくしている。酔うと先輩の悪口も平気であるので、上級生から恐れられている」、竹内毅（教育・呉宮原高）「卒業したら、故郷に帰って百姓をすることになっているほど、百姓という職業に愛着心を持っている。純情さが彼のとりえ」、石垣達郎（社会学・板橋高）「調子のよさでは部員の中でも有数である。異常なほどカメラにこっているが、その割に写真はうまくないようだ。昼間は日本エアシユーターに勤務しているサラリーマンでもある」。

伝統とは何か？ 丘を越え、年代を超えたもの

一部の最後に、秘話を一つ。

早スポの伝統は何か、と問われて即答できる人はいるだろうか。伝統とは、魂の継承だと定義すれば、「早大の運動部を応援する熱き心」は伝統といえるかもしれない。しかし、具体的に語り継がれ、教え継がれてきたものは、おそろくにもない。それぞれの年代が、それぞれ

の流儀で、創造的に新聞を作ってきたからだ。ところが、46年間、唯一引き継がれ、いや、歌い継がれてきたものがある。『ピクニック』（イギリス民謡）だ。部歌にあたるかもしれない。なぜ、この歌が「部歌扱い」になったのか。

1963（昭和38）年、春の早慶1回戦のあと、1年生の山本隆一、藤澤俊、文屋隆夫らは、タダで飲食できるという応援部員の言葉に誘われて、新宿の「とんかつ三太」（現存）にいった。当時、応援部の上下関係は厳しく、1年生たちは店の隅っこで、身をすくませて座っていた。そのなかの一人が誰に聞かせるともなく、丘を越え……、と口ずさんでいたのだ。山本は、その歌が妙に頭に残った。

2日後、早慶3回戦が終わり、「金城庵本館」で早スポの早慶戦打ち上げコンパが行われた。新人は一人ずつ歌わされるのが恒例。山本は、指名されて、丘を越え……と歌い始めた。山本にいわせると、「応援部の新人は暗く歌っていたが、私は明るく歌った」そうだ。これが、上級生の肝に響いた。はい、2番、はい、3番のコールが鳴りやまず、いつしか部員全員が合唱し、30番（そんなにないが）までつづいた。

この歌が「受けた」のは、山好きの中津海、高橋がいたうえに、宮坂、江口の歩き好きがいたことが、一つの理由だが、さらには、時代背景もある。

昭和30年代に入ると、合ハイ（合同ハイキング。現在の合コンに比べて、なんと清らかだったことか）が大学生の間にはやりだし、昭和34年には、ブームといわれるようになっていた。

学部への掲示板には、毎日のように「合ハイ」の誘いが貼られていた。

現在、高齢者の登山ブームが話題になっているが、その中核を担っているのは、「合ハイ」世代だ。「丘を越え……」を歓迎する土壌があったのである。

そして、伊豆湯ヶ野で行われた夏合宿の打ち上げで、2時間にわたり歌いつづけ、宿泊していた温泉民宿「江戸や」の床は抜けそうなくらいに揺らいだ。これ以降、『ピクニック』は部歌的地位を不動のものにしたのだ。

ラグビー蹴球部の第一部歌『北風』がスコットランド民謡だということを考えれば、酔った勢いの産物とはいえ、『ピクニック』も歌詞をオリジナルにすれば、十分歴史に耐える部歌になるのではないかと思う。

第二部

早スポ「クロニクル」栄光と挫折とともに

第1章 星野、田淵、谷沢たちが活躍した六大学野球の隆盛

安保闘争より神宮球場

日本初の「超高層ビル」、霞が関ビルがオープンした年である。1968（昭和43）年は六大学野球が一つのピークに達した年でもある。

他大学を見れば、星野仙一（明大69年卒・倉敷商高、中日、阪神元監督）、田淵幸一（法大69年卒・法政一高、阪神、西武、福岡ダイエー元監督）、山本浩二（法大69年卒・廿日市高、広島元監督）らの錚々たる顔触れが最上級生だった。

「（一年間に新聞を）5回も出していたなんて、今では信じられない……先輩たちには申し訳ないが、崇高なジャーナリストイックな思いなんてなかった」

卒業後、日刊スポーツに進んだ石垣達郎（70年社学卒・都板橋高）が回想している。スター揃いで華やかな学生野球に、ひたすら酔いしれることができた時代だったのだろう。

春は法大が67年秋に続き連覇。早大は秋、早慶戦に勝って逆転優勝を果たした。

まず法大戦、東京六大学の通算最多勝利記録（48勝13敗）を樹立することになる山中正竹（法大70年卒・佐伯鶴城高、住友金属、横浜ベイスターズ常務取締役）を攻略。第6週の明大戦にも連勝して優勝のチャンスが訪れた。明大の主将でもあった星野は早大と相性が悪く、通算23

勝も上げながら対早大戦は入学以来7連敗で終わった。星野の1学年上に高田繁（明大68年卒・浪商、巨人、日本ハム、ヤクルト現監督）がいた。

早スポの高橋英明（71年政経卒・都国立高）は1年の時に明大の主将だった高田に話を聞いたことがある。「早慶戦号」で各大学の主力に勝敗や試合展開を聞く恒例企画があったからだが、「最多安打記録を作ろうか」という4年生の大スターだったが（通算127安打は今も破られていない東京六大学記録）、1年生の若輩者にも真摯に接してくれて感激した」という。高田は、鉄拳制裁も辞さぬ熱血指導の「御大」島岡吉郎監督に一度も殴られたことがない優等生だったことでも有名である（もう一人、殴られなかったといわれるのが星野仙一である）。

早大の主将は長倉春生（69年教卒・静岡高、大昭和製紙元監督）。投手は小川邦和（69年二文卒・尾道商高、日本鋼管、巨人ほか）、小坂敏彦（70年社学卒・高松商高、巨人ほか）、安田猛（70年社学卒・小倉高、大昭和製紙、ヤクルト）。野手は阿野鉦二（70年卒・明星高、巨人）小田義人（70年教卒・静岡高、大昭和製紙、ヤクルトほか）、荒川堯（70年社学卒・早実高、大洋↓ヤクルト）谷沢健一（70年二文卒・習志野高、中日）、千藤三樹男（69年社学卒・岐阜商高、北海道拓殖銀行、日本ハム）というように下級生が主軸だった。

吉田保（71年卒）は、「78号」で、「（法大戦で）安田が山中に投げ勝った試合は見事だった」と書いている。「安田の持ち前の度胸」がものを言った投球であり、勝負だったとい

うことだ。宮坂康夫（70年卒）も、この時の投球を指して、「安田がプロでも活躍し、王キラーになったのは度胸だった」と早スポ「40周年記念誌」で賞賛している。

爽やかな戦いが繰り広げられる神宮外苑とは打って変わって、当時の大学は凄まじい学園紛争の真只中にあつた。69年には東大安田講堂の攻防戦が起こる。早大キャンパスでもデモ隊と機動隊が入り乱れ、早スポ部員たちはその合間を縫って体育館の部室に向かった。高橋英明（前出）も大学に来れば休講続きで、真直ぐ部室に向かったくちだ。

部室に行つて他の部員がいなければ、西門通りにある喫茶店「クレバス」に向かう。そこには部員の誰かが、必ずと言っていいほど顔を出していたからだ。「クレバス」では編集会議や割付までも行つていた。当時の第二部室的な場所だったのだ。もともと、部室や「クレバス」でいくら時間をかけて割付用紙にレイアウト案を書き込んでも、神奈川新聞に持ち込むと、結局は最初からやり直し、ということがしばしばだった。創刊から10年以上後の世代になる石橋誠一（75年卒）は「行数、写真のサイズなど、神奈川新聞でチェックが完了するのに丸一日かかっていった」と「40周年記念誌」に書いている。いつの時代も、アマチュアの気負いに対して、プロの目は厳しく冷静だったということだろう。

この当時、「早慶戦号」の1面には記事が少なく、選手らの大きな写真で埋めるシンブルな紙面構成であることが多かった。写真を担当していた石垣達郎は部所有のカメラがなかったのだ、自らバイトして中古のカメラを買った。

「1カ月のバイト代が9000円。レンズは3万円ぐらいだったと思う」

神宮球場のカメラマン席で六大学の試合を撮っていると、日刊スポーツのカメラマンから「ウチを受験してみれば」と声をかけられた。それがきっかけで、石垣は日刊スポーツに入社した。早スポ出身でスポーツ新聞記者となった第一号である。

谷沢健一らの黄金世代と同期になる石垣は、小坂敏彦と社会科学部で同じクラスだった。小坂が買った教科書を二人で読んで、試験のレポートを書いたこともある。

春秋の早慶戦に際しては、『早稲田大学新聞』と『三田新聞』が合同で特集号を発行していた。敵はなんとカラー印刷。同じ一部10円の新聞代で白黒印刷の早スポは、当然売れ行きが悪かった。「早慶戦号」に掲載されている広告を見ると、当時の『東京スポーツ』が一部10円とある。『早スポ』と同額だったということは、やはり割高だったのか……。

「早慶戦号」の印刷代が15万〜16万円かかった。部数は2000部から3000部ほど。試合当日は神宮球場の応援席入り口前に机を出して売ったが、「(一箱40円)タバコ一本をオマケにつける」と言っても、なかなか売れなかった。裏面に校歌、応援歌の歌詞が掲載されているので、「新入生はこの歌詞を見て校歌を歌ってください」とか「サツと読んだ後は、紙ふぶきに使ってください」と言って売ったりもした。

早慶戦は2勝1敗。勝ち点を上げて4シーズンぶりに優勝し、捕手の阿野が首位打者に輝いた。

この年、学生応援席を縮小するという神宮球場側の発表があった。珍しく(?) ジャーナリストティックな色気を出して、「寂しすぎる」という主張を書いて、神宮の伊丹球場長から呼び出されたこともあった。

当時は運動部の試合といっても、応援する学生は少なかった。野球部の優勝バレードには1万人が参加するのに、他の競技では一般学生に告知すらされないで試合が行われていた。この寂しい現状を憂えて、69年「10月号」の「主張」といコラムでは「応援部は定期戦以外の応援はしない、という方針のようだが、こうした慣習をなくして各々の部の応援に出向いてもらいたいものだ」と記されている。

年が明けて正月の箱根駅伝。読売新聞の本社は当時まだ有楽町にあり、その有楽町の本社前がスタート地点だった。

石垣はスタートの写真を撮った後、応援部から「一人だけなら乗せてもいいよ」と言われた。その好意に甘えて、彼らのマイクロバスに同乗させてもらう。各中継所で写真を撮りながら箱根を目指した。ところが、「芦ノ湖では先回りして待ってよう」と箱根ターンパイクに入るところでガソリン切れに。結果、ゴールの写真は撮れず、応援部が用意してくれていた宿への到着も遅れてしまった。夜の食事にはありつけず、風呂には湯もない。貧乏学生だから、カネはもとよりコートもセーターも股引もない。寒い箱根だった。

一方、秩父宮ラグビー場では、早大が大学選手権決勝に登場、慶大と14―14で引き分けて両

校優勝となった。しかし、抽選で負け、日本選手権への出場権は得られなかった。

ラグビー部には山本巖主将（70年卒・新田高、リコー、サントリリー元監督、日本代表元監督）、WTBに1年生の佐藤秀幸（73年卒・大分舞鶴高、新日鉄八幡、早大元監督）がいた。決勝戦終了後、表彰式が始まると、感極まったスタンドのファンが両校ファイフティーンをどつと取り囲んだ。それほど見事な決勝戦だった。

「ご苦労さん、君たちは一度も負けてないんだぞ。胸を張れ。抽選なんて水物なんだ。弱い弱いといわれながら、FWもよくやってくれた。ありがとう」という白井善三郎監督の声を、石垣はロッカールームのドア越しに聞いた。

映画広告と吉永小百合

1969（昭和44）年春に入部したての1年生だった豊田和夫（73年教卒・印旛高）は、当時の早大野球部のメンバーを今になって見直してみたが、改めて驚いた。

「投手の小坂、安田。捕手の阿野。内野は谷沢、小田、荒川、中村勝広（72年卒・千葉成東高、阪神元監督）。外野に谷沢、千藤とみんなプロに入っている。これで優勝してなきや、おかしいよ」もちろん、当時もそう思った。しかし、春季リーグ戦の現実とは明大優勝。法大には4年の山中投手がいて、この年の秋からは3連覇を果たす。早大の主将は谷沢健一。早大はこの年から丸4年間優勝から遠ざかることになる。

野球の早慶戦第1回戦と同日、隣の国立競技場ではナイターの「早慶サッカー」が行われた。当時の紙面によると、「浩宮さま（現皇太子）も観戦」「3万5000人の大観客が集まった」とある。

3年生で主務となった高橋英明は、部にカネがない苦労を改めて思い知らされる。

以前から神奈川新聞には印刷代の支払いを待ってもらい、かろうじて発行を続けていたのだが、新年度を迎えてついに最後通牒を突きつけられた。高橋の実家は商売を営んでいたが、やむを得ず親から借金して、急場を凌いだ。

「何に使うのか詳しいことは聞かれずに貸してくれた。30万円ぐらいだったように思う」

早慶戦号を10円で売っても部数はそれほど多くはない。朝の5時から新聞を売って、ゲーム中は寝てしまうことが多かった。そして、試合が終われば夜は新宿で飲んでしまう。2日間の売り上げはそこで消えるのが常だった。これでは経営危機も当たり前である。

豊田の2年先輩に当たる町田博（71年商卒・都九段高）は、入部早々に広告取りを命じられ、映画会社を訪問した。この頃はまだ映画が娯楽の中心だった時代で、「娯乐的なスポーツ紙だから、娯楽の王様の映画広告」。単純な連想だが、以前にも映画会社の広告が早スポに載ったことはあった。結構、簡単に取れるかも、と思えたのかもしれない。数社を回って、日本ヘラルドが早慶戦の日程と公開時期が重なる映画の広告を出してくれることになった。学ランを着込み、襟には「早稲田大学」の校章をつけていったので信用された、と思った。シドニー・ポ

ワチエ主演の『夜の大捜査線』（ノーマン・ジェイソン監督作品で、アカデミー賞5部門受賞）という話題作だった。広告料金は全5段で2万5000円。当時としては破格の収入になったが、映画自体も大ヒットした。これ以降も、日本ヘラルドの映画広告はたびたび「早慶戦号」などに掲載されることになる。

映画続きの話になるが、当時、大人気の映画女優といえは吉永小百合（69年二文卒・精華学園女子を中退後、大検）である。竹内毅（70年卒）は、秋の早慶戦をスタンドで観戦する吉永小百合の神々しさに見とれた。1年下の井田峰明（71年卒）も神宮で吉永小百合を目撃して感激している。馬術部に在籍した彼女は、いまでも水泳でシェイプアップに励んだり、ラグビーの熱烈ファンであることを公言したりしている。大女優とスポーツの関係は意外に深いのだ。

吉永小百合は高田馬場の喫茶店「白十字」によく出没していた。また、大隈講堂の駐車場に、当時としては珍しいテレビ付きの白いカラーが止まっていれば、彼女が体育の授業に来ていた証拠、という情報もあった。石垣は「一般学生は短パンだったが、吉永小百合は長いトレパン姿で卓球の実技に出席していた」ことを覚えている。上級生が何度も取材を申し込んだが、「一般学生と同じです」と断られたと聞いた。

早スポは春の「早慶戦号」の後、「6月号」、秋の「早慶戦号」「12月号」「1月号」を発行した。ラグビーのシーズンでも、現在と違って詳細なラグビー選手の紹介などはなかった。

ラグビーは対抗戦、選手権とも日体大に敗れ、2位に終わる。

1969年度は日本選手権の日程をめぐって前代未聞のトラブルが起きた。1月の同時期に行われたアジア選手権の日本代表チームに主力選手を供出しなければならなかったため、社会人大会優勝の近鉄、2位のトヨタ自工、3位の三菱自工京都と関西社会人リーグに所属する3チームが日本選手権への出場を辞退したのだ。日体大の対戦相手は、同率3位だった富士鉄釜石に急遽変更された。このドタバタ劇で準備不足のまま出場した富士鉄釜石は、学生相手にあっさり敗れてしまう。早スポは「日程を組んだ協会も非難されるべきだし、都合を押し通した関西社会人リーグも非難されるべき」と紙面で異議を唱えている。ちなみに、富士製鉄と八幡製鉄が世紀の合併を果たし新日本製鉄が誕生するのは、日本選手権から2ヵ月余り後の1970年3月31日のことである。

69年度最後の記事は、「ワセダスポーツの衰退は目に余るものがある。日大、日体大の進出は目覚しい。一般学生も試合を見て応援にしてみたいものである」という意見で締められている。1面には「主張」というコラム。駒沢秀太郎（71年卒）の最後の記事のタイトルは「70年の選択と義務」だった。

「今後の日本が歩むべき方向が規定される日米安保条件の改定の年が1970年の最も大きな出来事である。政府は早々と安保自動延長を決め荒れると予想されるであろう70年を前に、あらゆる防衛の手段を打ち始めた。我々は革命など考えてはいけなのだろうか。常に問題意識を持ち無関心な態度で妥協してはならない（一部略）」

安保闘争が終焉を迎えつつあり、学生が政治から距離を置き始める直前の時代。過度期を感じさせる、政治色の濃いコラムである。

2年後の72年1月号の「主張」にも、「日本資本主義 過去からの矛盾」という、明らかに左傾化した意見が述べられている。

「佐藤首相はニクソン大統領と会談し沖縄返還を72年5月15日と決めた。これで戦後日本が終わったと認識していいものだろうか。また当時の不況はニクソンショックにより、日本が急速に発展するたびにアメリカが脅威を覚え、力づくで押さえ込みにかかってくるというパターンである。これからは日本資本主義も過去の歴史的事実を反省して、新しい道を歩まねばならない。そしてアメリカの隷属を断ち切ったときに沖縄人民を含む全ての日本人民解放の第一歩となるであろう（一部抜粋概略）」

スポーツ紙らしからぬ、こんな生硬な意見記事が1面の左肩に掲載された時代もあったのである。

69年12月13日、南門前の高田牧舎にて早スポ10周年の記念会が開催された。

春と秋で記事流用疑惑？

「われわれは4年待った。最後の1年は熱烈に待った。もう待てぬ……」

こう檄文を撒き散らし、三島由紀夫が陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地で自決したのは1970（昭

和45) 年11月25日のことだ。

2年生だった後藤洋一(73年卒)は、三島由紀夫とすれ違ったことがある。この年秋の「早慶戦号」の取材で、有楽町にあるニッポン放送へ赴いた時だった。Tシャツ姿が奇異に映った。そんな印象が残る。それからわずか数週間後の事件だった。

野球の春のリーグ戦は、明大にこそ連勝したものの、法大に連敗。主将は勝部敬一(71年教卒・米子東高)で、エースは久保陽二(71年教卒・高松一高)。早慶戦は引き分けを挟み4連戦となったが、勝ち点を挙げて2位を確保。4日間で15万5000人の観衆が集まった。4回戦、米田俊次(72年社学卒・報徳学園高)の決勝ホームスチールは後々まで語り草になった。

秋のリーグ戦は、早慶戦で慶大に敗れ、4位に終わる。

ところで、春の「早慶戦号」と秋の「早慶戦号」の早慶両校「戦力打診」を並べて読んでみると、ほぼ同じ原稿で構成されていることに気付く。秋号では「今シーズン」が「春のシーズン」に、「登板していない」が「初登板の今季……」などと若干の言い換えが見られるものの、概ね同じ文章。最後に「春の4連戦のような試合を期待したい」と付け加えられているのだけが春と違う。流用? 手抜き? また、「選手紹介面」での各選手の記事でも、春と秋で重なる記述が多い。実はこの頃、早稲田スポーツの新入部員は極度に減少しており、部存亡の危機が続いていたのである。したがって常に人員不足で、新たな取材も難しかったということかもしれない。この選手紹介の「流用疑惑」は前々年の宮坂、前年の駒沢の代でも見られる。同じ年の春から秋へ

の流用は特に顕著である。しかし、高橋も町田もその件はまったく覚えていない。

年明けの「1月号」1面トップの見出しは「早大ラグー全日本を制す」とラグビー日本一を誇らしげに伝えている。

ラグビー部はこの70年度と翌71年度で対抗戦、大学選手権ともに連覇し、日本選手権も2連覇の偉業を成し遂げることになる。70年度の大学選手権決勝戦では14―6で日体大を破って前年の雪辱を果たし、日本選手権でも社会人チャンピオンの新日鉄釜石を30―16で退け日本一になった。ロックに大東和美（報徳学園高・現アントラーズ社長）、スクラムハーフには卒業後、エリート金融マンとして住友銀行（現三井住友銀行）に勤めながらジャパンを率い、ワールドカップで日本唯一の勝利を挙げることになる宿沢広朗（73年政経卒・熊谷高、日本代表、早大監督）がいた。紙面で「宿原」と誤植されているのはご愛嬌？

この頃、年間定期購読料3000円。

早慶戦号の値下げ敢行

1971（昭和46）年。野球部は中村勝広（千葉成東高、元阪神監督）が主将だったが、春は3位で優勝には手が届かなかった。石井好博（72年二文卒・習志野高）、丸山朗（73年教卒・興国高）ら甲子園の優勝投手も、早大では振るわなかった。2年生捕手の楠城徹（74年教卒・小倉高、太平洋クラブ↓西武。現東北楽天編成部）の「選手紹介」には「巨人のドラフト指名

を蹴って入学した」とある。高校球界の逸材は集まっていたはずなのだが。

秋は慶大の20回目の優勝が早慶戦で決まる。早大は4位。観客は2試合で10万人集まった。この年の「4月号」編集長は片岡正時。豊田和夫は次の号の「早慶戦号」から編集長になった。「今となつては時効だから話すけれど、同じ代のヤツが生意気で『俺が編集長をやる』というのでやらせたんだ。ところが、彼は春の合宿にも来なかったし、どうも気に入らない。一つ上の佐藤幸雄さんと相談して、俺が代わっちゃったんだよ。彼はいられなくなつて、『4月号』一つ作つて辞めちゃったんだよ」

「クーデター」は成功した。早スポ編集長の途中交代は後にも先にもこの一度しかない。

春の早慶戦では『早稲田大学新聞』と『三田新聞』がいつものように合同で早慶戦号を作つたが、一部30円で販売するという情報が直前に入ってきた。早スポは大手2紙に毎回苦戦を強いられてきた経緯がある。緊急会議を開き、20円値下げして10円での販売に踏み切ることにした。もちろん見込みはまるでわからない。神宮の販売現場では、ライバル紙を徹底マーク、敵の「売り子」の後からついて行って、「専門紙なのに安い」をアピールする作戦を取った。奏功して販売結果は早スポの圧勝だった。

秋は大手2紙が早慶戦号を作らないという情報を、またまた事前にキャッチすることができて、価格を30円に戻した。何しろ今回はこちらの独占状態である。売れ行きも悪くなく、試合が3回戦までもつれ込んだこともあり、収益は上がった。もつとも、相変わらず早スポの選手

紹介記事には、春↓秋の流用が見られた。

秋の「早慶戦号」には天地真理のインタビュー記事が掲載されている。早稲田祭に小柳ルミ子（70年の芸能面に登場している）が出演することになり、写真を担当していた豊田が撮影に行った。会場にいた野球部の中村勝広に「壇上で握手してください」と頼んだところ、「アマチュア規定に触れるので握手はできない」と断られたことを、豊田は今でも忘れられない。近年、プロ野球からの裏金問題が発覚して早大野球部も揺れた。何がアマチュアで何がプロかの線引きは曖昧で、アマチュア精神などつくに死語ではないか。翻ってみれば当時はアイドルとの記念写真すらタブー視するほど、アマチュアリズムに純情だったということだが、まさに隔世の感がある。

慶大の20回目の優勝がこの早慶戦で決まる。早大は4位。観客は2試合目までで10万人集まった。

不振の野球部に対して、ラグビー部は黄金期の輝きを見せる。対抗戦を全勝で優勝し、年明けの大学選手権決勝では法大を18―3で破り、2年連続で大学日本一。続く日本選手権でも三菱自工京都を14―11と撃破して2連覇を果たした。

「まさに奇跡ともいえる早大の逆転劇だった。後半の三菱陣10ヤード線上のラックから早大に絶好の球が出た。これを拾った宿沢が中村康につないで右オープン攻撃。さらに藤井、佐藤に渡った。ここで佐藤は相手を十分にひきつけて得意の低いパント。右WTBの堀口がダッシュ

鋭く、ワンバウンドで追いつき、そのままタックルを振り切って右隅にトライ。ノーサイド寸前、見事な逆転だった」(本紙より。一部省略)

ファンの間ではいつまでも語り継がれる堀口孝(74年商卒・早大学院)のトライである。編集長の豊田が語る。

「野球は1年の時からすごいメンバーが揃っていたのに優勝できなかった。他の種目も芳しくなかったけれど、ラグビーだけは安心して見ていられた。宿沢、中村康司(73年卒・函館北高)、金指敦彦(75年卒・下田北高)、堀口、植山信幸(75年卒・報徳学園高、横河電機)というBK陣は黄金世代だった。でも、4年の時は大学選手権で明大にノーサイド直前で逆転されちゃうんだけどね」

豊田が4年の時の大学選手権で、明大逆転勝利のキーマンになったのが1年生SHの松尾雄治(明大76年卒・目黒高、新日鉄釜石、現成城大監督)だった。後にSOに転向した松尾は4年生時に明大を初の日本選手権優勝に導き、卒業後は新日鉄釜石で7年連続日本一の立役者となる。

この頃の紙面の傾向だが、こんなに活躍していたにもかかわらず、やはりラグビーの扱いは小さい。野球の早慶戦が紙面のメインであり、ラグビーの早明戦を大きく取り上げようという意識は、当時の豊田らにはまったくなかった。世情がそうだったのだ。

豊田、岩田務(73年卒)、後藤洋一(73年卒)らが4年になって現役を退き、新しい体制をスター

トさせるはずの春合宿で暗雲が垂れ込める。新3年生になる代では島崎潤一郎（74年卒）のみが参加し、小川信（74年政経卒・仙台一高）、山根伸二（74年卒）は不参加だった。「小川、山根の二人は、部の先行きに不安を感じて合宿を見送ったのではないか？」という雰囲気合宿に参加した豊田ら4人は感じていた。部員不足、資金不足は慢性的に早スポを痛めつけていたのだ。もちろん、これでは合宿にはならない。途中で切り上げて帰京する。帰り着いた東京駅は騒々しく、テレビには黒山の人だかりがしていた。連合赤軍による「あさま山荘事件」だった。4月に入って、新入生の勧誘で10人ほどが入部した。これで部存続の危機をまずは免れた。定期購読料をこの年から値上げして、5000円に。

東門君死亡する

1972（昭和47）年、野球は主戦投手が佐藤守（75年教卒・本荘高）、大橋功男（74年教卒・静岡高）。野手は鈴木治彦（74年教卒・大宮高）前川善裕（75年教卒・東葛飾高、日本鋼管）ら。前川が4番を打っていた。

この時期、慶大が1971年秋から3連覇を果たす。優勝のかかった72年春の早慶3回戦では、徹夜組が史上最多の7000人も出たという。慶大の左腕・萩野友康（73年卒・土佐高、新日鉄八幡）が主将でエースと大車輪の活躍だった。3年生だった山下大輔（74年卒・清水東高、元大洋、楽天）も主軸を打った。

早スポでは、選手紹介面の石井藤吉郎監督の写真はもちろん、記事の若干の流用が続いている。

「9月号」の1面トップの見出しは「東門君死亡する」だった。野球部の東門明選手（教2・武相高）が日米大学野球の試合中に事故死した悲劇を報じている。

2年生ながら学生日本代表に選ばれた東門は、7月9日、神宮球場で行われた第2戦の7回に代打で登場。ヒットで出塁し、次打者・藤波行雄（中大73年卒・静岡商高、中日）の二塁ゴロで二塁へ。二塁手は二封のため遊撃手へ送球、一塁転送のボールが東門の右側頭部を直撃したのである。仲間に背負われてベンチに下がった時、東門は自分で起き上がった。ベンチでも腰かけて頭を叩いたり、撫でたりしていたが、周囲に「大丈夫」と答えた直後、意識不明になった。5日間、意識不明の重体が続いた後、14日11時35分、脳挫傷で死亡した。

20日正午から大隈小講堂で合同葬儀が行われた。米国野球連盟会長も参列してお悔やみを述べ、最後に丸山朗主将が弔辞を読んだ。

春の早慶戦選手紹介で東門は、次のように紹介されている。

「名門武相のエースとして関東球界では有名であった。今年のバッティングを生かすためピッチャーからサードにコンバートされた。2年生ながら早くもレギュラーの座を獲得。かなりの気迫と根性の持ち主である」

春季リーグ戦の打率がいきなり4割。ベストテンの6位で早大からは唯一、日米野球に選ば

れた。事故に遭った際の背番号「13」は日米野球学生日本代表の永久欠番、早大での背番号「9」も早大野球部の永久欠番となった。

島崎潤一郎（74年卒）は、70年安保を巡り大学全体が騒然となっていたこの年春の入部である。この前後の年代の記憶は雀荘の「南風荘」、とんかつ屋の「フクちゃん」、その隣の「クレバス」もみなワンセットになっている。部室は古い体育館の3階にあった。薄暗くて小さな部屋。剣道場横に並べられた胴着から汗の臭いが立ち込めてきた。夏などはとても編集会議を開くような気分にはなれなかった。

72年度のラグビーは対抗戦では明大に勝ったが、前述のとおり大学選手権の決勝で雪辱された。

早スポ「9月号」に「3年連続日本一なるか」という小さな記事が見られ、「12月号」に早慶ラグビーの結果までが載っている。相変わらずラグビーの扱いは小さいままだ。「1月号」がなかったため、早明戦も大学選手権も、結果さえ報じていない。

「ラグビーは社会人にも勝ち日本一にも輝きました。野球の早慶戦が早スポのハイライトで部員の間が早慶戦特集号に全力投球していました。朝一番の電車で信濃町に集合して販売をしました。当日の売り上げが年間の部費のかんりの部分を占めていたからです」

島崎は「40周年記念誌」にこう書いている。収入確保のためには、紙面が野球偏重にならざるを得ない苦しい台所事情が続いていたのだ。

「12月号」の1面トップは71、72年と関東大学リーグを連覇したア式蹴球部だった。72年のリーグ戦は新装なった西が丘競技場で行われ、早大はライバル中大に引き分け、得失点差で優勝を決めた。1年生の碓井博行（76年教卒・藤枝東高、日立元監督）が活躍した。

秋の「早慶戦号」は創刊1000号目に当たる。島崎は「創刊1000号を迎えて」と題した記事で、「百号を迎えたことを契機に、過去の反省（商業スポーツ新聞追隨）を踏まえつつ一般新聞と決別することによって新たに、大学スポーツ活動の純粋性」ということを中心課題とした目的に向かって飛翔することが、今後の我々の活動に課せられた任務ではないかと考えるのです」と書いた。

翌73年、野球は春の六大学リーグ戦で9シーズンぶり25回目の優勝。全校から勝ち点を挙げる完全優勝だった。主将となった楠城徹捕手の打棒が復活した。

2年生だった山内俊夫（76年卒）は第6週、明大に連勝した後の神宮の異様な光景を眺めていた。この後の慶法戦で法大が勝てば早大の優勝が決まるという状況である。球場に残っていた早大学生の一部が、法大の応援をするために一塁側から三塁側（法大側）へ移動していく。法大のチャンスにはコンバットマーチが三塁側から流れ、エール交換では両方のスタンドから「都の西北」が聞こえてきた。法大の勝ちが決まると三塁側の学生がスタンドから飛び降り、一塁側へ駆け抜けた。エール交換後、応援部の音頭で残っていた早大生のほとんどが、伴奏のない「都の西北」を歌った。9シーズンぶり。それだけ待ちわびたのだ。

優勝は慶法戦の結果待ち、というこの日の情景を、紙面では「新宿戸塚の野球部合宿所では石井（藤吉郎）監督が中本（尚・75年卒）選手を相手に将棋をさしていた。優勝を知らせる電話を受け……」とある。早大は早慶戦でも連勝して完全優勝。矢野暢生投手（75年教卒・今治西高）は6連勝だった。

この頃の早スポ部員は、早慶戦号の入稿になると禁酒禁煙。さらに禁麻雀、禁喫茶店まであった。3年生だった安藤亨（75年卒）は「当時は担当（主に取材する運動部を決めること）がなかった。同期が3人と少なかったし、野球もラグビーも取材に行った。とにかく全てをカバーした」という。安藤は写真も担当しており、「カメラマン席に入ってプロの方たちと一緒に撮っていた」。編集長の石橋誠一（75年卒）も「ネット裏席とカメラマン席を行き来したのは気持ち良かった」と「40周年記念誌」に書いている。少人数が融通し合い、取材もして写真も撮っていたのである。

2年生の丸山芳夫（76年卒）と北田昭雄（76年教卒・千葉成東高）は、優勝のパレードでは裸足で走ってはしゃいだ。北田は、高校の同級生で翌年主将を務めることになる川口和夫（76年商卒・千葉成東高）を応援していた。

秋は法大、明大に連敗し優勝争いからは脱落、3位に終わった。個人記録的には鍛冶舎巧（75年教卒・岐阜商高、松下電器・現パナソニック取締役）が5季連続3割を打った。

73年度のラグビーは大学選手権決勝で明大に29―6の完勝。74年度も同じく明大を18―0で

退け、大学選手権を連覇している。

73年春、ラグビー界の伝説的人物である大西鐵之祐が、早稲田スポーツ新聞会の新会長に就任した。

法大「花の49年組」を抑えて完全優勝&大学日本一

「4月の『新入生歓迎号』をたった4人で製作することになった。早スポも本当に終わるかと思った」

1974（昭和49）年春の時点で、たった一人の2年生部員だった井上健二（77年教卒・札幌啓成高）の述懐である。新3年生になったのは山内、丸山、北田の3人。2年生の伊藤政彦（77年卒）が4月になって少し遅れて入部するまで、全部員合わせて4人しかいなかったのだ。この頃の早スポは財政面の資金不足、人材面の慢性的な部員不足と、窮状が続いていた。

しかし、六大学野球では、江川卓（作新学院高・阪神↓巨人）、金光興二（広島商高・三菱重工広島、現法大監督）といった「花の昭和49年組」と呼ばれる甲子園のスター選手たちが法大に集結するなど、新時代の到来となった。早スポも臼井泉（78年教卒・島根大田高）、岡部宏（78年社学卒・伊勢崎東高）、中原孝子（78年商卒・佐賀西高）など1年生が大挙（？）入部し、息をついた。

石山建一（65年二商卒・静岡高、日本石油、プリンスホテル元監督）が新監督として就任し

たシーズン。投手陣は矢野暢生、阿部政文（75年教卒・大館鳳鳴高）が支え、打線は前川善裕の他、吉沢俊幸（77年教卒・日大三高、阪急）、松本哲（改名して匡史、77年教卒・報徳学園高、巨人）ら下級生が勢いに乗り、10勝1敗で完全優勝。札幌で行われた大学選手権でも15年ぶり2度目の優勝を果たした。

人数では法大「花の49年組」に及ばないが、早大にも甲子園の逸材・山倉和博（78年教卒・東邦高、巨人）が入学。山倉は前年、南海にドラフト2位指名されたほどで、堀場秀孝（慶大・丸子実高）、袴田英利（法大・自動車工高、ロッテ）と並んで高校捕手三羽鳥といわれていた。1年春から起用されたが、神宮のネット裏からもサインの指の動きが見えていたなど、ルーキーらしい初々しさがあった。丸山は「クレバス」で山倉にインタビュして、選手紹介では「野村克也の再来」と書いた。

春の「早慶戦号」の1面トップ見出しは「完全優勝へ走る早稲田」。企画では第1回早慶戦の特集を組み、安部球場にあった（現在も跡地の総合芸術情報センター入り口に置かれている）安部磯雄と飛田穂洲の胸像の写真を載せたが、紙面では真っ黒に印刷されてしまった。その新聞を持って広告取りに行った丸山は「きちんと写真の撮れるカメラマンはいないの？」と皮肉られて恥ずかしい思いをした。

秋の「早慶戦号」の編集作業では、長嶋茂雄の引退試合と入稿が重なった。北田と1年生の中原、甲斐まゆみ（現姓亀岡、78年教卒・甲府一高）らは10月14日、神宮での明大戦取材を終

えると、入稿作業はさておき、総武線で信濃町駅から水道橋駅へ移動。後楽園球場に長嶋の最後を観に行ってしまった。間の悪いことに編集長の山内は名古屋出身で中日ファン。前日に決まったドラゴンズの20年ぶりの優勝が長嶋の引退騒動で吹っ飛んでしまったばかりか、部員たちが勝手に引退試合に行ってしまったことでカリカリと来て、みんなを怒鳴りつけた。

この時に怒鳴られたせいかな(？)、1年生だった中原には「山内さんは恐かった」という印象がある。「女に何ができる、と思われていたように思う。いつか辞めるだろうと。でも、ずっと安部球場に通っていたので、こと野球の取材に関しては、任されていた部分もあった」と回想する。中原は卒業後、広告業界に進み、初の女性局長として活躍する(現I&S B B D O)。前年からのオイルショックにより、景気がさらに悪化。学生新聞といえども例外ではなく、影響は大きかった。春の「早慶戦号」で三十数万円はあった広告収入が、秋には17万円と半減した。

ア式蹴球部は72年から74年までインカレ3連覇を果たす。碓井、西野朗(78年教卒・浦和西高、日立、ガンバ大阪監督)らが主力。「7月号」によると、早慶サッカーは電力事情から前年までと違ってナイター開催ではなくなったが、国立競技場に皇太子さまを迎え、観衆2万5000人を集めて行われた。1年生部員の藤森祐一(78年商卒・上田高)は日本代表、ユース代表など7人の世代代表をそろえた早大メンバーを見て、黄金時代が来るという予感がした。74年のラグビー部主将は石塚武生(75年教卒・国学院久我山高、リコー、常総学院監督。09

年8月に急死)。しかし、この年も紙面は野球中心だったため、早慶ラグビーの結果は載るが、「12月号」での早明ラグビーの扱いは小さい。「12月号」以降、新年度まで新聞発行がないため、早明戦は結果も掲載されていないのだ。この傾向は1975年から79年まで続く。

74年の早慶ラグビーは国立競技場で観衆4万人が集まった。11―3で早大が勝ち、明大が翌日敗れたため、対抗戦の5連覇が決まった。辰野登志夫(77年教卒・今宮高)・星野繁一(77年教卒・西京高)・南川洋一郎(77年教卒・福岡高)という黄金のBKが揃っていた。

早明戦では国立競技場に部員一人が20部ほどずつ新聞を持参、ささやかに配った。

11月30日 高田牧舎で創刊15周年記念OB現役懇親会が催された。

大西先生の紹介で国会議員に会ったこと

2年生の冬、「早慶ラグビー号」が終わって新編集長になることが決まった井上健二に課せられたのは、悪化する一方の財政問題を改善することだった。神奈川新聞からは、印刷代の支払いをしきりに催促されていた。広告取りも、高田馬場周辺では既に新規開拓が難しく、1年生は明大のお膝元、駿河台まで出かけた。

さらに、「定期購読者を増やそう」と稲門会の集まりなどに行ってお願ひした。大隈会館で催しがあると聞けば、新聞を持って行って宣伝した。横浜、川崎など首都圏の稲門会を回ったのは伊藤政彦だった。部員たちが金策に奔走した様子は「40周年記念誌」に詳しいので、一部

紹介する。

「4月は5万円の赤字でのスタートだった。井上編集長は支払いの延期を頼み込んでいた。深刻だったのは広告収入の激減だった。石油危機の影響で企業の業績を直撃していたからだ。春と秋の早慶戦号に7万円ずつという破格の出稿をしてもらっていた商社からは打ち切りを宣告されていた。年間60万円前後だった広告収入のうちの四分の一だ。スーツにネクタイを常用し早稲田の商店街を回ってスポンサーを獲得した。

大西鐵之祐先生に窮状を訴えたのはそんな時だった。困った時の先生頼み。大西マジックにすがるしかなかった。先生は少しも驚かず、『よし、ここに行ってみろ』。自分の名刺を5、6枚取り出して、その裏にボールペンでさらさらと書き付けたのだった」

その名刺を部員が各自持参し、校友会などを回って新規開拓に成功する。

井上は「国会議員の中にこれだけ早稲田出身者がいるんだから」と早大出身者を調べて新聞を持って議員会館を訪ねた。本人がいらない時は秘書にその旨をお願いしたりもした。この機会に、新旧の体協会長となる河野謙三や森喜朗に会うこともできた。

以下は、2年生で主務だった岡部が、井上と一緒に森喜朗を訪ねたときの記憶である。

「当時はカネが本当になかった。春の早慶戦号を出そうという時に、神奈川新聞に払う印刷代が10万円ぐらい足りなかった。それで、定期購読者を増やそうと大西先生に相談して、自民党の森さんのところに伺った。森さんは議員になって6年目ぐらい。文教委員をやっていて、

衆議院の院内で会議が終わるのを待って会った。40人ぐらいの購読者を紹介してくれたと思う。そして、『財布の中の半分をやる』といわれて、文字どおりポケットマネーから5万円を頂いた」井上も岡部も、これで一息つける、と思った。

全員がカネ集めに走り回った結果、「次の代に渡した時は、5万円の黒字だった」と伊藤は胸を張った。伊藤は、早慶戦などの打ち上げの飲み会は将来のことも考えて「高いところはやめよう」と心配していたが、他のメンバーは「こういう時こそ、忘れて飲もう」と新宿に繰り出すのが常だった。

岡部は日を改めて、本紙の記事で森喜朗をインタビューしている。

「インタビュー時間は20分という約束だったが、1時間ほど相手になって話してくれた。『何でも用があれば、また来てくれよな』と励まされ、ワセダの持つ深いつながりを実感として受け取った次第である」

春の「早慶戦号」に掲載されたインタビュー記事は、こう締め括られている。岡部は「若手最大のホープ」と見出しをつけたが、後日、森を紹介した大西から「あの記事は森を持ち上げすぎやで」と苦言を呈された。

野球に関して詳しかった2年生の中原、甲斐に選手紹介などの原稿を任せて、編集長の井上自身は「早慶戦号」8面のうちの4面の割付を担当したこともある。それほど人数が少なかったのだ。

再三繰り返しているが、この10年ほどは資金ショートの連続だった。宮坂の時代も豊田の時代も、「広告は取って掲載はするけれど、料金をもらいには行かなかったなあ」という体たらく。10円で売った「早慶戦号」の売り上げを収めた袋の感触はズシリと重たかったが、神奈川新聞への支払いより先に、高田牧舎や新宿の打ち上げ代に消えてしまう、というのがお決まりだったのだ。危機続きなのに暢気というか、大らかというか……。新聞作りはともかく、カネに関しては甘くルーズな学生を、世間はまだ許してくれた優しい時代だったのだろう。

1975年から定期購読料を1000円に値上げ。

【コラム①】 芸能面は楽し

昭和の時代、「芸能人に会えて嬉しかった」と「芸能面」の思い出を語るOBは多い。

最初の芸能記事は1962（昭和37）年「秋早慶戦号」、ボニー・ジャックス（早大OB）とダーク・ダックス（慶大OB）を取り上げたと「40周年記念誌」にある。ただし縮刷版では未確認である。

次は63年「春の早慶戦号」の「ファンの声」で、歌舞伎俳優の中村万之助、映画女優の三条江梨子とタレントの山東昭子。さらに伊藤素道、チャーリー石黒というミュージシャンが登場する。

少し間が開いて、68年5月。早慶サッカーに酒井和歌子が花束贈呈で来ていて、その会場でインタビューが行われた。「マネジャーが慶応出身で慶応から話を頂いた」とある。聞いたのは石垣達郎（70年卒）だった。

本格的な「芸能面」の始まりは、佐藤幸雄（72年卒）が「何か新しいことはできないか」と思いついた。芸能人の取材だったが、「早慶戦号は10円で販売するんだし、商業的要素もあっていいのでは」と認められた。「女性タレント（伊東ゆかり、奥村チヨ、辺見マリ）は渡辺プロにお願いをし、早慶出身の芸能人には直接コンタクトをとった。1度も取材拒否はなく快く取材に応じてくださいました」と「40周年記念誌」に書いている。

早稲田といえば吉永小百合（69年卒）。同期になる高橋晃らは何度も取材を申し込んだが、いつも断られたことは、前にも触れた。はるか後年の87年、馬術部の60周年パーティーに吉永小百合、宇津井健が出席し、ここで初めて早スポも取材が許された。

「吉永小百合が難しいのなら、西早稲田に住んでいた山本リンダ。藤原武彦（70年卒）、竹内毅（70年卒）、石垣の3人で出かけたが、山本リンダの身長は168センチ。3人は彼女より小さかった。『早稲田、頑張つて』と励まされたが、ミニスカートのほうが気になった」と石垣は語っている（掲載号不明、61号から73号は未確認）。

68年秋の「早慶戦号」にフジテレビアナウンサーの露木茂と歌手の薩めぐみが登場。

これ以後、「早慶戦で早稲田を応援する」「早慶戦に寄せて」という趣旨で主にOBのインタビューが掲載されるようになる。宇津井健、加藤剛、加山雄三、小林大輔（フジテレビアナウンサー）、奥村チヨ、辺見マリ、石原裕次郎、栗原小巻、小柳ルミ子（2回）、落合恵子、五十嵐じゅん、天地真理（2回）、南沙織、岡崎友紀、榊原るみ、山口いずみ、小林麻美、大橋巨泉、藤村俊二、キャンデーズ（2回）、アグネスチャン、赤い鳥、村野武範、あいざき進也、太田裕美、仁科明子、高橋洋子、壇ふみ、岡まゆみ（女優）。以上が75年までの主な登場者である（掲載順）。

一世を風靡していた天地真理について、小川信（74年卒）は「天地真理、五十嵐じゅん（現中村雅俊夫人）に直接取材できたことが印象に残っている」、石橋誠一（75年卒）も「渡辺プロダクションで会ったのですが、デビューしたばかりでとてもかわいくて、相手は年下なのにドキドキした」と「40周年記念誌」に書いている。当時、渡辺プロダクションには応援部と体育局のOBが何人もいたのだ。

松本ちえ子、坂口良子（2度目）、見城美枝子、タモリ、久米宏、水島新司、三田誠広、名取裕子、渡瀬恒彦、斎藤とも子、桃井かおり、宇崎竜童、高見知佳、石野真子、小手川祐子、藤真利子、夏目雅子、杉田かおる、田丸美寿々、三浦友和、平田満、鳥越マリ、菊池桃子、岡田有希子、ビートたけし、松本伊代、安田成美、後藤久美子、横山めぐみ、サンプラザ

中野、山下真司（ラグビー号）、宮沢りえ、ウッチャンナンチャン、相原勇、以上が87年まで。岡部宏（78年卒、現アサツーディ・ケイ）は西門通りの「いねや」の前のピンク電話で、渡辺プロにいた応援部のOBを頼って取材の申し込みをしていた。

キャンデーズの取材はTBSの「8時だよ！全員集合」のリハーサル中。場所は渋谷公会堂だった。坂口良子にはTBSの一室で会ったが、ドラマで共演していた山本陽子にお茶を入れてもらった。臼井泉（78年教卒・大田高）は岡部、藤森の同期三人で行った太田裕美のインタビュ場所を、「有楽町のガード横」と記憶している。

篠田（現姓森）和子（79年卒）大岩堅一（80年卒）野宮（現姓桜井）範子（81年卒）乾高弘（82年卒）菅本史子（83年卒）らの時代が「芸能面」の最盛期だったようだ。81年秋の「早慶戦号」には『梨元勝のゴシップ診断』という囲みまであった。他にも『早スポおすすめシネマ』も。

一般スポーツ紙のノリと変わらないような記事である。84年春まで、映画の紹介は続く。大岩はTBSアナウンサーの取材、広告取り（78年秋の「早慶戦号」）が縁で、文化放送でバイトを始め、卒業後は大阪・朝日放送のアナウンサーになった。現在はフリー、長野を中心に活躍している。野宮は桃井かおり、宇崎竜童などの影響で、やはり電波の世界へ。現在は札幌でフリーのアナウンサーをしている。乾はカメラ担当で「芸能面」を支え、

中日新聞の写真部へ。

87年秋「早慶戦号」は、その年で除籍になるという早大8年生の「爆風スランプ」サンブラザ中野の爆笑トーク。取材した堀川貴弘（89年卒）は「早稲田に入ったからには対権力志向を持って」とアドバイスされた。

89（平成元）年は劇団時代の「ウッチャンナンチャン」。早スポ取材陣は遅刻しようだが、取材の様子を自分たちが担当する「オールナイトニッポン」で紹介してくれたらしい。

90年で「芸能面」はなくなった。決断した中居英一（92年卒）は「各部が強くなっている多くの競技を取り上げよう、という方針だった。そこにインタビューで1ページを割くのはもったいないのでは、と思った」と理由を語っている。また「芸能界に疎く、アポ取りも億劫だった」からとも。現在の中居は、共同通信運動部デスク。根っからのスポーツジャーナリストでもある。

第2章 早大スポーツの事件史

①野球部・荒川事件

早大のスポーツにまつわる事件史を語る上では、まず「荒川事件」について語らねばならないだろう。

1971（昭和46）年1月4日夜、ヤクルト入りが決まっていた荒川堯（70年教卒・早実高）が、自宅付近を散歩中に二人組の暴漢に襲われたのだ。棍棒状の凶器で殴打され、緊急入院。診断の結果、後頭部および左手中指に亀裂骨折。事件の後遺症による左目の視力低下などで、その後選手生命を絶たれることになる（犯行は熱狂的な大洋ファンによるものと見られたが、判明せず）。

堯は47年、長野県岩村田町（現佐久市）の映画館経営者の家に生まれる。浅間中時代には「長野に出澤（堯）あり」と県の内外で知られる存在となっていた。その噂を聞きつけた巨人の荒川博打撃コーチ（当時。後にヤクルト監督）は「中学を卒業したら養子に迎えて東京で野球をやらせたい」と両親を説得した。荒川は「世界の王」を育てた名伯楽として、すでに名高い人物だった。反対する親を、最後は堯が説得した。

義父の母校である早実高に入学し、1年生のときからレギュラーとなった。プロのコーチと養子縁組、1年生からのレギュラー起用とあって、上級生から苛烈なシゴキに遭い、「何度も逃げ帰ろうと思ったが、反対を押し切った末（上京した）とあってはそれも出来ず、毎晩布団を口にくわえて泣いていた」と堯は振り返っている。しかし、このつらい体験を克服したことが早大進学後、上下関係の厳しい大学野球の世界でも生きた。2年春の立大1回戦ではリーグ初の1試合3ホームーを放ち、「長嶋二世現る」と騒がれた。リーグ通算打率・336、19本塁打（リーグ記録4位タイ）。ベストナインに4回選出され、69年ドラフト会議の注目株になる。

義父が巨人の現役コーチであり、また六大学に馴染みの深い神宮球場を本拠地に行っているのがアトムズ（70年からヤクルトアトムズ）ということもあり、ドラフト会議の前から堯は「巨人・アトムズ以外お断り」と明言していた。だが、ドラフト会議で1位指名したのは大洋ホエールズ。堯は入団を拒否してアメリカに留学する。その後、大洋サイドがヤクルトへの移籍を前提とした契約、いわゆる「三角トレード」を持ちかけた。翌70年の暮れにこれを承諾していったん大洋に入団、直後にヤクルトへ移籍となった。そして冒頭の事件が起こる。

プロ入り2年目には18本塁打、打率・282とそれなりの活躍を見せたが、3年目以降は視力低下もあって振るわず、当時の最新手術などを受けたり左打者に転向したりしたが、結局75年のシーズン途中で現役を引退する。まだ28歳の若さだった。

早スポでは11月に行われるドラフト会議は新聞発行のタイミングが合わないこと、殴打事件は卒業して1年後のことだったこともあったせいか、一連の事件を大きく扱った記事は見当たらない。

プロ入りした71年秋の「早慶戦号」で、堯は一人のOBとして「球界の王子」というインタビューに登場している。記事にはヤクルトへの入団後、「ドラフトを破った」という理由でコミッショナー裁定による1カ月の出場停止処分を受けた、とある。

「(ヤクルトに入って)僕は良かったと思う。入りたかった球団だから」という堯に対して、「(中略)暴漢に襲われマスコミにもいろいろ批判された荒川さんだが、今はそんな思い出も忘れてしまったように明るい」という記述で記事は締められている。

さすがに、ルール違反となる「大洋入り」を質するような質問はできなかったか、おとなしい論調の記事だった。後に法大の江川卓が「ドラフト指名拒否」→「アメリカ留学」→「三角トレード」と、似たような経緯で巨人入りを果たす。荒川堯のヤクルト入団から12年後のことである。

②ラグビー部・辰野事件

1977(昭和52)年の早稲田スポーツはいきなり社会派ネタで始まった。「辰野事件」である。日本一になったラグビー部のS日辰野登志夫選手が逮捕された、というのだ。

2月18日深夜、飲んで帰る際に乗ったタクシীর料金を払わず、運転手を殴ったという事件

だった。

社会事件として一般紙も辰野を叩く記事を書きたてた。もちろんスポーツ界も大騒ぎとなり、『ラグビーマガジン』は事件の特集を組んだ。篠田和子(79年卒)が東伏見のラグビー寮に行くと、一般紙の記者が大勢いて、事の重大さを思い知らされた。早スポ会長でもあった大西鐵之祐に話を聞こうとしたが、「立場上、ちょっとあかんあ……」と言われた。ラグビー部の出した結論は「一年間の公式戦辞退」。OB会の総意を現役部員も受け入れた結果だった。

事件が起きた2月、早スポは代替わりの時期で、新編集長の土田以下、スタッフは慌てた。「4月号」の1面には早スポ部員による辞退宣言の考察記事を掲載した。「あれで良かったのか? 論議を呼ぶ責任の取り方」の見出しで、部内で出し合った意見を紙面化した。

個々の意見、感想、考え方を並べる形で、一つの答え、結論には至ってない。

「伝統あるラグビー部だからこそ取れた結論だったのでは。個人の責任を団体で取るのは古い体質かもしれないが妥当である。OB会の決定は選手の意見を無視しているかのようだが、伊藤主将、谷本主務らも十分に話し合って納得して結論を出したそうだ。伊藤主将からは犠牲者の意識は感じられなかった。この試練が土台になるだろう。」

一人の不祥事になぜ、全員が責任を取らねばならないのか。連帯責任は正しい処置とは言い難い、気の毒だ。全体主義的な考えがラグビー部に残っているのは残念だ。

この結論になにより悲しむのは辰野君ではないのか。また日本一、早稲田という点でマスコ

ミの力というものは恐い……」

篠田は4月上旬、ラグビー部を取材した印象を「練習も始まっていたし、緊迫感に包まれている感じではない。周囲の声には耳を貸さず、自分たちの道を行くしかない、と割り切っているようだった。伊藤主将は本音と建前がありますが、と取材に答えてくれた。後遺症はあるようだ。例年以上に練習に励んでいる彼らに拍手を送りたい」と書いている。

以下は「主張」と題したコラム。

「今回のショッキングな事件が与えた影響は、関係者のみならず、日本アマチュアスポーツ界全体にも甚大なものであった。その処置の採り方が、今まさに人気の頂点にあるラグビー界、そして早大ラ式蹴球部がその頂に位置することも手伝ってマスコミを通じ、世論の中心にもなった。その個人としての存在が考慮されるプロスポーツ界では、絶対に考えられないアマチュアスポーツ界だけに起き得る反響であった（中略）。

今回の事件を糧としてアマチュアスポーツ界のリーダーとしても、アマチュアリズムの原点に戻り、あらゆる面で「誘惑」を克服し、全体の中でのひとりであってこそ、一人が全体の一人となりうることを自覚し、『品位』を高めていってこそ、リーダー早稲田なのである」この号の「アウトライン」も面白い。

「甲子園で活躍した秋田商業の武藤は南海の1位を蹴って早稲田を目指したが、受験に失敗。法政に方向転換し入学した。短大だったが野球部に入った。

江川の時もやはり転部可能が絡んで、プロ側は2年後のドラフト指名が焦点になって話題になった。この年に阪急に1位入団した日大の佐藤は『卒業証書なんて野球選手にとって価値はない』と卒業試験を受けずにキャンプに参加した。

そんな折、関西の私大で、運動部推薦で合格した一部学生が夜間の授業しか受けられなかったと言う問題が発覚したという。大学運動部の活動は授業より優先されるのか。

果たして大学とは何なのだろう。それぞれの学生にとってそれぞれの大学と言うものがあるはずだ。自分の立場をしっかりと見つめなおす必要があるだろう。

推薦入学制が確立していなかった時代であったし、早大でも卒業していない選手がいる、と言われてもいた。大学の運動部のあり方が問われ始めた年代でもあった。

③運動部も巻き込んだ早大不正入試事件

1980（昭和55）年は早大全体が「不正入試」で揺れた。2月24日に行われた商学部社会科学の入試問題が漏洩していたことが発覚したのだ。捜査の中で英語、国語、社会の5科目の模範解答が作られていたことも判明して、開学以来の不祥事と関係者は色めきたった。3月6日、商学部の合格者発表。この日の毎日新聞朝刊は1面トップで漏洩の事実を報じ、大学でも入試問題漏洩を公表した。早稲田大学印刷所で入試問題を印刷する際に何者かによって盗まれた可能性が高いとされた。詳しい経過は省くが、大学職員の主事補が入試問題漏洩を計画、金儲け

が目的であったとされる。

また別ルートでは、ボクシング部部長でもあった教育学部教授が受験生の父母2組から依頼され、職員に1400万円を渡して入試問題を入手していたことも明らかになった。

80年「4月号」1面にボクシング部の責任のあり方について「連帯責任の範囲どこまで」と題した囲み記事がある。

「逮捕された市原教授は長年ボクシング部の監督、部長を務めており、部としても事件の連帯責任を取らなければいけないとする空気がある。ボクシング部のOBの組織、稲門拳闘倶楽部は市原部長の除名とボクシング部の解散を決議、採択した。事件に関わったのは市原部長だけで部員は一点の曇りもない。しかし、部長の引き起こした問題の責任まで取らされなければいけないのか。

ラグビー部員が起こした傷害事件の対外試合自粛の措置はやむをえなかっただろう。だが今回は違う。部長は非部員である。今回の問題が社会問題にまで発展したとはいえ、大学当局の裁定がラグビー部と同等、もしくはもっと重い処分となるならば公平を欠いていると言わざるを得ない。

稲門拳闘倶楽部の決議も理解できない。市原部長を名誉会長に選任していた自らが取りも直さず責任を明確にし、最も大切な現役部員を最大限守ってやるのがOB会の使命ではないか。『ボクシング部の解散を期待する』という声明を発表するとは本末転倒はなほだしい。世間

の目を意識しすぎた消極決議だ。四部落ちのピンチを切り抜けてモスクワオリンピック候補選手を抱えるまでに復活した部員たちの艱難辛苦をOBたちはどのように受け止めているのか。

大学当局の裁定は『無罪放免』が当然である。例えば社会への配慮を加味したとしても夏までの対外試合自粛が妥当ではないか。大学当局の「大岡裁き」を期待する」

ボクシング部の高木主務は関野弘（81年商卒・徳島市高、毎日新聞）の取材に対して「大学の決定がどうであれ、僕らはボクシングが好きなので一生懸命に練習するだけ。それが本望なんです」と答えている。

翌81年春の「早慶レガッタ号」ではこの不正入試事件が野球部、航空部に波及したことを伝えている。

「不正入試事件及び成績原簿偽造事件に元野球部員と航空部監督が関与していたことが明るみになった。今回の事件は現在の学歴偏重の社会矛盾、金銭で全て解決できるという誤った考え方が引き起こしたともいえるのではないか。そんなものが、純粋なスポーツの世界、なんら関係のない学生にまで影を落とすというのはあまりにもおかしい。この苦難の時、早大野球部も一般学生も負けてはいないスポーツの持つ本来の明るさを、そして早稲田マンとしての誇りを持ってこの問題に真正面からぶつかっていく姿勢をもちたいものだ」（「アウトライン」より）

野球部はこの問題の影響が大きかったか、始まったばかりの春季リーグ戦で東大に2試合連続の完封負け。史上初の屈辱を味わうことになる。

同じ号の終面「ワセダ大揺れ」の中で、航空部とスキー部の「事件」に触れている。まず航空部前監督が商学部不正入試事件に関与し逮捕されたという記事。山中勝弥前監督は早大学院の主事を務めていたが、成績表原簿偽造事件に関わったことが判明した。

山中前監督は海軍航空隊での経験に加え数多くの大会で優勝するなど統率力、飛行技術に定評があり、OB会の推薦で監督に就任した。熱心で面倒見もよく、部員からの評判は良かった。68年から大学職員として商学部に籍を置いていた。

航空部の理事会では「監督問題と部員は関係がなく、今後の活動は従来どおりに行う」という結論を出した。

「部活動自粛も考えられたが、他の部と異質の性格を持つだけに判定は微妙だった。航空というスポーツは競技人口が多くなり、大会そのものが年に数回しか行われない。さらに部としては自然の理解と人の和、何人もの人間の協力体制の養成に主眼を置いており部活動を自粛してもそれほど意味がないどころか、むしろ活動を推進したいぐらいである。

運動部に関する不正、老舗早稲田となると世間の風当たりも強い。しかし今回は指導者が不正を犯したのであって部員まで冷たい目で見られるのでは可哀想である。不正問題における判定は常に議論を呼ぶが、部員はこうした苦難にくじけることなく前進を続けて欲しい」（一部略）
この記事は航空部担当の織田健途（84年社学卒・市川学園高）が書いた。

④ スキー部・インカレ出場資格問題

もう一つの事件、スキー部は「資格問題」でペナルティーを受けた。妙高高原で行われた1980（昭和55）年度のインカレで、付属の専門学校生二人をスキー部の部員として登録し出場させた。連盟に所属する一母校のうち8校が「大学の王座を決める大会に専門学校生が出場するのはおかしい」と出場資格調査を求める要望書を提出し、連盟は富樫道弘監督から事情を聞くとともに資格審査委員会を設置して協議した。1月20日、「早大の二人の選手に出場の資格はなく、登録出場はルール違反」との結論に達した。

連盟規約の36条では、参加資格のない者として「大学院生、聴講生、通信教育生及び校外生」を挙げているが、早大側は「問題の二人が所属するのは早大が設置し、理工学部に隣接する早稲田大学専門学校。体育局は同校の生徒が大学生の中に入って課外活動をすることを認めている」とした。解釈によっては早大の主張も成り立つ。富樫監督は規約の不備を指摘していたと言いが、確かに連盟がこういった生徒の扱いについて考慮していなかった点にも問題はある。

また、大会前日の現役学生による協議では出場認可の決定も出ていた。しかし、一部大学のOBから指摘があったことで、問題が表面化したという微妙な経緯があった。

スキー部担当の田村公二（84年政経卒・静岡高）は「現役選手たちがその自主性を持って決定を下したのだから、OBがとやかく言うのは筋違いだ。同じ高等教育機関の学生として専門

学校生の大学スポーツへの参加の場をあたえることを考慮してよい。事実、卓球ではそうしたことが行われている」と明快に書いている。

その後、懲罰委員会が設置され、早大スキー部への処分が検討された。5月7日、学生連盟の理事会は「早大の1年間出場停止、当該選手の成績抹消、これに伴う繰上げ措置はとらない」ことを決定した。停止処分中に学校得点が0点になるため、処分解除となる翌々年の大会には最下部の四部から出場しなければならなかった。

ねじれた要因は前述したとおり、一部の大学のOBが大会終了後に問題を蒸し返したことがある。スキー競技の大会はコース設定、宿泊施設など開催地の地元の人々の尽力に頼らざるを得ず、学生だけの運営は困難だ。OBに協力を要請することになり、OBの意見に耳を傾ける場も増えるのである。

「出場許可をさせておいて後から出場はルール違反ということで処罰することはペナルティーを目的とした行為と思われるも仕方がない。学生連盟という組織は学生の自主組織であって、理事はオブザーバーに過ぎないのではないか」（春の「早慶戦号」）

しかしその後、この問題は意外な方向へ進む。事件の処理を巡って全日本学生スキー連盟と上部団体である全日本スキー連盟が対立することになったのだ。全日本スキー連盟はこれらの学連の不手際を重く見て、「早大を処分するならインカレをA級大会と認めない」と早大への善処を促し、前代未聞の事態となった。

予想外の展開にも、当事者である早大は静観するしかない。また、処分や決定も学生不在のまま行われていた。これは日大、専大などの新興大学が学連を動かし、早大、明大らの伝統校が全日本スキー連盟を牛耳るという、新旧勢力の主導権争いが「資格問題」を発端に表面化したということだったのだ。それは、現役選手への配慮ではなく、ただOBたちのメンツ争いではない。

「インカレの權威の失墜は選手の落胆以外の何も生み出さない。発火点となった早大はもちろん、スキー界全体に強く反省を促す声が多い」（12月号）

81年度のインカレは、早大が出場を辞退して一応の決着を見た。早大は「騒がせたことは申し訳ないが、四部から出場すれば非を認めたことになる、あくまでルールに抵触していないことを主張していく」ということで自ら身を引いたのである。

後味の悪い結論、長かった一年。選手たちにとっては、もちろんインカレ出場が最大目標であったはずだ。田村は早大の出場辞退を「学生スキー界がいい方向に向かうための捨石」と書いた。

翌82年の「4月号」にはスキー部の「新入部員ゼロ」という衝撃的な記事がある。ウィンタースポーツの選手にとつては、普通の受験生が追い込みに入る時期が競技、大会の真只中となつて、勉強時間と思うようにならない。スキー部志望者は9人が受験したが、全員失敗したという。スキー部にとっては非常事態だが「かえってチームワークも強くなり、一致団結している」

と記事は伝えている。

「一番苦しんでいるのは現役学生。じつと成り行きを見つめる選手たちがかわいそうだ。早大スキー部はそれだけで十分な制裁といえるのではないか」

そしてやっと82（昭和57）年12月11日、学連は緊急理事会を開き、全日本スキー連盟から出されていた「早大の処分を白紙撤回せよ」という裁定に従うことになった。実に1年8ヵ月ぶり。早大スキー部は晴れて一部からインカレに復帰することになった。

⑤山岳部・事故多発への警鐘

山岳部に対して、早大体育局では過去に何度か廃止論が唱えられてきた。やむを得ない事態とはいえ、死者を出す遭難事故を繰り返してきたからである。山岳部の歴史は快挙と悲劇の繰り返しでもある。1970年代の早スポの記事からその歴史を振り返ってみたい。

山岳部は1920（大正9）年の創部。ヒマラヤでの輝かしい活動を始め、日本山岳史上に多くの業績を残してきた。その中で58（昭和33）年、冬の北アルプス明神岳で雪崩のため死者4人を出し、60年11月には富士吉田大沢の雪崩に遭って死者4名と重軽傷者15名を出し、体育局から休部処分を受けている。「高度な登山は禁止」という条件付で半年後に処分は解除されるが、65年5月、前穂高岳北尾根で2人が転落し「監視処分」となった。その処分が解けたのが69年11月だった。しかし、半年も経たない翌70年4月30日に西ネパール・ツクチェ峰（6915

（山岳部）の登頂に成功したが、主務の菊池祐介隊員が遺骨となつての帰国となつた。頂上アタックメンバーの菊池、米本隆夫、大谷映芳の3人が登頂成功後の下山途中にスリップし、菊池隊員が死亡、他の2名が負傷した。

70年「6月号」の「主張」は、「こう死傷者が続発しては意見も強硬になつてこよう。早大山岳部は学生のクラブ活動ということを顧みず、安全登山に対する自覚が欠けているのではないか」と厳しい意見だ。

「合宿地」のダウラ・ヒマール北東山域には6000メートルを超えるピークが十数峰あり、高度な技術が強いられることは明らかだった。「ヒマラヤで危険が防止できる程度に合宿をするので許可を出した。7000メートル近い高峰に登山することは許可していない」という体育局に対して、「提出した計画書には頂上に登るとうたつてあつた」という山岳部の主張は食い違っている。「6月号」の記事は次のように書いている。

「登山に危険はつき物、という風潮を考え直す必要があると思う。遭難対策にあまりに努力をしていないのではないか。山岳部も遭難を繰り返し処分が解けてから1年もたたないうちにまた事故を起こすということは山に登りたいという願望ばかりが強くて、その陰にある遭難対策を軽視しているのではないか。

登山は自然を相手にするスポーツであるから登山をするものは自然を甘く見てはならない。山岳部側に見れば、あまりに常識的なことだと思うだろうが事故が相次ぐ以上、軽視して

いるとしか考えられない。早大山岳部の猛省をさげびたい」（一部省略）

71年に山岳部は創立50周年を迎えるが、無期限の休部処分中だった。遭難事故の責任を問われ部長、監督は辞任、「廃部にしろ」という強硬論まであったが、廃部に対しては「反教育的」という意見が多く、休部処分に留められたのだ。体育局は浜野吉生新監督を中心とした指導体制や部員の反省ぶりを見守ってきたが、「再建の意欲十分」として8カ月ぶりの部活動再開を認め、3月20日、「処分を解き、新学期から再出発をさせることになった」ことを発表した。滝口体育局長は「危険度の高い登山は事前に中止させるなど今後も厳重に監視していく。これが再建の最後のチャンスと思って、遭難を二度と起こさぬ覚悟で、慎重に登山活動を続けてほしい」と要望している。

当時の大谷映芳主将の手記が早スポに掲載されている。

「休部期間中は現役及びOBが一体となり山岳部再建案を数度にわたり、体育局に提出するとともに部を真に強力にバックアップできる新OB会の設立にも努力が払われた。部内においては事故の検討を行いつつ、勉強会、研修会等に励んできた。そしてそれをも含めたよき伝統の正しい継承と、新しい伝統の創出を意識的に行いながら、真のスポーツ登山を目指す、魅力ある山岳部を作ることが現在の問題である。そしてそれらが部員減少をなくすと同時に遭難を起こさない基礎となると考えるのです」（4月号）。

その大谷を中心とした早大隊は10年後の81年、世界初となる「快拳」を成し遂げる。未踏だったカラコルム山脈の世界第2位の高峰、K2（8611^{メートル}）西稜からの登頂に成功したのである。

5月18日に先発隊が成田を出発、5350^{メートル}地点のベースキャンプを6月19日に建設。予

想外の悪天候と燃料不足で計画変更を繰り返しつつ、8月3日、8030^{メートル}地点に第5キャンプを作った。5日には大谷（当時34歳）、山下松司（田尻フードセンター・同31歳）、ナジール（パキスタン山岳会）の3人が8300^{メートル}までルートを工作し、アタック態勢を整えた。

6日午前5時、3人は頂上を目指して出発した。8300^{メートル}からは8^{キロ}のボンベを降ろし、無酸素の岩登りになった。K2の岩壁は手強く雪面にたどり着いたのは午後6時。大谷は8500^{メートル}で異例のビバークを決断するしかなかった。3時間をかけて掘った雪洞で無酸素のまま朝を待ち、7日にアタックを再開。しかし疲労がひどく、松浦輝夫隊長は下山を指示した。体力が限界だった山下を残し大谷とナジールの二人が再び頂上を目指した。

「ザイルにつながれた二人は一步一步、頂上に近づいていく。5^{メートル}ほど前に行くナジールが突然振り向いた。『どうぞ、お先に。頂上だ！』。ほんの10^{メートル}先に頂上が見える。『君の国の山だ。君が行くべきだ』。大谷の言葉にナジールは、手を差し伸べた。最後の10^{メートル}を二人は手をつないで登った」（81年「9月号」）。

8月7日午前11時半。K2西稜を初征服した瞬間だった。総勢13人、一人の犠牲者も出さず、最難関といわれた西稜からの登頂は世界の登山史にも残る快拳だった。

大谷に取材して記事を書いたのは、卒業後、雑誌『花時間』の編集長を長く務めた菅本史子（83年教卒・大田高）だった。

その栄光から13年後の1994（平成6）年2月22日夕方、痛ましい事故のニュースが流れた。山岳部員の現役学生4人が富山県の剣岳（2998[㍎]）で遭難したのである。24日に藤井陽太郎（3年）は自力で生還したが、饗庭寛（4年）、河津豪（2年）、目方肇（4年）は遺体で発見された。

「4月号」は例年、新入生を歓迎するめでたい号のはずだが、この年の1面ではチーフリーダーだった4年生の椎名厚史の証言をもとに、事故の検証と山岳部の行く末をレポートしている。

「剣岳・立山連峰奥大日尾根の往復を計画し、2月13日に東京を出発、20日までは好天が続き計画通りに順調に進んだが、21日に天候が崩れた。ここまでの行動、疲労度をみて4人を選抜しルート工作隊を派遣した。工作隊は日没と天候悪化のため剣御前と黒百合の科尔（山の尾根で少し低くなったところ・編注）でビバークした。この時猛烈な吹雪のため持っていた二つのテントのうち一つが破れる。テント一つでは4人の頭しか入らず、体は外に出たままだった。

『会話はほとんどなく、お互い自分のことを考えるだけで精一杯』（椎名）。翌朝、饗庭が疲労凍死。目方、河津の二人が衰弱していた。比較的元気だった藤井が雪洞を掘ると、這うようにして二人は入って行った、という。その二人も22日15時に声が聞こえたのが最後だった。『とにかく生きようと必死だった。睡眠は1時間寝ては1時間起きたりで、うつらうつらとする程

度』（藤井）。

今回の事故が部員減少に悩む山岳部に追い討ちをかけることは間違いない。大学側から下される処分も過去の事例から見て休部などかなり重たいものになることは必至。輝かしい実績を持つ早大山岳部はこのまま衰退の道をたどるのか。

『自分で条件を設定し、それを遂行し終わった後の喜びのために山に登る』（椎名）。『まだ登り続けたい、冬山は恐いがやはり素晴らしい。山の魅力は一言ではいえない』（藤井）。亡くなった3人もそういった山の魅力に魅せられ、山岳部復興を常に念頭に置いていたことだろう」

原稿を担当した長嶺直行（96年卒）は、冬の剣岳登山の難しさを深田久弥の言葉を借りて、「その鉄の砦と急峻な雪谷に守られて、永らく登頂不可能の峰とされていた（日本百名山）。剣岳に関するあらゆる叙述はその登はんの難しさと威容な風格への礼賛に満ちあふれている」と記事の冒頭に記している。そして2面「フリートーク」でも山岳部への心情を、こう綴る。

「山の魅力を知らない私にとって正直言ってその存在自体が不思議な気もする。だが椎名さんや藤井さんのように友人を失う経験をしてもなお、山への情熱が冷めない人間もいる。漠然とではあるがそういった人達がいる限り山岳部は存在していくのであろうし、そのためには山岳部の灯を消してはならないと思う」

4月4日、大学は「処分せず」の結論を出した。過去の例に比べると異例の寛大さである。16日の合同慰霊祭で、小山宙丸総長は「勇気を失うことなくこれから一層、鍛錬に励んでも

らいたい」と激励した。

1年後の95年「4月号」最終面の特集。事故から半年後の夏合宿で剣岳の遭難現場を訪れた藤井主将は「あの危険を共有したものの同士。今でも仲間だなと思います。自分のやったことに自信を持っている。あれ以上のことは出来ないから後悔することはない。4人の代表として残ったのだから辛くて苦しくてもいい加減なことは出来ない。」と取材をした井尻真理子（97年人科卒・山梨英和高）に答えている。井尻にとって「自然の厳しさと人生観、死生観を考えさせられた」事件だった。

山岳部は翌96年2月にネパールのポカルデ（5906^{メートル}）、メヘラ（5920^{メートル}）の登頂に成功する。学生のみによる海外遠征は84年のアンデス以来。当初の予定に入っていたアイランドピークは時間的制約もあり断念したが、まずポガルテを目指し、藤井陽太郎主将のみが登頂に成功（7日）。そして10日に全員がメヘラ登頂に成功した。

剣岳の遭難から2年。部の再建には一応の区切りをつけた。さらなる高みに向けて、順調に歩み始めた海外遠征だったのである。

〔早スポOB特別寄稿①〕川村伸和（1980年卒）

卒業アルバムの「岡ちゃん」

ユーミンの「卒業写真」は皮の表紙だったが、手元にある冊子のえび茶色の表紙には金文字で「早稲田大学体育各部卒業記念アルバム 80MAR」。ページをめくると、野球部・岡田彰布、競走部・瀬古利彦、ア式蹴球部・岡田武史の詰め襟姿の顔写真が載っている。

後に阪神タイガースの中軸を打ち、2008年まで5年間、人気チームの監督を務めた岡田は、大阪・北陽高から鳴り物入りで入学。1年秋からレギュラーとなり、通算最高打率（3割7分9厘）、三冠王、サイクルヒットなど東京六大学リーグ史上に残る記録をつくり、4年秋のプロ野球ドラフト会議で阪神に1位指名で入団が決まった。在学中、3、4年生時に福岡国際マラソンを連覇し、モスクワ五輪の「幻の代表」となった瀬古は、卒業後もマラソンの第一人者としてポストン、ロンドンなど海外レースで優勝した。

大学時代に既に脚光を浴びていたこの2人に比べると、2010年のワールドカップ（W杯）南アフリカ大会で、サッカー日本代表監督として2度目のタクトを振るう「岡ちゃん」は、卒業時には一般学生にとっても名前を聞いたことのない一番地味な存在だった。

岡田との出会いは、ともに1浪して入学した1年のときの5月の連休。サッカーの同

好会「稲穂キッカーズ」の新入生歓迎合宿だった。サッカーマガジン誌のアジア・ユース日本代表チーム紹介で「メガネの奥にキラリとセンスが光る選手」とのコメントがついていた大阪・天王寺高3年の選手を、おもしろいやつだなと記憶していた、その選手だった。その後、私は早スポにのめり込み、岡田も浪人生活から解放され学生生活をエンジョイしようと思っていたに違いない。だが、日本サッカー協会の幹部に呼び出され「高校生でユース代表にしたのは何のためだ」と、こっぴどく怒られてア式蹴球部の門をたたいた。この事件がなければ、岡田は同好会でサッカーを続け、卒業後は希望していたマスコミにでも勤め（実はテレビ局の入社試験で落ちている）、メタボ体形のオヤジになっていたに違いない。

入部からしばらくは、浪人中でブヨブヨになった体を絞るため、毎日走らされた。秋に東伏見に取材にいったときも、グラウンドを黙々と走っており、彼の下宿に遊びに行くとき「おれは競走部だよ」とぼやいていた。

卒業後は日本リーグの古河電工でプレーし、日本代表としても国際Aマッチ24試合に出場しているが、ポジションがDFということで目立つ存在ではなかったし、何より当時はJリーグ発足以前で、サッカー人気は冬の時代だった。だが、大学でも実業団でもキャプテンを務めるなど、浪花節的な性格でチームを引っ張る統率力があった。そして、そ

の資質が指導者となってから花開く。97年、フランスW杯最終予選中に加茂周監督の更迭に伴い、コーチから監督に昇格。そして07年にオシムが脳梗塞で倒れて再びスクランブルで代表監督に復帰。「断崖絶壁の状況でおれがやらなければ誰がやる」と、崖っぷちに立たされればさらにやる気がわいてくるタイプなのだ。

岡田は年賀状に短いコメントを添える。代表監督に返り咲いた直後の08年は「人生わからないものです」。W杯予選の不振でメディアの中には岡田で大丈夫か——の論調もあった09年は「ぶれることなく頑張ります」。そしてW杯イヤーの2010年。今や日本のスポーツ界で最も注目される男がどんな決意を語るのか、楽しみだ。

卒業記念アルバムに話を戻すと、各部の最後に体育会ではないのに早スポのページがある。会長の故大西鉄之祐先生と同期の5人が写っている。昨年4月、長く海外駐在員生活をしていたIの帰国祝いの会を、先輩や後輩とともに早稲田界隈でやったが、同期のみんなは50歳になっても、気持ちだけは30年近く前のまま。やはり早スポは青春そのもの——。

第3章 江川に立ち向かった岡田世代

早スポ女子部員は「割付」で初外泊

早スポが創刊された1959（昭和34）年以降、野球部の六大学リーグ戦連覇はわずか3回しかない。まずは岡田彰布（80年教卒・北陽高、阪神、オリックス）が主砲として活躍した78年秋～79年春。続いて和田毅（2003年人科卒・島根浜田高、現ソフトバンク）と鳥谷敬（04年人科卒・埼玉聖望学園高、現阪神）が在籍した時の02年春～03年秋の4連覇。そして斎藤祐樹が入学してからの06年秋～07年秋の3連覇だけなのである。優勝は22回あるが（通算では戦前8回、戦後33回の計41回）、いかに連覇が困難であるかわかるだろう。

他校では圧倒的に強いのが法大。優勝は37回（通算は戦前5回、戦後38回の計43回）で、4連覇が3回を含む9回を数える。明大が20回（通算は戦前9回、戦後23回の計32回）で2連覇が2回。慶大は優勝16回（通算は戦前8回、戦後23回の計31回）、3連覇が1回を含め3回。立大は連覇がなく優勝5回（通算は戦前2回、戦後10回の計12回）である。

早スポの新聞作り、販売収入の確保など、部の活動の根幹になるのが春秋の「早慶戦号」で

あり、記事の中心となる野球部との関わりは深い。70年代半ばからの早スポ各年代の推移を、同時代の野球部の活躍を軸に追ってみたい。

1976（昭和51）年春、「花の49年組」「江川世代」と呼ばれた甲子園のスター軍団の大学進学の効果は続き、学生野球、特に東京六大学野球が盛り上がっていた。この年はスポーツ番組としては画期的だった「プロ野球ニュース」（フジテレビ系）が始まり、巨人の王貞治がベーブルースの記録を「超える」715号を打った年でもある。プロもアマも野球熱が高まっていった時代だった。

早大では2年前に大学日本一になった時の主力が最上級生になっていたが、依然として「江川の壁」は厚かった。「4月号」の巻頭を飾ったのは八木主将、吉沢、松本の4年生3人による座談会だった。

この年の野球取材班の中心は、江川らと同学年だった女性部員たちだった。

「雨の日に洗濯をして、晴れの日には安部球場に行っていた。練習時間と重なる講義は取らなかった」という中原孝子（前出・78年卒）と甲斐まゆみ（同）。まだ球場に女性の姿が珍しかった時代、女子学生ながら大学野球に通い詰めているのがマスコミの目に留まる。まずはファッション雑誌『an・an』に取り上げられ、六大学の試合中継を開始した関東ローカル局の「テレビ神奈川（TVK）」にも登場した。中原は、早大野球部関係者に「取材と

して安部寮に入った最初の女性ですよ」と言われた。安部球場のスタンドから1000人の部員全員の見分けがついたという二人は、当時の石山建一監督から「陰でタバコを吸ったり、練習をサボっている選手がいないか、上から見張っていてくれ」と頼まれることもあった。1年上の井上健二も信頼し、先に触れたように、「選手紹介は彼女たちにほとんど任せたい」と言っている。

甲斐は「アベキュー」通いが縁で、同学年の野球部員と結婚する。お相手は甲子園で江川とバッテリーを組んでいた小倉偉民捕手（78年教卒・作新学院高）。小倉は同期の山倉がいたため大学では出場機会が少なかったが、選手仲間から信頼され、チーム内での求心力は絶大だった。熊谷組でプレーを続け、87年には早大助監督としてベンチにも入った。その後、福島県選出の自民党代議士・亀岡高夫元建設相の養子となり、政治家を目指した。2005（平成17）年の「郵政選挙」で福島1区から立候補し初当選するが、09年夏の総選挙では落選。衆院選に挑戦すること6回、1勝5敗という苦労人である。

女子部員による安部球場への日参は後々まで続く。前述のように、当時の部室は旧体育館にあった。柔道など格闘技系運動部の道場などが隣接し、選手の汗の男臭さが充満していて、長居ができるようなところではなかった。麻雀が好きな男子は近くの「南風荘」に逃げ込み、女子は安部球場に向かうというのがパターンだった。「日参組」では甲斐らの4年下になる佐々木加代子（82年社会学卒・船橋西高）が、同じ社会科学部の学生だった犬飼

泰英選手と結婚している。

五輪イヤーのこの年、「7月号」はモントリオール五輪特集号となった。1年だった羽太（現姓坂神）多恵子（80年教卒・都戸山高）は高校時代に水泳をやっていたこともあって水泳部の担当になる。オリンピックを間近に控え、2000^{メートル}自由形と400^{メートル}個人メドレーの日本記録保持者（当時）の柳館毅（79年教卒・尾道高）、100^{メートル}と200^{メートル}のバタフライ日本記録保持者の原秀章（79年教卒・尾道高）の取材で、東伏見にあったプールに通った。一般への開放日にはこのプールで泳いだ。合宿所では選手の食事のために女子マネジャーと一緒にタマネギの皮むきもした。学部が同じ部員には「試験中に答えを教えた」ことも。御徒町のスポーツクラブで部員と一緒にアルバイトをするなど、取材を離れた後も交流が続いた。

新聞のレイアウトは「割付」といって新聞紙大の用紙に見出し、写真の位置、原稿の行数などを割り当てていく作業だ。「面担」と呼ばれる各面の責任者の下宿先に数人が集まって作業する。徹夜仕事になるのはしょっちゅうだった。もともと、たいていはジュースを飲みスナックをつまみながら話し込むといったことで時間は過ぎていく。腹が減れば鍋料理をつつくなどで仕事はいつこうに始まらない。マンガ本を持ち込んで厳しい上級生に怒られたり、途中で抜け出して銭湯に行って呆れられたり。まるで小中学生の修学旅行といった様相で、結局、最後は面担が一人で苦勞してレイアウトを仕上げることも多かった。「昭和世代」は概ねこういうスタイルで新聞作りに従事していた。

割付作業で外泊を初経験したという女子部員も多かった。1年で初めて割付に参加した山本（現姓渡辺）真弓（80年教卒・愛知中村高）は、編集長の白井泉に見出しを考えるように言われるが、なかなかうまく言葉が浮かばない。「燃えろとか神宮だとか青春だとか抽象的な言葉を使うな」と言われているうちに睡魔に襲われる。白井の「寝ていい」という言葉に堪らず甘えてしまう。すっかり寝入ってしまった山本の傍らでは先輩たちの割付作業が進んでいた。山本にとって、男性の家に初めて泊まった夜、だった。

もちろん、下宿ではなくて自宅から通う部員の家でも割付は行われた。貧乏でカネのない下宿組の部員は、面担の親に出してもらったお握りやカレー、あるいはもっと本格的な食事などふだんは口にできない「家庭の味」をありがたく満喫したものである。

かくや姫の『神田川』がヒットしたのは3年前の73年だが、長野出身だった藤森祐一（78年商卒・上田高）が住んでいたアパートは、まさに歌の舞台になったエリアの、都電早稲田駅と面影橋駅の中間辺りにあった。旧体育館の部室から10分ほどだ。1年下の永岡敬英（79年商卒・国泰寺高）の下宿はもっと近く、西門商店街の「三品」食堂の辺りを横道にちよつと入ったところ。それぞれ、格好の溜まり場だった。割付の会場になり、お好み焼きパーティーもたびたび開催された。

引き継ぎが迫っていた3年生の冬、主務だった岡部宏が体育局の事務所に寄ったときのことだ。野球部の松村隆夫（77年教卒・桐生高）はじめ各部のマネジャー数人が集まっていて、体

育局運動部の卒業アルバムについて話し合っていた。誰がどうやって編集するのか、話が進まないようだった。取りまとめをしていた共同印刷の担当者が卓球部のOBで、「早スポにやつてもらえば」と振られてしまう。つい「お手伝いします」と、丸投げに近い状態で請け負う羽目になった。

早スポの現役部員が各部から顔写真、集合写真やスナップを集め、部ごとにレイアウトをして、印刷所に回す。作業的には単純なものだ。とはいえ、これで終われば単なる骨折り損だが、編集の手間を考えてくれた顔見知りの体育局事務員からこんな口添えがあった。

「アルバムに早スポの4年生も載せたら？」

その前後から、早スポの主務も各運動部が集まる主務会議と呼ばれるようになっていたり、六大学野球連盟の年鑑を作ったりと、あくまでも体育局外のサークルという立場は変わらないが、運動部の報道に関しては早スポがオフィシャル的な存在になりつつあったという下地があったのだろう。交渉は成功し、4年の井上と伊藤が晴れて体育局の仲間に入ることになった。こうして以後は、体育局の卒業アルバムの巻末に早スポの卒業生が加わっている。

1977（昭和52）年は桜井（現姓高橋）由香（79年教卒・横浜翠嵐高）と永井（現姓岩田）利枝（79年理工卒・東京教育大付高）の二人の女性が3年生。永井は早スポ部員には珍しい理工学部生で、昼休みのミーティングには部室から遠い大久保キャンパスから20分歩いて通って

いた。

永井は1学年上に江川がいたため、野球ではいつも悔しい思いをしていた。76年秋、法大1回戦で江川を打ち崩し、勝利。「ついにやったぞ！ 打倒江川」という見出しをつけられると思つて狂喜したが、2、3回戦と連投する江川に敗れてしまう。その悔しさもあつてか、春の「早慶戦号」2面の戦跡と戦力分析のページで「野球部戦後最弱の声も 見せる野人の心意気」という見出しをつけた。石山監督から「君はいつたい、いつ生まれただ？ いつから野球を見てるんだ？」と怒られた。あわや取材拒否も？ という事態に土田純嗣（79年社学卒・両国高）は慌てたという。

ようやく憎き江川が卒業した78年春。4年生になった永井たちは現役を引退していたが、高橋三千丈（79年卒・元中日）、鹿取義隆（79年卒・元巨人・西武など）を擁した島岡明治に優勝され、ショックは大きかった。

「このまま優勝で済むに卒業するのかな」と半ば諦めながら迎えた78年秋、勝ったほうが優勝という早慶戦で中屋恵久男主将（79年教卒・早実高、プリンスホテル）、金森栄治（79年卒・PL学園高、プリンスホテル・西武など）のホームランで優勝を果たした。永井は「この神宮の夕暮れは忘れない」と優勝の感動を胸に焼き付けた。秋が深まった神宮の試合は寒く、1杯150円のうどんを交代で食べて温まった甲斐があつた……。この日は慶大も、優勝すればパレードで使う提灯を大量に用意していたらしい。それが無駄になった。勝った早大のほうは「応

援部も長く優勝の経験がないため、必要な提灯の数がわからなかったとかで、大幅に足りなかった」と聞いた。

中原と甲斐、永井、山本と3代続いた野球担当女性記者。彼女たちは午後になると、いつも安部球場の石段で野球部の練習を眺めていた。そんな女性記者たちをグラウンドから見ているのが、山本の同期の井上保行（80年社学卒）だった。井上は福岡・東筑高の野球部出身で、この頃、西大立目永元早大名誉教授が受け持つ体育実技の助手を務めていた。安部球場での午前の実技が終わって片付けをしていると、中原らが現れて三塁側のスタンドに腰掛ける。野球部の選手がポツリポツリとようやく集まってくる時間で、ランニングさえ始まっていない。彼女たちはレギュラーではない新人の練習までも見ていたのだ。仲間であり、実際に野球経験のある自分が見てもアタマが下がる。「これほど熱心に練習を見ている。いい原稿が書けるはずだ」と感心した。

その井上は、早スポ部員としての活動以外にも野球に関連して興味があったことに打ち込んだ。審判の技術も究めようとしたのだ。アマチュア野球の名審判として高名な西大立目の薫陶を受け、やがて東京都の高校野球の審判を務めるまでになる。

六大学の主砲・岡田彰布の実力と人気

安部球場の一塁側の通用門の奥に、グラウンドの整備や管理をする職員が家族と一緒に住み

込んでいたことはあまり知られていない。井上が講義の用意で朝から安部球場に行くと、その職員のおじさんから「グラウンド整備が丁寧で綺麗な年は強くなるんだよ」と声をかけられたことがあった。それが1978（昭和53）年だった。

監督は石山建一、主将は中屋恵久男。投手陣は北口勝久（79年教卒・天理高）、関口一行（80年教卒・龍ヶ崎一高）、中村誠治（80年教卒・PL学園高）、三谷志郎（82年商卒・今治西高、プリンスホテル）捕手は金森栄治、有賀佳弘（80年教卒・早実高、日産自動車、阪急など）、野手は須永三郎（79年教卒・川越工高）、宇佐美秀文（80年教卒・今治西高）、岡田彰布、島貫省一（80年教卒・福島商高、巨人など）、佐藤功（81年教卒・東海大相模高）。甲子園で活躍した錚々たるメンバーが揃っていた。

春の「早慶戦号」のため、井上は安部寮で中屋主将にインタビューした。「野球とは何ですか」という井上の問いに、中屋はボソッと「賭けです」と一言答えた。井上は「勝負に賭ける、青春を賭ける」という意味深さを感じ取った。中屋は三遊間の深い位置からでも一塁アウトにする守備範囲の広い遊撃手だった。プロには進まず、石毛宏典（79年駒大卒・市立銚子高、西武など）らとともにプリンスホテルの草創期メンバーとして活躍した。

秋のシーズンは52年秋以来という勝ち点4同士、8勝1敗の相星で早慶戦を迎え、初戦は須永のホームランなどで得点し、5―0で北口が完封。第2戦は金森の先制ホームランなどによるリードを1年生投手の三谷が守りきり、慶大を4―0で連続完封し完全優勝となった。岡田

は打率・500、4本塁打、18打点で戦後2人目の三冠王に輝く。石山監督としては就任した最初のシーズン、74年春以来の優勝だった。

1年生だった佐々木加代子（前出）は秋の早慶戦で、「信濃町、6時」という集合時刻に遅刻してしまった。千葉の自宅からでは間に合いそうもなかったため、前日は同期の村尾（現姓渡辺）晶子（82年一文卒・高松高）の家に泊めてもらったのだが、二人とも寝過ごした。シヨックと他の部員への申し訳なさと記憶が飛び、懲罰を受けたかどうかは今も判然としない。

早朝、神宮球場の周りにいた学生はもちろん徹夜組だった。寝ている人もいるし、朝から飲んでいる人、麻雀をしている人もいた。彼らにとっては早朝から「新聞いかがですか」と声をかけられるのも迷惑な話だ。女子部員には気が引ける辛い仕事だった。

当時の新聞印刷の技術は、活字を拾う手作業から版下をフィルムにするなどのCTS化への変革期だった。プロが作るスポーツ紙は写真も見出しもドンドン派手になっていた。編集長の川村伸和（80年一文卒・川越高）は大岩堅一（80年教卒・君津高）と「スポーツ紙のように見出しに色をつけられないか」と雑談で何気なく話していた。一般紙の神奈川新聞にはそういう技術がなかった。ふと、赤のゴム印で手押しすることを思いつく。部室で神奈川新聞から運んだ梱包を解いて、一枚一枚に手作業でゴム印を押した。ゴム印は見出しの大きさに合わせて一つ作った。ゴム全体にインクをつけなければいけないし、重ねると下の紙に滲んでしまうので、押した後一部ずつ別にして乾かさねばならない。根気のいる、地味で大変な作業だった。ただ

し、秋の「早慶戦号」はその苦労の甲斐もあって、よく売れた。何しろ優勝がかかった早慶戦なのだから学生は集まるし、みんな機嫌は良かった。まあ、これが一番の勝因だろう。

長谷川（現姓大岩）裕子（80年教卒・西遠女子学園高）は軟式野球部の同期・上村と実家が目と鼻の先という顔見知りだった。記憶に残っているのは、その軟式野球部が春のリーグ戦で史上初の7連覇した快挙を間近で見たこと。もう一つ、競走部の瀬古利彦（80年教卒・四日市工高）の取材で千駄ヶ谷の中村清監督邸を訪れた際に、機嫌が良かった監督お手製の豚肉てんぷらとビールをご馳走になったことだ。しかし、取材に同行した川村伸和の記憶によれば、振る舞われたのは大量の鳥の唐揚げだったというのだが……。

1979（昭和54）年、勇退した石山監督の後を受け継いだのは宮崎康之監督。「新監督の最初のシーズンは優勝する」という言い伝えが早大にはあるが、幸い79年春も例に漏れなかった。

有賀、岡田、鳥貫のクリーンアップは史上最強ともいわれ、チーム打率は・320を超えていた。投手の二本柱は4年生の向田佳元（80年教卒・前橋工高、富士重工）と2年生の三谷。捕手で、現在の早大監督の応武篤良（81年教卒・崇徳高、新日鉄広畑）もベンチ入りしていた。連覇は実に23年ぶりだった。期待された大学選手権は、決勝でエース香坂英典（80年卒・川越工高、元巨人）を擁した中大に3―7で敗れた。

岡田は田淵に次ぐリーグ通算20本塁打を放っているが、2年秋の東大戦、3年秋の早慶3回

戦の逆転の3ラン、4年秋の立大戦と3本もバックスクリーンへ叩き込んでいる。3本のバックスクリーン直撃弾は、六大学史上岡田ただ一人の記録である。この件は79年秋の「早慶戦号」の「神宮に刻む青春 早大岡田主将」に詳しい。

この年の秋、2年生のカメラマン、乾高弘（82年商卒・旭丘高）が撮りためてきた写真を使って、早稲田祭で写真展を初めて開催した。主将の岡田が足を運んでくれて、オープン前から女性ファンが並ぶという盛況ぶりで、中心になって準備した乾は喜んだ。改めて岡田の人気を実感した出来事だった。

編集長になった岡部道雄（81年商卒・前橋高、現上毛新聞）は兄の宏が大学2年生、自身が高校2年生の時に早慶戦観戦に行く。そこで新聞を販売していた早スポ部員の生き生きとした表情に魅力を感じた。もともとマスコミ志望で、早大に入学したら入部しようと思っていたが、ここで意を強くした。50年の歴史の中でも珍しい兄弟部員となった。

創刊20周年のこの年は、4年に野球部の岡田彰布とア式蹴球部の岡田武史（80年政経卒・天王寺高、古川電工など、現日本代表監督）がいて、さらに競走部の瀬古利彦がいた。ラグビー部には1年生の本城和彦（83年教卒・国学院久我山高、サントリー）らもいて、スター選手の話が多い年だった。

4年生の川村伸和は入学時、サッカーの同好会『稲穂キッカーズ』にも掛け持ちで所属していた。その新人歓迎合宿で出会ったのが岡田武史だ。目立つスターではなかったが、その才能

を高く評価されていた岡田はサッカー協会関係者の説得でア式蹴球部に入り直すことになり、川村も早スポの活動に専念するようになった。卒業後、共同通信に入り、運動部記者としてサッカーも担当した川村と岡田の関係は、仕事上の付き合いという範囲を越えて学生時代のまま今でも続いている。また野球部の岡田とも甲子園球場で何度も顔を合わせている。

編集長の岡部は前年のように、春の「早慶戦号」の見出しをゴム印の赤枠で囲んだ。部数が伸びたかどうかは定かではない。翌55年秋の「早慶戦号」1面、「仁村vs.慶大打線」の大見出しにもこの時のゴム印が使用されたようだ。

早稲田スポーツ創刊20周年の記念懇親会は11月23日、市ヶ谷の私学会館で催された。

東大が苦手になった野球部の苦難

1980（昭和55）年から、しばしば東大戦で勝ち点を落とすなど、野球部にとっては苦難の時代に突入する。

まず春のリーグ戦、3カード目の東大に連敗する。1回戦、3―3の同点から9回裏、東大は一、三塁と攻める。ここで早大ベンチは捕手を交代させた。すかさず一塁ランナーが盗塁。代わったばかりの捕手は慌ててセカンドに送球したが、ボールは悪送球となり、センターへ抜けて行った。サヨナラ重盗になった。編集長の児玉恵司（82年社会学卒・藤島高）は「どうしてキャッチャーを代えたんだろう」と悔やんだ。この日の1勝は東大が早大から奪った10年ぶり

の勝ち星だった。

続く2回戦になると、勢いに乗った東大が早大を圧倒した。序盤からリードし、早大は1点を返すのがやっと。1―3で完敗だった。東大戦での連敗は史上初という屈辱的な不名誉だった。敗戦が決まった瞬間、早大の女性ファンが「キャー」と悲鳴を上げたことを、野球担当の唐木（現姓乾）富美代（82年法卒・菊里高）も泉浩三（82年社学卒・札幌啓成高）も耳の奥底に刻んでいる。

東大の大沼徹監督は「一勝しただけで満足なのに……。早稲田がのびのびとプレーしていたら、うちなんかはとてめかないませんよ。早稲田には強くあってほしい」と破った相手を氣遣うようなコメントをしている。

この年の早大の主力は仁村薫（82年教卒・川越商高、巨人）、PL学園高出身で甲子園準優勝手の中村、甲子園ベスト4の今治西・三谷。野手陣には現監督でセンバツ優勝捕手の応武、同じくセンバツで準優勝投手だった黒田光弘（81年教卒・小山高）、甲子園優勝キャプテンの片桐幸宏（81年教卒・桜美林高）、清水隆一（82年教卒・早実高）などと甲子園で名をはせた選手がズラリとスタメンに並んでいたのだが。

この当時は明大、法大が強く、直近20シーズンのうち13シーズンは優勝がかからない早慶戦となっていた。このシーズンも第6週で明大の優勝が決まっている。早大は早慶戦前までの10試合で11得点。チーム打率が・207と打線の不振が極まっていた。

宮崎監督は取材に来る児玉に、いつも「明治、法政より東大が恐い」と言っていた。

春の「早慶戦号」には宮崎監督の「おとなしい選手が多いので萎縮してしまうのだろう」というコメントが載っている。このシーズンを振り返る宮崎監督の嘆きがさらに並ぶ。

「疲れた。ほんとにしんどい試合や」

「負けてしまったものはしょうがない。クヨクヨ考えず、一から出直した」

最後は応援部の檄文である。

「とにかく一から出直すつもりで。たとえ最下位争いでも総力を挙げて勝ってもらいたい。野球部全員のいや、特に4年生の意地に大いに期待するというのが率直な気持ち……」

法大に連敗してマスコミに叩かれ、巻き返しと意気込んだ東大戦では焦るばかりで空回りした。悪循環でツキからも見放された。

「早慶戦号」1面は「ぶつけろ 男の意地」「奮い立てワセダ」の見出しが躍る。

3面では「消すな 伝統の灯を」と、消化試合になりつつある早慶戦の現状に対する緊急提言である。東大戦連敗を評して「勝とうとする気迫がない」「精神力がない」と一般マスコミが報道していたことも伝えている。

「気迫とか精神力というのは日々の苦しい練習に耐え、そこで何かを身につけた自信から来るものである。気迫がないというのは自信が持てないから。平素の努力、野球の取組み方が足りないからじゃないか。野球バカが少なくなつた。三度のメシより野球が好きだ、というヤツ

が。もしほんとうに野球が好きなら練習はいつ、どこでだってできる。プライドを持たなくちゃいかんよ。早慶戦は日本の野球の草分けなんだから」

前監督の石山建一はインタビューに答えてこう語っている。

苦闘はさらに続く。秋の東大戦は1回戦を2―2と引き分け、悪夢の再現かと不安がよぎったが、2、3回戦で打ち勝ち、なんとか春の二の舞は免れた。ところが、立大戦で連敗。17シーズンぶりの勝ち点献上で、こちらでも歴史的な敗戦となった。

それでも春の最下位争いからは上向いていて、秋は一時、首位にも立った。その原動力は仁村、清水、実島範朗（82年教卒・国学院久我山高）、山本智（82年教卒・早実高）の3年生たちだった。「片桐を除く4年生に見るべきものがない。意気込みはあるだろうが実戦に現れてこない。試合中、『4年生、何をやってきたのか』とファンからヤジられても、返す言葉のない散々な成績である」と野球担当者は紙面に書いた。

秋の「早慶戦号」はリーグ戦最後となる4年生を称え、心地よく送り出す原稿で埋められるのが普通だが、この年は「爆発3年生パワー」の1面トップ見出し。2面では「俺たちにおまかせ」という、仁村と清水へのインタビュー。記事はことごとく4年生選手に対して厳しかった。現状を客観的に見れば致し方ない構成だった。だが、安部球場に取材に行った児玉ら担当者は「野球部の4年生ににらまれた」という。

3面ではかつての栄光を伝えたいと、谷沢健一と岡田彰布の二人のOBにインタビューした。

この年度は「1月号」で箱根駅伝、ラグビーと新春の大学スポーツの結果を載せた。発行回数を7回に増やしている。

この頃の東大は、大山雄司を中心とした投手力を、安定した守備が支えていた。

1981（昭和56）年の春、このバランスの良いチーム状態はさらに進化し、他校を苦しめた。早慶は揃って東大に勝ち点を献上し、慶大に至っては史上3回目という最下位に転落したのだ。東大の大山はこの春、5勝を上げる活躍を見せた。

まず、早大の開幕戦。東大との1回戦は0―1。2回戦は0―2。仁村が2試合とも完投したが打線の援護がまったくなかった。東大に連続完封負けしたのは史上初だ。屈辱体験には慣れてしまったのか、清水隆一主将は「心配ないですよ。優勝の望みが消えたわけではなし」とさらりとコメントしている。しかし、そんなものだったか。

試合前から東大の善戦、早大の苦戦は予想され、前評判どおりの戦いだった。判官びいきの対象から一躍人気チームに変貌し、マスコミの取材も殺到した。神宮球場を揺るがすほどの大応援団が詰め掛けた。「東大を優勝させよう会」なる私設応援団まで誕生した、と早スポでも書いている。早大は早慶戦に連勝し、3位。東大の4位をかうじて上回った。

それでも春はまだ良かった。早大にとって、続く秋は史上最悪のシーズンだったかもしれない。東大戦1回戦を仁村の完封で幸先よく勝ち、2回戦も1回に3点を先制する。しかし、仁村に次ぐ2番手の三谷が打ち込まれ、1回も持たずに降板。木暮洋（84年教卒・桐生高）ら

リーフ陣が打ち込まれ、逆転負けした。

初戦に勝っているのに、なぜその後連敗してしまうのか。春秋と連続で勝ち点を落とすのは、
またも史上初の屈辱だった。

「9月号」1面のリードは早スポのというより、早大関係者すべての悲鳴のように読める。

「ワセダの野球部が二度も続けて東大に負けてはならんのだ。これがすべてのワセダマンとワセダファンの偽らざる気持ち、願いだと思う。早稲田スポーツはここであえて苦言を呈すること、野球部の奮起を期待したい」

野球担当の田村公二（84年政経卒・静岡高、現日本経済新聞）は「仁村以外はまったく計算の立たない弱体投手陣。一度劣勢に置かれると、もはや反発力を失う打撃陣。逆転されると再逆転など不可能なのである」とチームの惨状を淡々と綴っている。

1面に掲げられたのは、東大戦敗戦直後の仁村の冴えない表情を大写ししたピンボケ気味の写真。その隣に「早大ガツクリ 王者の姿今はなし」の大見出し。

この紙面は『報知新聞』など一般スポーツ紙でも取り上げられた。早スポOBも在籍する『日刊スポーツ』は「2面で山岳部のK2登頂の明るい話題があるのになぜ、情けない1面なんだろう。価値判断が間違っている。新聞作りのイロハを教えてやろうか」という内容で「後輩」を批判した。身内である学生の新聞にまで叩かれた野球部の情けなさを、揶揄して書いたのだろう。編集長の中村広志（83年商卒・小倉高）らは「早スポもメジャーになったなあ」と苦笑

いしながらも、自信を深めた。この中村は卒業後、共同通信運動部に進む。

中村は宮崎監督とは小倉高の先輩後輩の関係だ。試合後、中村が取材に行くと、ロッカールームに招き入れられ、タバコをくゆらせながら着替える監督に話を聞かせてもらった。参宮橋にあった新日鉄の寮に呼ばれて、食事をご馳走になったこともある。しかし、野球部を批判する早スポの論調には「お前までそれを書くかよ……」と嘆かれた。

秋の「早慶戦号」1面は「最下位はご免だ 早慶勝ち点1の激突」の見出し。早慶両校とも、連敗すれば東大との同率最下位の可能性があった。早大は1947年以來のピンチ。慶大は史上初の2季連続最下位という不名誉な記録が待ち構える。ライバル紙である『慶応スポーツ』も「もう最下位はご免だ」の1面の見出しだった。もちろん示し合わせたわけではないのに同じ見出しになって、お互いに刷り上ってからビックリした。

「早慶戦は消化試合と化し、単なるお祭り騒ぎになろうとしている。早慶戦は今、存亡の危機にあると言っても決して、過言ではない」

学生野球の華であり、早スポにとっては販売収入の素ともなる早慶戦に対して、このリードはあまりに痛々しい。

2面には担当記者の座談会。「どうして弱い早大野球部」と題した。要旨は次のとおり。

「強い法大、明大には優秀な選手が入り易い。だが、早大にも体専（教育学部の教育学科体育学専修・編注）があつて言い訳にはできない。早大は部員が多いので年功序列になりがち。

練習場が狭く、レギュラー以外は球拾いになる。下級生の伸びる余地がない。選手に厳しさを感じない。一部の選手はリトルリーグ出身で、子供の頃からスター扱いされている。地方出身の選手は都会の誘惑に走ることもある。今年から上級生の鉄拳制裁がなくなった。しかし、締めるところは締めていかなければ。野球への自覚が欲しい。法大に負けて『最下位だ、最下位』と言いながらベンチを出てきた選手がいた。勝とうとする意欲がない。負けるべくして負けたんだ」

3面には「早慶戦を再考」の特集が組まれている。各部の早慶戦の全対戦成績や現状分析。伝統と栄光は過去のものなのか。早慶のスポーツがスポーツ界の頂点に立つことはあるのか。近年、問題となっていた神宮周辺での泊り込みの検証。早慶戦には野球そのものを楽しむのではなく騒いだり酒を飲んだりするための口実に行く、という学生気質が紹介されている。泊まり込み後のゴミ放置や歌舞伎町での泥酔トラブルなど社会問題化した事柄も取り上げた。

ちなみに、神宮球場は前年の80年から泊まり込みを禁止にしている。早慶戦の存続意義が大きく揺らいでいた。

野球部の精神的なもろさだけが目立っていたが、4面の「相手に勝とうと思っただけで、自分に勝とう」というアプローチも面白い。心理的なマイナスは訓練で克服できる、という今日では常識になっているメンタルトレーニング法の特集だ。「東大パワーは本物だ」という体育局心理学専門の上田雅夫教授のインタビューもある。

「運動学習の進歩はある水準でスピードが落ちる。進歩は練習量に正比例はしないので、あるところで『高原現象』が訪れ、それを繰り返して階段状の進歩がある。早大の選手は経験が長いために、ある程度のところでは自分の限界を決めてしまふ恐れがある。東大の選手は特別な訓練をせずに入学しているため、伸び代が大きい。また東大の練習は科学的。時間と効果も正比例せず、目的に応じれば短時間の練習ですむ。拘束時間が長ければ逆に密度は落ちる」

今読み返せば当たり前のことだが、当時としては画期的な分析ではないか。読んでいれば、野球部のその後の戦いの参考になったかどうか。

早慶戦は1回戦に完封負けして瀬戸際に立たされたが、2回戦に木暮が完封のお返し。3回戦は延長で振り切って、早慶とも連敗とならず最下位を免れた。

この年は印刷所を創刊以来の神奈川新聞から日刊スポーツに変更した。発行回数を前年の7回から10回に増やしたこともあり、経費がかさんだ。業務担当・篠原令広（83年社会学卒・足利高、産経新聞）の奮闘にもかかわらず広告などの収入が追いつかず、30万円ほどの赤字になった。この頃、現役を退いた早スポ部員の一部は川上哲治元巨人監督の個人事務所「川上企画」で発行している少年野球向けの機関紙「赤バット新聞」の編集を手伝っていた。4年生になった篠原らは、この新聞を1回発行することに受け取る編集バイト代10万円のうち5万円を赤字分の返済に充てることにした。主務だった今野邦彦（83年教卒・札幌旭丘高）が手堅く取り仕切り、赤字は無事補填できた。毎回返済した残りの5万円は4年生5人で分けて使った。

81年の春前後、建て替えのため、旧体育館にあった部室はなくなり、まず記念会堂横の2階建てプレハブ部室に移る。そしてその2年後には体育局横のグラウンド奥にあった、いわゆる「部室長屋」に移る。ここは応援部、山岳部などの部室もあり早スポは漕艇部と相部屋だった。

歓喜の100周年優勝

1982（昭和57）年春は79年春の優勝以来最高の2位という上位の成績を挙げた。打率2位になった広岡資生（83年教卒・姫路西高、松下電器元監督）、木村恒（85年教卒・天理高）、山岡靖（83年教卒・早実高）、阿久根謙司（84年商卒・早実高）、泉正雄（84年教卒・前橋工高）らを主将の安部嘉弘（83年教卒・小倉高）がまとめた。投手陣は3年の木暮、岩下雅人（84年教卒・早実高）の左右の両輪が踏ん張った。

そして秋、歓喜の100周年優勝の時を迎える。

数シーズン苦手にしていた東大戦だったが、無難に連勝して開幕週を飾った。次の相手・立大戦では野口裕美（83年卒・米子東高）が立ちふさがった。野口は戦後最多のシーズン96奪三振（当時）を記録し、西武にドラフト1位指名されプロ入りすることになる快速球投手だった。

第1戦は完封されたが2、3戦はKO。続く明大戦はすべて1点差の接戦となったが、きわどく勝ちを拾って2勝1敗。そして第六週の法大戦。木戸克彦（83年卒・PL学園高、阪神コーチ）、西田真二（83年卒・PL学園高、広島）、小早川毅彦（84年卒・PL学園高、広島コーチ）、

銚子利夫（84年卒・市銚子高、横浜大洋など）、投手の田中富生（83年卒・南宇和高・日本ハムなど）と5人がプロ入りしたというスター軍団との決戦だった。

秋の「早慶戦号」では「完全優勝へ王手 10年ぶり法大連破」の1面見出しが躍った。

「正直なところワセダが法大を連破すると予想した人は少ない。法大はこの春、長い歴史の中で史上3度目という10戦全勝優勝を達成した強豪チーム。連敗など考えられなかった。それだけにワセダの大金星は非常に価値がある」（1面本文より）

編集長の織田健途（84年社学卒・市川学園高、日刊スポーツ）も「駒を考えれば誰が見ても法大の勝ち」と思っていた。

第1戦は1―1の同点から8回裏、安部主将がボテボテのタイムリー内野安打。熱血キャプテンの安部だったが、出塁はいつも内野安打ばかり。それが大一番、ここぞという場面で出たのだ。「内野安打しか打てないのに、ああいう場面で出るんだから運もあった」と織田は振り返る。これを木暮が気迫で守りきった。

2―1の辛勝。これが大きく、第2戦も勝って予想外の連勝で優勝に王手となった。野球担当の田村は「あの安部の内野安打は渋かった」と今でも思い出す。

「今季のワセダは岡田のような絶対的なスターがいらない。そのスターなき集団の背景にあるのは早稲田野球の原点である精神野球に他ならない。競り合いを勝ち抜いてきたのは強い精神力があったからである」（同）

「早稲田大学創立百周年という記念すべき年。最高のお膳立てが揃った。不正入試事件などがありキャンパス全体が暗い雰囲気陥っていた。こうした時に必要なのがスポーツの持つ明るいムードなのだ。昨年のラグビー早明戦に続き野球部の活躍は学内を多いに盛り上げたと言えよう」(同)

優勝を目前にした部員たちの高揚ぶりが手に取るように伝わってくる。10月30日、5万人の大観衆で埋め尽くされた神宮球場での早慶1回戦。2―3と一点を追う9回表2死。連続四球で一、二塁とし、代打の阿久根謙司が左中間二塁打を放ち、逆転勝ち。優勝が決まった。

1勝1敗で迎えた3回戦では広岡、山岡、荒木健二(83年教卒・早実高)が1イニング3ホームランの史上初の記録も作って、優勝と4年生のラストゲームに花を添えた。

荒木大輔(早実高・現東京ヤクルト投手コーチ)の兄で4年生の荒木や山岡が早実高に入学する前に所属していたのは、世界一の強豪で有名だった「調布リトル」。2年生の神山正幸(85年法卒・都伯江高)の父はこの「調布リトル」でコーチを務めていた。同世代の神山も、もちろん彼らとチームメートだった。早実高から入学した住吉秀実(86年教卒)も高橋公一(87年教卒)も旧知の仲だ。

その神山は優勝した1回戦より、最後の3回戦に感動したという。それは元チームメートが活躍したからという単純な話ではない。神山自身は腰を痛めて野球を諦めた。だから、自分は取材者という立場を選んだ。彼らとは選手と取材者という立場で微妙な線を引いて関わってき

た。上辺だけの親近感よりも取材者として接したことの充実感が心地良かったと振り返る。

早慶戦の試合終了後は高田牧舎で恒例の打ち上げ。優勝パレードを二階の宴会場から見下ろせるベストポジションだった。酔ってはしゃいだ女性部員たちが、パレードめがけてビールの（ビール瓶も？）シャワーを浴びせても誰も怒らない。

優勝を見据えた「早慶戦号」は12面仕立て。これまでは8ページが最高で12ページは史上最多の構成である。編集会議では何ページにするかで紛糾した。実は、12ページにしたものの企画がない。広告も思うように入らず、校歌、応援歌の歌詞だけのページを作って埋めたりもした。刷り部数も大幅に増やしたが、残念ながら結局は売れ残った。

100周年企画では野球部・安部、ラグビー部・益子俊志（83年教卒・日立一高、元早大ラグビー部監督）、競走部・金井豊（83年教卒・沼田高、エスビー食品、90年に北海道で事故死）の3人による対談。これは前述の高田牧舎二階で行われた。

「歴史を探る 37回 野球部」の連載企画は特別版扱いで（ページを埋めるためもあり？）見開き2ページを割いた。谷沢健一、安田猛、山倉和博、松本匡史などへのインタビューが織り込まれている。神山とカメラの五井力（85年商卒・駒場東邦高）は野球部OBの千藤三樹男を日本ハムのも摩川合宿所に訪ねた。そこで千藤から「あそこにいらっしやるのが、寮長をしている南村不可止さん（市岡高、巨人、日本ハムなど。故人）ですよ」と言われ急遽、話を聞いた。早大時代には2度も首位打者になり、プロでも日本シリーズMVPに輝いたこともある

スターである。五井は「ただのおっさんに見えた人が名選手で驚いた」という。

この年、ラグビーも対抗戦で優勝して、新春の箱根駅伝も勝てば史上初の「メジャー3競技優勝揃い踏み」だったが、箱根では復路優勝の2位にとどまり「3冠」はならなかった。

しかし……。100周年Vからこの後8年、15シーズンの間、野球部は優勝から遠ざかるのである。2年生だった神山と1年生だった石黒たちの代は優勝を経験することができたが、以降の菅井暢浩（87年商卒・仙台一高）、清水岳志（88年二文卒・上田高）、熊田明裕（89年教卒・安積高）、上田守英（90年一文卒・早大本庄高）の各編集長は野球部優勝の経験がない。

東大に再び苦杯

劇的な100周年優勝から半年、1983（昭和58）年春はまたしても東大に勝ち点を奪われた。初戦は辛くも振り切ったが、2回戦は0―1の完封負け。3回戦は投手陣の乱調から逆転負けを喫した。早慶戦でも10シーズンぶりに勝ち点を奪われて5位。早慶の順位では15シーズンぶりに慶大が上位に来ることになった。

続く秋も東大には連敗した。1回戦で大越健介（新潟高・現NHKニューヨーク支局長）に完封され、2回戦も先発を救援した市川武史（都国立高）に抑え込まれた。当時、東大には都立高として初めて甲子園出場を果たした国立高の市川と川幡卓也（国立高、東大助監督）のバッテリーがそのまま進学し、人気を集めていた。

東大に再び敗れた瞬間、編集長の神山はスタンドのコンクリートを蹴り上げた。

2年生で野球担当だった榎谷謙士（86年商卒・希望ヶ丘高）は宮崎監督を取材するためロッカールームの前で待っていた。しばらくして、一般紙やスポーツ紙の取材を終えて出てきた宮崎監督に「早スポ？ おうつ、こっちに入れ」とロッカーに呼びこまれた。この時、監督は荒れていた。「一般紙なんて普段は取材になんて来ないのに、東大に負けると、途端にやって来る」と吐き捨てながら、パイプイスを蹴つ飛ばした。榎谷はこの言葉を聞いて、腐肉に群がるハゲタカのようなマスコミが嫌いになったという。しばらく経って落ち着いてから「ミーティングでは怒つとらんよ。ケロッとしていたら怒るつもりやったが、選手は泣きそうな顔しとったから」と宮崎監督は語り始めた。阿久根主将も「とにかく泣くほど悔しいとしかいえない。このまま卒業するのでは悔いが残ります」と言葉の端々から意地も見えた。

東大戦での連敗が奮起の起爆剤になったのか、そこから5連勝したのは救いだった。

はたして野球部のみならず、早稲田マンは弱いのだろうか。神山の代は男が3人に女子が6人。

「1年の時に、私たち女子は上級生から多少なりとも体育会的な要素を教え込まれました。そういう個性派の女子部員が、周囲の男子部員に対して厳しく当たるところはありました」（ある女子部員）。彼女たちと同期、その下の代の軟弱な（？）男性部員数人は進級するタイミングなどで退部してしまった。世間ではNHKの連続テレビ小説「おしん」ブームで耐え

忍ぶ女性が再評価され、その一方で「オールナイトフジ」（フジテレビ系）がスタートし、女子大生ブームも巻き起こるといふ不思議な時代だった……。

1984（昭和59）年、対東大戦は春は2勝1敗、秋は4シーズンぶりの連勝を果たした。名門・静岡高出身の鈴木康生主将（85年卒）は先輩の安部、阿久根元主将と比べると、声を出すのではなく無言の背中で引つ張るタイプ。野球取材班チーフの猪澤（現姓寺西）真里（86年教卒・横須賀高）も榎谷も、コメントを聞き出すのに苦労した。娯楽の殿堂「みよし」でパチンコ、麻雀に興じる野球部員をよく見かけたが、無邪気に遊ぶ彼らが「神宮のグラウンドでは、なぜのびのびと縦横無尽にベースを駆け回ってくれないんだろう」と残念でならなかった。

野球部の川野太郎（85年教卒・山口鴻城高）が沢口靖子主演のNHK連続テレビ小説「滯つくし」に出演することが決定し、猪澤がインタビューをしている。川野は1年遅れて卒業したが、木暮洋、和泉実（84年教卒・早実高）らと同期。和泉は一般企業に就職した後、すぐに南陽工高監督に就任。92年に母校・早実高の監督に就任し、06年には斎藤佑樹を擁して夏の甲子園で初優勝を果たした。この代には他にも変わり種がいて、山内俊明（84年教卒・都江北高）は教員志望から転じて光文社に入社。野球とは直接関係のない週刊誌、女性誌編集部などを経て、現在は『FLASHスペシャル』編集長である。ちなみに、『FLASH』本誌のデスクには同じ野球部出身の海蔵寺宏敦（97年人科卒・早実高）がいる。付け加えると、光文社の販売部長は赤黒のジャージを着たラグビー部OBの渡辺浩章（87年社学卒・修猷館高）である。

秋のシーズン、立大1年生だった長嶋一茂がプロ野球コーチと接触していたという疑惑が持ち上がり、スポーツ紙が書きたてた。この余波で、編集長の石黒秀樹（86年政経卒・倉吉東高、東京新聞整理部デスク）は事前検閲のため「早慶戦号」を当時の長船騏郎学生野球連盟事務局長に届けなければならず、「問題になるような記載なし」とお墨付きをもらって初めて神宮周辺での販売を許可された。この年で宮崎監督は勇退し、翌年から飯田修が早大を率いる。

84年のロサンゼルス五輪に、現役では水泳の奥野景介（88年教卒・瀬戸内高）が出場。OBでは陸上の瀬古利彦と金井豊、レスリングの太田章（81年教卒・秋田商高）、陸上の大森重宜（83年教卒・星稜高）の4選手が出場した。

春の「早慶戦号」7面には初の現役部員による海外特派員レポート。早大がシドニー大、慶大がメルボルン大と姉妹校の提携をした記念で漕艇部のクルーがオーストラリアに遠征した。4年の堀（現姓織田）美奈子（85年一文卒・広島ノートルダム清心高）と2年の杉田（現姓井上）裕子（87年学卒・足利女子高）が2週間、遠征クルーに随行した。「オーストラリアとの交流が今ほど盛んではなく、往復のチケット料金が驚くほど高い時代。でも、その他の費用は日豪交流基金に出して頂いた。カルデラ湖でのオーストラリアのインカレに当たる大会に早慶クルーが招待されました」と堀。タスマニア島の雄大な大自然を満喫した。

当時の早スポの部室は体育局の横のグラウンドの奥。そのグラウンドでは昼休みにまだ同好会だったソフトボール部が練習をしていた。早スポは部室長屋の一室を漕艇部と共同で使って

いた。漕艇部は艇庫が戸田にあるため、ほとんど部室には出入りしなかったが、唯一、その部屋にニヤニヤして来ていたのが杉田の兄。シングルスカルの選手だった。

谷口誠基（86年教卒・松阪高）は高校時代、応援部に所属していた。もちろん大学でも応援部に入部したが身が持たず、早スポへ転身。宴会の締めには必ず谷口が学ランでエールを切った。卒業後は、就職した東洋紡（Vリーグ）の応援団長として道を究めた。

たけしと西大立目教授の対談

1985（昭和60）年春は東大に連勝したが、秋は初戦に完封負け、2回戦は2―2で引き分けて悪夢がよぎったが、3、4回戦に連勝してやっと勝ち点を挙げた。飯田監督は「何とか勝ち点は取れたが。東大もウチに自信を持っていて、悪く言えば遊ばれてしまった」とコメントしている。

早スポ自体は秋にいきなり「桑田スクープ（別掲）」を飛ばして意気盛んだったが、野球部は早慶戦に連敗して4位。慶大の優勝を見せつけられることになる。後に近鉄の「いてまえ打線」の中心打者となった石井浩郎（87年二文卒・秋田高）は4番に座り続けたが、チャンスにはめっぼう弱かった。野球班チーフの峰岸直也（87年商卒・鶴見高）は野球部主将の山川明俊（86年教卒・高松商高）に、「野球にはこういうこと（連敗）もあります」とあっさり言われ、「キャプテンのくせに悔しくないのか」と嘆いていた。

峰岸は「40周年記念誌」に「勝負強さで鳴らしている石井があの時力を発揮していれば。桑田が入学していれば。取手二高の石田が実家に逃げていなければ。池田の江上が木のバットでもちゃんと打てれば。せめて1回は優勝できた気がする」と書いている。石田文樹は84年夏の甲子園で桑田・清原を擁するPL学園高を破って優勝した豪腕だった。特選で合格したが、入部直後から練習に來なくなった。後に日本石油を経て横浜大洋に入団したが、08年死去。

秋の「早慶戦号」の売りは「ビートたけし×西大立目教授」の対談だった。西大立目永教授は六大学や甲子園の審判を勤めるなど、アマチュア球界のご意見番的存在だった。早スポにもたびたび登場している。

きっかけは、ラジオだった。「野球界に西大立目という妙な名前の審判がいる」とビートたけしが「オールナイトニッポン」で発言したことを、編集長だった菅井暢浩が聞き逃さなかった。テレビ界の超売れっ子、時代の寵児だったたけしと対談ができないか、と菅井は考えたのである。

どうにかしてビートたけしに近づけないか、ゼロからのアプローチが始まった。菅井はビートたけしのファンだった神村弘道（87年政経卒・市尼崎高）を伴って「オールナイトニッポン」の放送が終了する深夜3時、放送局の前で待ち伏せした。必死に近づこうとしてマネジャーに「学生が来るところじゃない」と胸倉を掴まれたこともあった。そして何度か所属事務所の太田プロに連絡を入れ、ついに企画が通った。

当日は西大立目、菅井、神村、小座野容斉（87年政経卒・芝高）、清水岳志の5名で四谷の太田プロに向かった。太田プロの磯野副社長（当時）から「たけちゃんは見知りだからね」と聞かされていたとおり、「最初はたけしが緊張していた」と神村の目には映った。緊張をほぐしたのは西大立目の「ビートさん、初めまして」という一言だった。

対談は「『西大立目』と言うと、野球を知っている仲間は反応して面白がる」というたけしが、教授に興味を持った由縁からスタート。教授はその年夏の甲子園決勝、PL学園高対宇部商高の主審を務めていて、その名は一般にも知られていたのだ。明大OBのたけしは「六大学はもっぱら、外野席で酒を飲みながらの観戦だった」「早慶戦後は新宿で大騒ぎをするのではなくて外苑を開放してイベントなどをやれないか」などと野球、六大学について幅広く語っていた。

対談終了後、西大立目は高校野球の記念ネクタイピンをたけしに渡し、たけしはベストセラーとなっていた著書『たけし君、はい』のサイン本を贈った。

帰り際、菅井が「この新聞は50円で販売します」と正直に言うのと、磯野副社長は「それは良かったわね。でも、聞かなかったことにしておくわ」と学生新聞への配慮をしてくれた。プランニングに興味を持った菅井は、卒業後、電通に入社する。

秋山素子（88年社会学卒・横浜双葉高）は「阪神の20周年ぶりの優勝と入稿が重なり、日刊スポーツの『切り張りのおじさん』がイライラしていた」ことを覚えている。

この年は珍しくカメラ専門として小座野、2年生の今利幸（88年法卒・都伯江高）と理工学

部の新家稔央（88年理工卒・芝高）の3人を充てる態勢ができた。小座野は卒業後、毎日新聞の写真部で活躍中。今は2年上の写真担当だった本田典之（86年教卒・開成高）に続いて読売新聞写真部に所属。五輪やメジャーリーグの取材で世界を駆け回り、NY滞在中は Yankees タジアムで松井秀喜を撮り続けた。

85年は神宮プールで行われた水泳のインカレで2位に入る。ロサンゼルス五輪に出場した奥野景介（現スポ科准教授）らが少数精鋭で得点を稼いだ。かつての水泳王国復活に近づく第一歩。この年は金メダリスト・北島康介のコーチで現水泳連盟強化コーチの平井伯昌（86年社学卒・早稲田高）が水泳部の主務を務めていた。担当の山本俊尚（87年教卒・攻玉社高）らがこの平井から集計記録をもらうなどして世話になった。

昭和の終焉 優勝のない世代

1986（昭和61）年春の「レガッタ号」2面に前代未聞の全面広告が掲載された。プロ野球界では西武ライオンズの「ナベQ」「クドちゃん」という「新人類」がもてはやされ始めた時代。部員が減少し、存続の危機に立たされていた老舗運動部の相撲部が部員募集の広告掲載を申し込んできたのである。発案は4年生の村上選手兼主務。写真に載せる力士姿のモデルは現役部員。女性のモデルは相撲部員が連れてきた。

「きつと何かがありそうね。」「ああ、必ず掴んで見せるよ。」

コピーは学生らしい、と言うべきか。広告料は20万円前後だった。

春の早慶戦は3回戦の9回裏、逆転サヨナラ勝ちで慶大の連覇を阻止。PL学園高出身の加藤正樹（88年教卒・元近鉄）がサヨナラヒットを放つ。慶大側は優勝パレードのための提灯を配っていたが、またしても無駄になってしまった。慶大の1年生には3年後、巨人のドラフト1位指名を受ける大森剛（90年卒・高松商高）がいた。

「9月号」は通巻200号。秋のシーズンから亀岡偉民（78年卒）が助監督としてベンチに入るようになった。

秋の「早慶戦号」の野球企画ページは「さよなら安部球場」特集だった。翌年のグラウンド移転がほぼ決定。この時の報道では暫定的に3年間は東伏見を使い、そこから所沢に移る、となっている。稲門倶楽部は大学側に再考を求め折衝中だった。地元の商店街や住人に取材をしていて、惜別の念が伝わってきた（別掲）。

この年の12月、前年秋の「早慶戦号」に登場したビートたけしが講談社を襲撃する。

早スポ会長を長く務めた大西鐵之祐がこの年で大学を退官、年度最終号に「ワセダスポーツの躍進を」と題した文を寄稿した。

1987（昭和62）年から人間科学部が新設され、スポーツ環境も変革のスタートを切った。「特選」も合格者枠を増やした。

早スポは大西鐵之祐の後任として日比野弘が会長に就任して新しいスタートを切る。もちろ

ん、このバトンタッチには大西前会長の尽力があった。

春の「早慶戦号」1面に日比野会長の就任挨拶が掲載されている。

「1、大学チャンピオンになること。2、スポーツと学業を両立させること。3、早大生に愛されること。この三つが各部に求められている。早稲田スポーツ新聞会は各部が年間を通じて真摯に努力する姿を伝え、共に早大で青春を燃焼させた思い出を盛り上げていきたい」

2年間、孤軍奮闘して投げ続けた竹之内崇（89年教卒・小倉高）は投げすぎてヒジを壊し、4年生になってからはまったく投げられなかった。運不運で片付くことではないが、飯田修監督時代の3年間、早大野球部には不運が付きまとった。

春は慶大が優勝し早大は4位。堤美奈（89年教卒・四谷双葉高）は左腕の志村亮（桐蔭学園高）の颯爽としたクレバーな打球が好きだった。早大は田宮実（88年教卒・大阪春日丘高）がシーズン最高打率を樹立して首位打者になったことが、このシーズン唯一の救いだった。

特集の「フリーストック拡大版」には野球部の低迷に「男なら意地を見せろ」と題した論説。

飯田監督の「新人類と言うのかね。熱意が伝わっているかわからない。打てば響くような反応が欲しい」という嘆きを紹介するとともに、「負けたら身体いっぱい悔しがり、泣きじゃくってもいいじゃないか。次の日にその悔しさをプレーに出せばいい。人間臭い野球を見てみたい」と熊田明裕は書いている。熊田はこの2年間、神宮球場に通い続けたが、飯田監督の辛い顔ばかり見ていた。

「安部球場の思い出」特集は巨人で活躍していた山倉和博、松本匡史、仁村薫の連続インタビュー。取材した堀川貴弘（89年法卒・湘南高）は後に朝日新聞で巨人担当となる。競走部の担当でもあった堀川は、実家のすぐ前の道が箱根駅伝のコースで、沿道で応援しているうちに駅伝が好きになった。高校時代は陸上部の長距離ランナーだった。箱根駅伝では芦ノ湖のゴール地点の取材で、陸連関係の手伝いに来ていた高校の恩師と何年かぶりに出会った……こんな出来事を最後の「アウトライン」で書いている。

秋の「早慶戦号」は久々のAクラス入りを願う紙面作り。飯田監督の「優勝させてやりたい、絶対に」という切なる願いと落胆は、「起て臙脂よ 飯田監督の夢叶わず」とそのまま見出しになった。この年は、甲子園を沸かせた池田高出身の江上光治（88年教卒）が主将。安部球場最後の主将でもある。水口栄二（91年人科卒・松山商高）が「野球日記」を寄稿している。

試合は2回戦で小宮山悟（90年教卒・芝工大柏高、ロッテ、メッツなど）が志村に1―0で投げ勝って、3位に入った。1回戦で勝った段階でタブロイド版の号外を初めて出した。なお、早スポ縮刷版では、この号外が春の早慶戦の後に続いて印刷されている。

11月22日、安部球場の「送別試合」として全早慶戦が行われた。

昭和の終焉期ともなると、女性部員も多くなり、割付は部室で行うことが増えた。岡本純子（90年政経卒・横浜双葉高）は1988（昭和63）年、女性として初の主務となった。この春には初のスキー合宿が実施された。

88年は石井連蔵が監督としてカムバックした。春の「早慶戦号」1面には3年生の小宮山が登場。「早稲田で人気者になりたい」（本文中より）と二浪までして入学を果たした技巧派が一本立ちした。本庄学院高で野球部に在籍していた有賀守（90年政経卒）は「小宮山番記者」として1面の記事を書いた。積極的で恐いもの知らずの岡本純子は、野球部の新井岳彦主務と親しくなり、石井連蔵新監督とも話せる仲に。石井監督はゲーム後も口が堅かったが、岡本にはポロッと話してくれた。岡本は野球部の新練習場となった東伏見球場を訪れ、雨が降りしきる中で見た石井監督のノックに新しい歴史の始まりを感じた。

慶大の4年生・志村亮が最後の早慶戦に登板、1回戦と3回戦で勝利を挙げ、通算31勝になった。

庭球部・土橋の「もう一つの偉業」

庭球部は85年、柳川高校から土橋登志久（89年教卒、現テニス部監督）が入学。1年生でいきなり全日本大学対抗王座に貢献して優勝。庭球部復活の原動力となっているが、その後は王座を4連覇。また個人戦のインカレも4連覇するという偉業を成し遂げた。テニスは夏、というわけで、土橋は「7月号」あるいは「9月号」の1面を4年間連続で飾った。これも一つの偉業に違いない。

3年生の時の記事では高校時代からのライバルでプロとなった松岡修造のことを「気になる

存在」と答えている。鶴田康（89年教卒・白杵高）、上田守英（90年一文卒・本庄学院高）は「ツッチー」のパッシングショットに酔った。主将を務めた4年生の時はデ杯選手にも選ばれた。インカレ4連覇は神和住純（70年法大卒・法政二高、神和住は3連覇止まり）も成し遂げていない初の快挙だった。同期で主力の一人だった丸山淳一（89年教卒・早実高）は卒業後、プロテニスプレーヤー・杉山愛の練習パートナーだった。

2009（平成21）年、OB会長の岡部宏が早スポ50周年の挨拶のため庭球部を訪れると、土橋監督に「早スポには現役の頃からお世話になりっぱなし。励ましていただいてありがたい」と感謝された。クラブハウスには「早スポ号外」（2006年王座獲得）が飾ってあった。団体戦の王座は土橋卒業後の翌89年も勝って5連覇を達成することになる。

「9月号」はソウル五輪特集。1面は2年生で1000メートルライアルの代表に選ばれた自転車部の豊岡弘（91年人科卒・西海学園高）。2年連続日本選手権2冠で、国内に敵はいなかった。インタビューが行われたのはソウルに旅立つ前日。母親の話もしっかり取れている。早スポ2年生の大森（現姓栗原）由香（91年卒）は「特派員」としてソウル五輪に。観戦記を書いたが、もちろん自費での出張取材だった。

全国の大学スポーツの趨勢を探る「大学スポーツランキング」はこの年で10回目。早大は2位に躍進となった。合気道部が無敵のインカレ8連覇と安定した実力を発揮し、ハンドボールが悲願のインカレ制覇を果たしていた。

三輪洋子（90年一文卒・横浜双葉高）は早スポ史上初めてのカメラマン専門の女性部員となった。そのまま技量を生かし、現在は読売新聞写真真部で活躍中だ。

上田は編集長を引退後、「学生時代にもう一つ何かを残したい」と相撲部に入部した。早大本庄高で後輩だった相撲部員もいた。道場が西早稲田にあり、相撲部とはチャンコと呼ばれたりする付き合いもあった。4年生になった同期の井上太（90年教卒・明大中野高）は東日本学生選手権で優勝。「7月号」では1面を飾っている。上田の成績は「1勝6敗ぐらい」だったが、「満足感を感じていた」という。

年号が改まった1989（平成元）年、「1月号」は昭和天皇崩御の直後、日刊スポーツでの入稿作業となった。春には東京ドームが開業し、秋には南海、阪急がダイエーとオリックスにそれぞれ身売りした。昭和世代から平成世代へ。時代が大きく移り変わっていく。

〔早スポOB特別寄稿②〕 中村広志（1983年卒）

創刊22年目の転換点

1959年11月の「早稲田スポーツ」創刊以来、22年。早スポは紙面を一新して、81年4月の第151号「新人生歓迎号」の発行を迎える。低迷期にあった早大の競技スポーツ再生への期待を込め、1面は「甦れワセダ魂」の見出しで、ア式蹴球部・釜本邦茂、ラグビー部・藤原優、競走部・瀬古利彦、野球部・岡田彰布の4人を「早スポを飾った男たち」として紹介した。2ページ表裏の号外スタイルの紙面で、2面には新人生向けに「これが早スポ」と、取材の現場や新聞製作など部活動の全体像を書いた。記念すべき日刊スポーツでの印刷第1号は、大学入学式の4月1日、早大記念会堂の周辺で新人生らの手元に届いた。

▽紙面刷新への願い

紙面刷新は早スポ歴代OB、OGの願いでもあった。79年に開催された早スポ創刊20周年記念パーティーなどの席で、先輩たちに聞かされる新聞作りにかけてきた熱い思いが、伝統として刷り込まれていたのかもしれない。創刊当初から新聞製作のサポートをいただいた横浜市の神奈川新聞社から、東京・築地の日刊スポーツに印刷所を移す。これで年間

発行スケジュールに縛られることなく、号外発行にも対応でき、最先端の新聞印刷技術を駆使してカラー印刷も可能になった。レイアウトは、一般紙のようなちよつと硬めから、スポーツ紙のような派手めで軟らかな仕立てに。早スポにとって、部としての活動や紙面展開に大きな可能性を開く、転換点となった。

▽今野メモの発掘

30年近い過去の記憶は、薄らいで遠くなっている。81年度主務を務めた今野邦彦が札幌の実家で「発掘」した学生時代の手帳に残っていたメモが、当時の状況を呼び覚まし確認する手助けとなった。

「昭和56年1月23日。19時より『トモン』にて2年生会。来年度の方針について話し合い。いろいろなアイデアが出る」

早スポの中核メンバーとして活躍していた3年生からバトンを受け、「これからは僕らがやっていかなければ」という気持ちだったのだろう。今野、中村、篠原令広、中本顕二、菅本史子の5人が、学年末試験の真最中にもかかわらず、高田馬場駅近くの喫茶店に集まった。「印刷所を変えることができるだろうか」。神奈川新聞社から「1年間の製作日程を早く知らせてください」という通告が届いていたのも、このプランが現実味を帯びて大きく浮上するきっかけとなったのだろう。

▽頑張ってやれ

印刷所変更のプランを大西鐵之祐・早スポ会長に相談した。71年3月まで体育局長を務め新聞製作に詳しい安井俊雄先生を訪ねるよう勧められ、その口添えで日刊スポーツへ出向くことになった。条件は極めてよく、「製作経費がクリアできれば、やれるかもしれない」。早スポ創刊を推進した松井盈先輩からは、「それはいい。ぜひとも頑張ってやりなさい」と背中を押され、「神奈川新聞社への感謝とお礼をくれぐれも忘れないように」とアドバイスを受ける。

▽部室にあふれるインクのおい

今野メモによると、並行して部内の会合が断続的に開かれるが意見はまとまらず、最終的には1年生を交えた2月10日の部会で印刷所移転が決まる。3月9日、神奈川新聞社へ最後のあいさつ。翌10日、日刊スポーツの印刷工場を見学し、製作工程の詳しい説明を受け、新たな印刷所での新聞製作の段取りを確認した。動き出したプロジェクトに、「印刷所を変えることの重大さが身にしみる」と今野は手帳に記している。日刊スポーツでの新紙面第1号は、3月27日入稿、翌28日の校正を経て、30日に降版・印刷となり、新聞は受け取り後、学内の部室へと運ばれる。「もう、東横線に揺られて桜木町へ行って、新聞の束を抱えてくることもなくなったなあ」。新しい新聞のインクのおいと、感慨の言

葉が部室にあふれていた。

▽全国区へ

新入生歓迎号に続き、4月Ⅱ早慶レガッタ特集、5月Ⅱ野球の早慶戦特集、6月Ⅱオール早慶戦構想、7月Ⅱワンダーフォーゲル部の中国遠征など各部の海外展開——と新聞発行は順調に進む。9月Ⅱ野球部の春秋とも東大に勝ち点献上、10月Ⅱ野球の早慶戦特集。そして11月の「早慶ラグビー号」発行にこぎつける。ラグビーの特集は12月の「早明戦特集号」が定番で、2週間足らずの間に「早慶戦と早明戦で新聞を出す」のは、当時の学生スポーツ新聞の体力では夢のような話だった。「早明ラグビー号」では、早大の「5年ぶりV奪回」を完全予想する記事を1面に据え、ライバル紙「明大スポーツ」を圧倒。一般紙を含めた大多数のマスコミの「明大優位」の見立てを覆す結果を、早スポならではの選手・監督への密着取材で的確に分析した。大西ラグビー部監督は、後の著書「わがラグビー挑戦の半世紀」(ベースボールマガジン社)の中で、このときの早スポの1面記事を引用して、「早明戦までの実情と予想を、うまくまとめている」と紹介している。当時の大学ラグビーは、早明戦では国立競技場が約7万人の大観衆で埋まるほどの人気があり、早スポはサンケイスポーツなどプロのスポーツ紙をはじめとするマスコミからの取材も受け、認知度は「全国区」となった。



1982年3月5日、全早大ーエディンバラ大。後半34分WTB新谷時男が相手パスをインターセプトし、そのままトライ。16-10として勝利を決定づける（早稲田スポーツ 82年「4月号」の1面に掲載）



ケンブリッジ大戦の終了後、クラブハウス前で大西鐵之祐監督と喜びの握手をかわす中村広志・早スポ編集長(当時)

と称賛された。ラグビー部では、翌82年2月から3月にかけて現役部員にOBを加えた全早大チームを編成して、英仏遠征をすることが決まっていた。この遠征を最後に、ラグビー部監督を退く大西会長が、早スポからの遠征同行取材への道を開いてくれた。

ラグビー部OB会が企画した「観戦応援団」への参加が認められ、このサポーターツアー

神奈川新聞から日刊スポーツへ。新印刷所での第1号となった「新入生歓迎号」(1981年4月)

▽英仏遠征に同行
大西・早スポ会長の顔は、あくまでも一つの顔であり、「本職」はもちろんラグビー部監督である。注目の81年の早明戦を21―15で快勝し、5年ぶりの関東大学対抗戦グループ制覇を8戦全勝で飾り、「大西マジック」

の一員として、パリ大（2月25日・●3―50）、オックスフォード大（3月2日・●27―40）、エディンバラ大（3月5日・○20―10）、ケンブリッジ大（3月10日・○13―12）の4試合を観戦・取材した。カメラは得意ではなかったし、ラグビー担当でもなかったが、この遠征の試合中はゴール裏やサイドラインでカメラを構え、試合後のロッカールームで選手・監督らの話を聞いた。とりわけ、遠征最後のケンブリッジ大との試合は大接戦の末の勝利で、名門ケンブリッジ大を日本の単独チームが初めて破る快挙となった。早スポでも「早大 本場を疾走」「ケ大破る」の見出しで1面展開したが、この歴史的シーンに、早スポ編集長として立ち会えたことは誇りであり、そこで撮影した写真が早スポの1面を飾ったことは、ラグビー部と同様に歴史的なことだろう。試合の写真は、ラグビー部の遠征報告書「早稲田ラグビー英仏遠征記 1982」にも提供し、掲載された。遠征費用は「出世払い」ということで両親が出してくれた。あらためて感謝をしなければならない。

▽30万円の赤字

1月11日ラグビーの全国大学選手権、箱根駅伝で、81年度、新しい印刷所での新聞発行は計10回となった。思い切り突っ走った後には、赤字約30万円が残る。春と秋の野球の早慶戦特集号の新聞販売、定期購読などの収入があるとはいえ、新聞製作費の大半を賄うのは今も昔も広告収入である。部員が手分けをしてそれぞれ広告先を回るのだが、苦戦が続い

た。新しい印刷所でのスタートはすべてがバラ色だったわけではない。新3年生に新聞製作を引き継ぎ、現役を退いた4年生5人で小中学生の野球少年を対象にした広報紙の編集製作のアルバイトをして、なんとか赤字は補てんできた。今から考えても「冷や汗もの」の収支状況で、82年度の織田健途編集長らの頑張りがあつて早スポ発行停止の危機を回避できたのは、奇跡的なことだったのかもしれない。

早スポ50周年を迎えるにあたって、あらためて大西先生の言葉の多くを思い出す。印象的なのは、『『早稲田スポーツ』という変わらない看板のもとで、毎年毎年ひとは変わつても、新聞を出し続けていくことが大事。お上（大学、体育局）が作る新聞じゃない、学生が学生を取材して作る新聞だから、価値がある』。

大学卒業にあたって色紙をいただいた。「人生とは意気であり情熱であり努力の累積である」。いまでも心の支えである。

第4章 ラグビー再興 堀越入学で10年ぶりの日本一へ

対抗戦60連勝でストップ

1976（昭和51）年、ラグビー部は明大との全勝対決に勝って対抗戦で優勝。大学選手権も8度目の優勝を飾った。

主将は後に監督になるフランカーの豊山京一（77年教卒・福岡高）。フランカーにジャパンとなる伊藤隆（78年教卒・石巻高）、SHは辰野登志夫（77年教卒・今宮高）、SOはジャパンのメンバーで遠征も経験していた星野繁一（77年教卒・西京高）、CTBにも南川洋一郎（77年教卒・福岡高）といった逸材がそろっていた。

しかし日本一に喜んだのもつかの間、1977（昭和52）年2月に魔の事件が勃発する。他の項でも詳述するが「辰野選手逮捕事件」である。事件の真相はどうあれ、世間を騒がせた責任をとってラグビー部は一年間の公式戦自粛の措置を取る。

大東和美に代わって新監督には栗本利見（70年教卒・岐阜工高）を迎えた。栗本監督は70年、宿沢や堀口らとラグビー日本一になった時のメンバーだった。

「事件に関しては、アマチュアスポーツであるにもかかわらず、チャホヤされて学生スポーツの自分を越えてしまったのではないかと反省しています。本来の姿に戻すことに努力しております。とにかく練習に励むのみだと考えています」

ラグビー部の辛い時期に取材をした篠田（現姓森）和子（79年商卒・加納高）に語っている。編集長の土田純嗣（79年卒）も「代替わりをしたばかりでショックだった」。野球とラグビーが早スポにとってメーンの競技という時代。野球は江川卓がいる法大に歯が立たず、苦しいシーズンが続いていたため紙面構成にも苦労した。しかし、一方のラグビーは日本選手権に2連覇するなど全盛期ともいえた。それが突然の公式戦自粛である。「事件によって大きな取材源が減った」わけである。ラグビー号が作れない可能性がある。何で紙面を埋めればいいのか。篠田も「ラグビーの記事が減って芸能のほうに軸足が移った」という。

ラグビー部は寮生活を指導する研修会を発足させて、再建へのスタートを切った。そしてその後、これらの自浄努力が認められたことで自粛期間が軽減され、秋の公式戦に出場可能となった。土田が胸を撫で下ろしたのはいうまでもない。

開幕の東大戦は伊藤主将が病氣、その他の主力もケガで欠くなど不安もあったが、主将代行を務めた松本純也（78年教卒・日川高）がチームをまとめ、新生早大は快勝で復帰の門出を飾った。しかし、その後、5連勝で迎えることになった早慶戦で思わぬ敗戦を喫することになる。

前年は40点差以上をつけて大勝した相手に、17―34と一蹴されたのだ。大西鐵之祐は「ラグ

ピースピリットで負けた。慶応の執念を知らなかったのはまずかったな……」と慶大を称えた。慶大は早慶戦で15年ぶりの勝利。その間の屈辱を一気に爆発させた勝利だった。早大はこれで、69年から対抗戦で続けてきた連勝記録が60で途切れる試合になった。続く早明戦にも6―17で敗れ、対抗戦は3位。Bグループに降格していた時（62年）以来の悪い結果になった。交流試合でも敗退し、大学選手権の出場もなかった。

危機感を背負って白井善三郎が1978（昭和53）年、3期目の監督に就任する。岡部道雄（81年商卒）は入学前の76年の早明戦を観戦し、強い早大ラグビーに酔いしれた。しかし、いきなりの辰野事件。対抗戦3位と交流戦敗退はまさに悪夢だった。

この5月、主将になった橋本裕幸（79年教卒・早実高）に取材をした。身長170センチ、体重70キロあまり。父は「ターザン」の異名を誇った巨漢の橋本晋一元監督だが、その長男は自己と体格が変わらない。その上「緊張している」こちらを氣遣ってお茶まで勧めてくれた。復活にかける意気込みを聞くと「とにかく、一生懸命」という言葉を繰り返す。そのたびにひしひしと熱意が伝わってきた。

岡部は帰省した伊勢崎から比較的近い、ということもあって、菅平の夏合宿取材に行く。

「特別な気負いはなかった。『原点に戻って初歩からやり直そうと思いました。今年もやれるという目途はついた。一戦一戦試合を通して覚えていけば優勝を狙えると思います』という白井監督の力強い言葉を聞いた。昨シーズン屈辱の3連敗を喫し、失った選手たちの自信は、言

葉で自信を与えるのではなく、猛練習を通して『これだけの練習をやったんだから負けるはずがない』という風に自信を植えつけてきた。そのためにも今年の合宿は例年以上に厳しかったようだ。順風満帆、優勝目指して一直線といった自信に満ちた口調の白井監督であった」と「9月号」で合宿レポートを書いている。

公式戦に入って、雨中のゲームとなった筑波大戦で初めて黒星を献上した。1トライの4点しか上げられず、4―22で慶大にも2連敗。明大にも16―23で敗れて対抗戦5位と屈辱は続いた。大学選手権も1回戦敗退。

「伝統があっても努力を重ねても苦境から脱することの難しさ」を岡部は感じた。

低迷していたにもかかわらず1979（昭和54）年には高校時代から花園で活躍した本城和彦（83年教卒・国学院久我山高、サントリー）、吉野俊郎（83年教卒・日立一高、サントリー）、津布久誠（83年教卒・佐野高）、益子俊志（83年教・日立一高、元早大監督）らが入部してきていた。岡部は「有望なルーキーが入った。今季は彼らの力を借りて去年の屈辱から這い上がれるかもしれない」と大きな期待を寄せた。公式戦にも彼らが出場し、若いチームに生まれ変わった。白井監督は新戦力を積極的に起用し、筑波大を完封。慶大も1PGのみに抑えて15―3で快勝した。全勝同士で対戦することになった明大戦。期待は高まったが6―16の惜敗。大学選手権でも準決勝で敗れ、完全な復活にはならなかった。しかし、この年の健闘は本城や吉野が十分に機能した81、82年の対抗戦連覇につながっていく。

1980（昭和55）年は監督に「ターザン」橋本晋一が再登板する。48年、戦後初の日本一になった時のロック。明大は相撲部員を連れ出して突進を止めたという巨漢である。

『去年はよくあそこまでやれたと思う。今年は、もちろんその上を狙いますよ』と力強い言葉が返ってくる。今年の手応えについては『ええありますよ。選手たちのやる気が伝わってきますから』と自信満々（4月号）

水谷雅和（82政経卒・早大学院高）は橋本監督に取材した。この言葉を聞いて、今年こそ復活してくれるのではないかと大いに期待をしていた。

キャプテンはガッツ溢れるS.Hの奥脇教（81年教卒・吉田高）。4年生が3人という若いチームだった。無敗を守って迎えた早慶戦は16―16の引き分け。「それにしても慶大の再三の攻撃を必殺のタックルで耐え抜いた姿はまさに早稲田ラグビーの真髄だったのではないだろうか」という選評。早明戦にも復活の予感を感じさせた。

この80年は「早明戦号」を試合の当日に合わせて発行した最初の年である。選手が野球の「早慶戦号」と同様に、顔写真付きで紹介されるようになる。明大は主将が瀬下和夫（81年卒・秋田工高、東芝）、4年生の人気選手、SOの砂村光信（81年卒・国学院久我山高、リコー）がいた。

前年までは年明けの発行はなかったが、この80年度から「1月号」も発行するようになった。そして早明戦以後のラグビーの結果が掲載できるようになった。

ところが、なんとも寂しい結果報告になっている。1面に「難問山積 試練のラグビー部」のタイトル。早明戦は18―33と、当時としては記録的な敗戦。対抗戦は3位に終わり、専大との交流試合では9―40というこれまた惨敗を喫したのだ。大学選手権に進めなかったのは3年ぶり。低迷の闇は晴れず、どこまで続くぬかるみぞ、だった。1面の記事は1年間ラグビーを見続けてきた水谷が、最後に思いのたけをぶつけた提言である。

『慶明に勝つことだけを考え、正月は付け足しだというムードの持つて行き方が間違っていたのかもしれない。慶大戦で張り詰めていたものが切れ、明大戦では気分に乗れなかった』と橋本監督は今季を振り返る。まず弱さ、もろさを露呈したFWの建て直しが第一だ。小さくてもたくましいFW作りが目標で、ウエートトレーニングにも今まで以上に力を入れることが必要だ。やはり相手のFWと五分に戦える力が欲しい。

しかし精神的な影響も無視できない。一つつまずくとガツと行く弱さをどう克服していくか。来季の4年生の責任は重い。この4年間、優勝の味を知らないラグビー部。大事な試合に勝つことを忘れるのが一番恐い。昨年よりも四十日も早く練習が再開されるが、今年は試練の年になることは間違いない」

大西監督復帰で奇跡の対抗戦優勝

1981（昭和56）年は印刷所を日刊スポーツに移して、早スポも新たなスタートを切ったが、新たに「早慶ラグビー号」などを加え、発行回数は年間10回になった。

早スポ会長だった大西鐵之祐が17年ぶりに監督として復帰。大西監督の登場はいつも緊急事態と言っている。例年より一ヵ月以上早く始動し、春先はウエートトレーニングにも力を入れた。春のオープン戦はライバルチームとの対戦を減らし、藤原、植山、豊山ら代表クラスのOBとの練習試合をこなした。力をつけたところでサントリー、日新製鋼などの社会人チームに連勝。ところが慶大、明大にはやはり力負けしてしまう。

「明大、慶大を叩いて自信回復を狙った早大だが、連敗で逆に自信を失う結果になった。昨年後半ガタガタと崩れた早大。春も後半に弱さを暴露。精神面にも弱さがあるのではないか」早スポの「7月号」は手厳しい。これに対して寺林努（82年教卒・早大学院高）主将は静かに、次のように誓っている

「明大、慶大に負けて恥ずかしく思っている。合宿までに個々で力をつけ、合宿でチームプレーを完成させたい。なんとしても慶大、明大、同大を倒す」

秋の本番はまず、ダブリン大との招待試合で始まった。全早大チームで臨んで相手をノートライに抑え込んだ。27―9の完勝で好スタートが切れた。早慶対決でも慶大を25―16と一蹴した。そして明大との全勝対決である。

有料入場者が4万人を超えたこの試合は、80年代に入って上向いてきた学生ラグビー人気が

一気に跳ね上がる起爆剤になった。早稲田ラグビーのハイライトでもある。この後、国立競技場の早明戦は超人気カードとなり、前売りチケットを求めてファンが長蛇の列を作り続けることになるのだが、この日スタンドを埋めた大観衆が注視する先に、SOの本城和彦がいた。

史上最強FWといわれたこの年の明大。4年の相沢雅晴（国学院久我山高）、川地光二（熊本工高）、河瀬泰治（大工大高）と後の代表が並ぶ重量FWが相手。戦前、大西監督は「早大は3割のボールを支配したい」といつていた。「早明戦号」1面でも大西監督は、「早大にとって恐いのは重量のある明大のFW。しかしFWさえ持ちこたえればBKで勝負できる。BKの勝負なら明大に負けるはずがない。いずれにせよベストを尽くして、ワセダラグビーをするのみ」と語っている。マスコミの予想は圧倒的な明大有利だった。『サンケイスポーツ』が企画した「大学スポーツ紙予想」で『明大スポーツ』は80―0で明大の勝利。それに対して早スポの中村広志（83年商卒）編集長は早大の辛勝を予想した。大西監督は試合前に「俺を信じるのか、マスコミを信じるのか」と早大のメンバーに語ったという。

ゲームは本城のPGで早大が先行、明大がFWの認定トライなどで三度追いつく展開。両校の持ち味が出た好ゲームだった。そして後半33分、明大陣22メートルラインでBKのハイパントを早大CTBの佐々木薫（国学院久我山高）がチャージ。転がったボールは吉野の胸の中へ。そのまま拾ってトライ。21―15の激戦でノーサイドとなった。対抗戦5年ぶりの優勝。早大選手はグラウンドで抱き合って鳴咽した。対抗戦優勝だったが、本来は日本一にならないと歌わないは

ずの『荒ぶる』を歌った。

1年生で担当だった五十嵐（現姓名取）美穂（85年法卒・水戸一高）はこのゲームに感動して次のように書いた。

「早明戦まで大西監督は選手への取材を全て拒否し、文字どおり、鉄のカーテン」を引いた。これは外野からの雑音を遮断し、選手たちの緊張を極限にまで高めるためと思われる。最大限の緊張を求め選手からプラスアルファを引き出そうとしたのだろう。

試合後、早大日比野コーチは『監督の信念と理論と情熱の勝利』と評したが、その監督によく応えたファイティーンを声大にして称えたい。15人の全員ラグビーを思う存分發揮し、ここに荒ぶる魂は完全復活を果たしたのである」（「1月号」）

大西監督は「作戦どおりに動いてくれた学生に敬意を表したい」と語っている。

このゲームに人一倍思い入れが強かったのが早スポ4年生の水谷雅和だった。前年までラグビー部の担当でもあったし、主将の寺林、SHの佐々木卓は早大学院高での同級生だった。

4年前、学院は大西鐵之祐がコーチを務めて花園出場を果たしている。大学と同じように高校でも同じように寺林が主将で佐々木が副将だった。東京大会の決勝の相手は国学院久我山高でSOは2年の本城。戦前の予想は、実力では久我山が数段上というものだった。早明戦と状況はよく似ていた。11月の「早慶ラグビー号」に「勝利のカギを握る学院パワー」という囲み記事を1年生の木村朱美（85年一文卒）が書いている。学院時代から結ばれてきた絆。これも

含めて「大西魔術」というのだろうか。

サンスポに載った中村の得点予想は、ほぼ的中した。

プロのスポーツ紙絡みのエピソードとしては、2年生の森本優子（84年一文卒・斐太高）が『日刊スポーツ』に食ってかかったという「事件」があった。試合の当日、『日刊スポーツ』に載った早明戦の予想記事が早スポの記事に酷似していたのだ。森本の真剣さに、「あの学生女性記者は誰だ？」と『日刊スポーツ』では話題になったという。

「1月号」には大学選手権決勝の結果記事。「死闘再び 泣く早大」の見出しが痛々しい。2年生の沼尾直美（84年一文卒・栃木女子高）が書いた準優勝原稿からは、学生らしい熱血が伝わってくる。

「『堂々と出て行くんだ』。記者団の取材に淡々と答えていた大西監督はロッカールームへ向きを変えて叫んだ。着替えを済ませた選手たちが目を真っ赤に泣きはらして、うつむきかげんに出てきたのだ。」

昨年12月6日、絶対不利を伝えられた対明大戦に勝って全勝優勝を遂げたのである。捨て身のタックルと鉄のディフェンスでつかんだ勝利は見るものの全ての心を感動で震わせた。早稲田ラグビー部というより早大全体が「優勝」という二字に飢えていた。

負けた試合を悔やむなど言うのは無理かもしれない。しかしどんな雑音にも惑わされず、どん底から這い上がった見事な精神力を見せ付けた。監督、選手の信頼関係、素晴らしさを教え

てくれたのである。それだけで胸を張る価値がある、堂々とすべきなのだ。

だが真の復活は来年以降の活躍にかかっている」(一部略)

森本は大西監督の様子を書いた。

「淡々とあまりに淡々とした口調で大西監督は語った。『選手にあれ以上、望むのは酷です』。話しぶりにいささかも氣負ったところは見られなかった。

対抗戦で明治に勝つ、それだけを至上命令に一年間、練習を続けてきた。燃え尽きたという表現はふさわしくないが、早明戦後監督にも選手にも、それに似たある種の満足感があつたのは確かである。一年間かけて登った山をわずか数日で再び征服しろ、というのは酷だ。

男が命を賭けた真剣勝負、それが早明戦であると監督は言う。グラウンドは死に場所であり、合宿所を出発する時は後ろを振り向かない。およそ今日の社会で失われた男の生き様が、確実に存在している。」

大西監督はこの年度限りで、ひとまず現場での指導から退いた。

本城、吉野、益子ら花の54年組が最上級生になり、戦力も充実した。翌1982(昭和57)年度こそ大学日本一という年だった。監督は名FBだった31歳の植山信幸(75年卒)。ナンバー8の益子主将、杉崎克己(83年教卒・松原高、博報堂)、松瀬学(83年社会学卒・修猷館高、共同通信・現ジャーナリスト)など4年生のFWは充実していた。対抗戦全勝で迎える早明戦は、珍しく下馬評では早大有利だった。「有利といわれたほうが負ける」というが、23―7で明大

を破り、連覇した。しかし、大学選手権は準決勝で明大に当たり、悪夢のノートライ負け。明大の気迫に一蹴された。明大にはフッカーの藤田剛（83年卒・大工大高、日新製鋼、前明大監督）主将、フランカー岸直彦（83年卒、国学院久我山高）らがいた。

試合は9―4でリードしていた後半。早大の自陣内で本城のパスに反応するはずの吉野がその位置にいなかった。転がるボールを明大に拾われ、逆転のトライを奪われた。早大の焦りと悲壮感の中、ノーサイドとなった。本城は1年生からすべての公式戦に出場したが「もう、ラグビーをやめたい」とゲーム後に悲痛な声を上げた。

「昨年の対抗戦、完膚なきまでに叩きのめされた明大。圧勝した早大。もちろん早大も気を引き締めていたには違いないが、敗者の執念はしばしば勝者の一瞬のスキを突く。気力が実力を上回る。ラグビーの恐さ、面白さはそこにある」（1月号）

最後こそは「荒ぶる」優勝原稿を書くかと期待していた森本だったが、まさか大学選手権準決勝で負けるとは思ってもよらなかった。森本はこのゲームを見て、記事に書いたとおりその面白さに惹かれ、なおラグビーの取材を続けたいと思った。現在も『ラグビーマガジン』編集部で原稿を書いている。

明治、同志社、大東大の壁

土屋謙太郎（84年教卒・国学院久我山高）は悲運のキャプテンだったのか。本城、吉野ら主力がごっそり卒業し、1983（昭和58）年のチーム作りは一からのスタートとなっていた。監督は28歳、早大史上最年少となる豊山京一が引き継いだ。大学選手権ではその豊山が主将で勝って以来（76年度）、日本一にはなっていない。

対抗戦の中盤、要注意的存在だった帝京大に史上初の金星を献上した。一週間後、日体大戦で連敗。慶大にはなんとか6―4と辛勝した。

明大SOの小林日出夫（84年卒・目黒高、新日鉄釜石）と主将のフランク・高田健造（大工大高）は日本代表入りしていた。早大はFB安田真人（84政経卒・早大学院高、現横河武蔵野アトラスターズGM）一人がジャパン。

早明戦は12月4日、絶対に負けられない剣が峰だった。しかし、後半途中までリードしていたが、力尽きて逆転負け。交流試合にも進めない屈辱のシーズンとなった。一週間後、異例の早大で新主将を選出し、12月30日まで練習した。

2年生でラグビー担当の清田雄功（86年法卒）は、早大学院高でラグビー部だった。大柄な体型そのもので、ポジションはプロップ。豊山監督には自宅に招き入れられて、取材させてもらった。選手と一緒にグラウンドを駆け回る、兄貴分のような監督に親近感を持った。しかし、勝負は非情だと思った。

主将の土屋は翌年から母校の国学院久我山高に教師として赴任し、ラグビー部の指導に当

たった。「高校生に話すことは負けたことのほうが多い。精神面の話をよくします。一人でも多く早稲田に行ってほしい」(85年「早慶ラグビー号」)。その息子、鷹太郎は父と同じく久我山から早大ラグビー部に進み、現在2年生。赤黒のジャージは手の届くところにある。

1984(昭和59)年の監督には日比野弘(58年卒・都大泉高)が就いた。70年に初めて監督に就任して以来、73年から75年の3連覇を含めて4回の対抗戦全勝優勝(3回の大学日本一と1回の日本選手権優勝)を成し遂げるなど、輝かしい指導歴を誇る。前年の汚名返上のための切り札が投入されたわけだ。主将は矢ヶ部博(85年教卒・筑紫丘高)。

しかし全勝対決だった早慶戦でまさかの敗戦。対抗戦はその慶大が優勝した。慶大は31歳の青年監督・上田昭夫(75年卒・慶應義塾高、東京海上、トヨタ自動車、フジテレビ)の就任1年目だった。早大は早明戦には雪辱したが、大学選手権の準決勝で平尾誠二(85年卒・伏見工高、神戸製鋼)、土田雅人(秋田工高、サントリー)、大八木淳史(伏見工高、神戸製鋼)、東田哲也(85年卒・大工大高、ワールド)などスター選手を擁した同大に敗れた。この時期の同大は史上初の大学選手権3連覇を達成している(82〜84年度)。

1985(昭和60)年は主将の山本巧(86年卒・青山学院高)や恵藤公浩(86年卒・大分舞鶴高、朝日新聞)などFW陣に献身的な選手が多かった。4年ぶりの早明全勝対決に敗れ、対抗戦は2位。大学選手権では平尾らが抜けた同大に雪辱したが、対抗戦では破った慶大に準決勝で足元をすくわれた。対抗戦では振るわなかった慶大だが、大学選手権では勢いに乗って明

大と同点優勝。日本選手権でもトヨタ自動車を破って日本一に輝く。一方の早大は切り札・日比野監督をもってしても頂上には届かなかった。

3年生のラグビー担当・菅原徹（87年卒・湯沢高）は明大・北島忠治監督、早大・日比野監督、慶大・上田監督の人物クロージアップを企画した。

「自宅での北島監督は自由奔放な明治らしく美味そうにタバコ吸っていたし、上田監督は慶応らしく飯田橋のトヨタ自動車本社最上階で迎えてくれた」

菅原の原稿は仕上がりが遅く、面担をやきもきさせたが、人物描写は上手かった。

「早明戦号」のラグビー特集は「観客へのホイッスル」と題する提言内容だった。80年代前半から大学ラグビーブームが始まっていたが、同大の大八木、平尾らの活躍がさらに盛り上げた。秩父宮ラグビー場や国立競技場には「ミーハーな客」が大挙して押し寄せた。ブーム以前の熱心なファンの苦い顔が浮かぶようだが、その点、早スポもお堅かったのである。

特集では大西鐵之祐のインタビュも掲載され、「ルールのわからんヤツが来るようになった。命がけのファイトが受けるんや。ラグビーにはハイクラスのファンが来るんや。マスコミも選手をスター扱いしたらあかん。配慮した報道をせなあかんわ」などの苦言が紹介されている。

「鬼のキモケン」の異名を取る木本健治が1986（昭和61）年に2度目の監督復帰。西谷光弘（87年教卒・早実高）主将は監督と話し合い、厳しさよりも楽しく、量より質の練習メニューとなった。特選一期生の栗原誠治（87年教卒・新田高、サントリー、日本代表）は1年からレ

ギュラーとして活躍した。ロックの坂本光治（87年社学卒・宇都宮高）は正確無比な左利きのブレースキッカーだった。

早スポ2年生の高野道夫（89年二文卒・小石川高）は慶大の絶対的WTB若林俊康（87年卒）と高校の同窓生。「向こうは高校から人気者。慶応のスター。なんとなく目の上のたんこぶのようなヤツ」と思っていた。早大ラグビー部に勝ってもらって、虫の居所の悪さを払拭したいというのが願いだった。若林率いる慶大を「おごれる人も久しからず……」の『平家物語』平家になぞらえ、「早慶ラグビー号」1面で高野は慶大の終焉を描いてみせた。18―15で筋書きどおりになった。

対抗戦は明大に1点差の惜敗で2位。大学選手権準決勝は同大に1点差で逃げ切る。決勝は明大でも慶大でもなく新興の大東大。早大史上最重量といわれたロック栗原もラトウ、ナモアのトンガパワーに押し切られ、10―12で敗戦。またしても悲願達成はならなかった。

あと一步のところで大学日本一にはたどり着けない。前回の優勝から10年が経っている。そして大西鐵之祐はこの年で早大を退官した。

野球部は82年の秋以来、優勝していない。ラグビー部も同年以来、優勝がない。早稲田在学中に野球とラグビーのどちらかでも優勝したことがないのが86年度の卒業生だった。早スポでいうと菅井暢浩の代になる。こういう状態がいつまで続くのか。

早スポ会長を長く務めた大西鐵之祐が退官するにあたって、87年1月17日、最終講義が大隈

小講堂で行われた。テーマは「人間とスポーツ」。大西は早スポの86年度最終号に「ワセダスポーツの躍進を」と題した寄稿文を寄せた。

「十四年前初代清原健司先生から会長を引き継いで何することもなく会長職を退任することになった。初代の基礎作りを経て発展期に向かう時期なのに何等指導もせず、会員諸君の自由に任せ過ぎたきらいがあるかもしれない。しかしその間の会員諸君の全力投球によって現在の紙面の充実と経営の安定を見たことはこの上ない喜びである。学生スポーツの先導役として、一つはチャンピオン・スポーツの修行者として振興と学生生活に浸透する真のクラブスポーツの育成と新興に尽力し、ワセダ・スポーツの第二期黄金時代を目指して躍進される様心から念願して愛する会を去る言葉としたい。大西鐵之祐」（一部略）

編集長の清水岳志（88年卒）はその原稿を大学選手権決勝戦の終了後、国立競技場の関係者控え室で受け取った。控室の大西鐵之祐は手に杖を持ち、報道陣や関係者に背を向けて一人で静かにイスに座っていた。窓越しに射し込むやわらかい西日を眺めているようだった。「おう、来よったか。これや」と原稿を渡されたが、敗戦直後にもかかわらず、表情は穏やかだった。

スーパーキー堀越入学

1987（昭和62）年は人間科学部元年。教育学部の特別選抜制での入学者も増えた。その

中でスーパー1年生がラグビー部に加わった。SHの堀越正巳（92年人科卒・熊谷工高、神戸製鋼、元日本代表、現立正大監督）とFBの今泉清（大分舞鶴高、サントリー、元早大コーチ）である。堀越は同じ熊谷出身の先輩になぞらえて「宿沢二世」と呼ばれ、春のオープン戦から一本目で起用された。

本本監督2シーズン目は、今泉、藤掛三男（92年人科卒・佐野高）といったフランカーの選手をコンバートして大型BK陣を形成したことも奏功した。プロップの永田隆憲（88年教卒・筑紫高、九州電力）主将、フランカー神田識二郎（88年社会学卒・福岡高、元日本代表、九州電力監督）、今駒憲二（88年教卒・生田高）、桑島靖明（88年教卒・石神井高）、加藤進一郎（88年教卒・国学院久我山高）らの4年生と2年生の清宮克幸、前田夏洋（90年社会学卒・修猷館高）、さらにルーキーがバランスよく揃ったチームだった。

「今年はチャンスなのではないか」、ラグビー班3年生の海老原俊一（89年商卒・薬園台高）、高橋伸周（89年一文卒・平塚江南高）、高野道夫、鶴田康は出稿を競った。春の東伏見のオープン戦も完全取材した。

ラグビー班は「早明戦号」で前監督の日比野弘に話を聞いた。

「早稲田が勝つだろう。近年にない大きなチャンスをつかんでいる。今年、勝てないとなると当分、勝てないんじゃないかなあ」

という言葉をもらって、安心して高田牧舎を後にした。

「早慶ラグビー号」の選手紹介面は最上段一列に広告を置いた、当時流行の「青空広告」に挑戦。また、中段も両側に広告を配し、左右で早慶を分けた縦割りのレイアウトをしている。

優勝目前の「早明ラグビー号」の企画面には、ラグビーを題材にしたテレビドラマ「スクールウォーズ」で注目された俳優・山下真司が登場している。

高野の顔写真付き「高さんの知ったか予想」は、弱かった野球班の大塚常好（89年二文卒・野沢北高）がいい加減に思いついたコラムだった。「明大のナンバー8の大西（二平、88年卒・大工大高、神戸製鋼など）は暑苦しい。一つぐらいスクラムトライでもさせておけば満足だろう」と洒落のつもりで書いた。海老原、高橋、鶴田ができた新聞を明大に届けたところ、新聞を読んだ途端に大西の目が吊り上がり、顔はみるみる赤くなった。目の前で火が燃えたつドラム缶の中に新聞を放り込んだのだった。

雪の中で行われた早明戦に勝利し、大学選手権でも勝ち進んで、ついに決勝進出を果たした。準決勝の翌日、スポーツ紙のほとんどが早大勝利を一面で報じた。決勝は同大に19―10。11年ぶりの優勝で国立競技場には現役、OBが入り交じった〝荒ぶる〟の輪ができた。

この年、早大はすべてのゲームで2トライ以上取られていない。早慶戦前に行われたいわゆる「ウチゲバ」、AB戦でBチームに2トライを取られて、からくもAチームが勝っていたが、2トライを喫したのはこのゲームだけだった。それだけ部内の競争が激しく、チームとしての力も充実していた。そして日本選手権でも東芝府中を22―16で破った。

東芝府中戦は一般のマスコミも注目し、学生の手を離れた感じもして、優勝しても号外という話にはならなかった。

ちなみに、86、87年のラグビー号に関しては1面下のコラム「アウトライン」を、「ラインアウト」と小細工して掲載していた。

1988（昭和63）年、大学ラグビーブームはさらに盛んで『ザ・ラグビーワールド』などの専門誌も創刊された。ラグビー部は監督に佐藤秀幸（72年卒・大分舞鶴高、新日鉄釜石）、主将に清田真央（89年教卒・神戸高）という体制で挑んだが、日体大と明大に負けて対抗戦3位に終わった。明大は安東文明（89年卒・秋田工高、秋田市役所）主将、富岡洋（91年卒・大工大高）、吉田義人（91年卒・秋田工高、現明大監督）、小村淳（92年卒・函館有斗高、神戸製鋼など）らの顔ぶれだった。大学選手権はクリスマスの日の1回戦で同大に敗れ、年越しさえできず、2連覇はならなかった。

次の大学日本一は2002（平成14）年度。対抗戦でも清宮克幸監督が指揮を執る2001年まで優勝できず、明大の後塵を拝することが多かった。1989（平成元）年からは再び、「失われた10年」になる。大学選手権では準優勝が4回。手堅く出場はするものの、2回戦敗退が4回、準決勝での敗退も3回ある。

増保輝則（94年卒・城北高、神戸製鋼）、小泉和也（96年卒・日川高、神戸製鋼）、平田輝志（97年卒・東筑高、九州電力）、中竹竜二（97年卒・東筑高、現早大監督）、永島茂樹（97年卒・

啓光学園高、サントリー）月田伸一（98年卒・東福岡高、リコー）、速水直樹（98年卒・農大二高、東京ガス）、吉上耕平（99年卒・筑紫丘高、九州電力）などジャパンで活躍する選手も、早大らしく献身的にプレーする選手も絶えず輩出してきた。監督には切り札といわれた宿沢広朗、石塚武生や、再登板となった木本健治、日比野も代わる代わる指揮を執ってきた。それでもこの時代、頂点には届かなかった。

【コラム②】 早スポ25周年を祝福した「箱根駅伝V」

創刊25周年を数ヵ月後に控えた1984（昭和59）年の正月、早大は第60回箱根駅伝で30年ぶりの優勝を果たす。

76（昭和51）年、前年の早大受験に失敗し、陸連の要請で南カリフォルニア大に留学していた瀬古利彦（80年教卒）が、1年間の「浪人生活」を経て、晴れて早大入学となった。競走部復活の序章は、まず瀬古の入学から始まるのである。箱根駅伝では77年度、総合6位で24年ぶりの上位入賞。2区を走った瀬古は区間2位。79年度は25年ぶりの3位。瀬古は2区で区間賞を獲得した。

瀬古の在学中には優勝できなかったが、80年「12月号」で早スポは初めて箱根の展望記事を打つ。陸上担当の今野邦彦（83年教卒・札幌旭丘高）は「総合7位あたりを予想」し

た。中村清監督に「個人の持ちタイムで競うなら駅伝はやる必要がないんだ。勝負はやってみないとわからない。今度は面白いよ」と言われ、伴奏車に乗る瀬古の声援にも期待した。結果は総合5位で「健闘した」という評価だった。この後、エスビー食品に入社して社会人1年目の瀬古が『伴走記』を寄稿している。

81年度は総合では2年連続5位だったが、坂口泰（84年教卒・世羅高、9区）、遠藤司（85年教卒・横手工高、10区）らが走った復路で優勝。早スポの沼尾直美（84年一文卒）は大手町ゴールで解散後、すぐに練習するため神宮外苑に向かった選手を見て、来季こそは優勝という予感を感じ取っていた。

82年度の59回大会は29年ぶりの総合2位に入った。復路は2秒差で2年連続優勝。中村監督は早スポの取材に対して、次のように語っている。

「私も戦争で何度死んだと思ったかわからないが、ここにこうして生きています。たった2秒の差で勝てたことは神仏の存在なくては説明できません。『一升のマスからは一升の米しか出ない』といいますが、今年はマスが濡れた分だけ多く入ったようです。来年は一升二合くらい出したいと思います」

5区の山登りはルーキーの木下哲彦（現姓金、86年教卒・八幡大付高）。坂口、遠藤も期待どおり走った。

そして83（昭和58）年度、優勝候補の呼び声が高く、それに応えるかのように、2位の日体大に15分の大差をつけて圧勝した。

坂口、高橋雅哉（85年教卒・本郷高）、木下、谷口伴之（84年教卒・川崎北高）、遠藤らと、戦力は充実していた。春の関東インカレ、全日本インカレで5000^{メートル}、1万^{メートル}、30^{キロ}など、それぞれが一桁の順位に入るなど安定した総合力を備えていた。前の年からエースの金井豊が抜けただけで、メンバーはまったく見劣りしない。担当の鈴木（現姓中村）美幸（86年教卒・浦和一女高）は中村監督から「皆さんをガツカリさせるようなことはしません。優勝の可能性は高いといえます」と聞いて「完全Vへ手ごたえ充分あり」と確信していた。日体大、順天大と比べれば総勢わずか18人という小さな所帯。中村監督の口癖は「選手層は薄いが、名門ゆえそれを言い訳にはできない」だった。「早大で駅伝を走りたい」といつて浪人しても入学してくる選手は少なくない。自己の目標と責任感と熱意が支えている。

「人事を尽くして天命を待つ」と中村監督はレース前にこの言葉を選手たちに与えた。『人事』つまり練習の厳しさやその密度は想像を超えるものがあった。何度もの試走、『箸の上げ下ろしに至るまで』の細かな精神的指導。合宿所のある東伏見で駅伝メンバーを見かけた他の運動部の部員は『まるで修行僧のような顔をしていると思った』という（「1月号」1面の「ワセダ復勝 完全優勝」という赤いV字の大見出しは、面担の国分敦（85年社

学卒・安積高)が自ら毛筆で書いて、日刊スポーツで版下にしたものである。

70歳の中村清監督はこの駅伝を最後に辞任することになった。

「今回の優勝は監督以下選手ともども光栄に思い大変感謝しております。選手はよく練習しました。これ以上の努力は出来ないでしょうし、このように誠心誠意やってくれる者もいないでしょう。」(1月号)

早大とエスビー食品の両方を指導していた中村監督。瀬古が出場するロス五輪が、数ヵ月後に迫ってもいたのだ。

83年のスタッフは「赤字は出さない」を新年度の最初に宣言。81年に印刷所を日刊スポーツに移したばかりだったが、収支は赤字になっていたからだ。国分が作った赤のV字見出しは紙面の半分を占める大きさを特注である。もちろん版下の製作費も高くなる。木村朱美(85年一文卒)はこの「特注」にダメ出しをして日刊スポーツの工程室で言い争いになったが、「箱根の30年ぶりの優勝だし、俺たちの最後の新聞。華やかにしよう」と国分が押し切った。

国分は紙面をレイアウトするのが好きで、駄洒落を使った見出しが得意だった。また芸能担当でもあった。卒業後はスポーツ紙で整理部や芸能担当のデスクとして活躍した(現報知新聞レース部長)。

翌84年度の61回は2連覇を目指した。

「坂口（2区）谷口（9区）の両エースが抜けた穴が大きいことは否めない。『日体大、順大より実力は1ランク下』と言わしめる原因と言えよう。確かに層の厚さは一步譲るが、田原、遠藤、高橋、木下らの好走はある程度期待できるので、初出場組がどれだけ走れるかがポイントだ。V2の可能性は十分」

競走部担当、吉田康郎（87年一文卒・土浦一高）の「12月号」での戦力分析である。

84年の大晦日、石黒秀樹（86年卒）と猪澤真里（86年卒）、競走部担当の寺西広（88年商卒・都片倉高）らは高尾山に必勝祈願登山をして1月2日の本番に備えた。

前年と同じ1区の田原貴之（86年教卒・水口東高）は33秒差の3位で2区の遠藤へ。学生長距離界のエースの遠藤は日体大、東海大を抜いて首位に躍り出る。1年生の坂内敦（88年二文卒・国学院久我山高）は順大に逆転されるが、4区の高橋が主将の意地を見せ再逆転。5区の山上りはスペシャリストの木下が区間新で駆け上がった。8回目の往路優勝となった。

復路スタートの朝、7年ぶりの雪となった。6区、4年生の赤堀正司（86年教卒・岡崎城西高）は慎重に山を下る。追走する順天大は焦って転倒した。そして伊藤雅弘（86年教卒・鳥取東高）、尾崎一志（86年教卒・海田高）川越、豊福嘉弘（89年社学卒・福岡大大濠高）

と続いた復路の早大ランナーは最後までペースを乱すことなく、1位のままゴールを駆け抜けた。2位の順大には4分30秒の差をつけた。早大の連覇は1934（昭和9）年以來の快挙。野球もラグビーも弱かった時代。唯一、正月の箱根だけが面目を保った2年間である。そして早スポの25周年を飾る嬉しいニュースだった。

就任一年目で優勝した鈴木重晴監督は「練習方法は中村方式をそのまま進めた。練習量はどこにも負けない自負がありました」と語った。中村前監督は「ワセダは襷をつなぐだけではなく、魂も渡す」と常々話していた。

「V2戦士の手から手へ渡ったタスキにはお守りが縫いつけられていた。9区を走った川越が勝負の神様、原宿の東郷神社で買い求めたお守り」（1月号）

最近でこそ、各校のタスキに縫い付けられたお守りを目にするが、最初につけたのは早大だった。吉田の細部を穿つ取材が小さな特ダネをモノにした。

翌年は総合2位、往路の3連覇を達成する。山上りは4年連続で木下哲彦。2年連続で区間賞を獲得した。金哲彦といえ、いまやテレビのマラソン解説でお馴染みだし、陸連女子長距離マラソン強化部長の要職に就いている。吉田は「山を上ってきた木下の、疲れているにもかかわらず、笑顔で取材に答える優しさが嬉しかった」と書いている。

第5章 スポーツ選手入試事情の変遷

まずは体専から特選へ

1983（昭和58）年から始まった教育学部の特別選抜制度。この流れが現在のスポーツ科学部のスカウト制度に受け継がれ、各運動部がインカレなどで上位の成績を収める結果として現れている。こうした「スポーツ推薦制度」の変遷を『早稲田スポーツ』の紙面で追っていきたい。

82年「7月号」の3面に「甦るか？ 強い早稲田」の見出しで特別選抜制度の特集が組まれた。教育学部教育学科体育学専修で行うもので、教育学部の教授会が提案し採択した。

当時の教育学部教務主任の田辺教授は「体力、学力に秀でた学生は指導力、統率力が優れているはず。入学させることは体育学専修の学生全体の牽引力になる」と語っている。

募集要項を見ると、特別選抜制度の枠としては体育学専修の募集人員160人のうちの十分の一、16人を充てる。小論文と面接によって教育学部が設置する特別選抜委員会が可否を決定し、体育局はいつさい関わらない。募集資格は野球、バレーなど集団的スポーツでは全国大会ベスト4以内に入賞した正選手。個人的スポーツでは競技によって条件は異なるが、概ね全国大会8位以内となっている。

また、その他の調査書の資格として、高等学校2年までの各教科、科目の評定平均値の平均が3・5以上、行動および性格の記録にCがないこと、高校1学期までの欠席日数が40日以内であること。加えて、卒業見込み証明書、体育活動証明書などの提出を求めている。この推薦制度の特徴は学校推薦ではなく、まったくの自薦、という点にあった。

取材した竹嶋（現姓河西）三奈（85年教卒・姫路西高）によって、いくつかの問題点が指摘されている。

「応募できる種目は32あるが、16人という人数では2種目に一人の割合である。入部を前提とせず学部に入部をさせるというが、各部に入部を期待されているのは明らかで、これでは恩恵に浴せない部がたくさん出てくる。また団体スポーツのベスト4以上の選手よりも（ベスト）8以内のエースのほうが実力上位の場合もあって、募集資格に片手落ちの点はないか」というものだ。この記事は、最後に次のようにまとめられている。

「これまでの体育専修の実技試験は、例えば100メートル走を相撲選手が走る場合、不利な条件でもあった。デメリットが克服されることは有意義で、少人数ながら優秀な選手が加われば全体のレベルアップにつながる。5年間は実験的に実施して結果を見るそうだが、続けて欲しい」各部への取材で面白い反応が掲載されている。体育局の窪田登局長は「歓迎するが体育局への相談はない。学部が独自に決めたことだ」とコメント。競走部の中村清監督が「たった16人で文武両道の選手がとれるというのかね。高校時代の成績はあてにならない。家庭教師をつけ

たり、予備校に通わせたり入部させるのに苦労している。一人はもらえるだろうが……」と語る一方で、ラグビー部の植山信幸監督は「僕は監督が1年だけなので何も思いません。早稲田は昔から無名の人が入ってきて有名になっていく。本城（和彦）君なんて実力で入ってきているから立派じゃないですか」と困惑の様子。野球部の宮崎康之監督は「具体的ではないので動きが取れない。野球部では2、3人は欲しいな。野球部が強ければ学校全体が盛り上がる。全国には早稲田の野球に惚れるヤツがなんぼでもおる」と言っている。他の競技からは「16人から回ってこないでしょう」「無名校の選手のほうが強く大学で伸びる選手も多い。基準には問題が多すぎる」など、ついには「うちには関係ないですよ」という声も出た。

慶大の入試事情について、ライバル紙「慶応スポーツ」の協力によって紹介されている。2年前から法学部で18パーセントを推薦枠としている。その中にスポーツ選手も含まれ、2年間で70人弱が運動能力を評価されて入学した。野球部の上田和明（85年卒・八幡浜高、巨人）などが活躍した。ただ高校の指定校推薦であるため、全国レベルの選手は多くはなかった。

この年の特選導入については、7月22日に行われる総長選挙との関わりがあったのだろうか。スポーツ紙としては珍しく、同じく「7月号」に総長選挙に立候補する本明寛文学部教授への取材。特選について、本明教授の言葉を要約すると「頭がいいというだけで人間の評価は決まらない。受験のための知識を詰め込むのは偏りができる。多少、学力が低くてもいろんな面から早稲田大学の人間として採るべき。卒業できないでは困るので推薦で入った学生のフォロー」

アップも大事。チームワークという点ではスポーツは欠かせない要素。みんなが広くスポーツマインドを持てる雰囲気を作っていきたい」ということになる。

本明教授を破って総長となる西原春夫教授にも取材を申し込んだが、「選挙が終わるまではコメントをしない」と断られている。

同じページには体育局の上田雅夫教授にスポーツ科学部設置問題を聞いたインタビューもあり、100周年記念事業の一つであるスポーツ系学部新設の進捗状況を尋ねている。

「構想段階で正式には決定していない。スポーツ科学の研究者、様々な分野のスポーツ指導者を養成したい。選抜方法も目的に応じて必要な選抜になる。他大学にはない異色の学部で、特殊な学部にしたい。200億円の資金目標があるが、まだ40億円しか集まっていない。計画倒れでは大学の社会的責任人になる」と

と上田教授は語っている。

さて、この第一回特選の試験は82年12月に行われた。野球でセンバツに優勝したPL学園高の佐藤公宏、夏に準優勝だった広島商高の池本和彦、ラグビーでは高校日本代表で新田高の栗原誠治、国学院久我山高の東末吉史など有望選手も合格した。制度の恩恵に預かったのは11部。二人の合格者を得たのは5部だった。しかしその他の27競技は割り当てられなかった。相撲、柔道など、従来の実技試験では不利になっていた競技のハンディが解消されることが特徴とされていたが、実際には合格者が出なかった。

一般マスコミでもこの新入試制度は報道され、翌83年の特選枠は32名に広がった。

野球の池田高・江上光治、PL学園高の加藤正樹（元近鉄）、水泳の奥野景介（瀬戸内高、早大水泳部総監督）、サッカーの大槻克己（清水東高、清水エスパルスユース監督）などの精鋭に加え相撲、フェンシング、自転車などの個人種目でも合格者を出し、種目も21競技に広がった。

84年「1月号」、座談会形式の記事では次のような問題点を提起している。

「各部への入部の強制の有無。32人では強い早稲田につながらないし、体専の一般入試が難しくなっている。チームが弱くても主力の選手のほうが能力は高い場合もあってベスト4という基準が疑問……」

運動部への入部を強制するのかしいのか、という条件の扱いが依然として難しい。本音は各部を強くすることだろう。だが、強制されて入部してもイメージしていた環境とは違っていたら、入学そのものの意義が失われることになりかねないからだ。

翌85年入学の合格者で、その問題がクローズアップされることになる。夏の甲子園で優勝した取手二高のエース・石田文樹がいる。低迷が続く野球部の救世主と期待は大きかったが、入部してすぐ水が合わず、数ヶ月で退部、退学している。学部と部の連携が薄いために起きた事象だったか。ボクシング、アイスホッケーなど新しい競技にも合格者が出た。

そして86年は「桑田問題」である。PL学園高の桑田真澄投手が「早大受験する」と上京し

ながら、巨人のドラフト指名を受け、直前に撤回した。社会問題にまで発展した。結局、野球部は有意義な戦力補強とはいかなかった。この年、種目は26部とかなり広がったことは喜ばしい。競走部の池田克美（秋田中央高）は1年生で箱根駅伝の区間賞を獲得したし、ラグビーの清宮克幸（茨田高、サントリー監督）はご存知のとおり、選手としての活躍のみならず、指導者としても早大ラグビーを変えるほどの存在感を発揮した。他大学の付属高からも入学者が出るなど、制度が浸透し始めたといえそうだ。

86年秋の「早慶戦号」で「特選再考」の1ページ提言特集を組んでいる。教育学部長、窪田体育局長のインタビューと各部監督へのアンケートだ。回収率60パーセントのアンケートの回答の中には、「全体のレベルが上がった」「中高のスポーツ少年に夢を与える」「チームの核となる選手の確保が可能」「精神面で彼らは何かを持っている」「彼らは自覚と意地がある」「各部の現状を理解してもらって特殊性を重視した選抜をしてほしい」「人数をもっと増やしてほしい」「スポーツで最も重要な人間性を加味してほしい」などの声があった。翌87年から新設される人間科学部にスポーツ科学科が作られるため、体育学専修はこの年で募集を終えた。

87年、100周年事業の一環として人間科学部が発足した。240名の中の40名を特別選抜制で受け入れることになった。水泳のアジア大会4冠の藤原勝教（近代付高）、ラグビーの堀越正巳（熊谷工高、現立正大監督）野球の水口栄二（松山商高、近鉄など）などが入学したが、変り種としてはピストン堀口の孫、堀口昌彰が祖父から三代続けての早大ボクシング部入りと

なった。また、特筆すべきは女子で初めて4名の合格者を出したことで、中でも堀江陽子（ヨーコ・ゼッターランド、中村高）が注目された。堀江は春高バレー準優勝の原動力で、関東大学リーグ最下部の6部だった早大を在学中に2部に引き上げることになる。卒業後はアメリカ代表としてバルセロナ五輪で銅メダルを獲得した。

88年の特選入学組には世界のノルディック界を席卷したあの荻原健司、次晴兄弟（群馬長野原高）がいた。

89（平成元）年は陸上400メートルの記録ホルダー・渡辺高博（新居浜東高、バルセロナ五輪出場）、ボクシングの三谷大和（岡山県山陽高）など。女子4名を含む合計44名と人数がさらに増えた。また、この年から社会科学部で文化、芸術、スポーツなど一芸に秀でた学生の自己推薦制度を実施した。

半年で退部した大越の悲劇

1990（平成2）年入学の特選入試は一般にも注目された。89年12月の試験日当日、甲子園で準優勝した仙台育英高の大越基が受験ということで、キャンパスはマスコミで賑わった。早スポもこの時から入試の現場取材を始め、大越の「試験を終え開放された。ドラフトには興味なし。プロへは行きません」というコメントを掲載している。この大越は1年春のリーグ戦

優勝の立役者になりながら、秋には退部、中退と極端な浮き沈みを見せた。しかし、大越以外でもこの年は野球の仁志敏久（常総学院高、日本生命、巨人など）、水泳でバルセロナ五輪に出場する糸井統（岐阜商高）、ラグビーの増保輝則（城北高、神戸製鋼）、陸上の櫛部静二（宇部鴻城高、現城西大監督）武井隆次（国学院久我山高、エスビー食品監督など）、花田勝彦（彦根東高、上武大駅伝部監督）の3羽ガラスなど、後に活躍した選手が多かった。

91年、大越が退部した野球部には受験者がゼロだった。ソウル五輪に出場した女子体操の真田マキ子（二階堂高）が合格。ジュニア時代からすでに「ジュンジュン」の愛称で人気者だったフィギュアの八木沼純子が教育学部に合格したことも話題になった。

翌92年は定員が50人になり、競走部の渡辺康幸（市立船橋高、エスビー食品、早大駅伝監督）、サッカーのバルセロナ五輪予選代表になった上野良治（武南高、その後中退、横浜マリノス）。この年から社会科学部に加え、教育学部の「一芸自己推薦」の合格者もわかる範囲で早スポ紙面で発表するようになった。

93年の主な入学者は、甲子園に四季連続で出場した帝京高エースの三澤興一（巨人など）、バルセロナ五輪に出場したバタフライの漢人陽子（現姓藤本・浜松商高）などだったが、あるバルセロナ五輪代表候補が不合格になったことが問題になった。

「早慶ラグビー号」でこれらについて紙面で疑問を投げかけている。「特選の『強化スポーツ』の指定ではない部がある」「女子枠の限定」「推薦でありながら教育・社会学の自己推薦と併願が

可能なのはなぜか」など。質問状を人間科学部事務所に提出したが「答えられない」という回答だったという。「かなりの競技歴を持つものが落ちたり、面接で『勉学より部活優先』と答えると落ちるらしい、など学力重視の傾向のようだ」と結んでいる。

この質問状について、人間科学部の宮内孝知教授（現早スポ会長）が93年「1月号」でインタビューに答えている。

「特選は体育局の戦力補強のためではなく、学部生として相応しい人材を選抜している。指定スポーツがあり空手、ゴルフは含まれない。指定スポーツは人間科学部で技術的、理論的に指導できる競技であり、高体連が存在し全国大会が行われている。女子の合格で各部でも目覚ましい活躍が認められるが、女子枠については今後、改善すべき」

同じく「1月号」では教育学部の自己推薦について、教育学部の教務主任、津本信博教授に話を聞いている。この年はフェンシング女子の田中奈々絵（松戸高、アトランタ五輪に出場）などスポーツ系は22人が合格した。

「一般入試では評価されない能力を持った多様な学生を受け入れ、学部の活性化を図る。早稲田を志願しても学力が2番なら、指定校推薦では高校は推薦しない。一般入試でも氏名は公表しないものを（自己推薦だけ）公表するのはおかしい」

と津本教授は語っている。

1号前の「早明ラグビー号」では社会科学部の自己推薦について詳細な検証記事を掲載して

いる。全国自己推薦という名称どおり全国から募るのが原則で、各県から1名を選拔し面接も県別。評定が4・5以上と高い設定なのは定時制、高専、職業科からも受け入れるためで、進学校でなくても3年間の真摯な勉強態度が評価の対象となるという。「スポーツ選手を取るための制度ではないので」という学部側のコメントを紹介し、運動部のない女子ソフト選手の合格を伝えている。

94年入学からは人科特選、教育学部と社会科学部部の自己推薦の試験日が同じ11月7日に統一され、併願ができなくなった。この年、教育学部の自己推薦で黒鳥文絵（薬園台高、水泳個人メドレーでユニバーシアード福岡大会2冠、アトラント五輪出場）が合格した。95年はフィギュアスケートで3回五輪に出場する井上怜奈（渋谷教育学園幕張高）、ゴルフの中島真弓（東京学館浦安高）が教育学部に合格した。

自己推薦の入学者は剣道、柔道、卓球、バドミントンなど個人競技が目立ち、特選のほうにチームスポーツの合格者が多い傾向にある。また自己推薦は女子選手が半分近くを占めることも特徴的だ。96年の人科特選で野球の藤井秀悟（今治西高、現日本ハム）、97年の教育自己推薦では中学時代のバルセロナから3大会連続で五輪出場する水泳背泳ぎの稲田法子（市船橋高）が合格している。

「スカウト制度」で何が変わったか

1999（平成11）年からはスポーツ科学部のスポーツ推薦入試、通称「スカウト制度」が始まる。各運動部が有能な高校生を学部推薦できる制度だ。例えば野球でいえば、捕手ばかりが合格して投手が落ちるという「不備」がなくなる。チームの強化が計画的にできるようになったといえる。

初年度には野球部の鳥谷敬（聖望学園高、現阪神）、ラグビーの大田尾竜彦（佐賀工高・現ヤマハ発動機）などが入学し、その活躍は枚挙にいとまがない。またそれと別枠で同時にスポーツ科学部では自己推薦試験も導入。2000年代後半ではスカウト制度が80人前後、偏りがなく各部に渡って合格者を出している。

また政経学部、国際教養学部では若干のAO入試もある。

2006（平成18）年入学組からは、スポーツ科学部ではトップアスリート推薦が導入された。「オリンピックなど国際大会で活躍できるアスリートを求めている」と要綱にはある。水泳部の古賀淳也（春日部共栄高）、卓球の福原愛（青森山田高）がそれであるが、合格者の中にはテニス選手のように大学のリーグ戦に出場できない選手も含まれる場合もある。

過去にはいろいろな問題点も指摘されてきたが、ほぼ整備された制度といえるのではないだろうか。他の大学では一つの部で十数人が推薦できるか、あるいは意思を示せば合格することもある。可能な看板の部もある。しかし、一方では一般入試で入学した選手が努力してレギュラーで

活躍してほしい、という思いがあるのも事実。ファンはそういう早稲田を見守って来ているのである。

【コラム③】「桑田 早大進学」のスクープ!?

1985（昭和60）年「9月号」3面に早スポでは語り草になっている「スクープ」が掲載される。

1面題字の横に「PL桑田独占取材！ 早大進学か」の見出し。3面の見出しは「桑田 コイコイ 9月21日 本紙が偶然接触！」。桑田真澄投手と菅井暢浩編集長が握手している写真がある。

9月21日の六大学リーグ戦、早大の初戦、東大1回戦、桑田投手がリーグ戦観戦に神宮を極秘に訪れていた。野球班はゲーム後のいつもの取材をしつつ、桑田と接触。近くの喫茶店に桑田ら一行を招き入れ独占取材に成功したのである。

夏の甲子園で優勝し進路が取りざたされ、本人は「進学志望でしかも早大が意中である」

と一般マスコミは伝えていた最中でのリーグ戦観戦だった。

当時、2年生で野球班だった清水岳志が振り返る。

「当日は東大戦ということもあり、観客はそれほど多いというわけではなかったと思います。桑田とキャプテンでショートだった松山（青学大・現オリックススコーチ）君と控えの投手だった井元（青学大）君の3人を、そのお父さんで元PLの監督をしていた井元さんが引率していました。僕らも緊張していましたが、高校生もいきなり、喫茶店に連れて来られて緊張していましたね。インタビュの声以外、私語はほとんどなかった。

菅井さんが『桑田がいる』という情報を突然、持ってきたんです。どこで観戦していたかはわかりません。記事では、球場出口で接触した、と書いていますが、『既に引率者は了解を取っているので、ゲーム後に周囲に悟られないように喫茶店に移動しよう』ということだったと思います。

当時は球場の隣、外苑前の駅寄りにボウリング場があつて、その喫茶室でした。同行したのは菅井さん、小座野さんと私です。記事にも書きましたが、ドアで仕切られた部屋をお願いしました。店員にも桑田ということを知られなくなかった記憶がある。菅井さんの態度が堂々としていましたね」

桑田への一問一答を要約すると、

「オジが早稲田の出身で小さい頃から聞かされていて、PLから早稲田へ行きたいと思っ

ていた。最初から早稲田一本で法政、同志社などは考えていない。大学でもピッチャーをやりたい。勉学は自信はないけれども……。今日は7回から観ましたが、技術ということより雰囲気を観たかった。応援を楽しみました。観客が少なかったですね」

清水は桑田の入学を確信した、と書いている。

この日の観戦をつかんだのは早スポだけで、その他のスポーツ紙は接触できず、コメントも取れていないし写真も取れていない。『日刊スポーツ』だけがベタ記事を載せていただけだった、と清水は記憶している。発行は数日遅れたが学生新聞がプロを出し抜いた記事になったわけである。

実はその日、最初に桑田を発見したのは『日刊スポーツ』整理部勤務の児玉恵司（82年卒）だった。児玉は当日、深夜勤務だったため個人的に神宮でゲームを観戦していて、偶然に桑田を見つけたのである。それをまず、早スポカメラマンの小座野容斉（87念卒）に耳打ちした。おそらく小座野は球場内を移動して写真を撮っていたため、児玉は伝えやすかったのではなかろうか。

児玉はその後、早スポの現役部員が桑田のインタビューを取っているとは知らずに、会社に上がった。同じ頃、神宮の取材から引き揚げてきたアマチュア野球担当が、「桑田が来ていたらしい。どうやら『早稲田スポーツ』が接触したらしい」と日刊の編集局では騒

ぎになっていた。

兎玉は上司から「OBだろ。早スポの現役に聞いてくれないか」と頼まれる。

「桑田の写真を貸してくれ。日刊でも使いたい」

写真を貸してもらえらるだろう、と思つて菅井に電話をした兎玉だったが、

「桑田側とうちだけの新聞に載せると約束していますから」

と、菅井の答えは「ノー」だった。

唯一、現場フィルムを持っていた小座野は菅井の指示でこの日の夜、逃げ続けることになる。

「なぜ、自分のところの日刊のアマチュア担当に伝えなかったのか……。たまたま小座野が近くを通ったから何気なく耳打ちしただけ。会社的には大きなニュース、スクープを逃したことになる。今となっては、そういう意味での引け目は感じる」

と兎玉は回想している。しかし、兎玉は上司に「彼ら現役が独自で見つけてインタビューを取ったから、フィルムは貸すことはできない、といわれました」と報告をしている。先輩の温かい親心があのスクープにはあつたのである。

さて、早スポの記事は桑田へのこんな配慮を見せている。「桑田君は進路を決定したわけではないので、進学かプロ入りかの選択に関して、質問を避けた。菅井は早稲田の印象

を聞くことに留めた」と記事は伝えている。

この特ダネで当時の早スポ部員は、スクープをものにした時の高揚感に浸ったのではないだろうか。しかも時の人・桑田の進路に関わることである。

しかし、まさかこれが幻のスクープになるとは思いもよらなかった。早スポ部員は桑田の早大入学を疑わなかった。当時の「特選入試に願書を出せば、合格すると路線は敷かれている」と信じていた。

しかし桑田はそれから2ヵ月後、ドラフトで巨人の1位指名を受け、入団することになる。11月20日にドラフト指名があり、桑田は23日に願書提出のため上京した。ところが開かれた記者会見は早大断念の意思表示明だった。

「どんでん返しに飯田監督の表情は冴えない。佐野マネジャーは仕方ないと話した」

こんな話が「早明ラグビー号」に載っている。数日間の桑田狂騒曲はこうして幕を下ろす。密約説や清原との確執などその後も話題に上ることも多い。PLから早大野球部への入部者はこれ以降、今に至るまで出ていない。

当時の野球部・飯田修監督は桑田に二度会ったという。最初は、大阪だった。

その時桑田は「受ければ、絶対入れるんですか」と聞いてきた。

飯田は、「早大は、そういうことはできない。推薦選手が4、5人いたら、二人くらいは

入るよ。まあ、しっかり勉強してください」としかいえなかった。しかし、桑田は、受ければ入るといふ保証はないのかと、しきりに聞いてきた。

11月、桑田から、受験のために東京に行くという連絡があった。しかし、宿泊先は教えてくれなかった。そして、「会いたい」という電話があったので、受験の相談だと思って会ったところ、巨人に行きたいという話だった。

「4年間、早稲田に行ってもいいけれど、4年後に巨人が1位指名してくれる保証はない」というのが、桑田の巨人入りの理由だった。桑田が、「試験、受けたほうがいいなら、受けますよ」いったので、飯田は「そんなことしたら、騒ぎはもっと大きくなるから、やめなさい」とたしなめた。

桑田は周りにどんな迷惑をかけているのか理解せず、同行してきたPLの野球部長のほうが悪く思っているようだった。さらに、桑田は、記者会見をしたいので、場所を用意してほしいといってきた。飯田は、早大側がプロ入り宣言の記者会見場を提供するのは、理不尽だと思いつつも、日本鋼管高輪クラブの一室を確保し、金屏風を用意させた。

これには、後日談がある。日本鋼管から巨人に入った選手の結婚式があった。その時、王貞治監督（当時）は、わざわざ飯田の席に来て、「その節は、ご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした。私も、突然トップのほうから桑田指名といわれて、初めて知った

のです。こんなことは二度といたしません」と丁重な謝罪をしたという。

桑田からの謝罪は特にならない。2009（平成21）年4月、桑田が早稲田大学大学院に入った後、野球関係者の間では、「何もなかったかのように早大に来るのはどうなんだろうね」という感想も出ているようだ。

【コラム④】 所沢新キャンパス誕生

1987（昭和62）年、人間科学部が新設され、各運動部の環境も大変革のスタートを切った。この年の「新歓号」の見出しは「新生早稲田スポーツ元年」。特集の「スポーツ万華鏡」では、人間科学部が新設された所沢キャンパスのレポートを掲載している。半年後の87年秋「早慶戦号」には「所沢探訪」特集ページがある。

西武線小手指駅からの通学バスにはキャッシュではなく特別の乗車券が必要なこと、綺麗で広い生協食堂、700人が一度に講義を受けられる映画館のような大ホールがあるなど、西早稲田では考えられない新キャンパス事情が綴られていた。野球場の写真も掲載され、「安部球場からいずれはここにバトンタッチ」というキャプションがついている。安

部球場が閉鎖されることになり、野球部のグラウンドは当初、東伏見に移転し、その後、所沢に再移転する計画だった。後にこの計画が変更され、東伏見の野球場をそのまま使用することになったため、このキャプションは結果的に「誤報」となった。

11月22日、その安部球場最後の「送別試合」として、全早慶戦が行われた。早スポは「さよなら安部球場号」と題した通巻「210号」を発行。編集長の熊田明裕（89年教卒）が年間を通して追いつけた安部球場モノの集大成だった。熊田は「悩んだ時はスタンドでボールとしていると、広々とした視界と頬に当たる風で冷静になれたものでした。東京にある私の故郷でした」と安部球場の思い出を綴った。

「球場のおかげで周囲の町並みは延焼を避けられたという戦時中。付近の住人は球場に手を合わせた、という。ところが最近『声がうるさい、ボールが飛んできて危ない』と苦情も増えていた。これも心の欠如、世の流れなのか」

と都会の中のスポーツ環境の厳しさを本文では指摘している。実は、前年秋の「早慶戦号」でも、野球企画ページに「さよなら安部球場」特集を組んでいた。もちろん、面担は熊田。この時点で安部球場は翌年中に移転することがほぼ決定していた。前述したように、この時の報道では「3年間で東伏見、そこから所沢に移る」と当初の計画を伝えている。野球部OB会である稲門倶楽部は、大学側に再考を求め折衝中だった。地元の商店街や住人に

も取材をしていて、惜別の念がこめられた好企画だった。

92（平成4）年秋の「早慶戦号」に新安部寮の特集記事が掲載されている。練習グラウンドの移転に伴い、野球部の寮も移転する予定だったが、移転予定地から遺跡が見つかり、発掘作業を行った。このため建設が遅れていたが、ようやくこの7月に完成し、移転した。

この記事によれば、収容人員31名。入寮者はレギュラー優先で、監督が決定する。寮費は3食付きで1ヵ月6万5000円。テレビやビデオも置かれ、ミーティングなどに使用するホール、食堂、畳敷きで飛田穂洲氏ゆかりの品が置かれる娯楽室、洗濯室、浴室などの共用部分がある。食事作り寮生の世話をする管理人の成田夫妻の紹介もしている。

個室は2、3階部分に一人部屋が31室。6畳で冷暖房完備。一人一部屋制は、初代野球部長の安部磯雄が1905（明治38）年に渡米した際にアメリカの制度を見聞して取り入れたもの。個人の時間は個人で自由に使う、というのが旧安部寮時代からの伝統なのだそう。

西早稲田にあった旧安部寮は25（大正14）年に建てられ、当時としては画期的な鉄筋コンクリート造りだった。49（昭和24）年に「学生野球の父」とも呼ばれた安部磯雄が亡くなった際に、その功績を称えて、野球部合宿所から「安部寮」へと名称を変更した。戸塚球場と呼ばれていた練習グラウンドも、この時期に「安部球場」に改称された。旧安部寮

も安部球場も半世紀以上にわたって野球部の歴史を見てきたわけである。

93（平成5）年11月27日、東伏見に「スポーツホール」が完成し竣工式が行われた。キャンパス整備計画の一環で、総工費17億円。地上3階、地下1階。各部の練習や体育実技で使われる。

1階のアリーナはバスケットやバレーコートに対応し、普段はハンドボール部が練習で使用する。地下1階の弓道場には人工芝が敷かれ、国内最高の施設、といわれた。同じく地下の相撲場は大型トイレ、ちゃんこ用キッチンも完備している。2、3階は射撃場。他にトレーニング室が3つあり、最新の科学トレーニングができるマシンが並ぶ。各部が小規模で独自に行ってきたトレーニングを集中、充実させて行えるようになった。ここは一般学生も無料で使用できる。

しかし、弓道部などは早稲田のキャンパスからの通いになるため、それまで講義の合間にも早稲田周辺の弓道場に通っていた練習ができなくなると、マイナス効果を心配する声もあった。各運動部にもいろいろな事情があったようだ。

2002（平成14）年には、ラグビー部のグラウンドが東伏見から上井草に移転する。「東伏見」は早稲田ラグビーの聖地と呼ばれたほど、ラグビー部にとっては象徴的な場所だった。グラウンド横には鉄パイプと板のスタンド。土のグラウンドに立ちこめる砂埃の中か

ら数多の有名選手が育ち、伝統を育んできた、まさに聖地だった。ラグビー部の事情とはいえ、今なお移転を惜しむ声は多い。

上井草では銀行が所有していたグラウンド跡地を買い上げて、早稲田のラグビータウンを築いた。天然芝のグラウンドが1面、人工芝グラウンド、スクラム練習用のスペースもある。ウエートトレーニング室にはスポーツクラブ並みのマシンが揃っている。さらに瀟洒な寮も併設されて、40人余りが合宿生活を送っている。

ラグビーグラウンドの移転がきっかけで、早大と移転先の杉並区はスポーツを通じた協同連携に関する覚書を交わすことになり、以後はスポーツ振興など地元との協調を図っている。また、元のラグビー場には人工芝が敷かれて、ホッケー部のグラウンドとして使用されることになった。隣のサッカー場も、06年に人工芝仕様となり、公式戦を行うようになった。

第6章 平成の時代——早スポ拡大期

平成に入って早スポは拡大期を迎える。紙面のカラー化はもちろん、編集部への取材方法などに「挑戦する伝統」が生まれたといっている。

カラー化は「上の代が何回やったから、今年は何回やりたい」と編集長のプライドから増え、通常号の発行も年を重ねるごとに増える。号外もまた増えていく。担当する部だけではなく年代ごとに早スポの中でも競争が行われていた。各編集長の証言を元に紙面を再現する。

カラー化と号外への挑戦

1989年、年号は平成に変わった。4月1日からは前年末に公布された消費税法が施行され、あらゆる消費に対して3%の消費税が課せられることになった。そんな世知辛い年でもあったが、世は年号とともに新しい時代に突入していた。早大体育局でもアーチェリーとソフトボールが部に昇格して41部でスタートしている。この後、日本拳法部は91年に体育局の仲間入りを果たす。

この年の編集長、鈴木一成（91年法卒・水戸一高）の試みは3面左肩に4コマ漫画の連載を始めることだった。題して「わしえだ君」。「新聞なんだから4コマ漫画は定番」と原田順夫

(91年法卒)が提案して、自ら漫画も書いた。しかし、読者の反応が鈍く、この年のみで休載。代わりに、スポーツ紙にならって欄外に一行情報を載せた。

野球部の石井連蔵監督の挑戦は大沢明(90年教卒・熊谷西高)外野手を4年になってから投手にコンバートすること。大沢は「春野球」の主役になって1面を飾る。主将の小宮山悟(90年教卒)の不調をカバーし、法大から13季ぶりの勝ち点を挙げることに貢献した。しかし、優勝は法大。この年の4月に明大の「御大」島岡吉郎監督が77歳で亡くなった。ちなみに、平成の時代になってから、春と秋の「早慶戦号」を次第にそれぞれ「春野球」、「秋野球」と呼ぶようになった。

創刊30周年を記念する特別企画もスタートした。

「7月号」は「相撲部の井上が東日本で優勝」の1面。43年ぶりの快挙だった。この時、前編集長・上田守英(90年一文卒・早大本庄高)が相撲部の一員として集合写真に写り込んでいる。

「秋野球」の1面は副将で5番ファーストの芦川敦彦(90年教卒・旭川北高)。主将の小宮山悟は4年生では1面にならなかった。選手紹介面は2面ぶち抜き、神宮球場全体の写真を背景にあしらった。この構成は1年生で担当だった庄子真憲(93年政経卒・仙台二高)と秋葉俊二(93年社会学卒・越谷北高、扶桑社『SPA!』編集部)が上級生に提案した。小宮山は早慶戦で2勝を挙げたが、大森剛(90年卒)との対決は当時「早慶戦の華」とよばれたほどの名勝負だった(3年秋の早慶戦でベンチに大森敬遠を指示された小宮山が涙した、という逸話もある)。

小宮山はロツテからの指名を受け、早大からは8年ぶりのドラフト入団。ドラフト指名されての早大選手のプロ入りは89年までで16人。

11月11日、30周年の記念式典は市ヶ谷の「アルカディア市ヶ谷」で行われた。30周年の記念事業として早スポでは初めて縮刷版を作成。実行委員の堤哲（64年卒）が中心となり、編集作業は制作委員会のメンバーで上田守英（90年卒）、溝口勝之（91年卒）、杉村康之（93年理工卒・海城高）があたった。縮刷版に掲載されたのは1号から220号までで（一部欠落あり）、全1046ページ。発行日は90年8月20日である。

「早慶ラグビー号」では創刊30周年の記念特集。通常の4ページより増やして6ページの構成だった。ラグビーは佐藤秀幸監督の2季目。キャプテンは清宮克幸（90年教卒）である。「早慶ラグビー号」の選手紹介ページの「清宮欄」が彼の性格をよく表している。

「150人もの部員を引っ張っていく上で大切にしているものは『一切なし』。主将になって変わったことも『全くなし』。今回の敵・慶応に関しては『あいづら嫌いだ』とのこと」

アンケートを元に書いている記事だが、本人の声が聞こえてくるようだ。89年度、平成元年のリーダーだが、体專最後の世代で麻雀とパチンコが好き。将来の理論家の学生時代は、筋の通った無頼派だった。清宮の父親は熱心な早スポ定期購読者だったことを付け加えておく。

この年、早明戦には勝利したが、日体大に残り1分、1点差で逆転負けしていたため、対抗戦は2位。大学選手権決勝はその日体大が相手。7トライを奪い、45―14と圧勝した。45点は

選手権史上最多得点。2年前、10年ぶりの日本一となってそのままグラウンドで「荒ぶる」を歌った時とは喜び方が違っていた。

「スタンドの人影がまばらになる頃、ロッカールームから泣き声も混じった勝利の『荒ぶる』が聞こえてきた」（1月号）

しかし、日本選手権は平尾誠二、大八木淳史らのいた最強軍団、神戸製鋼になすすべもなく大敗している。フッカーの森島弘光（90年卒・早実高）、ロックの後藤禎和（90年社学卒・日比谷高）、SOの前田夏洋（90年卒・修猷館高）は後の清宮監督時代を、コーチとして支えることになる。

新時代というと、早スポでは女性カメラマンも多く生まれた。野球を沖元（現姓上村）陽子（91年一文卒・女子学院高）、ラグビーを河崎美穂（91年卒）と二人の女性が撮っていた。「グラウンドに降りられるのは男性のみ」というお達しがラグビー協会からあったというが、これは差別というより、秩父宮ラグビー場では選手が裸でロッカー周辺を出歩くので「女性は好ましくない」という配慮があったというのが真相のようだ。河崎は髪を普段よりもショートカットにし、帽子をかぶりグラウンドに降った。沖元は卒業後もサンケイスポーツ写真部でカメラマンとして活躍した。

1990（平成2）年は中居英一（92年卒）が早スポ初の「優勝号外」に挑んだ。まず「新歓号」はアイスホッケー。3年生の榊川浩司（92年人科卒・苫小牧東高）荒沢義寛（92年人科

卒・駒大苫小牧高、小堀恭之（92年人科卒・駒大苫小牧高）の「3銃士」が1面だった。スケート担当の中居の肝いりだ。「オーソドックスに野球などの1面にするべきではないか」という反対意見を退けての中居の挑戦だった。アイスホッケーは4月22日、関東大学選手権で宿敵明大を破って念願の優勝を果たす。1年後の「1月号」でもアイスホッケーがインカレで23年ぶりに優勝し、大きく取り上げられた。

この年、初めて「新歓号」から独立させた「早慶レガッタ号」はレース当日、配布の便を考えて2ページ立てにして発行した。

野球は8年ぶりの優勝を目前にした春の早慶戦。優勝すれば15季ぶり30回目となる。主将は水口栄二。鎌倉高出身の市島徹（91年教卒）はオール完投の6勝を上げていた。そして4月29日の明大戦、鳴り物入りの特選で入学したルーキーの大越基が初登板する。前年夏の甲子園で準優勝した仙台育英高のエースは、174球で初登板初完投の快挙を成し遂げた。

野球企画ではその優勝のなかった8年間をOBの安部嘉弘、江上光治に思いを語ってもらい、ご意見番・広岡達朗（54年教卒・呉三津田高、巨人、ヤクルト、西武）のインタビューでプレイバック。近年では破格の14ページ構成だった。なお、芸能面はなかった。

早慶戦は1勝1敗で3回戦に。3―3で迎えた7回表、慶大は1死満塁のチャンス。ここで市島から大越にスイッチする。

大越には早くからマスコミなどの注目度が高かった。しかし、入学当初から、練習に來ない

こともあった。本人からは「イジメではない」という煮え切らない言葉を聞いた早スポ記者もいた。石井監督も、「第1戦（の先発）は市島」と明言したが、第2戦の先発を問われると言葉を濁したという場面もあった。大越が野球部の体質に溶け込んでいなかったことを、取材を通して野球班は感じていた。この場面での投手交代に「市島が打たれるのなら納得するが、大越で打たれたら後でどうなるのか」と4年生の溝口は心配しながら戦況を見守っていた。

大越は次打者を併殺打に打ち取って、雄叫びを上げた。その裏、上杉健（91年教卒・松本深志高）、斎藤慎太郎（91年社学卒・秀明高）の連続2塁打で勝ち越し。追加点を挙げた早大が6―3で勝って優勝した。慶大最後の打者がアウトになり、大越はグラブを放り上げた。

中居はその瞬間、じつくり感慨に浸る間もなく、カメラマンの野口秀樹（93年一文卒・都新宿高）からフィルムを受け取り、外苑前駅に走った。「優勝記念号外」を制作するため、印刷所の日刊スポーツに急いだのだ。優勝号外は早スポの歴史始まって以来のこと。日刊スポーツ工程部の「奥村さん」（この方には代々、世話になった）に事前に相談し、レイアウト、見出し、予定稿は入れておいた。あとは戦評、選手の声などだけを入れる手はずになっていた。ラグビー班は優勝パレードに参加したが、神宮に残った野球担当の青野良生（92年卒）が現場を仕切った。すぐに写真を決めて、広告なし、紙面の半分を記事で埋めるという力技の紙面ができあがった。なお、この号外の「編集人」欄にはなぜか2年前の編集長「上田守英」の名前が……。

祝勝会は当時の体育局前のグラウンド（現学生会館）で。体育局のテラスに野球部の選手た

ちが現れて、水口主将らが挨拶をした。2回目の挨拶の時に号外が届いて配ると、瞬く間になくなった。グラウンドに祝杯のビールが染み込んでいて、翌日になっても部室には心地良い(?)アルコールの匂いが漂っていた。

この早慶戦決戦は12年ぶり11度目となつて、試合前から大いに盛り上がっていた。試合前の学内販売の様子をスポーツ紙に取材され、『スポーツニッポン』は3連戦の間、現役部員の観戦記を掲載してくれた。『日刊ゲンダイ』は早慶対決企画の原稿執筆を1ページ9万円で依頼してきた。また、号外を手にする写真を写真週刊誌が掲載した。

「春野球号」で異彩を放っているのが「実録体育実技」という記事。荻野嘉彦(93年政経卒・葦山高)の渾身の企画。ロスとソウルの両五輪で銀メダリストとなった太田章(81年教卒・秋田商高)助教授による女子レスリングの実技は衝撃的だった。カリスマ性を発揮する一方で女子学生を笑わせるチャーミングな面があり「大きな目標を持ってこつこつやっていく、それがロマンであり楽しさでもある」と言われ、夢の大切さを知らされた。

秋の六大学リーグ戦は早々に優勝争いから脱落。春の立役者だった大越が退部したという噂が、早くから流れていた。前年秋に23年ぶりの優勝を果たした立大が、この秋も優勝。

中居の次なる挑戦は、またしても早スポ初となるカラー印刷。一般のスポーツ紙ではカラー刷りが出始めていて、「早スポもカラー印刷をやりたい」とこの1、2年の代で考え始めていた。早明戦も4年ぶりの全勝対決。早大・堀越正巳と明大・吉田義人(秋田工高)のキャプテン対

決も注目され、カラー印刷に挑むには絶好のチャンスだった。製作費は約15万円のプラスになる。しかし、時はバブルの真っ只中。「ラグビーに力を入れて報道していたサンスポも広告掲載の食いつきが良い」と中居は業務から報告を受けた。

当時のカラー印刷は降版を一日ほど早める必要があった。入稿もその分早い。また、テスト刷りも何回も出すわけにもいかず、色の具合などで文句をいえる状況ではなかった。

本番の早明戦は白熱した。明大リードの後半38分に郷田正（91年人科卒・筑紫丘高、九州電力監督）のトライで6点差と詰め寄る。そして、明大のキックオフを今泉清がキャッチし、ノーホイッスル&80^{メートル}の独走トライを決めた。守屋泰宏（92年政経卒・早大学院高）のコンバートも成功して追いつく。24―24、奇跡の同スコアだった。

全国選手権は再び明大との決戦。後半の26分、今泉、増保輝則らのタックルを交わした明大・吉田が逆転トライを決めて、早大の2連覇はならなかった。

箱根駅伝では、早大競走部に瀬古利彦コーチの就任、武井隆次、櫛部静二、花田勝彦のスーパーキーの加入があつて、優勝争いもと期待された。しかし、武井は1区区間新でトップになったが、2区の櫛部がよもやのブレーキ。意識朦朧とする中、歩き続ける姿は衝撃的だった。櫛は繋いだものの、後続もそのまま波に乗れず、総合10位でシード権を逃した。

1991（平成3）年、3月25日発行の「卒業記念号」を新年度メンバーの第1号としてこの年から号外として発行した。堀江陽子、堀越正巳ら人間科学部1期生が初めて卒業する年で、

この「英断」は庄子真憲編集長が下した。庄子らの代は平成元年入学で部員も多く同期が17名、うち女子が9名と男子を上回った。

取材でカバーする運動部が増えたことで、この代から「野球かラグビーのどちらかの担当につく」という部内の了解事項がなくなる。人間科学部の富井（現姓桐越）玲子（93年卒・杉並高）の発案だった。所沢の部員は本部キャンパスで行う毎昼のミーティングに出られないという物理的な問題も出てきた。3年生以下7人の所沢組。富井は人科代表という役職になる。

「4月1日号」の1面は荻原健司と河野孝典（91年教卒・飯山南高）のスキー複合。ユニバーシアード札幌大会での1、2位のコンビだ。荻原は前回のソフィア大会に続く2連覇だった。インカレにも優勝し、無敵だった。もちろん、その後の五輪での活躍はご存知のとおり。アイスホッケーも早大勢は6人が五輪代表に選ばれた。

野球は前年秋に続いて慶大の優勝を阻止する役回り。ルーキーの織田淳哉（95年社学卒・日向高）が「オリタボール」で5勝と獅子奮迅の活躍。織田の1面で2回目のカラー化。

庄子編集長、主務の秋葉俊二など、新聞社でアルバイトをする部員も多く、プロの新聞作りに接するにつけ、「去年、中居さんに先を越されたが、カラー紙面を増やせないか」という思いを強くしていた。ちなみに当時の部数は「早明ラグビー号」が2万部、「早慶戦号」が1万2000部、その他の号が5000部だった。

夏の合宿で「メジャーな競技だけでなく、マイナースポーツも取り上げて早スポらしいオ

リジナリティを出そう」と議論になった。「9月号」ではインカレと全日本学生を制した自転車の松村健（95年社会学卒・岐阜工高）がトップ記事。森木（現姓庄子）則子（93年二文卒・国学院久我山高）が推したソフトボールの東日本インカレ3位は裏1面。自動車部もジムカーナと呼ばれる全日本学生選手権で団体優勝した。マイナー競技の躍進が目立つ夏だった。

「秋野球」は慶応が連勝して19年ぶりの春秋連覇。エースは小松山雅仁（92年卒・桐蔭学園高、日本石油、横浜）、主将は捕手の大久保秀昭（92年卒・桐蔭学園高、日本石油、近鉄）だった。早大は4位、主将は川原潤一（92年人科卒・常総学院高）。3年生の鈴木浩文（93年社会学卒・関東一高）が首位打者を獲得したと、織田が好調を持続したことが今後への期待を抱かせた。

ラグビーは早明の全勝対決。加藤（現姓小西）綾（93年人科卒）と森木は国学院久我山高の同級生。2年上にラグビー部のスター選手だった吉雄潤（92年人科卒、サントリー）がいた。吉雄の取材ができれば、という思いと、二人とも自宅が東伏見に近く高校時代からラグビーの練習を見に通っていたという縁もあった。「早明ラグビー号」は相良南海夫（92年政経卒・早大学院高）主将と増保で1面と最終面の見開き両カラー紙面。二人三脚の初めての挑戦だった。結局、明大の主将・小村淳（後神戸製鋼）らFWのパワーあふれるプレーに圧倒され、早大は2位。全国大学選手権は決勝で新興の大東大に完敗だった。2年生の増保は宿沢ジャパンのメンバーに選ばれ、第2回ワールドカップでトライを上げた。

箱根駅伝は武井隆次が1区で再び区間賞。櫛部静二が前年の雪辱を期したが2区で9位。山登り5区で中富肇（92年社学卒・県柏高）が2位と好走し、往路で2位となった。復路は9区の豊福知徳（93年人科卒・福岡大豪高）が区間賞を取るなど粘って総合6位とシード権を獲得した。優勝は出場6度目の山梨学院大だった。

カメラマンの野口秀樹（93年一文卒・都新宿高）はスポーツに適應する300^ミのレンズを30万円で買った。本格的なスポーツ写真への挑戦である。

カリスマ編集長登場

「アルベールビル五輪 萩原が複合で優勝」。この胸躍る「4月号」で1992（平成4）年度は幕を明ける。萩原健司が日の丸を持ってゴールするカラー写真は、新聞各紙も掲載した外信モノ。編集長の高橋俊博（94年社学卒・相模原高）が日刊スポーツの児玉恵司（82年卒）に相談すると、日刊スポーツも朝日新聞から借りたという。その写真を児玉は無償で借りてくれた。ちなみに表彰式のシャンパンファイトで萩原にシャンパンを手渡したのは、ミズノ社員としてアルベールビルに出張していた堀美奈子（85年卒・現姓織田）である。

高橋もカラー印刷を増やしたいと意気込んでいた。1ページの製作費が約8万円。全3段の広告費でそれがトントンになるという時代だった。この頃は、カラーで1面を作るのにプラス

20万円ほどかかった。全5段の広告でも赤字になる。高橋は「前の年より多く出したい。挑戦の継続が新しい伝統を作っていくことになる」と「4月号」のほか、「春・秋野球」「9月号」「早明ラグビー」と計5回のカラー版を出した。

カラー印刷を増やすには広告を取るしかない。業務の芝沼美和（94年一文卒・新潟明訓高）はOB回りに奔走した。高橋が「必要もなく闇雲にカラーにしてみました」と反省する（?）「9月号」に「新日本プロレス」の全5段広告が取れた。「芝ちゃん、びっくりした。助かったよ」とみんなに喜ばれた。それでもこの代の引退時、赤字になった。「負の遺産はよくない」と各自4万円を出し合って、合計50万円ほどの赤字を補填することになる。また、この時、一人1000円の部費も集めた。

この代はいろいろなことに挑戦した。発送用の封筒に、『後納料金』『早稲田スポーツ』のネームを入れる。これは渉外の大輪（現姓吉川）香緒子（94年一文卒・フェリス女学院高）の発案だった。紙面の欄外に、一般スポーツ紙にならって1行情報を入れることも復活し、レイアウトの担当者の名前を入れた。

「こちらは勝手に作りっぱなし、読む人はどう思っているのか」ということで「4月号」では定期購読者宛に読者アンケートを封入した。「アウトラインはどうだったか」「面白い記事は」などの質問項目だった。20通ほどの返信があったが、「文章がなっていない」という手厳しいものがあって、納得するメンバーもいた。

「高橋のカリスマ性が光った年」と証言する同期や前後の世代の部員もいる。高橋は「1学年10人ぐらいがちょうどいい。キッチリできないのなら、辞めてもいい」と下級生には言い放った。その後は主務の名越貞寛（94年政経卒・川越高）が穏やかに場を和ます。いいコンビだったし、これで1年生まで引き締まった。早スポの筋肉質的な（？）体質が保たれた態勢だった。「レガッタ号」は1面レイアウト、本文の両方を鈴木（現姓江崎）奈穂美（94年人科卒・市ヶ尾高）が担当した。

「春野球」の1面トップは「大森首位打者へ」。天理高から特選入学の1年生がいきなりの活躍で、打率5割。64年ぶりの新人の首位打者獲得となった。優勝は明大、早大は3位。「1面を飾った男たち」の企画は阪神の中村勝広（72年卒）監督。この号は通巻250号に当たり、「250人に聞きました」という特集も組んだ。

2面は広告なしで、記事の多い結果面。芝沼が割付をしたが、予定していた原稿が飛んだことが発覚。校了の前日にレイアウト変更の緊急事態になった。高橋は再び日刊スポーツの児玉の下へ相談に行く。それぞれの行数も写真の大きさも変わってくる。深夜まで作業は及んだが、児玉は後輩のため、目立たないようにこっそり手引きした。

怒られた記憶も多い。「雅子妃報道」に驚いて日刊スポーツの食堂で騒いで怒られ、工程室でテレビに夢中になっていたら、作業中の他誌の編集者に「我々は仕事だ。君たちには学生という甘えが見える」とたしなめられた。ある新聞社のハサミを無断で拝借し、返すのを怠り、

謝りに行ったこともある。

そして、ついには警察のご厄介にもなった。日刊スポーツのある築地からラグビー号の新聞を部室に運ぶ途中、柳沢良和（94年人科卒・徳島生光学園高）と中山英子（94年社学卒・松本県ヶ丘高）は「事件」を起こしてしまった。ラグビー号は部数が多いため、幌付きの軽トラツクを借りて運搬していた。銀座にさしかかり、中山が車窓から見たのは夕暮れのネオン街といった煌びやかな光景ではなく、風に吹かれて横にも前方にも舞い散る新聞紙だった。銀座四丁目辺りに路上駐車をして拾ってみると、まさしく刷り上ったばかりの我がラグビー号である。新聞の束が崩れて梱包が解け、バラバラになった新聞を撒き散らしながら走っていたのだ。交番にその旨を届けた上で、走ってきた道に戻って30分ほど汗をかきながら回収した。人目を気にする余裕などなかった。翌朝になって、銀座に差し掛かる前に落としていたと思われる3束もの新聞が警察から届けられた。ちなみに、この時の事件の主人公の一人、中山英子は卒業後、地元の信濃毎日新聞に進む。98年の長野五輪の取材でも活躍するが、その関連でスケルトンの第一人者・越和宏を取材したことで、この競技に興味を持ち始めたという。そして、なんと2002年のソルトレークシティ五輪に日本代表として出場してしまうのである（12位）。トリノ五輪にも出場した（14位）。中山は今もバンクーバーに向けて奮闘中である。ズブの素人がわずか4～5年で五輪出場とは、一つのジャパンドリームといえるだろう。スポーツ経験のある早スポ記者は多いが、早スポ経験のある五輪選手は中山ただ一人だ。

野球の早慶戦は、連勝すれば逆転優勝だったが、1勝2敗となり慶大の優勝。慶大は古葉隆明（93年卒・広島城北高）、高木大成（96年卒・桐蔭学園高、西武）らが主力だった。日刊スポーツにでも手はずを整え、号外を用意したが幻になった。

ラグビーは慶大に大勝。全勝対決で迎えた早明戦で惜敗。明大主将のS H永友洋司（93年卒・都城高、サントリー、キャノン監督）を捕まえられなかった。この年から早明戦チケットがハガキ抽選になった。正月の大学選手権は決勝で法大に逆転負け。

競走部では櫛部がやっと素質を開花させ、インカレ1万^{マイル}で山梨学院大のマヤカとの根競べを制し、初優勝。伊勢路で行われる全日本大学駅伝も現監督・渡辺康幸（96年人科卒・市船橋高）らの活躍で初優勝。

12月11日付で箱根駅伝の前モノ「12月号」を初めて発行している。「野球とラグビーがあるなら箱根があってもいい」。テレビが完全中継をするようになり、正月の風物詩として定着していた。高橋の練っていた構想で、「当日の中継所で配ろう」という試みだった。陸上担当の中山は陸連に届けると「周辺を汚さないように。ゴミは拾って帰るように」きつくいわれた。

武井、花田、櫛部の3年生トリオに、実力者の小林正幹（95年人科卒・松山高）、スーパールーキーの渡辺と揃い、早大は優勝候補の筆頭。そして8年ぶりに歓喜の優勝を成し遂げた。なんと3年生トリオはそろって区間新。渡辺もマヤカに次いで2区で2位など、期待どおりのリレーだった。この号のお陰で早明ラグビーの結果が詳細に載るようになった。

写真も担当していた中山は、「スポーツ写真に対応する300ミを使ったほうがいい」と思い、20万円するシグマのレンズをバイトをして購入、後輩に安価で置いていった。写真は撮りだめする傾向にあった中山は、近所に住んでいた柳澤良和、田中和生（94年商卒・四日市高）らをアパートに呼び、「風呂場の現像パーティー」をたびたび開催している。

1993（平成5）年は8月に細川連立政権が誕生し、与野党がひっくり返る。早スポでは、高橋によってスリム化された上野大介（95年政経卒・井草高）編集長の代。女性が9人で男性が3人という女性上位の体制になった。女性たちはいったん口を開くと歯に衣を着せず、会議は白熱した。

女子の部員数が順調に増えたため、彼女たちも原稿を書く紙面を取り合うようになる。取材は多方面にわたるようになった。水泳・糸井統（94年人科卒・岐阜商高）の記事は中野（現姓市瀬）広子（95年人科卒）が担当、自転車塩原正長（94年人科卒・松本工高）主将が全日本インカレ1000リタイムトライアルで優勝、早大勢初Vで日大の15連覇を阻止した偉業は皆瀬有里（95年二文卒・浦和一女高）が書いた。

早慶野球90周年特別企画「早慶讃歌」がスタート。第1回はコンバットマーチの作曲者、三木佑二郎氏。「早慶讃歌」はこの他に6連戦実況の土門正夫氏、新聞小説の「早慶野球戦」などにスポットを当てた。歴史発掘である。

野球部主将は伝説の仁志敏久。前年まで投手だった荒井修光（94年人科卒・我孫子高）が捕

手にコンバート。ルーキーの中村壽博（98年人科卒・西日本短大付高）は開幕からスタメン出場。センバツV投手の三沢興一（98年人科卒・帝京高）も明大戦で初登板した。4年左腕の滝口正嗣（94年人科卒・安積高）がブレーク。早慶戦でも2勝してシーズン7勝。仁志は2回戦で満塁サヨナラ本塁打。これで早慶戦3本塁打の固め打ちとなり、シーズン6本塁打は六大学最多タイ記録（当時。現在は法大・田中彰の7本）になった。リーグ戦は2位。

この年のハイライトは秋の六大学。法大に連敗し、優勝争いからいったんは脱落。キャプテンの仁志と石井監督の不仲が伝えられていた。仁志は監督を無視し、監督もついに放任した。野球班チーフの山田真琴（95年一文卒・普連土学園高）は敏感に感じ取っていた。明大戦のオーダーがこれまでとはまったく違う。選手が自主的に考えたオーダーだった。仁志には「法大に負けても望みがあった。小さな穴を見つけてそこを通れるように頑張った。思った以上にチームが一つになった」（「早慶戦号」1面）といわれた。

早慶戦に連勝で優勝というスリリングな展開。1勝1分で迎えた3回戦。1―3の劣勢から8回ついに仁志、浪岡靖之（94年人科卒・桐光学園高）のタイムリーで逆転。最終回を織田が締めた。7季ぶり31回目の優勝にはもちろん、「ワセダ ミラクルV」の号外が出た。

上野は「1敗も許されない状況で、今季も厳しいだろうな」と応援部と話しながら、号外を出せる用意をしていた。4年ぶりの挑戦である。広告は三分の一を3段分集めた流用ものになった。中居の代以来、緊急号外は出していない手探りの状態だった。

最終の月曜日、上野一人が日刊の工程室に控え、神宮と連絡を取り合う。周囲からラグビーや野球には興味がないように思われてきた主務の皆瀬有里が神宮からの連絡係を買って出た。公衆電話からの途中連絡ではリードされていたが、8回に逆転し優勝。「早稲田さん、号外確定」の電話が行程室からその他の部署に発せられて緊張感が高まった。

見出しだけは仮に入稿していたが、予定稿などはまだだ。野球担当は現場で選手の声を拾っている。全員の声を集めたのは須田（現姓半田）聡子（95年一文卒・不動岡高）、豊嶋陽子（95年一文卒・山城高）、中村（現姓松坂）円（95年二文卒・調布南高）ら3年の野球班。

トラブルに巻き込まれたのは写真だった。新宿のヨドバシカメラなら1時間ほどでサービスサイズに焼いてくれる。ネガなら自動でプリントし、引き伸ばしてくれる機械もあった。しかし、この日に限ってその機械が故障していた。一瞬、工程室が凍りつく。他の部員が電話帳から問い合わせをしてカメラ屋を探して事なきを得たが、メインの大きな写真は残念ながら、廣谷利之（95年政経卒・京都共栄学園高）らの撮った中で一番のショットではなかった。

当時はまだ、携帯電話がない。急ぎの時は家の留守電に吹き込んでもらって、それをわざわざ外の公衆電話から聞くという時代。締め切り時刻が迫っていて「写真は今、何処まで来ている」と写真を運ぶ者と日刊の工程室では緊迫した電話のやり取りが続いた末の号外だった。無事に刷り上がり、優勝祝賀会では配ることができた。上野は最後に日刊を出て、読み捨てられた号外を目にすることになるが、言葉にならない満足感でいっぱいになった。

11月7日、テニスの王座はダブルスの逆境を跳ね返して3連覇。伊藤智子（95年一文卒・目黒星美学園高）、は岐阜から帰京して、8日の野球部の優勝写真を撮った。豊嶋も京都・園部での射撃の伏射、部史上初の学生選手権優勝を7日に見終えてとんぼ返りした。

ラグビーは慶大には勝ったものの帝京大に敗戦。明大にも14―21で雪辱ならず。大学選手権も12月26日に京産大に破れ、年越しはならなかった。ナンバー8に小泉和也（96年人科卒・日川高）、WTB・増保など切り札がいただけに惜しまれる。明大の主将は元木由記雄（神戸製鋼）だった。

上の代の出費が大きく「秋野球」ではカラーを出せなかったが、廣谷と勝又（現姓清水）乙恵（95年二文卒・北海道藤女子学園高）が「カラーを出したい」と懇願して「早明ラグビー号」はカラーにした。

駅伝は津布子英和（95年商卒・沼津東高）の独壇場。1年生の時から箱根駅伝の1面を書いた。全日本を独走で勝った伊勢にも出かけたし、「縦走70年」のコラムも、「1月2日特別号外」も、「1月号」の1面も自分で書かないと気が済まなかった。櫛部、武井らが4年、渡辺が3年でV2が固いといわれただけに、山梨学院大に敗れた悔しさといった言葉にならなかった。1面タイトル「まさかの2位」は本音だろう。

ア式蹴球部は2年ぶり9回目のインカレ優勝。相馬直樹（94年人科卒・清水東高）はJリーグの鹿島アントラーズ入りした。

同期11人でアルバイトをしてキヤノンの700^ミ、三十数万円のレンズを買って、カメラの廣谷はそれを使った。年間の赤字もあったので次の代の長嶺直行（96年政経卒・宮崎西高）のためにレンズを置いていった。皇太子ご成婚（6月9日）の頃、男子も女子も周囲に実は穏やかで優しかったのだ。

「僕とワセダをつなぐもの」

定期購読者募集に藤田恭輔（96年政経卒・淳心学院高、電通）が使ったコピーである。1994（平成6）年、復活させた「卒業記念号外」の定期購読者用の広告に目が留まればという願いと、1年間この思いを抱いて書きたかった指針だ。

カラー紙面を何回出せるか。それが各代の編集長に課せられた命題のようになっていた。高橋も上野も藤田も、上の代への意地だったりプライドであったりした。

1面にサンスポの広告が入る時はカラー紙面になった。経費の問題もあり4ページの号は2色で抑えた。

「4月号」は山岳部の今後。2月22日に剣岳で死者3人を出した遭難事故から1ヵ月。存続を願う現状をリポートした。1面を何で行くか、合宿ではもめた。野球の織田が4年。でも新入生に「織田のインパクトはない」。彼らの中には荻原健司がアルペールビル五輪で優勝した

時のカラー写真を「綺麗だなあ」と感心して入部した者もいた。「インパクトのある山のカラーで行こう」となった。

この年から定期購読料が3500円に改定された。

また、この年から「体育局新人パレード号外」を発行。体育局から製作費が出た。よくいえばこちらからの言い値で、少し黒字になった。財政的な余裕が出れば他の号の穴埋めにもなるし、発行回数が増えれば下級生の勉強にもなる。翌年からは「サッカー早慶戦号」も発行することにした。

野球は東大に17季ぶりに勝ち点を献上して、屈辱のスタートになった。立大、法大に勝ったが明大に連敗。早慶戦に連勝すれば優勝だったが、逆に連敗を喫して4位だった。慶大はルーキーの高橋由伸（後巨人）がデビューした。野球はなんといってもエース、4番そして主将の織田。投手として最多の9号本塁打をマークし、登板しない日は4番一塁手としてスタメンに名を連ねた。投げては30勝に到達した。

織田が秋の開幕戦で東大に5失点KOされた。法大、明大に破れ、早慶戦には連勝したが3位。織田はシーズン3勝、通算33勝。三沢がシーズン5勝となり来季に望みをつないだ。織田は巨人に入団し石井連蔵監督は2度の優勝で勇退する。

プロ野球はオリックスのイチローが初めて200本安打を達成し、長嶋茂雄が「国民的行事」と表現した巨人と中日の「10・8」決戦で大いに盛り上がったが、大学野球はその恩恵には預

かれなかった。

サッカー早慶戦特集では川淵三郎チェアマンのインタビュ。当日は皇太子夫妻が観覧した。マリノスに上野良治、レッズに中島豪（国見高）と、早大を退部してJリーグ入りする選手が出ている。

ラグビー部は富樫正太郎（95年一文卒）、遠藤哲（95年商卒）、渡辺大介（95年商卒）ら早大学院高が花園に出場した時のメンバーが4年生。まとまりもあるし、監督に宿沢広朗が就任し期待されていた。「早慶ラグビー号」は6ページ建て。1面は新人スタメンの月田伸一（98年人科卒・東福岡高）と石川安彦（98年人科卒・日川高）。慶大に80―10で大勝したが明大にはノースライ負け。明大の黄金時代が続く。この年のコーチ陣は木本前監督、益子元監督、石塚武生らがいた。「特に石塚は学生と一緒にグラウンドを走り回る」という記述がある。

全国選権の準決勝、大東大に史上最多失点を喫し、41―50で大敗。またしてもラトウ、オトラ外国人パワーの前に屈した。

日本学生陸上では渡辺と小林が5000^リでワンツ―。1万^リは山梨学院大のマヤカに次いで二人が2、3位に入った。全日本大学駅伝は3連覇。渡辺がラストスパートで劇的に山梨学院大を振り切った。

「12月15日号」は箱根の前モノ。近年の人気からか広告が多く入っている。「1月18日号」は箱根の結果。往路は2区の渡辺が驚異の1時間6分台の区間新。小林正幹、小林雅幸（97人卒・

十日町高)の3、4区も連続区間新。そのまま往路優勝を飾った。だが復路では山梨と抜きつ抜かれつのデッドヒートが続いた。史上稀に見る名勝負だったが、2分差の2位に終わる。

全国大学スポーツランキングは4位に転落。日体大、中大に逆転された。

「1月号」は工程室で阪神大震災のニュースを見ながらの作業だった。

話は変わるが、この頃のラグビー人気は高く(早明戦は抽選ハガキ制)、プレイガイドなどで並んで買った。藤田は1年のときに早慶ラグビーで遅刻をしてしまう。「こういう時こそ遅刻したらダメだろう」と編集長の高橋に頬を叩かれた。男子は前夜から歌舞伎町で飲んで、そのままサブナードのチケット売場に並び、女子が早朝に差し入れを持って行った。「藤田を殴った」という話が大きくなって一人歩きするのだが当の高橋は今、報知新聞の文化社会部デスク。藤田の代は途中で辞めていくものも多く、最終的には6人。藤田は「適材適所、役割を与えて仕事をさせれば、機能する人間もいる」という方針。だから一度は退部したものの戻ってきた仲間もいる。そう、僕とワセダをつなぐもの……。

「青春18切符」で西へ東へ

ここで平成年代、新聞作成の日々の様子を紹介しよう。

部室は記念会堂の裏のプレハブ2階(95年ごろ移転)。1面の面担は、春の合宿で3年生の中

で1年分を割り振って決定した。部員が増えていたので、3年の全員にチャンスがあるわけはなかった。

オフィシャルなミーティングは火曜日と金曜日の昼の週2回。これは連絡事項が中心で体育局の教室を借りて行った。また秋の発行が重なるシーズンは第二学生会館の会議室を借りて3時間、4時間かけることもあった。ここでは紙面、行数の取り合いになった。

入稿前の割付は以前と同じように仲間の下宿に泊まったり、夏目坂の「デニーズ」、別名「第2日刊（スポーツ）」に集まったりして行うことが多かった。机に割付用紙を広げて、原稿の赤入れに数時間。コーヒー1杯300円で朝まで粘った。

外苑前から神宮に向かう途中のコーヒーショップ「ベローチェ」は野球班の「会議室」。ゲームの前後に集まった。

早慶戦は外苑の軟式野球場グラウンド横のトイレの前の通称、「本部」に6時に集合した。「遅刻したものは罰則として1束を売って来い」という話は代々伝わっている。が、遅刻した者は少なかったようだ。

「4月」、「春野球」「秋野球」、「早慶ラグビー」、「早明ラグビー」「箱根」はカラー印刷という傾向が固まりつつあり、年間の半分はカラーになる。

広告取りでは1年生は「新人パレード号」にあわせて、道順だった高田馬場から早稲田までAとBの班を作って、「5000円で三分の一（のスペース）を取って来い。4000円でもいい」

とくまなく店を当たらせた。これも当時の伝統。人科の部員も増えてきたので西武線小手指駅近辺の店も回らせた。

日本各地への取材旅行も増えた時期だ。1994（平成6）年8月、福岡で行われる水泳インカレ取材のため、初めて飛行機に乗ったのは1年生の青木由里子（98年教卒・足利女子高）と柳澤るみ（98年一文卒・小石川高）。

夏のラグビー菅平合宿取材は10人前後で毎年の恒例行事だった。92年には東海道新幹線ののぞみは走っていたが、長野新幹線はまだない時代。信越線の横川駅で「峠の釜飯」を買い込んで食べたこともいい思い出。

スケートのインカレは遠隔地が多い。94年の苫小牧へは藤田、下田（現姓岩田）宏子（96年人科卒・双葉高）、岩田剛平（97年社学卒・錦城高）、北原茂一（98年社学卒・早実高）、加藤朋子（98年教卒・甲陵高）ら6人で大挙して遠征した。帰りは函館へ。日光のインカレでは帰りに東照宮にも観光した。毎日のようにゲームがあったのでスケート班は他の担当より仲が良かったかもしれない。

自費で取材に行くことに疑問を感じる者もいたが、所詮はボランティア。そういう部員とは温度差ができて、離れていく者も少なからずいたのはいたしかたない。

1995（平成7）年8月23日から福岡のユニバーシアード。青春18切符を手に東京駅23時

55分発の大垣行きに乗ったのはカメラの岩田剛平、中村公彦、北原ら6人。伊藤亮（97年二文卒・竹原高）は広島、井地さよ子（97年一文・小倉高）は福岡で合流した。雷で1時間ほどの遅れが出るなど丸一日かけて九州へ。2年生の魚住奏介（98年法卒・東福岡高）の父親の仕事先の保養所を運良く借りられて、10泊の自炊生活が始まる。1年生で大分から駆けつけた麻生佳愛（99年一文卒・大分上野丘高）は夕飯のおかず「不思議なもの」を買ってきて爆笑された。朝、西鉄に乗ってサッカー、水泳など各自で競技場へ行き、夕方に帰還し酒を飲んで盛り上がる。のべ10人ほどが寝泊りした取材合宿だった。公共交通機関で安く移動できる術を身につけた。やはり青春18切符で辰口虎之介（97年社会学卒・長岡高、TBS）、中村公彦（97年一文卒・上田染谷丘高）、原（現姓武永）礼子（99年人科卒・三重高田高）らは出雲駅伝にも10人ほどで出かけた。

またその頃、早明ラグビーは空前のブーム。92年から協会は抽選制に踏み切る。席を確保するため一人約20枚、家族や親戚の名前を書いて抽選ハガキを出した。数百枚のハガキを出して当選はがきを持ち寄り、30人前後の部員分は確保した。

「箱根駅伝号」は12月中に刷り、一部を学内で配布してから残りを各自が自宅で越年させる。そして1月2日、各中継所で一束ほどを配った。ラグビー班は国立競技場の準決勝戦があるので1～3区への配置。野球班は平塚で配って、芦ノ湖に行く。1年は東海道線の始発で戸塚に行ったりもした。3日は配らない場合もあり、あらためて田舎に帰ることがあった。シード

落ちの年は芦ノ湖では新聞をもらう人が少なかった。

1995（平成7）年、「春野球号」の1面は矢口健一（98年商卒・木更津総合高）。打撃重視の方針を打ち出した新監督・佐藤清（天理高）の申し子だ。記事を書いたのはチーフの中村公彦。早慶3回戦で痛恨の押し出しサヨナラ負け。連勝が優勝の条件だっただけに、勝ち点4を挙げたが勝率で3位。

秋の野球は4位に転落。川上憲伸（98年卒・徳島商高、中日、アトランタ・ブレーブス）がいた明大が優勝。慶大の主将は高木大成（96年卒、西武）。早大は1年時、首位打者を獲った大森が主将。明るい話題は4番・中村の首位打者獲得。荒井が日本ハムからドラフト2位指名を受けた。後に日本ハムの広報に転進している。

9月19日、大西鐵之祐が逝去。大西は早スポ会長に就いた頃、年間6回ほど行われていた牧舎のコンパに必ず顔を出してくれた。もちろん、牧舎がまだ蔦の絡まる2階建ての建物の頃だ。ラグビーは帝京大、日体大に負けた。慶大には快勝したが、早明戦に向け木本監督も「難しいね……」。日比野元監督の恒例の得点予想も「今年は勘弁して」と苦戦を予感させた。

迎えた明大戦。「泣いた震えた6年ぶりメイジに勝った」と「1月2日号」は伝えている。ロスタイムに入って、WTBの山本肇（97年社会学卒・藤沢西高）が逆転の70分独走トライを決めた。

辰口が慶大、原田文雄（97年一文卒・川越高）が明大ラグビー担当。原田は早明戦の劇的な山本の7人独走トライをカメラのシャッターを切りながら追いかけた。「出場全選手のコメントを載せたい」と張り切った辰口の挑戦は、地味ながら評価は高い。

この年度の大学スポーツランキングは法大、明大の後塵を拝し6位。10点の優勝種目は全日本大学駅伝だけだった。

入部勧誘もかねてカラー印刷をするようになった1996（平成8）年の「新入生歓迎号」は低迷野球部へのメッセージも込めて「神宮へ行こう」。前年から約15万円の赤字を引き継いだため、「運搬もトラックを使わず、凸版も少なめに作ろう」と編集長の北原は宣言。3面はラグビー部キャプテン・中竹竜二（97年人科卒・東筑高、現早大監督）のインタビュー。監督は石塚武生。終面は部員不足に悩んでいた山岳部から「製作費を出すので作ってほしい」と申し出があった。11年ぶりのネパールでの海外合宿リポート。

野球は最上級生になった三澤の双肩にかかっていた。慶大までのリーグ戦11試合のすべてに登板。うち完投が7試合。明大には2試合とも完投勝ちだった。立大に勝ち点を奪われ、法大の優勝が決まっていたが、早慶戦でも1回戦は延長11回完投勝ちして、通算27勝目を上げた。アトラクタ五輪にも出た三澤は「自分で自分を褒めたかった」だろう。第2戦、13年ぶりの甲子園出場の原動力となった早実高出身の村上友一（00年社会学卒）が先発。帝京高出身の本家穰太郎（00年人科卒）とともにルーキーが踏ん張って連勝し、2位を堅持した。

秋の六大学リーグ戦は明大の完全優勝が確定。第5週、目前で優勝を決められた屈辱のシーズンだったが、早慶戦連勝で3位。三澤は通算31勝を挙げ巨人にドラフト指名された。主将の中村は後に日本文理大の監督として全日本大学選手権で優勝している。

北原は早実高で野球部。矢口の陰に隠れがちだった同期の杉本武則（98年社学卒）は4年になった東大戦で3打数連続本塁打を放つ。できることなら自分が杉本の原稿を書きたいと思った。下の代の野球班チーフ・小寺登雄（99年教卒・川越高）もその3本塁打に衝撃を受けた。ちなみに北原は現在、早実高の総務課勤務。野球部の遠征についていくことも多く、エース・斎藤佑樹が活躍して夏の甲子園で優勝した時（06年）には20泊21日間帯同した。

「9月号」の1面は史上初めてインカレ総合優勝の漕艇部。エイトは全日本を制した中大を破る。男子舵手付きペア、男子舵手なしフォアにも優勝。終面はパラリンピックで水泳優勝の盲学生・河合純一（98年教卒）。漕艇部インカレVとどちらを1面にするか激論になったが担当の山本陽久（98年政経卒・三重上野高）の訴えが上回った。

ア式蹴球部は関東大学リーグ戦で20年ぶりの優勝。外池大亮（97年社学卒・早実高）はベルマーレ平塚に入団。松永章監督は男泣きに泣いた。しかし、インカレは国士大に敗れ準優勝。

ラグビーはよもやの慶大に破れ、さらに早明戦でも後半39分に認定トライを奪われて、傷心の結末となった。「早明戦号」1面は「中竹勝者になれ」。史上最弱キャプテン、中竹竜二の道程である。しかし、この時の学生の自主性を重んじた指導体制は、いま花開いた中竹ラグビー

の原点といいいい。ちなみに、同期の青野泰郎（社会学卒・国立高、東京電力）、有水剛志（人科卒・鹿屋高）、山本裕司（法卒・桐朋高）らが現役コーチとして現在の中竹体制を支える。

選手紹介面はコンピュータがまだない時代に、「早」と「明」の字をかたどった画期的なレイアウト。

駅伝は出雲でアンカー・小林雅幸が8人抜きで念願の初優勝。伊勢路では4位。箱根はエースの小林が体調万全ではなく区間賞は獲ったものの7区に回り、総合5位に留まった。1区は梅木蔵雄（98年人科卒・宇部鴻城高）が期待どおり区間賞。苦労人、高松高出身の藤井一博（97年政経卒）が2区で健闘、往路は4位だった。

北原編集長の挑戦は初めての「ラグビー号外」になった。大学選手権で明大と決勝で当たることになって、1月15日付で「ラグビー決勝号外」を発行する。2日の準決勝は優勝候補の関東学院大を18点差のビハインドから後半35分に劇的な逆転。財政的にも4月とは違って余裕もあり、裏面なしの号外を発行できた。この頃のラグビー班は早大、明大、慶大と担当が分かれていて全員が早大戦を取材するわけでもなかった。明大担当なら明大戦の取材、慶大なら慶大頑張れ、と「それぞれの大学への思い入れが強かった」。柳沢るみは明大の担当だったが「最後だし、みんなで作ろう」とプッシュした。巨人しながら「メークドラマ」だったか？

しかし「1月号」の見出しは「中竹 明大に連敗」。またしても後半39分、認定トライによって勝敗は決した。

【コラム⑤】 なでしこワセダの活躍

1980（昭和55）年「7月号」4面に「大和撫子たち」という特集が組まれた。レポートによると当時の女子部員は合計で84人。人数が多いのはバスケット10人、弓道7人、自動車7人、合気道7人、卓球6人。これに対して柔道は1人、スキー1人、バレーは5人と、女子だけのチームを組めない状況だったようだ。

そして3年後の83年「早明ラグビー号」「学生スポーツの今 虚像と実像 早大女子部を探る」の特集で扱われている。19部が活動しているが部員不足は喫緊の事態だった。担当だった卓球部の取材をしてみても、峰岸直也は改めてその惨状を目の当たりにした。四部所属で、引退した4年以外は3年生が1名いるのみ、団体戦にも出られない状況だった。

6名のバレーは試合中に一人が足をつたが、交代の選手はいない。結局、コートのすみにいるだけだったという冗談のような話が紹介されている。早大の場合、女子の付属校はなく体専は男子のみの募集という事情もあったか。「昔のワセダというイメージで女子に対する差別はあるかもしれない。面白いテーマだし部長さんに話したり、監督会議にかけたりしよう」という窪田登体育局長のコメントが載っている。しかし、大学の受け入れ態勢は整っていないし、女子部への意識はまったくなかったといえる。

そして87年、人間科学部ができて女子の活躍が目立ち始める。陸上と水泳は特選で合格者を出し、初めて女子部員を受け入れる。スポーツ環境も変革のスタートを切った。4月の新入生歓迎号は『新生早稲田スポーツ元年』。

中でも注目されたのが堀江陽子（ヨーコ・ゼッターランド、91年人科卒）。後にバルセロナ五輪で銅メダルを獲得するアメリカの代表選手である。早スポは「高校の頃から神宮球場で六大学リーグ観戦をしているところを目撃していた。入学を確信していた」（87年「4月号」と書いている。当時の女子バレー部は6部リーグ。彼女がそんな低迷した部に入部をしてくれるのか、と記事にはあるが、そんな心配をよそに、入部して堀江が引っ張ったバレー部は順位を上げていくのである。バレー担当の高野も編集長の熊田も、大声を張り上げて仲間を叱咤する堀江を記念会堂で眺めたものだった。

バレー部は堀江陽子の入部で当初の6部リーグからシーズンごとに昇格を果たし、89（平成元）年は春秋とも2部全勝優勝までのチームになった。堀江の在学中の1部昇格はならなかったが、獅子奮迅の活躍は早スポ誌面を賑わせた。

1933（昭和8）年創部の女子体操部は91年、初めて団休出場を果たした。原動力は真田マキ子。ソウル五輪やアジア大会などの代表に選ばれた中心選手だった。

同じく91年秋にはバスケット部が創部以来の1部昇格の快挙（男子は2部）。原動力と

なった箕輪あきは元実業団でプレーした変り種。日立戸塚でプレーし、ケガもあって3年間で現役引退。2浪後、5年越しの入学を果たした23歳のルーキーだった。早大入学を聞きつけた知人の部員らがキャンパスで箕輪を待ち受け、入部を懇願したというエピソードが学生らしい。95年のインカレ5位を「快進撃」と誌面は伝えている。

93（平成5）年から女子ホッケー部が体育局に昇格。関東学生リーグの2部からスタートした。そして創部3年目の7年秋、1部リーグに昇格する。

ボートの女子シングルスカル、洪田紀子（95年人科卒・青森田名部高）が全日本選手権競漕大会で社会人を抑えて優勝。9年ぶりに学生が制して、ユニバーシアード代表にも選ばれた。この年は7月に米国・バッファローで行われたユニバーシアードに出場した1年生の漢人陽子（97年人科卒・浜松商高）が、100歳と200歳のバタフライで2冠を果たした。

平成のフィギュア王国・早大の先駆者は八木沼純子。88（昭和63）年のカルガリー五輪に14歳、最年少で出場し、早大でも2度目の出場を目指した。コーチは67年卒のOG・福原美和だったが、二人三脚の夢は果たせなかった。「八木沼さんから誘われて」早大に入学したという井上怜奈（99年人科卒・渋谷教育学園幕張高）はアルベールビル、リレハンメルに連続出場の実績を引っさげての入学。長野五輪のイメージポスターは井上だった。「顔

を映さないからという約束で（ポスターのモデルになった）……」（95年「早明ラグビー号」という井上のコメントを、蓮見（現姓北原）景子（98年教卒・浦和一女高）は取っている。97年に韓国で開かれたユニバーシアード大会で2位。

94年春の「早慶戦号」で、また女子部だけを集めた特集ページが載った。トップを飾っているのはフェンシングの田中奈々絵（97年教卒）。既にナショナルチームの強化選手で、ルックスも可愛いアイドル的存在だった。ユニバーシアード、世界選手権選考会に優勝。代表の座を勝ち取った。

94年度のスケートインカレでスケート部スピード部門史上初めて女子のチャンピオンが誕生した。長岡弥生（96年人科卒）が1500^リで新女王に。長岡は卒業後、02年ソルトレークシティ五輪に出場した（1500^リ24位）。

ゴルフの金沢鈴華（97年教卒・常総学院高）は94年に日本女子学生で優勝。早大からは初優勝。中島真弓（99年教卒）は96年の日本女子オープンで6位に入り、ベストアマ獲得。さらに、女子アマチュア選手権でも優勝、アマチュアマッチプレーにも勝って、史上初の年間アマ3冠になった。

95（平成7）年の福岡ユニバーシアードでは競泳陣が頑張る。当時2年の黒鳥文絵（98年教卒）がメドレー2冠。同じく2年の粕谷恭子（98年人科卒・狭山ヶ丘高）は200^リ平泳ぎで3位、3年の漢人陽子も入賞した。彼女らはその年のインカレでも部員4人なが

ら、総合3位に入った。96年は2位に順位を上げた。

96年のアトラクタ五輪には、入賞はなかったが水泳の黒鳥、ボート・女子ダブルスカルの吉田理子（99年人科卒・大湊高）、フェンシングの田中が出場。吉田は2000年のシドニー五輪にも出場した。

2001年、庭球部女子は大学王座初出場で初Vの快挙。06年からは、王座で4連覇する。水泳では稲田法子（01年教卒・市船橋高）、三田真紀（06年教卒・須磨学園高）、三輪芳美（07年スポ科卒・岐阜商高）らが活躍。トップアスリート入学1期生の北川麻美（スポ科4・春日部共栄高）は北京五輪100^リ平泳ぎで8位入賞。同じく北京ではカヌーの竹下百合子（スポ科3年・桜華女学院高）がスラロームカヤックシングルで4位と日本選手の過去最高成績。

フィギュアは早稲田勢が強い。ソルトレークシティ五輪の村主章枝（03年教卒・清泉女子学院高）は5位。トリノでは村主4位、荒川静香（04年教卒・東北高）が見事に日本唯一の金メダルを獲得した。井上怜奈がジョン・ボルドウィン選手と組んだ男女ペアで7位に入賞した。さらに中野友加里（08年人科卒・相山女学園高）、武田奈也（スポ科3・日本橋高）らは現在、日本のトップクラスで争う。

ところでフィギュア担当の林哲子（03年一文卒・新宿山吹高）は村主章枝とはメールで

取材のやり取りをする仲だった。試合会場ではなかなか詳しい話を聞くこともできなかったが、メールではじっくり良い取材ができた。

また七田惇（08年教卒・札幌西高）もフィギュアに魅せられた一人。トリノにも取材に出かけ、荒川のコメダル写真を撮って紙面に載せた。中野由加里とは同期。中野は演技直後のメール取材に対してすぐ返信してくるなど、早スポびいき（？）だった。七田は本番で着る衣装の相談を受けるほどの仲だ。

【早スポOB特別寄稿③】 中山英子（1994年卒）
楽しいと感じた場所に身を置いて

高校時代陸上部で、体力を使い果たしたと思い込んでいた私は、運動は大学に入ってからでたくないと思っていた。そもそも、音楽のほうが好きなので、本当は、大学では、オーケストラに入るつもりだった。のぞいてみたけど、なんとなく近寄りにくい雰囲気跳ね返されて音楽活動を断念した。

「早稲田のスポーツ大好き」な人たちと比べて、スポーツがものすごく好きなのでも

なく、ただ、なんとなく、顔を出してみた部室の空気にずるずると引きずり込まれた「早稲田スポーツ」。正直なところ、「ここなら私もいられるかも」という直観とにおいだけで居ついてしまったように記憶している。周りにひきずられながら毎週、神宮球場に通い、毎日部室に顔を出したのは、きつとそこに心地よい何かがあったかのように思う。

その割には、早スポ一色に近い4年間だった。いろいろと面白いことがあったけど、その中で印象的だったのは、3年生の秋のこと。早明ラグビー号の新聞が刷り上がり、野球担当だったメンバー2、3人で、レンタカーだったか軽トラックを使って、築地の日刊スポーツから銀座を通り、部室（当時は文学部キャンパスのほうにあった）に運ぶ際、新聞を銀座大通りで落としたことだ。キラキラと光るネオンの中、銀色の何かが、空高く舞いあがり始めているのが目に入ってきた。最初は、なんだか分からなかったのだが、「もしや……」と、車を脇に停めてみると、刷り上がったばかりの「早スポ」の束を落としたということが発覚。夢中で拾い集め、銀座四丁目あたりの交番に届けたという思い出である。焦るというよりも、間抜けな様と、美しい秋の夜空とネオン、走りまわって汗だくになった自分に変な満足感を覚えていたことを記憶している。翌日、部室にさらに数束の新聞が、落とし物として届いた。

翌年の93年正月。箱根駅伝での優勝に、担当チーフとしてかかわった。箱根時はプロの

記者に交じって、多くの取材をこなす体験をした。夢中で欲もなく書いた記事だったせいか案外、よいものが生まれたらしい。キャプテンに、「早稲田スポーツが一番本当のことを書いてくれるからいいですよ」と言われ、有頂天になり、すでに、スポーツ取材に興味が失せていたにもかかわらず、「長野で五輪があるから」を理由に、早スポを片手に地元紙を受験し入社した。長野五輪ではめでたく？スポーツ現場に置かれた。五輪の矛盾を目の当たりに、疑問を感じていたのに、流れて選手になってしまった。そういう矛盾が私には多いようだ。

社会人になって5年目から、急に競技スポーツとしてスケルトンを始めたのは、スタートに立った時に受けた、「真剣にやったほうがいいらしい」というひらめきを信じたまでだ。今、3回目のオリンピック（バンクーバー五輪）出場を目指して、海外遠征を直前に控えているが、こんなに心身がよい状態にあって、シーズンを迎えるのは初めてである。

7月に五輪のコースがあるウイスラー（カナダ）にトレーニングに出かけ、拔群の自然環境に身を置いた。マウンテンバイク、ロッククライミング、ハイキングなど、非日常の満載だった。日本では、頭ばかりを使ったトレーニングに偏りがちだったけど、自然の中で動いているだけで、これまでに使っていなかった脳が活性化するのを体で感じとった。子供のころは持っていた感覚↓野生!?を取り戻したのか、身体感覚が研ぎ澄まされていっ

た。そこで行きついた結論は、「そこにいたいと感じる場所＝楽しい空間で、何かする」とが、最も効率よく自分を伸ばせる」——例えば、大学時代にはやってきていたことだった——、と気がついた。無意識でできていた若いころに、アラフォーになった今、私は戻っているだけなのかもしれないなあ。



スケルトン競技でバンクーバー
五輪を目指す中山英子

第7章 平成の時代——新技術と躍進

印刷技術は日進月歩

日刊スポーツでの新聞作成技術は1997（平成9）年、革新的に変わった。現場でいうところの「SS」システムが導入される。レイアウトがコンピューター入稿で割付用紙が不要になった。学生新聞ではありながら日刊スポーツで印刷する早スポも、新しい時代に突入したのである。

SS導入と同時に編集長になった小西啓樹（99年法卒・札幌北高）は通巻「300号」の発行を間近に控えて悩んでいた。3月の「卒業号外」から5月の「春野球」と例年どおりに発行していくと「7月号」が300号に当たる。「はたして、それでいいのだろうか」。「7月号」には野球、ラグビーなど大きなイベントがなく、比較的地味な競技を1面に持つてくることが多かったからだ。そこで号数を調整して「春野球号」を「300号」にすることに決めた。

2年生でエースに名乗りを挙げた藤井秀吾（00年人科卒・今治西高、ヤクルト・日本ハム）をカラー1面で取り上げることに決め、自ら面坦をした。カラー印刷は、2年前からエバーライトという紙に替えて質を上げていた。原稿は野球班チーフの前田淳（99年政経卒・早大学院高）が書いた。

小西の代は部員が15人。通常であれば新編集長は、2年生の段階でそれまでの仕事量、部への貢献度や、お互いの雰囲気といったものを感覚的に評価して、同じ学年の中で決めてきた。ところが、この年は珍しく編集長決定のための選挙が行われている。

300号の「春野球号」は増ページの14面。数年間、著名OBに頼らないページ作りをしてきた禁を破ってヨコ・ゼッターランド（堀江陽子）、萩原健司らに話を聞いた。OBを登場させなかった理由は、「同じ世代の選手が扱われていない新聞を一般学生が読むのか」という疑問があり、「OBよりも多くの現役選手を扱っていいこう」という方針を取っていたからだ。萩原は3年前のリレハンメル五輪で金メダルを獲得した大スターであり、翌98年の長野五輪で選手宣誓することが決まっていた。

春早々、野球班チーフの小寺登雄が倒れた。巨人に入団した三澤興一（97年卒）の取材で、よみうりランドの坂を上っていたところ、急に胸が痛くなり、倒れたのだ。胸に穴が開いていた。小寺は業務のリーダーでもあって、他の業務担当は「春野球の広告をどうしよう」と焦ったという。

さて、新しい新聞制作の「SSシステム」だが、実際は7月の「301号」からの新システム移行だった。これまでは割付用紙に線を描いて、写真や凸版の大きさ、位置を指定。行数や文字の流れを決めていたが、紙が必要なくなつてモニターの画面上でマウスを使って、操作するようになった。「SS」と作業上呼ばれているのは日本のメーカーのシステムである。そし

て05（平成17）年から使われているのが通称「方正」と呼ばれる、中国のメーカーのシステムによるもの。昭和世代にはイメージしにくいかもしれない。ゲラを出して赤字のチェックはするものの、「切ったり貼ったり」というカッターナイフと糊を使う工程はなくなった。

昔は日刊スポーツで「切り張り」を担当するオジサンが早く仕事を終えたいからと、「もうF（フィルム）出しちゃえよ」とよく急かされた。カッターを持ったオジサンは恐かったものだ。しかし「SS」の導入当初は、若い分、早スポ部員のほうが覚えが早く、日刊スポーツの技術者よりも手際が良かった時期もあった。

「方正組版システム」を使う現在、モニターが多い時は4台貸与され、「忙しそうだから増やそう」「他が忙しいので減らして」などと適宜加減される。早スポでは「記録」という校閲部門の役職があつて、そこで言葉のチェックをして、最終的に編集長がOKを出す。

「301号」1面を「SS」で編集し、2面、3面、4面は前のシステムだった。

「ノウハウがなくて、具合が違う。書体を太めで指定したら極太だったり。ラグビーの頃まで慣れるのに時間がかかった」

谷川真知子（99年一文卒・広島女学院高）は、レイアウトのためにファミレスで徹夜をして、そのまま日刊スポーツに行くような男勝りのところがあつた。その一方で、「独特のアートセンスがある」と仲間からいわれ、イラストも書いた。

彼女が担当して、野球結果の星取表で、日刊スポーツの紙面では○●が使われてきたものを

☆★にしてしまったことがあった。指定ミスもあったのだろう。☆★のゲラが出てきて、周囲は直そうといったが、谷川は「これでいいじゃん」と強気に押し通した。だから、未だに早スポの紙面では☆★が使われている。

学生には遊び心があった、ということなのだ。カラーで1面の見出しに使う『早稲田色』を探すのにも当初は大変だった。字の影はどの色が適当か、決まっているものもあったが、変えてみたくもなる。主務の前田淳が「新歓号」の題字をピンクにしたいと言いつ出したこともあった。何もかもが手探りで、色校で刷り上ってくるまで、実際にどんな色になるかイメージを掴みづらいこともあった。

98（平成10）年には新聞の文字を大きくしたが、一行字数が2字減の12字になって、「やらないほうがいい」という意見もあった（この後、レイアウトによって前後の変更あり）。

渡邊泰央（00年二文卒・札幌北高）の年は、春先に願ってもない話が舞い込む。産経新聞の広告部、山本俊尚（87年卒）が実業家の関口房朗を連れてきて、「フランスW杯を観に行こう」という記事広告を載せてくれる」ことになった。関口は競走馬の「フサイチ」の名で有名な馬主でもあった。「学生に夢を」という本人の、1面を使ったインタビュー記事広告を出稿した。また私財で500人をW杯に連れて行った。自分が率いる企業の青田買いの意味もあったのだろう、学生へは相当な投資をしていた。まだバブルは残っていたのだ。

これで早スポ史上最大のバブル、100万円ほどのカネが余る。ならば、と中面もカラーに

した。「早明ラグビー号」は1面に正木宏和(99年人卒・筑紫丘高)主将と山崎勇氣(99年人科卒・啓光学園高)。10ページ構成で1、3、最終面がカラーだった。3面カラーは初めての試みだった。カラーはインクをいわず「4色」にするので3〜4倍の費用がかかる。「1月号」の箱根駅伝シード落ちもカラーにするなど、この代は多数の号をカラー印刷にした。

しかし、当たり前のことだが、使えば資金は底をつく。年間1100万円ほどを使った。赤字を引き継いだ竹本達哉(01年社学卒・大阪高津高)の代は前々年と同額の800万円程度に製作費を戻さざるを得なかった。「関口資金」の100万円のほとんどを使い果たしてしまったことになる。

実は、98年は苦難の年だった。野球で東大に勝ち点を落として8連敗で5位。この頃は東大の遠藤良平投手(00年卒・筑波大付、日本ハム)を打てる気がしなかった。野球部の松瀬大主将(99年人科卒・宇和島東高)はインタビューを嫌がって、神宮の裏口から逃げ帰ったこともあった。サッカーが関東大学リーグ1部から転落、アメフトが2部低迷など大学スポーツランキングは7位。近年では早大が弱かったピークに当たる。

ちなみに、関口による記事広告で『早稲田スポーツ』では原田裕章(00年人科卒・早稲田高)以外、自己負担なしでフランスW杯に行っている。

原田は「おいしい話があるわけがない。関口さんの意図がわからなかった。マジで北朝鮮に連れて行かれるのか」と思ったという。

渡仏した竹本は「セーヌ川沿いでシャンパンを飲みました。日本対アルゼンチン戦を観てたら、隣にベンゲル（元グランパスエイト監督、現アーセナル監督）がいました」と現地から日本に残っていた原田に電話をした。早スポの面々は、広告で募集した500人とは別便で渡仏し、W杯の取材をした。

日刊スポーツ降版遅延事件

中面カラーの「早明ラグビー号」で初めて、というトラブルが起こる。1998年、初の試みで3面をカラーにしたところ、緑の色が飛んでしまったのだ。赤青黄黒と4色印刷の過程で、シアン（青）が飛んでしまったために緑色が出なくなったのだ。日刊のミスになるのだが、「カラー印刷ということが伝わっていなかったよ」と言い訳された。

これには伏線もある。この夏、菅平のラグビー合宿でラグビー部の「レイプ事件疑惑」が起きていた。週刊誌などが書き立てた。主将だった山崎勇気が関与したともいわれ、主将が正木宏和に途中交代したのだ。編集長の渡邊泰央は熱い思いも重なり、1面の原稿の行数が180行にも達していた。最終的に日刊スポーツで書き上げたが、仕上がったのは4日目。状況はせば詰まっていた。そんなに載せられるわけがない。選手紹介面も、ラグビーの芝のグラウンドを書いてポジションごとにレイアウトしていこうという入り組んだもの。画像は重く、ファイル

ムが出るのに10分以上を要した。既に深夜の12時を過ぎていた。結局、当日は降版できず、早稲田に戻ってサイゼリヤでゲラのチェックなどをして朝を待った。

試合の3日前の木曜日に学内で配ることもできなかった。渉外担当は焦って、「日曜日に間に合うように発送するにはいつまでに投函しないといけないか」と郵便局に問い合わせた。9時半に封入して、原田が車を出して10時半に新聞を郵便局に運んで投函して事なきを得た。

1999（平成11）年、代替わりした直後、早慶両校の親睦団体である「早慶三九会」の特別号外を3月9日付けで出してくれと、編集長の竹本達哉は堤哲（64年卒）から依頼された。竹本がまだ通常の『早稲田スポーツ』を出す前のことだ。『慶應スポーツ』がスポーツニッポンで制作していて、早スポが初めてスポニチで刷ったという珍しい新聞になった（もちろんボランティア）。

竹本は「早慶6連戦の取材をしたりして、新聞をその会合で配りました」。おそらく近年では製作に一番苦心した新聞だろう。ただ、秋の一大イベントだった40周年の成功と経費節減という命題を与えられていたこの代にとって、苦勞が後々の肥やしになる。

この年、「春の早慶戦号」の定価を50円から100円に上げた。その後、資金が余ったのはこの値上げが効いたこともある。2月に『慶スポ』と一緒に作っていた時に、「早慶同時に上げないといけないから相談をした。値上げをしてもいいか、40周年の集まりの時にOBにも聞きに行った」。

春は開幕から一気の8連勝で優勝した。野村徹監督（61年卒・北野高）は就任最初の春に優勝という野球部の「言い伝え」に漏れなかった。主将は梅沢健（00年人科卒・前橋工高）だった。投手は藤井と鎌田祐哉（01年社学卒・秋田経法大付高、ヤクルト）がいた。

まずは号外作りだったが、5年半ぶりで作り方を知らなかった。「学内で配るか、提灯行列で配るか」意見も割れたが、「優勝が決まった時だろう」と翌日の5月17日、月曜日の学内配布になった。「緊迫感のある号外ではないので、提灯行列でも配ろう」「早慶戦号でも付けて売れ」という意見も出た。

「早慶戦号」は「大勝負、2万部にちよつと上乘せして刷った」。全勝で決めるという願いを込めた祝いの号だった。大見出し凸版は「早大全勝」。シンプルなのが良い。でも、日刊のスポーツの人からは「これで大丈夫か」と言われた。1000円で1万部売って、100万円の売り上げがあった。

しかし勝負はあっさり連敗。気が抜けた感じだが、提灯行列に最初から参加できた稀有な代かもしれない。

この年の優勝は前年まで佐藤清監督（78年卒・天理高）が種を撒いて選手を育てた遺産でもある。佐藤監督は「推薦で選手が取れない」と野球班にばやまぐつていた。「他の大学と比べてどれくらい取れないのか書こう」となった。他の監督にも話を聞いて、毎号、各部の弱さを書いた。

「弱いからどうにかしましょう」。当時の奥島孝康総長に提言を持っていた。総長の回答は簡単にいえば、「今、いろいろとやっているとところだ」ということだった。弱かった時代は、系列の早実高から早大野球部に入らないという傾向もあった。「強くなることがすべてじゃない」という意見もあったが、「スポーツ科学部に限らず全学部で推薦を応援せよ」という紙面を作った（「早慶ラグビー号」）。

松坂世代（80年度生まれ）の同期になる和田毅（03年人科卒・浜田高、福岡ソフトバンク）は甲子園ではそれほど有名ではなかった。現横浜ベイスターズの村田修一（東福岡高）が特選試験で落ちていたことがショックだった。早スポは試験当日に村田を取材していたのだ。

この98年の合格発表では、受かった高校生に「早稲田で何をしたいか」という取材をしたが、他にも陸上の有力選手が落ちていることがわかった。番号しか発表されず、各部のマネジャーが真剣に番号をメモしているが、競走部のマネジャーが横で「なんであいつが落ちてるんだ」と嘆いていたのだ。

「甲子園で145^キの速球を投げて早稲田に行く」という鳥谷敬（04年人科卒）がスカウト入試で合格した時は部員全員で興奮した。記事でも特選の合格情報は反響があった。楽しみで読んでくれる。載っていないと読者から「お叱り」を受けることもあった。

失敗談・土下座事件

1999（平成11）年は、「旅行社土下座事件」があった。大手旅行会社が折り込み広告を入れて出稿してくれることになった。ところが折り込みチラシが大量に余ってしまい、廃棄したことがばれた。発行部数を割り増しで伝えていて、部数以上のチラシが来てしまったのだ。「みんな余っても家に持ち帰って捨てろよ」と示し合わせたはずだった。しかし高田馬場で力尽きた者がいた。旅行社の高田馬場支店で広告をもらって、チラシを高田馬場で捨ててしまったのだ。偶然ではあるが、やっぱり見つかった。旅行者の担当者は「俺たちは朝の7時から仕事してるんだ。甘くないんだ、世の中は」と怒鳴った。担当した主務が何度も謝りに行って、土下座もしたという。

2000（平成12）年、2年生の佐藤健介（03年人科卒・天王寺高）は「春野球号」で慶大の選手紹介の面担だった。それで、警察沙汰になった経験がある。入稿した日の深夜、疲れが出る頃。所沢の人間科学部から通うには片道2時間ほどかかる。翌日も早朝から来なければならず、「しんどいな」と思いつつ、日刊スポーツの校正室にイスを並べて横になった。

校正室は警備員が見回って、自動のセキュリティシステムに切り替えられていた。数時間寝てしまった佐藤は、足元の赤外線に気づかず触れてしまう。警棒を持った7、8人の警備員

と刑事が駆けつける羽目になってしまった。「最近、空き巣事件が起きているんだ」。朝の4時頃、編集長の伊佐治慎平（02年政経卒：広島城北高）に電話をかけ、事情を分かってもらった。

ホームページ開設

「SS」導入後の部員の日常を紹介してみたい。

まず「欄外伝票」を出すのが編集長の仕事。そして何より、編集長は困ったことがあったら解決する人間である。日刊スポーツでもトラブルをいかに解決できるか、ということが問われた。コンピューターによって新聞制作の考え方も変わっていく。大きな写真を自由に使ったりできるようにもなった。

いろんな煩雑さが「SS」によって解決されてはきた。その作業ができる人、機械を動かせる人が部の全体をまとめていく。ある意味、「編集長の役割も変わった」時代になったのかもしれない。

編集長になったら「野球班、ラグビー班の班長には立候補しない」という不文律があった。なので、編集長は現場取材に行けないこともあった。日刊スポーツで紙面の仕上りをチェックをしなければいけないからだ。仕事の住み分けがはっきりしていた。野球やラグビーの記事に編集長は口出しできないような雰囲気もある。編集長は結果面の総合的なチェックと全体の

最終的なOKを出すことが主な仕事。最後に責任を取るのが編集長だった。

合宿は春と夏。春は真面目に組織固めの会議を行う。スキー合宿は恒例になっていたが、実際に全員がスキーをするわけでもない。夏は野球班のミーティングがぎつしりあった。片やラグビー班はこの時期はまだ遊んでいた。1年生は正式に部員になって「企画を出しなさい」と仕事を振られるようになるのがこの夏合宿。そこから認められるようになる。

早慶戦では4年生やOBの差し入れも楽しみの一つだ。梨、荻窪の卵ソーマン、中華のちまき、寿司のほか、駅ナカでおにぎりを買ってくる先輩もいた。「OBに感謝するように」といわれて食べた。

早慶戦は朝6時半の集合の時があった。新聞が売れなくて国立競技場で行われるJリーグの試合、浦和レッズのサポーターに売ったこともある。サッカー人気のほうが早慶戦を上回ってしまったのだ。早慶戦の打ち上げは高田牧舎ではなくて文学部キャンパスの前のファミレスになった。

早慶レガッタは2、3年の女子部員が弁当を持ってくるのが通例だった。部員60人分を作るには一晩中かかることもあるようだ。

2001（平成13）年に部室が現在の学生会館に移る。

ホームページは坂井裕之（01年二文卒・検見川高）が軌道に乗せた。「記事のデータベース化ができないか」とさらに可能性を追求した。それを片岡千晶（02年社学卒・桐朋女子高）が

引き継いだ。片岡は卒業後、講談社に入社し、現在は女性誌『F R a U』編集部に所属する。続く中村将之（03年二文卒・愛知桜台高）には、正式に「ホームページ」担当の肩書きがつき、公式ホームページや試合の結果を書き込むための速報サイトも作った。写真ニュースなども載せた。各運動部の担当者は自分のパソコンや大学のパソコンから打ち込めるようになった。

次の代の村岡貴仁（04年一文卒・室蘭栄高）がさらにバージョンアップさせて、今の形に近いものになっている。発行してきた過去の1面を見られるようにしたのもこの代からだ。

和田が奪三振記録達成

2000（平成12）年は春も秋も優勝の可能性があった。秋は9回まで1点差という緊迫したゲーム。号外の用意を伊佐治慎平は進めていた。凸版だけを作って、写真と結果を日刊スポーツで待っていた。携帯電話で逐一、連絡を取りながら最後の報告を待つ。

しかし、「負けました」の報告。野球班3年生の女性記者は泣いていた。早慶戦で勝ったら優勝という最高のシチュエーションで春秋の2回とも号外は作れずじまいだった。エースは4年生の鎌田祐哉。2番手に2年生の和田。中西良太（01年商卒・三田学園高）主将、林川大希（01年人科卒・鹿児島実高）捕手がいた。春から1年生の鳥谷敬がスタメンに名を連ねた。

佐藤は鳥谷担当だった。「いつもどおりに、というのが口癖であり口数は多くなかった」が、

バックスクリーンへのサヨナラホームランなど、醸し出す雰囲気はスター特有のものを持っていた。「放たれた打球の速さがすごかった。1年の時からモノが違う」と思った。現在、神戸新聞の運動部所属で阪神の話題が近くにあるだけに、鳥谷に対してはちょっと物足りなさを感じているのだが……。佐藤は人間科学部生として初の早スポ編集長となる。

和田毅は02年に江川卓の持っていた奪三振記録443を破り、通算476奪三振にまで記録を伸ばす。「和田は1年の時は優勝パレードの警備員をやるなど、下積みを経験していて、練習態度も真面目。エラぶることもなく努力家の好青年だった」と寿美陽介（04年一文卒・浅野高）はいつも感心していた。

寿美は野村徹監督の担当でもあった。「ノムさんは気難しそうだが、いくらでも話してくれる好々爺。取材にも立ち止まって話してくれた」という。

そして02年、長い低迷期から脱して野球部は黄金時代を迎える。「早大V歓喜」のタイトルで春と秋に2回の号外を出した。和田、清水大輔（04年卒・柏稜高、J R東日本）越智大祐（06年人科卒・新田高、巨人）と好投手を育てた。

春は6季ぶり33回目優勝。大学選手権は亜大にサヨナラ負けで28年ぶりの日本一ならず。「7月号」は大学選手権で優勝できなかった記事。「秋野球」は11月2日、和田完封で52年ぶり春秋連覇を達成する。

和田はリーグ通算27勝13敗。27勝は早大の左投手として最多。己に厳しくひたむきな練習姿

勢は下級生の鳥谷、青木宣親（04年人科卒・日向高、ヤクルト）、比嘉寿光（04年社学卒・沖縄尚学高、広島）、由田慎太郎（04年一文卒・桐蔭学園高、オリックス）らに影響を与えた。それが早大野球部史上初の4連覇を達成する元となったことは間違いない。

史上初の4連覇

2003（平成15）年にスポーツ科学部が新設される。春の早慶戦は連勝でリーグ戦3連覇。35度目の優勝となった。秋には4連覇、早大史上初の全勝優勝だった。

この年の4年生からは4人のプロ野球選手が誕生している。比嘉は第71回のセンバツで沖縄勢初の優勝を果たした時の主将。1年時から出場した。沖縄県出身として早大初の主将を務め、4番打者としても長打力を発揮し、春秋連続でベストナインに選ばれた。大学通算成績は77試合、77安打、打率・259、9本塁打。

鳥谷は後藤武敏（横浜高・法大、西武）と並んで史上最速タイとなる2年春での三冠王に輝き、4年春には19四死球のリーグ新記録を樹立。4年秋には2度目の首位打者を獲得し、ベストナインにも通算5度選出された。大学通算96試合出場、115安打、打率・333、11本塁打、71打点。

青木は高校時代、投手だったが入学後は外野手に転向。3年秋に打率・436で首位打者を

獲得。58試合出場、ベストナイン3回、63安打、打率・332。青木はヤクルトのドラフト4位指名だった。

由田は1年の春からレギュラーとなり、4年春に首位打者とベストナイン。80試合に出場、80安打。通算打率は・294。

この年の打線は1番田中浩康（05年社学卒・尽誠学園高、ヤクルト）・青木・鳥谷・比嘉・武内晋一（06年人科卒・智弁和歌山高、ヤクルト）、由田という6人全員がプロ入りした強力打線だった。

主戦は4年の清水大輔（04人科卒・柏陵高）。和田の背番号を受け継いだ早春、オープン戦で打ち込まれた。エースの自覚の見えない清水に、野村監督は自らマスクをかぶり投球練習をさせた。夕暮れ時に、清水も同期の4年生も涙を流しながら練習をしている姿を早スポ野球班は目撃している。

4連覇を達成したレギュラーが抜けた翌04（平成16）年春は、47年ぶりで立大の日野康彰にノーヒットノーラン負けを喫する。そして02年秋以来、16カードぶりに相手チームに勝ち点を献上するなど苦戦。明大が早々に優勝を決め、早慶戦でも連敗し4位に沈んだ。「春野球号」は選抜優勝投手でスカウト入試で入った大谷智久（07年スポ卒・報徳学園高）の1面。秋は田中浩康（05年社学卒・尽誠学園高、ヤクルト）。野村徹監督が、3位に終わったこのシーズン限りで勇退した。

05（平成17）年に応武篤良（81年卒・崇徳高）が監督に就任し、またもジंकスどおりに春に美酒を味わう。「春野球号」は宮本賢（07年スポ卒・関西高、日本ハム）。27年ぶりに勝ち点4同士でぶつかった早慶戦で勝点を挙げて、3季ぶり37回目の優勝。「優勝号外」を作った。15試合を戦い抜いての「完全優勝」だった。

「秋野球号」は主将の武内。早慶戦で連勝したが、秋は2位だった。エースの越智大祐は4年秋に最優秀防御率を獲る。

06（平成18）年の春は早慶戦連勝も勝ち点4で2位。エースで主将の大黒柱となったのは宮本賢。05年度編集長の五島悠一（07年卒・横浜緑ヶ丘高）は同期だった。「宮本は練習熱心で人望があった」とホメる。

「秋野球号」1面はキャプテンの宮本。優勝してモノクロの「号外」を出した。10月15日、明大が敗れて、優勝が転がり込んだのだ。早慶戦には敗れて完全Vはならなかった。

秋の新聞ラッシュの時は日刊スポーツにずっと詰める日々が続いて、編集長の大迫拓郎（08年スポ卒・福岡宗像高）は一ヵ月間の定期を買った。秋の早慶戦で優勝して号外を出したが、反応は今ひとつ。「春野球号」では、発行部数を8000から6000に下げたが売れ残った。

この年の「春野球号」ではセンバツに出場した早実高の斎藤佑樹のインタビューを掲載した。そして秋、夏の甲子園で優勝した斎藤が早大進学を発表してから広告が急増。再び斎藤のインタビューを掲載した。「秋野球号」では3面の細山田武史（08年スポ卒・鹿児島城西高、横浜）

のページまでカラーにできた。

斎藤佑樹入学

2007（平成19）年、斎藤佑樹が入学した春先、編集長の八木圭太（09年教卒・八王子東高）は頭を悩ませる。追っかけを含め野球部に押し掛けるファンがすごかったからだ。オープン戦の出入り禁止、早スポに対しても野球部からは出待ち取材禁止という措置もあって、どう対処したらいいか。「インタビュースhirtを用意して、質問を書いて選手に答えてもらう」ということになる。また「ゲームがあつたら、その日に結果を即ホームページにアップする」ということにもなった。一気に規制が厳しくなったのだ。ただ、寮での取材を許されたので助かった面もある。

「新聞広告の面では、春は異常なほどたくさん入った」。14ページのうちの中面に当たる7、8面のペラは両面が広告で埋まった。業務の釜谷美穂（09年卒）が手際よくさばいたが、他にも出稿希望がたくさんあって載せきれない。翌月にやむなく回した広告もあったという。いまだき、ぜいたくな話ではある。

斎藤番記者は15局に上るテレビの番組に出だし、新聞、雑誌からの取材も多かった。それほど「ハンカチ王子旋風」は凄まじかった。新聞を作っている最中も、テレビ局が日刊スポー

ツに入り込み、制作風景を取材されたりもした。

斎藤が登板する早慶戦の当日は、土曜日に新聞が完売した。朝から「やばい、売り切れる」という勢いだったので、ゲーム前の昼頃に日刊スポーツに電話で確認して、「増刷はできる」といわれて、3000部の増刷をした。その日の夕方6時頃にはタクシーで運んで神宮に届けた。

この時は、号外の製作も日刊スポーツでは初めて通された部屋で、VIP待遇で作らせてもらった。前年もその前も号外を作っていたので、事前にアドバイスは受けていた。ある程度の用意をしておいて、写真を入れるだけの状態で、月曜日に優勝して一時間ほどで出来上がった。この号外はアディダスが広告を出していて、「早大連覇」は野球号外としては初めてのカラー紙面になった。

2週間後の6月17日、東海大に4―1で勝って33年ぶり3回目の大学日本一を果たす。やはり号外を出した。

「秋野球号」の見出しは主将の田中幸長（08年スポ卒・宇和島東高）。優勝して1色の「優勝号外」を出したが、春とは違って落ち着いていた。「春野球号」で萩本欽一にインタビューをしていて、芸能人のページが久々に復活。「学生が喜んでくれるページならいいんじゃないか」という意見があったからだ。秋は1年生に「何でも好きなことをやってみろ」と企画のページを与えて、野球好きのグラビアアイドル、磯山さやかへのインタビューになった。

斎藤の記録を詳述すると、春の開幕戦で、1年生としては慶大の宮武三郎以来80年ぶりとなる勝利を収めた。春は4勝0敗、防御率1・65。1年生投手としては史上初めて、春季リーグ戦のベストナインに選出された。第56回大学選手権では2勝を記録、33年ぶりの選手権制覇に貢献し、最高殊勲選手に選ばれた。

秋季、開幕の東大戦で斎藤は先発を務め勝利投手。1年生投手が春秋ともに開幕戦の先発を務めるのは1929年帝大の古館理三以来4人目。1年生投手が春秋ともに開幕戦勝利を収めたのは宮武三郎以来80年ぶり。1年生選手の春秋連続ベストナイン受賞は上本博紀（09年スポーツ・広陵高、阪神）以来2人目、投手では初だった。

人氣が低迷しているといわれていた東京六大学野球も、日本テレビが試合中継に乗り出し、対明大2回戦では観客3万人。優勝が決まった対慶大2回戦では、3万6000人の観衆が集まり立ち見が出た。満員になったのは1997年春の早慶戦以来10年ぶりだった。

また、07（平成19）年の春季リーグの早大戦での観客は、11試合で22万8000人、前年度に比べ、3倍近く増えた。

「この1年は斎藤一色になるはず。ならばまず中野でいこう」。編集長の八木は「新歓号」であえて斎藤ではなく中野友加里（08年人科卒・相山女学園高、早大大学院、プリンスホテル）を取り上げた。八木がひそかに心配していたのは、「斎藤がもし、活躍できなかつたら、どう扱えばいいか。どんな論調で書いていけばいいか」ということだった。しかし、八木の心配を

よそに、斎藤は期待どおりに活躍、早大そのものまで背負ってくれているようだ。

08年の主将は上本博紀。松本啓二郎(09年スポ卒・千葉経大付高、横浜)、細山田武史(09年スポ卒)ら、プロ入りする選手が揃っていた。投手の須田幸太(09年スポ卒・土浦湖北高)は、斎藤にエースの座こそ譲っていたものの、マウンド上でのガッツは観る者を惹きつけた。

清宮監督就任でラグビー復活

2000(平成12)年、ラグビーは監督に益子俊志が再登板。山下大悟(03年人科卒・桐蔭学園高、サントリー)、上村康太(03年人科卒・国学院久我山高、サントリー)、大田尾竜彦(04年人科卒・佐賀工高、ヤマハ)らが成長し、春から期待はあった。しかし正月を迎えることができず、江原和彦(05年人科卒・筑紫高)主将時代までは悲運の世代が続く。

そして清宮克幸が2001年、ついに監督に就任する。キャプテンは左京泰明(02年二文卒・東筑高)だった。

前年までは慶大が上田昭夫の監督復帰で復活した最盛期。99、00年には対抗戦で2連覇していた。早大はまず早慶戦でその慶大の対抗戦20連勝を止めることになる。清宮監督は「慶大には勝てると思っていた」と豪語した。ラグビー班の「期待が確信に変わった」瞬間でもあった。そして早明戦、ロスタイムで8点差をひっくり返す。山本功(03年法卒・横手高)は清宮番と

して、そのカリスマ性に感心していた。

その勢いで、大学選手権でも決勝に進む。佐藤編集長は業務に「ペラでもいいから決勝号外を作らせてくれ」と頼み込む。カラーではなかったが、この代の唯一の号外になった。しかし関東学院大に16―21で負けてしまう。

この代には田原耕太郎（02年人科卒・東福岡高）、武川正敏（02年人科卒・日川高）、西辻勤（02年教卒・御所工高）などがいた。

早大ラグビーが完全復活したのは02（平成14）年。「早明ラグビー号」は「山下天下無双」の1面だった。この年、「さよならイベント」で早稲田ラグビーの聖地、東伏見から上井草に本拠を移す。9月10日、上井草で初練習、16日のオックスフォード戦が柿落としいになった。

1月15日、大学選手権決勝で関東学院大を27―22で撃破し、13年ぶりの全国優勝。「1月号」で1面にした。

寿美編集長は「野球、ラグビーの号外もあって発行回数、部数は今までで一番多かった」という。アメフトも甲子園ボウルに出場し、この時も号外を出した。

翌03（平成15）年12月7日、清宮早大は29―17で早明戦に勝ち、大学選手権準決勝でも同大に38―33。しかし、関東学院大との決勝は7―33で敗れた。主将は大田尾竜彦。川上力也（04年人科卒・国学院久我山高、リコーブラックラムズ）などが活躍した。

翌04（平成16）年、ラグビー部は対抗戦優勝。「早明ラグビー号」は主将の諸岡省吾（05年法卒・

国学院久我山高、電通）を取り上げた。早明戦は49―19の完勝。1月9日には「ラグビー（大学選手権）決勝号外」を出した。31―19で関東学院大に勝ち、2年ぶりの大学日本一に輝く。「1月号」は「荒ぶる」の1面。この世代は内橋徹（05年政経卒・明善高）、桑江崇行（05年人科卒・茨木高）、後藤翔太（05年人科卒・桐蔭学園高）、安藤栄次（05年人科卒・熊谷工高）など精銳が揃っていた。

トヨタ自動車を破る

ラグビーの取材というと、ラグビータウンの菅平はもとより、秋田など地方の試合にも行った。高田馬場駅前のロータリーに集合して、ワゴンを借りて数人で行く。高速代、レンタカー代を2005（平成17）年度のラグビー班は割り勘にした。清宮監督の一挙手一投足を見ておきたかったのだ。

06年1月8日に関東学院大に勝って2年連続13度目の学生日本一。「1月号」は「史上最強の荒ぶる」。そして、2月12日には、28―24で社会人上位チームのトヨタ自動車を破る。18大会ぶりの学生の快挙だった。

代替わりをした直後のことで、2年生の大迫は「トヨタに勝ったら号外を作ろうか」と漠然と思っていた。「いい勝負になる、という報道ばかりが先行していて、ホントに勝てるだろう

か半信半疑だった」からだ。

当日は「早稲田コール」が響き、グラウンドで写真を撮っていた増田仁（08年二文卒・札幌北高）は鳥肌が立った。横にいたカメラマンは「何かが起きる」と言っていた。一緒に見ていた和泉恵太（08年卒）は勝った瞬間に泣きながら、記者会見に向かった。

大迫は「とにかく選手のコメントを取ろう」と増田から取材用のパスを借り受ける。前年の主将だった諸岡省吾も近くにいたので話を聞いた。一緒に行った4人はとにかく興奮していた。喫茶店のベローチェで「号外をどうしよう」と話し合った。業務に電話をし、「去年からの金が残っている。余裕はある」という答えを得た。渉外からは「時間的な余裕もある」といわれた。そこから日刊に電話をした。ゲームを見ていた担当者も「作るべきだよ」といつてくれた。細野恭代（08年卒）が「原稿は問題ない、間に合う」と請け負って、全員のゴーサインが揃った。そして翌々日に降版というスピード発行にこぎつけた。

「大勝利」の見出しの号外は翌週の東芝府中戦の開場で配る予定だった。しかし2年以下は春の合宿と重なっていた。そこに引退していた3年の五島の代が「手伝うよ。配るよ」と申し出てくれた。いつもは我関せずの3年野球班も「また、号外を配れるとは思っていなかった」と参加してくれた。「瞬く間に新聞はなくなった」と聞いた。清宮監督から「ありがとう」という言葉も届いた。

「清宮監督が社会人との開いた差を縮めてきた5年間」（号外）の成果が発揮された勝利だっ

た。

佐々木隆道（06年人科卒・啓光学園高、サントリー）、青木佑輔（06年教卒・国学院久我山高、サントリー）らの集大成だった。

中竹監督でV2

2006（平成18）年はラグビー部に中竹竜二監督が就任。部員たちに「早スポに協力してやって」ということをいつてくれた。

細野恭代は五郎丸歩（08年スポ卒・佐賀工高）が好きで、彼の1面を作りたかったが、「早慶ラグビー号」では今村雄太（07年スポ卒・四日市農芸高）で作るほうに回った。五郎丸は取材に対して「それにはさつき答えましたよ」というように、そっけなく、恐い印象があった。だが、そんな五郎丸から話を聞きだすのが、細野は得意だったのだ。

「早明ラグビー号」の1面は東条雄介（07年教卒・国学院久我山高）だった。試合の結果は早慶戦が41―26、早明戦が43―21とともに完勝して対抗戦優勝。その勢いのまま大学選手権も勝ち進み、「ラグビー決勝号外」を作ったが、決勝では26―33と関東学院大に惜敗した。「1月号」は「敗戦早大」の1面だった。

この年の主将は東条雄介。曾我部佳憲（07年教卒・啓光学園高）、首藤甲子郎（07年スポ卒・

桐蔭学園高）、今村雄太、矢富勇毅（07年スポ卒・京都成章高）などBKに逸材が揃っていた。翌07年は対抗戦7連覇を達成。08年1月12日、大学選手権決勝の行われる国立競技場で権丈組の「優勝号外」を配布した。決勝は39年ぶりの早慶決戦で、26―6と圧勝し2年ぶりの優勝となった。

権丈太郎（08年スポ卒・筑紫高）、臼井陽亮（08年スポ卒・横須賀高）、畠山健介（08年スポ卒・仙台育英高）、有田幸平（08年スポ卒・啓光学園高）、五郎丸歩ら4年生の団結力が高かったチームだった。また、山中亮平（スポ・東海大仰星高）、中浜寛造（スポ・大工大高）など1年生も活躍した。

07年度はこのラグビーに加えて、斎藤佑樹の野球も優勝。箱根駅伝でも駒野亮太（08年スポ卒・早実高）の5区区間賞などで往路優勝を果たした。ア式蹴球部もインカレを制するなど、早大のスポーツは全般的に当たり年だった。おかげで新聞の発行回数なんと19回、早スポ史上最多かった。

翌08年のラグビー部は豊田将万（09年スポ卒・東福岡高）が主将。瀧澤直（理工4年・千種高）、橋本樹（09年スポ卒・国学院久我山高）、上田一貴（09年教卒・啓光学園高）、小峰徹也（09年スポ卒・清真学園高）、田中渉太（09年スポ卒・佐賀工高）、長尾岳人（09年スポ卒・本郷高）らが主力。対抗戦の優勝は逃した。だが、大学選手権では対抗戦で敗れた帝京大にリベンジを果たし、見事にV2を達成している。

どん底から復活したア式蹴球部

ア式蹴球部は1990年代半ばから低迷期が続いた。96（平成8）年に1部リーグ優勝を果たしながら、翌97年には2部リーグ転落という、ジェットコースター的な天国と地獄を経験したのだ。2部転落に立ち会った早スポの女性担当者は泣いた。しかも、入れ替え戦で負けた相手がライバルの慶大だったのだからショックは大きい。00年にはついに都リーグにまで降格してしまう。

末延（現姓川上）智子（02年一文卒・都調布高）が入学した時は2部。3年生の最後の試合で都リーグ落ちを目撃することになる。試合後、自身も目を腫らしながら、それでも選手の取材に行くと、次年度の主将就任が決まっていた青嶋晶（02年卒、藤枝東高）が「今日は無理です……」と取材拒否。いつもは丁寧に答えてくれるのに、この日だけはさすがにダメだった。本当に悪夢のような一日だったという。

00年は早スポの財政面でもつらい年だった。前の年までは安定して広告を出してくれていたあるスポーツ紙が「急に投稿を断ってきた」からだ。まさに青天の霹靂だった。代理店周りもしたが埋まらない。紙面の都合上、入金のない、スペースを埋めるためだけの広告をもらったこともあった。

02年の年明け、フィギュアスケートの村主章枝（03年教卒・清泉女学院高）が3年生の時に世界選手権で3位になった。編集長の寿美は、借り写真だったが村主の綺麗な演技写真を1面にした「新歓号」を作った。

同じ02年に米式蹴球部（アメリカンフットボール部）が『早慶戦号』と甲子園ボウル出場が決まったら、号外を出してください」と頼んできた。寿美編集長の代でこのアメフトの号外2回などを含め、発行回数と部数が増えた。

「アメフト号外」、「ヨット号外」、05年には「ラクロス号外」も始まる。つい4～5年前の苦境が嘘のような、「号外バブル」とでもいうべき活況ぶりである。

06年10月28日には、テニスの「王座君臨」の号外も出した。「優勝したら号外を出してほしい」と以前からいわれていたのだ。この号外は今もクラブハウスに飾ってくれている。

02年、ア式蹴球部は都リーグから2部への昇格を果たす。

04年の「新歓号」は徳永悠平（06年スポ卒・国見高、FC東京）が1面。8月に開催されたアテネ五輪にはこの徳永も出場した。この年、大榎克己（88年卒・清水東高、清水エスパルス）が監督になって、ようやく1部復帰も果たす。

06年2月、編集長の五島は自身の代の総決算として、表のみの1枚だったがカラーの「トリノ号外」を出した。荒川静香（04年教卒・東北高、プリンスホテル）が金メダルを獲得する大

会である。大学の入試の時期に合わせた発行で、対外的なアピールも狙った。戸山警察署に許可を取って、試験を終えた受験生が出てくるのを、門の前で待っていて配ったものだ。約2週間にわたる入試期間に合わせて、部内でシフトを組んで配った。

この06年の「新歓号」1面は、当時3年生だった中野友加里のカラー写真で組んだ。この号は記念の「400号」でもある。日比野弘、清宮克幸、アメフトで甲子園ボウルに導いた波木健太郎（04年法卒・駒場学園高）が「大学スポーツを斬る」という企画に登場している。早スポ前会長でもある日比野は、ラグビー予想など早スポ紙面への登場回数は数え切れない。おそらく最多であろう。

この頃は、多方面のメディアから早スポに原稿の依頼がある。『Jスポーツ』の大学ラグビーの原稿、スポーツ関係のフリーペーパーの原稿もある。出稿依頼には積極的に応えた。部員たちの視線は大学の外にも向けられている。

* * *

創刊50周年となる2009年、政権が交代し、長く続いた戦後の秩序が急激に崩壊しつつある。50年も経てばこういう時代も巡ってくる。早スポ創刊当時のメンバーは、いったいどんな50年後を想像していたのだろう。時は移ろうものだ。早大のスポーツはこの間に隆盛と凋落を

繰り返し、さまざまなドラマを演じてきた。登場する人物の名前も性格も変わっていく。しかしスポーツシーンとともに流れる『コンバットマーチ』や『荒ぶる』は永遠に続いてくれるのではないだろうか。伝統というもののへの期待とはそういうことなのだ。あえて付け加えれば、ペンの力もまた変わらず衰えることがない。早スポが50年にわたって紙面を通じて伝えてきた真実の重みは変わらないはずだ。それが報道である。学生が作るスポーツ新聞にも、それだけの矜持はある。

早スポの部員たちはペンを駆伝の櫓のように次の世代へと引き継ぐ。そして50年後、100年後へといつまでも走り続けるのである。

第三部

早スポと早稲田大学体育各部の50年「記録集」

早稲田大学体育各部の歩み

明治32年	弓術部創立
明治34年	野球部創立。学習院と最初の対外試合（7―6で勝利）
明治35年	弓術、野球、剣道、柔道、庭球、端艇の6部で体育部発足。戸塚球場（安部球場）竣成。
明治36年	野球部、慶大と初試合（9―11で敗戦）
明治37年	第1回校内ボートレース。早慶テニス日没中止
明治38年	野球部第1回アメリカ遠征。戦績は7勝19敗。漕艇第1回早慶戦。1挺身差で勝利。秋より早慶野球三回勝負に
明治39年	野球早慶戦中止に。以後、早慶対校競技すべて中絶
明治43年	野球部ハワイ遠征。水泳部体育部加入。早慶テニス、三田・稲門名義で試合
明治44年	野球部第2回アメリカ遠征。早慶明3大学野球連盟発足
明治45年	野球部第1回フィリピン遠征
大正3年	競走部体育部加入
大正4年	野球部第2回のフィリピン遠征
大正5年	野球部第3回アメリカ遠征
大正6年	相撲部体育部加入。野球部、満州・朝鮮遠征（8戦全勝）
大正7年	ラグビー部創立、体育部加入。アントワープ五輪に三浦弥平がマラソンに出場、24位。早稲田から初出場
大正8年	野球のリーグ戦、3戦方式に
大正9年	庭球部硬式化。山岳部体育部加入。第1回箱根駅伝が行われ、早稲田は3位に（優勝は東京高等師範）。
大正10年	体育部が体育会に改称。野球部第4回アメリカ遠征。5大学野球連盟発足馬術、バスケットボール、スケート部創立
大正11年	山岳部より分離レスキー部創立、体育会加入。ラグビー第1回早慶戦（0―14で敗戦。箱根駅伝で初優勝。河野一郎、河野謙三兄弟が快走した
大正13年	スケート、ア式蹴球、バスケットボール部が体育会加入
大正14年	野球の早慶戦が復活（11―0、7―1）。東京六大学野球連盟発足。初の六大学リーグは10勝1敗で優勝
大正15年	神宮球場開場
昭和2年	馬術部体育会加入。ボクシング部創立。野球部第5回アメリカ遠征。ラグビー部オーストラリア遠征。バスケット部アメリカ遠征
昭和3年	卓球部加入。サンモリッツ冬季五輪にスキー部矢沢武雄、竹節作太、永田実が出場。アムステルダム五輪で競走・織田幹雄が陸上三段跳びで金メダル、南部忠平が4位に。水泳・高石勝男が100m自由形で銅メダル獲得

昭和4年	ボクシング部体育会加入
昭和5年	庭球・佐藤次郎が学生選手権、全日本選手権に優勝。その後昭和7年の全英でベスト4、翌年の全英でもベスト4に入り、世界ランク3位になった
昭和6年	空手部、レスリング部創立
昭和7年	リーグブラシッド冬季五輪にスキー・岩崎三郎、坪川武光が出場。ロサンゼルス五輪で競走・西田修平が棒高跳びで銀メダル、水泳・横山隆志が8000メートルリレーで金メダルを獲得。入江稔夫も1000メートル背泳ぎで銀メダル、ホッケ―では今治彦、左右田秋雄が銀メダルを獲得した。ラグビーが初の全国制覇
昭和8年	体操部、空手部が体育会加入。野球秋の早慶戦で「リンゴ事件」発生。従来の応援団が解散され、体育会各部から代表を出す体育会主体とした新応援団となる。バレーボール部創立
昭和9年	自動車部創立。バレーボール、レスリング、自動車、空手部が体育会加入
昭和10年	バレーボール部全日本選手権初制覇
昭和11年	ガムミッシュ・バルテンキルテン冬季五輪にスキー・龍田峻次、スケート・石原省三、アイスホッケ―・亀井信吉、市川辰雄が出場。ベルリン五輪で水泳・杉浦重雄が8000メートルリレーで金メダルを獲得、植野正蔵が4000メートル自由形で銅メダル。競走・西田修平は棒高跳びで2大会連続の銀メダルを獲得した
昭和13年	米式蹴球部が体育会加入。ハンドボール部創立。野球部ハワイ遠征
昭和14年	ヨット部体育会加入
昭和17年	ハンドボール部が体育会に入会するも、11月体育会解散
昭和18年	安部球場で学徒出陣早慶戦が開催される
昭和21年	軟式野球部創立。体育会が復活、ホッケ―、フェンシング、応援が加入
昭和22年	軟式野球、軟式庭球が体育会加入
昭和27年	体育局誕生。自転車部、バドミントン部、航空部加入。オスロ冬季五輪にスキー・吉沢宏司、スケート・五味芳保が出場。ヘルシンキ五輪で水泳・長沢二郎が200メートル平泳ぎで五輪新をマーク(6位)
昭和28年	ワンダーフォーゲル部体育局加入。山岳部がアコンカグア登頂に成功
昭和29年	日本で開催されたスピードスケート世界選手権に五味芳保が出場。スキー世界選手権に吉沢宏司、柴野宏明、斎藤貢が出場
昭和31年	ゴルフ、ウエイトリフティングが体育局加入。コルチナ・ダンベツオ冬季五輪にスケート・五味芳保が出場。メルボルン五輪に競走・桜井孝次らが出場
昭和32年	射撃部が体育局加入。記念会堂が落成
昭和33年	合気道部が体育局加入。
昭和34年	早稲田スポーツ創刊。清原健司会長、松井益編集長

早稲田大学体育各部「50年の栄光」 (早スポ創刊以後…成績は主なもの)

昭和34年度

野球…春の六大学優勝、大学選手権も初制覇。水泳…山中毅、日本選手権2冠。
日米対抗400メートルで世界新記録樹立

年度

野球

ラグビー

競走

部

戦績

部

戦績

◆学生王者への戦い◆

◆日本一へ、世界へ◆

1959.4 ~ 1960.3

優勝

2位

4位

5位 (⑥、⑤)

春秋

対抗戦

箱根駅伝

競走

相撲

水泳

庭球

野球

学生対校…男子Ⅱ藤井忠彦
3000メートル障害、黒川澄夫20
キロ優勝

学生選手権…小谷修一優勝
(学生横綱)

学生選手権…男子Ⅱ山中毅
400メートル自由形、800メートル自由
形優勝 大崎剛彦200メートル平泳
ぎ優勝

学生選手権…広瀬均・崎口俊也
ダブルス優勝、福井昭子・シングル
ス2連覇 福井昭子・高木美絵
子ダブルス優勝

春季六大学…優勝。大学選手
権…初優勝(4—3関西学院大)

レスリング

競走

水泳

漕艇

全日本選手権…田代孝グレコフ
ライ級優勝

日本選手権…久保宣彦200
メートル、田中清司1500メートル優勝

日本選手権…山中毅400メートル、
1500メートル自由形優勝。大崎剛
彦200メートル平泳ぎ優勝

全日本選手権…舵付ペア優勝

1960.4 ~ 1961.3	昭和35年度	※早稲田スポーツ編集長…松井盈		◆小野梓記念スポーツ賞の表彰始まる。 第1回受賞者は水泳部・山中毅					
2位	野球部…秋の六大学早慶戦、優勝決定戦で6連戦の激闘。 安藤元博5完投49イニング投げ抜いて優勝								
優勝									
5位									
7位 (⑨、⑧)									
野球				軟式庭球	自動車	スキー			
リーグ戦 早稲田2—1慶応 (安藤完投) 早稲田1—4慶応 早稲田3—0慶応 (安藤完封)	〈早慶戦6連戦〉 秋季六大学…優勝。早慶6連戦、 安藤元博5完投	学生選手権…団体優勝		学生運転競技大会…優勝	学生選手権…男子Ⅱ松井孝ジャンプ、塚田辰雄滑降、見谷昌禧回転優勝				
スキー	競走			スキー					
優勝 全日本選手権…松井孝ジャンプ	日本選手権…飯島恵喜4000メートル障害優勝			多田修滑降46位、大回転35位、 回転26位。見谷昌禧滑降53位、 大回転33位、回転失格。松井孝ジャンプ30位		〈スコーパーレー冬季五輪〉			

1960.4 ~ 1961.3				年度	昭和35年度
2 位				春秋	野球
優勝				対抗戦	ラグビー
5 位				箱根駅伝	競走
7 位 (⑨、⑧)				部	◆学生王者への戦い◆
水泳	競走	野球		戦績	◆日本一へ、世界へ◆
学生選手権・男子Ⅱ福井清1000 メートル自由形、梅本利三4000メートル自由 形、8000メートル自由形優勝。8000 メートル、4000メートルドレーリ 優勝	学生対校・男子Ⅱ飯島恵喜 4000メートル障害優勝	優勝決定戦 早稲田1—1慶応（延長11回。 安藤完投） 再試合 早稲田0—0慶応（延長11回。 安藤完封） 再々試合 早稲田3—1慶応（安藤完投）			
競走	〈ローマ五輪〉	ボクシング	レスリング	水泳	部
太田富夫三段跳び予選落ち		全日本選手権・堤五郎フライ級 優勝	全日本選手権・利光紀グレコバン タム級優勝	日本選手権・山中毅4000メ ートル自由形2連覇。大崎剛 彦2000メートル平泳ぎ2連覇。中川 清1000メートル平泳ぎ、吉無田春男 2000メートルバタフライ優勝	戦績

※早稲田スポーツ編集長…松井盈	②明大 119ポイント ①早大 131ポイント ◎大学スポーツランキング◎					
自動車	相撲	庭球	馬術	卓球	スキー	
学生運動競技大会…優勝	学生選手権…団体優勝 (3—2日大)	学生選手権…福井昭子・高木美絵子ダブルス優勝	学生選手権…真田幸昌馬場馬術優勝	学生選手権…高柳千明・明石重治男子ダブルス優勝	学生選手権…男子Ⅱ見谷昌禧滑降、回転優勝	
ウエイトリフティング		ホッケー	水泳		ボクシング	
大沼賢治ライト級失格		木原征治1次リーグ敗退	山中毅400メートル自由形銀メダル、 1500メートル自由形4位、800メートル リレー銀メダル。大崎剛彦200 メートル平泳ぎ銀メダル、400メートルメド レーリレー銅メダル。吉無田春男 200メートルバタフライ5位。井筒賢 造200メートルバタフライ8位。		伊藤靖倅ライト級3回戦	

1961.4 ~ 1962.3						年度	昭和36年度
4位						春秋	卓球
4位						対抗戦	ラグビー
7位						箱根駅伝	競走
12位 (⑭、⑪)						部	◆学生王者への戦い◆
庭球 学生選手権…黒松和子シングルス優勝	スキー 学生選手権…男子Ⅱ総合優勝。 松井孝ジャンプ、藤沢隆複合優勝	競走 学生対校…男子Ⅱ下哲三段跳び、三木孝志やり投げ優勝	相撲 学生選手権…新保茂優勝 (学生横綱)	水泳 学生選手権…男子Ⅱ総合優勝。 中川清1000 ^{メートル} 、2000 ^{メートル} 平泳ぎ、吉無田春男2000 ^{メートル} バタフライ、2000 ^{メートル} 、8000 ^{メートル} リレー、400 ^{メートル} メドレーリレー優勝。土佐忠雄飛板飛込み優勝	卓球 学生選手権…木村興治・上田浩ダブルス優勝	戦績	
スケート	スキー	競走	漕艇	水泳	卓球	部	◆日本一へ、世界へ◆
	全日本選手権…石幡忠雄5000 ^{メートル} 優勝	優勝 全日本選手権…大平義博大回転	優勝 日本選手権…里勝安1500 ^{メートル} 、下哲三段跳び、三木孝志やり投げ	全日本選手権…舵付ペア優勝	日本選手権…吉無田春男2000 ^{メートル} バタフライ2連覇	戦績	
					ダブルス優勝 全日本選手権…木村興治シングルス優勝。世界選手権…木村興治ダブルス優勝		

1962.4 ～ 1963.3		昭和37年度 水泳…学生選手権制す。 リリース3種目完全制覇。松本健次郎は平泳ぎ2冠	※早稲田スポーツ編集長…西川昌衛					
4位								
5位								
10位 (⑦、⑪)								
庭球		軟式野球		自動車	レスリング	弓道		
学生選手権…黒松和子シングルス2連覇		全日本大学…優勝(4—2法大)		学生運動競技大会…優勝	学生選手権…国井玄雄フリーミドル級優勝	学生選手権…団体優勝		
ボクシング	漕艇	スキー		水泳		〈ユニバーシアード〉		
全日本選手権…柄沢正夫フライ級、白鳥金丸ライト級、益田弘ニライトミドル級優勝	全日本選手権…舵付ペア、ダブルスカル優勝	見谷昌禧回転銅メダル		〈冬季ユニバーシアード〉 福井清1000 ^{メートル} 自由形銅メダル。 吉無田春男2000 ^{メートル} バタフライ金メダル、4000 ^{メートル} メドレーリレー金メダル。福井清・吉無田春男400 ^{メートル} リレー金メダル。土佐忠雄飛板飛び込み金メダル				

1962.4 ~ 1963.3				年度	昭和37年度
4位				春	野球
5位				秋	野球
Bブロック優勝				対抗戦	ラグビー
10位 (⑦、⑪)				箱根駅伝	競走
スキー	競走	水球	水泳	部	戦績
学生選手権…男子Ⅱ総合優勝。 藤沢隆複合、佐々木昌平15 ^キ 、 中村行成滑降、伊藤敏信回転 優勝	学生対校…男子Ⅱ蒲田勝100 ^メ 、200 ^メ 、下哲三段跳び、 林茂樹やり投げ優勝。400 ^メ リレー優勝	学生選手権…優勝 (3—3日大。反則数による)	学生選手権…男子Ⅱ総合2連覇、 松本健次郎100 ^メ 、200 ^メ 平泳ぎ、梅本利三200 ^メ 自由形優勝。400 ^メ リレー、 800 ^メ リレー、400 ^メ メドレ ーリレー優勝。土佐忠雄飛板飛 込み、高飛込み優勝	部	◆学生王者への戦い◆
弓道		競走	卓球	部	戦績
全日本王座…優勝		日本選手権…男子400 ^メ リレー 優勝	全日本選手権…木村興治混合ダ ブルス優勝	部	◆日本一へ、世界へ◆

水泳…学生選手権制す。リレー3種目完全制覇。松本健次郎は平泳ぎ2冠

※早稲田スポーツ編集長…堤哲						
	自転車	体操	弓道	レスリング	アイスホッケー	
	競走優勝 学生選手権…角田広 ^キ _ロ 速度	学生選手権…加藤武司種目別つ り輪優勝	学生王座…男子団体優勝	学生選手権…秋山行晴グレコ イト級優勝	学生選手権…優勝 (8—5中大)	

1963.4 ~ 1964.3					年度	昭和38年度
5位					春	野球 体操…加藤武司、ユニバーシアード団体金メダル。 庭球…黒松和子は学生選手権シングルス3連覇
5位					秋	
2位					対抗戦	
7位 (⑩、⑤)					箱根駅伝	競走
スキー	水泳		庭球	競走	野球	部
大学選手権…男子Ⅱ総合優勝。 藤沢隆複合優勝	学生選手権…男子Ⅱ総合3連覇、岡部幸明100メートル自由形、200メートル自由形、松本健次郎100メートル平泳ぎ、200メートル平泳ぎ優勝。400メートルリレー、800メートルリレー、400メートルメドレーリレー優勝。土佐忠雄飛板飛込み、高飛込み優勝		学生選手権…黒松和子シングルス3連覇、渡辺功シングルス、北村淳子・鯨井芳江ダブルス優勝	学生対校…男子Ⅱ下哲三段跳び優勝	春季六大学…三原啓治首位打者	◆学生王者への戦い◆
フィギュア	スキー	水泳	庭球	ア式蹴球		部
全日本選手権…福原美和シングルス優勝	全日本選手権…大坊保雄複合優勝	日本選手権…松本健次郎200メートル平泳ぎ、土佐忠雄飛板飛込み優勝	全日本選手権…渡辺功ダブルス優勝	全日本選手権…優勝(3-0日立製作所。釜本邦茂、森孝慈)		◆日本一へ、世界へ◆
						戦績

					弓道	自転車	軟式庭球		
					学生王座…団体優勝	大学対抗…山口博司ロードレース優勝	大学対抗…団体優勝		
水泳	競走	〈ユニバーシアード〉	スキー	フィギュア	〈インスブルック冬季五輪〉	ボクシング	卓球		
福井清400メートル自由形銀メダル	下哲三段跳び金メダル		藤沢隆複合20位。気田義也回転34位、大回転38位	福原美和シングル5位		全日本選手権…柄沢正夫フライ級、白鳥金丸ライト級、益田弘ニライトミドル級優勝	全日本選手権…新関卓・小林健一男子ダブルス優勝		

		昭和39年度	※早稲田スポーツ編集長…中津海光夫		1963.4 ~ 1964.3	年度	昭和38年度
		競走…坂井義則が東京五輪聖火最終ランナー。スキー…藤沢隆学生選手権4連覇			5位	春	野球 ラグビー 競走 ◆学生王者への戦い◆
					5位	秋	
					2位	対抗戦	
					7位 (⑩、⑤)	箱根駅伝	
						部	◆日本一へ、世界へ◆
						戦績	
スキー	野球	春季六大学…小淵進首位打者	スキー	フィギュア	体操	部	◆日本一へ、世界へ◆
勝 学生選手権…男子Ⅱ総合優勝。 藤沢隆複合、松岡昭義30 ^キ 優			藤沢隆複合銅メダル	福原美和シングル金メダル	加藤武司体操団体金メダル、個人総合銀メダル	戦績	
水泳	スキー	全日本選手権…藤沢隆70 ^メ トル、90 ^メ トルジャンプ、気田義也回転優勝	〈冬季ユニバーシアード〉				
飛込み2連覇	日本選手権…松本健次郎200 ^メ トル平泳ぎ2連覇、土佐忠雄飛板						

1964.4 ~ 1965.3					
優勝					
2位					
2位(Bグループ優勝)					
6位 (⑨、⑥)					
剣道	庭球	フィギュア	水球	水泳	
学生選手権…池田健二個人優勝	学生選手権…黒松秀三郎・倉片允ダブルス、鯨井芳江シングル ス優勝、北村淳子・鯨井芳江ダブルス2連覇。学生室内…渡辺功シングルス優勝	学生選手権…福原美和シングル優勝	学生選手権…優勝(5—1日大)	学生選手権…男子Ⅱ総合4連覇。岩崎邦宏1000メートル自由形、2000メートル自由形、松本健次郎1000メートル平泳ぎ、2000メートル平泳ぎ優勝。4000メートルリレー、8000メートルリレー、4000メートルドレーリレー優勝。土佐忠雄飛板飛込み、高飛込み優勝	
水泳		ボクシング		フィギュア	漕艇
岩崎邦宏8000メートルリレー銅メダル、4000メートルリレー4位。松本健次郎2000メートル平泳ぎ準決勝。伊藤圭祐2000メートル背泳ぎ準決勝。土佐忠雄飛板飛込11位		全日本選手権…柄沢正夫フライ級、白鳥金丸ライト級、益田弘ニライトミドル級優勝		全日本選手権…福原美和シングル4連覇	全日本選手権…舵無しフォア優勝

昭和39年度		年度	競走…坂井義則が東京五輪聖火最終ランナー。スキー…藤沢隆学生選手権4連覇			
1964.4 ~ 1965.3			野球	ラグビー	競走	
優勝		春秋	対抗戦	箱根駅伝		
2位						
2位						
6位 (⑨、⑥)						
軟式野球		自動車	競走	部	戦績	◆学生王者への戦い◆
全日本学生…優勝 (7-0 東農大)		学生運転競技大会…優勝	学生対校…男子Ⅱ飯島秀雄 200 ^{メートル} 、秋田弘吉1500 ^{メートル} 、 村松勇やり投げ優勝。400 ^{メートル} リレー優勝。			
ボクシング	ア式蹴球	漕艇	競走	水球	部	◆日本一へ、世界へ◆
高山将孝フェザー級2回戦。白 鳥金丸ライト級3回戦。益田弘 ニライトミドル級2回戦	森孝慈・釜本邦茂7位	大西恵弘エイト10位。松田征男・ 芳野法一舵付フォア敗者復活敗 退。三木俊介・本間康二・塚 本公樹・木村文三舵無フォア12 位。細谷進・村瀬康ダブルスカ ル10位	飯島秀雄100 ^{メートル} 準決勝、 200 ^{メートル} 棄権、400 ^{メートル} リレー 予選敗退	竹内和也・皐月啓左1次リーグ 敗退	戦績	

※早稲田スポーツ編集長…江口拓

◆東京五輪の聖火最終走者を務めたのは、競走部1年の坂井義則。坂井は昭和20年8月6日、広島に原爆が投下された日に広島県三次市で生まれた。坂井は2年後の日本選手権400^{メートル}で優勝した

1965.4 ~ 1966.3						昭和40年度	
3位						コンバットマーチ誕生。秋の早慶戦で初登場、慶応連破し優勝。 フィギュア…福原美和ユニバ2大会連続金メダル	
優勝							
優勝							
7位 (⑧、⑦)							
水泳					ラグビー		
学生選手権…男子Ⅱ総合5連覇。岩崎邦宏1000メートル自由形、2000メートル自由形、藤島祥三4000メートル自由形、15000メートル自由形、伊藤圭祐1000メートル背泳ぎ、山南宏一1000メートル平泳ぎ、松本健次郎2000メートル平泳ぎ、門永吉典2000メートルバタフライ優勝。4000メートルリレー、8000メートルリレー、4000メートルメドレーリレー優勝。坂手昭治飛板飛込み優勝					大学選手権…優勝（16—0 法大）		
卓球	弓道	フィギュア	スキー	水泳	ラグビー	ホッケー	
全日本選手権…斎藤敏男・鍵本肇男子ダブルス優勝	全日本選手権…女子団体優勝	全日本選手権…福原美和シングル優勝	全日本選手権…気田義也回転2連覇	日本選手権…松本健次郎2000メートル平泳ぎ3連覇	日本選手権…優勝（12—9 八幡製鉄。矢部達三、山本巖）	橋本征治・吉村実5、6位トーナメント	

※早稲田スポーツ編集長…齊藤楨 ◆応援曲「コンバットマーチ」が誕生。応援部夏合宿で曲が作られ、秋の早慶戦で披露された。優勝のかかった早慶戦で効果テキメン、慶応を連破し3季ぶり優勝を飾った		1965.4 ~ 1966.3		年度		昭和40年度	
		3位		春秋		野球	
		優勝		対抗戦		ラグビー	
		優勝		箱根駅伝		競走	
		7位 (⑧、⑦)		部		◆学生王者への戦い◆	
弓道	スキー	フィギュア	剣道	競走	庭球		部
学生選手権…女子団体優勝	学生選手権…伊藤吉彦複合、気田義也回転優勝	小塚嗣彦シングル優勝	学生選手権…団体優勝	学生対校…男子Ⅱ飯島秀雄100メートル200メートル優勝	学生選手権…女子Ⅱ鯨井芳江シングルス2連覇、北村淳子・鯨井芳江ダブルス3連覇。学生室内…男子Ⅱ黒松秀三郎・倉片允ダブルス優勝。女子Ⅱ北村淳子・鯨井芳江ダブルス優勝		戦績
スキー		フィギュア	〈冬季ユニバーシアード〉	水泳	競走	漕艇	部
		福原美和シングル金メダル		岩崎邦宏・藤島祥三・岩本和行800メートル銅メダル	飯島秀雄1000メートル金メダル	全日本選手権…エイト優勝	戦績
		松岡昭義40キロリレー銀メダル		〈ユニバーシアード〉			◆日本一へ、世界へ◆

コンバットマーチ誕生。秋の早慶戦で初登場、慶応連破し優勝。フィギュア…福原美和ユニバ2大会連続金メダル

1966.4 ~ 1967.3					昭和41年度 ア式蹴球…森孝慈、釜本邦茂擁し全日本選手権で東洋工業破り3年ぶり日本一。 漕艇…全日本選手権エイト2連覇		
2位						卓球	学生選手権Ⅱ団体優勝 (3—0中大)
優勝							
2位							
10位 (⑩、⑩)							
		競走	ア式蹴球	ラグビー			
		優勝 100 ^{メートル} 学生対校…男子Ⅱ飯島秀雄 井上栄千彦800 ^{メートル}	大学選手権…優勝 (4—0中大)	大学選手権…2連覇 (18—3法大。藤本忠正)			
漕艇	水泳	競走	ア式蹴球	ホッケー			
全日本選手権…エイト2連覇、 ダブルスカル優勝		日本選手権…坂井義則400 ^{メートル} 葛西康二十種競技優勝	全日本選手権…優勝 (3—2東洋工業)	全日本選手権…優勝 (3—1慶大)			

1966.4 ~ 1967.3				年度	昭和41年度
2位				春秋	野球
優勝				対抗戦	ラグビー
2位				箱根駅伝	競走
10位 (⑩、⑩)				部	◆学生王者への戦い◆
フィギュア	水球	水泳		戦績	◆日本一へ、世界へ◆
優勝 学生選手権…田村正人シングルの優勝	学生選手権…優勝 (5-5日大。反則数による)	学生選手権…男子Ⅱ総合6連覇。岩崎邦宏100メートル自由形、200メートル自由形、田中毅司雄100メートル背泳ぎ、200メートル背泳ぎ、400メートル個人メドレー、山南宏一100メートル平泳ぎ、門永吉典100メートルバタフライ優勝。400メートルリレー、800メートルリレー、400メートルメドレーリレー優勝。前川剛三飛板飛び込み優勝		戦績	
ボクシング		自転車	フィギュア	部	◆日本一へ、世界へ◆
優勝 全日本選手権…柄沢正夫ライトフライ級、高山将孝ライト級		全日本選手権…中原曙観ロードレース優勝	全日本選手権…小塚嗣彦シングル優勝	戦績	

ア式蹴球…森孝慈、釜本邦茂擁し全日本選手権で東洋工業破り3年ぶり日本一。
漕艇…全日本選手権エイト2連覇

※早稲田スポーツ編集長…佐瀬正弘	◆サッカーの全日本選手権で大学チームが優勝したのはこの年が最後。以降は44年度に立大が決勝に進んだのが最高（1—4 東洋工業）							
航空	空手	卓球	柔道	アイスホッケー	スキー	庭球	自転車	
学生選手権…宮坂充江優勝	個人選手権…小野泰規優勝	優勝 学生選手権…鍵本肇シングルス	勝 学生選手権…山下雅之中量級優勝	学生選手権…優勝 (11—2 法大)	優勝 学生選手権…男子Ⅱ総合優勝。 丸山寿一滑降、佐々木富雄回転	江ダブルス4連覇 学生選手権…北村淳子・鯨井芳	競走優勝 学生選手権…中原曙観1 ^キ 速度	

1967.4 ~ 1968.3						年度	昭和42年度
4位						春	野泳
2位						秋	ラグビー
優勝						対抗戦	箱根駅伝
10位 (⑪、⑨)						箱根駅伝	競走
弓道	野球	空手	馬術	水泳	卓球	部	◆学生王者への戦い◆
学生選手権…女子団体優勝	春季六大学…荒川堯一試合3本塁打(立大戦)。谷沢健一首位打者	勝 学生選手権…小野泰規個人準優勝	学生選手権…織田靖雄優勝	学生選手権…男子Ⅱ有働徹400メートル個人メドレー優勝。400リレー優勝	優勝 学生選手権…河原智シングルス	戦績	
フィギュア	競走	弓道	漕艇	水泳	卓球	部	◆日本一へ、世界へ◆
全日本選手権…小塚嗣彦シングル2連覇	優勝 日本選手権…落合三泰十種競技	全日本選手権…女子団体優勝	勝 全日本選手権…ダブルスカル優勝	日本選手権…有働徹400メートル個人メドレー優勝	全日本選手権…河原智混合ダブルス優勝	戦績	

昭和43年度		昭和42年度	
	※早稲田スポーツ編集長…高橋晃	1967.4 ~ 1968.3	年度
	バスケット…関東選手権、関東リーグ、学生選手権の3冠獲得。 フィギュア…小塚嗣彦は全日本3連覇	4位	春秋
		2位	野球
		優勝	ラグビー
		10位 (⑪、⑨)	対抗戦
ラグビー			箱根駅伝
大学選手権…優勝(14—14慶大) Ⅱ両校優勝。山本巖			部
			戦績
			◆学生王者への戦い◆
水泳	スキー	庭球	部
	義40キロリレー銀メダル	黒松秀三郎シングルス銅メダル	戦績
日本選手権…高田康雄200メートル バタフライ優勝、有働徹400 メートル個人メドレー2連覇	須藤正敏複合銀メダル。松岡昭	有働徹400メートル個人メドレー銅 メダル。田中毅司雄・岩崎邦宏 400メートルリレー銀メダル。 中野悟・岩崎邦宏400メートルリ レー、800メートルリレー銅メダル	◆日本一へ、世界へ◆
	〈冬季ユニバーシアード〉	〈ユニバーシアード〉	

1968.4 ～ 1969.3						
2位						
優勝						
優勝						
14 位 (⑭、④)						
フィギュア	柔道	水泳		弓道	バスケット	
優勝 学生選手権…小塚嗣彦シングル	勝 学生選手権…中川良夫重量級優勝	400 ^{メートル} 個人メドレー優勝 雄200 ^{メートル} バタフライ、有働徹 ぎ、200 ^{メートル} 背泳ぎ、高田康 由形、細川伸也100 ^{メートル} 背泳 100 ^{メートル} 自由形、200 ^{メートル} 自 学生選手権…男子Ⅱ中野悟		学生選手権…女子団体優勝	関東選手権、関東リーグ、学生 選手権…男子優勝(山本雄三M VP)	
水泳		〈メキシコ五輪〉	柔道	弓道	レスリング	フィギュア
中野悟400 ^{メートル} リレー8位、800 ^{メートル} リレー予選落ち、200 ^{メートル} 自由形予選落ち。田中毅司雄400 ^{メートル} メドレーリレー5位、100 ^{メートル} 背泳ぎ予選落ち。高田康雄100 ^{メートル} バタフライ準決勝、200 ^{メートル} バタフライ予選落ち			世界大学選手権…中川良夫重量級金メダル、無差別級銀メダル、団体金メダル	全日本選手権…女子団体2連覇	全日本選手権…渡辺正孝フリーライト級優勝	全日本選手権…小塚嗣彦シングル3連覇

昭和43年度		年度	バスケット…関東選手権、関東リーグ、学生選手権の3冠獲得。 フィギュア…小塚嗣彦は全日本3連覇		
昭和44年度	野球…谷沢健一、6季連続3割をマーク。弓道…全日本選手権女子団体3連覇	野球	対抗戦	◆学生王者への戦い◆	
		箱根駅伝	部	◆日本一へ、世界へ◆	
		成績	戦績		
		庭球	部		ホッケー
		勝	学生室内…坂井利郎シングルス優勝		
1968.4 ~ 1969.3	2位	優勝	優勝	大塚智万・和田明仁13位	
14位 (⑭、④)					
◆関東大学ラグビーが対抗戦グループとリーグ戦グループに分離					
※早稲田スポーツ編集長…竹内毅					
水泳					
学生選手権…沢正二郎100メートル自由形、細川伸也200メートル背泳ぎ、高田康雄200メートルバタフライ、有働徹200メートル個人メドレー優勝。400メートル個人メドレー優勝。400メートルリレー優勝					
弓道	水泳				
全日本選手権…女子団体3連覇	日本選手権…沢正二郎100メートル自由形優勝。高田康雄200メートルバタフライ2連覇				

※早稲田スポーツ編集長…駒沢秀太郎	◆前年の箱根駅伝で14位に終った競走部だったが、部員不足のため予選会に出場できなかった	1969.4 ~ 1970.3						
		2位						
		2位						
		2位						
		欠場						
野球	庭球	自転車	スキー	レスリング	弓道	水球		
谷沢健一 6季連続3割	勝 学生室内…坂井利郎シングルス優勝 坂井利郎・土肥哲ダブルス優勝	優勝 学生選手権…岡島伸平スクラッチ、大原貢一・岡島伸平タンデム優勝	合優勝 学生選手権…男子Ⅱ工藤孝夫複合優勝	キ級優勝 学生選手権…渡辺正孝フリー68	学生選手権…女子団体優勝	(4—2法大) 学生選手権…優勝		
卓球						ワンダーフォーゲル		
世界選手権…田阪登紀夫シングルス3位						北ボルネオ遠征		

1970.4 ~ 1971.3						年度	昭和45年度
2位						春	野球
4位						秋	ラグビー
優勝						対抗戦	箱根駅伝
13位 (⑪、⑬)						箱根駅伝	競走
ホッケー	自転車	水泳		レスリング	ラグビー	部	戦績
学生選手権…優勝 (3—2天理大)	大学対抗…岡島伸平スクラッチ優勝。学生選手権…岡島伸平・太田忠男タシデム優勝	学生選手権…男子Ⅱ沢正二郎100メートル自由形、新井到400メートル自由形、高田康雄2000メートルバタフライ、有働徹2000メートル個人メドレー、4000メートル個人メドレー優勝。8000メートルリレー優勝		学生選手権…長谷川恒夫フリー74キログラム級、磯貝頼秀フリー90キログラム級優勝	大学選手権…優勝(14—9日体大。大東和美、宿沢広朗)	部	◆学生王者への戦い◆
	水泳	漕艇	自転車	レスリング	ラグビー	部	戦績
	日本選手権…有働徹4000メートル個人メドレー優勝	全日本選手権…小沢由紀子シングルスカル優勝	全日本選手権…太田武男10キロボイントレース優勝	全日本選手権…磯貝頼秀フリー100キログラム級優勝	日本選手権…優勝(30—16新日鉄金石)	部	◆日本一へ、世界へ◆

レスリング…磯貝頼秀、学生選手権2冠、全日本選手権も100キログラム級優勝

1971.4 ～ 1972.3		昭和46年度	※早稲田スポーツ編集長…佐藤幸雄						
3位									
4位									
優勝									
予選会落選									
競走		ラグビー	水泳…高田康雄、学生選手権200メートルバタフライ4連覇。	合気道	野球	漕艇	卓球	競走	
学生対校…男子Ⅱ浅井正泰 跳び優勝	大学選手権…優勝（18—3法大。 益田清、佐藤秀幸）	学生選手権…乱取男子団体、天 倉国博乱取男子優勝		秋季六大学…大木勝年9連続奪 三振（東大戦）	大学女子選手権…小沢由紀子シ ングルスカル優勝	学生選手権…柴田幸男男子シン グルス優勝	学生対校…和久博至400メートル優 勝		
自転車	競走	ラグビー	水泳					〈ユニバーシアード〉	
全日本選手権…太田武男ロード レース優勝	日本選手権…石沢隆夫200メートル 優勝	日本選手権…優勝 （14—11三菱自工京都）	高田康雄200メートルバタフライ銀 メダル、100メートルバタフライ銅メ ダル。沢正二郎400メートルメドレ ーリレー銅メダル						

1971.4 ~ 1972.3					年度	昭和46年度
3位					春	野球 ラグビー 対抗戦 箱根駅伝 競走
4位					秋	
優勝						
予選会落選						
庭球	スキー	自転車	水泳		部	◆学生王者への戦い◆
学生室内…女子Ⅱ張晴玲シングルス優勝	学生選手権…男子Ⅱ中野秀樹複合優勝	大学対抗…太田武男ロードレース優勝。学生選手権…岡島伸平スクラッチ優勝	学生選手権…男子Ⅱ沢正二郎100メートル自由形、200メートル自由形、新井到400メートル自由形、高田康雄100メートルバタフライ、200メートルバタフライ、竹本啓司200メートル個人メドレー、400メートル個人メドレー優勝		戦績	
スキー		スキー	水泳	部	戦績	◆日本一へ、世界へ◆
中野秀樹90メートルジャンプ金メダル、複合銀メダル		〈冬季ユニバーシアード〉 中野秀樹複合13位	〈札幌冬季五輪〉 日本選手権…沢正二郎100メートル自由形優勝			

1972.4 ～ 1973.3			昭和47年度	柔道…宇津木房夫が全日本学生中量級で優勝。競走・石沢隆夫は日本選手権100メートル制す	※早稲田スポーツ編集長…豊田和夫	◆ラグビー、45、46年度と大学、社会人相手に負けなし。47年度大学選手権決勝で明大に敗れる(12―13)まで公式戦35連勝(1引き分け)を続けた				
5位										
3位										
優勝										
15位 (⑬、⑮)										
柔道	庭球	競走	合気道	漕艇	レスリング	体操				
優勝 学生選手権…宇津木房夫中量級	玲シングルス優勝 史ダブルス優勝。学生室内…張晴	学生対校…男子Ⅱ石沢隆夫 200メートル優勝	学生選手権…乱取男子団体、加藤茂樹乱取男子優勝	大学女子選手権…小沢由紀子シングルスカル優勝	学生選手権…長谷川恒夫フリー74キロ級2連覇、磯貝頼秀グレコ90キロ級2連覇	学生選手権…森岡俊明種目別鉄棒、井上公延種目別あん馬優勝				
レスリング		競走								
磯貝頼秀フリー100キロ級3回戦		日本選手権…石沢隆夫1000メートル優勝 〈ミュンヘン五輪〉								

昭和47年度		年度	昭和47年度
1972.4 ~ 1973.3		野球	柔道…宇津木房夫が全日本学生中量級で優勝。競走・石沢隆夫は日本選手権100メートル制す
5位		春秋	ラグビー
3位		対抗戦	競走
優勝		箱根駅伝	部
15位 (⑬、⑮)		戦績	◆学生王者への戦い◆
自転車	レスリング	ゴルフ	ア式蹴球
自転車…大学対抗…太田武男1 *速度競走優勝。学生選手権… 岡島伸平タイムトライアル、太田 武男スクラッチ優勝	学生選手権…伊藤一雅フリー54 *級優勝	学生王座…土田孝夫優勝	大学選手権…優勝 (10大商大)
スキー		部	◆日本一へ、世界へ◆
学生選手権…男子…中野秀樹 複合、清川涉滑降優勝		戦績	
スキー		部	
全日本選手権…熊谷毅志滑降 優勝		戦績	

昭和48年度

ラグビー…早慶戦、早明戦が国立競技場開催。以降早明戦は国立

※早稲田スポーツ編集長…島崎潤一郎

◆この年の日米大学野球に早稲田から唯一出場した東門明選手が、試合中送球を頭部に受け死亡。東門選手が早稲田で付けていた背番号「9」は欠番となっている

※早稲田スポーツ編集長…石橋誠一 ◆ラグビー対抗戦、早慶戦、早明戦が国立競技場で開催。秩父宮ラグビー場の改修のため、早慶戦は50年まで開催。早明戦はこの年以降国立開催となつた		1973.4 ~ 1974.3					
		優勝					
		2位					
		優勝					
		16 位 (⑰、⑱)					
自転車	フェンシング	バレーボール	卓球	ア式蹴球	ラグビー	庭球	
大学対抗…太田武男ロードレース優勝。学生選手権…太田武男スクラッチ優勝	学生選手権…宮原辰朗サーブル個人優勝	学生選手権…準優勝 (2—3 大商大)	大学王座…優勝 (4—1 近大)	大学選手権…2連覇 (3—0 法大。碓井博行)	大学選手権…優勝 (29—6 明大。神山郁雄、植山信幸)	大学対抗…優勝 (6—3 法大)	
レスリング							
							全日本選手権…磯貝頼秀フリー100キ級優勝

1974.4 ~ 1975.3						年度	昭和49年度
優勝						春秋	野球
2位						対抗戦	ラグビー
優勝						箱根駅伝	競走
15位 (⑭、⑮)						部	◆学生王者への戦い◆
スキー	競走	庭球	ア式蹴球	野球	ラグビー	戦績	
学生選手権…中野秀樹複合優勝	学生対校…男子Ⅱ石沢隆夫走り幅跳び優勝	学生選手権…待鳥明史シングルス優勝	大学選手権…3連覇(2—0大経大。古田篤良、西野朗)	大学選手権…優勝(3—2駒大。矢野暢生、前川善裕)	大学選手権…優勝(18—0明大。石塚武生、藤原優)		
漕艇						部	◆日本一へ、世界へ◆
						戦績	
							全日本選手権…舵付ペア優勝

野球、ラグビー、ア式蹴球が大学日本一。ラグビーは2連覇、ア式蹴球は3連覇

1975.4 ~ 1976.3				昭和50年度	※早稲田スポーツ編集長…山内俊夫			
4位								
4位								
優勝								
予選会落選								
スキー	庭球	卓球	水泳	漕艇…全日本選手権舵付ペアで2年連続優勝。 ラグビー…早明戦は初の引き分け（10—10）	合気道	ハンドボール		
学生選手権…加藤清英回転優勝	学生選手権…待鳥明史・西尾茂之ダブルス優勝	大学対抗…団体優勝（3—1専大）	学生選手権…男子Ⅱ原秀章100メートルバタフライ、200メートルバタフライ、柳館毅200メートル個人メドレー、400メートル個人メドレー優勝。400メートルドレーリレー優勝		学生選手権…乱取男子団体、演武男子優勝	学生選手権…優勝		
			漕艇					
			全日本選手権…舵付ペア優勝					

昭和51年度		1975.4 ~ 1976.3				年度	昭和50年度
	庭球…西尾茂之、学生選手権シングルス、ダブルス2冠。 野球…佐藤清、早慶戦(秋)で3ホームー	4位				春	漕艇…全日本選手権舵付へアで2年連続優勝。 ラグビー…早明戦は初の引き分け(10-10)
		4位				秋	
		優勝				対抗戦	
		予選会落選				箱根駅伝	
ラグビー	◆学生王者への戦い◆ ◆日本一へ、世界へ◆	ラグビー	バスケット	合気道	軟式野球	部	
大学選手権…優勝(34-6明大。 豊山京一、星野繁一)		対抗戦…早明戦初の引き分け (10-10)	学生選手権…準優勝	学生選手権…乱取男子団体、松 原良友乱取優勝	全日本学生…優勝 (6-2東北学院大)	戦績	
水泳						部	
日本選手権…樺谷博1000メートル平 泳ぎ、柳館毅2000メートル個人メド レー優勝						戦績	

※早稲田スポーツ編集長…井上健二

※早稲田スポーツ編集長…臼井泉	1976.4 ~ 1977.3						
	3位						
	2位						
	優勝						
	13 位 (⑪、⑬)						
合気道	野球	卓球	競走	庭球	水泳		
学生選手権…乱取男子団体、杉崎一博乱取優勝	秋季六大学…佐藤清早慶戦3本塁打、17塁打	大学対抗…団体2連覇(3—2近大)	学生対校…男子Ⅱ瀬古利彦5000メートル優勝	学生選手権…西尾茂之・シングルス、西尾茂之・陸浦隆茂ダブルス優勝。学生室内…西尾茂之・陸浦繁ダブルス優勝	学生選手権…男子Ⅱ樺谷博1000メートル平泳ぎ、2000メートル平泳ぎ、原秀章1000メートルバタフライ、2000メートルバタフライ、柳館毅2000メートル個人メドレー、4000メートル個人メドレー優勝。4000メートルリレー優勝		
漕艇				水泳	〈モントリオール五輪〉		
金康健司エイト11位				原秀章1000メートルバタフライ7位、2000メートルバタフライ予選落ち、4000メートルリレー8位。柳館毅2000メートル自由形予選落ち、4000メートル個人メドレー予選落ち、4000メートルリレー8位			

1977.4 ~ 1978.3						年度	昭和52年度
3位						春秋	野球
2位						対抗戦	ラグビー
3位						箱根駅伝	競走
6位 (⑤、⑥)						部	◆学生王者への戦い◆
フェンシング	スキー	ラグビー	水泳	競走	戦績	部	
学生選手権…張守栄エへ個人優勝	学生選手権…男子Ⅱ山本進複合、小田桐世公大回転優勝	対抗戦…60連勝	学生選手権…男子Ⅱ樺谷博 100メートル平泳ぎ、200メートル平泳ぎ、原秀章100メートルバタフライ、200メートルバタフライ、柳館毅200メートル個人メドレー、400メートル個人メドレー優勝。 メドレーリレー優勝 4000メートル	学生対校…男子Ⅱ瀬古利彦 5000メートル、10000メートル優勝	◆学生王者への戦い◆	部	◆日本一へ、世界へ◆
ワンダーフォーゲル					部	部	
インド遠征					戦績	部	

1978.4 ～ 1979.3			昭和53年度	野球…岡田彰布、秋季リーグ3冠王。 競走…瀬古利彦、福岡国際マラソン優勝。水泳…柳館毅、学生選手権4年連続3冠	※早稲田スポーツ編集長…土田純嗣		◆応援部にバトントワラー登場。神宮応援席に華を添えた		◆関東大学ラグビー対抗戦で9年に渡って（44～52年度）60連勝をマーク。45～51年度は7連覇。52年度は慶大に17-34と敗れ連勝ストップ。続く明大にも敗れた。この年は大学選手権出場も逃した	
2位										
優勝										
5位										
4位（②、⑤）										
ア式蹴球	水泳	競走			合気道	自転車	レスリング			
大学選手権…優勝（1-0法大）。 加藤久、岡田武史	学生選手権…榑谷博1000メートル平泳ぎ、2000メートルバタフライ、柳館毅章1000メートル個人メドレー、4000メートル個人メドレー優勝。 メドレーリレー優勝	学生対校…瀬古利彦5000メートル、藤森良文1100メートル障害優勝。 4000メートルリレー優勝			学生戦選手権…乱取男子団体、 演武女子、羽場逸夫乱取優勝	大学対抗…内藤一夫ロードレース優勝	学生選手権…太田章フリー82キロ級優勝			
水泳		競走								
原秀章1000メートルバタフライ優勝		日本選手権…柳館毅2000メートル自由形、2000メートル個人メドレー、 由形、2000メートル個人メドレー、 原秀章1000メートルバタフライ優勝	日本選手権…藤森良文1100メートル障害優勝。 瀬古利彦福岡国際マラソン優勝							

昭和54年度		昭和53年度	
競走…瀬古利彦、福岡国際マラソン2連覇。レスリング…太田章、学生選手権3連覇	※早稲田スポーツ編集長…川村伸和	◆神宮球場外野スタンドの芝生席が消え、イス席に	1978.4 ~ 1979.3
			2位 優勝
			5位
			4位 (②、⑤)
			年度
競走…岡田彰布、秋季リーグ3冠王。競走…瀬古利彦、福岡国際マラソン優勝。水泳…柳館毅、学生選手権4年連続3冠	野球	ラグビー	春秋
			対抗戦
			箱根駅伝
			競走
			◆学生王者への戦い◆
部	戦績	野球	秋季六大学…岡田彰布3冠王。通算打率3割7分9厘、81打点は歴代1位
			レスリング
			学生選手権…太田章フリー82キロ級優勝
			バドミントン
			学生選手権…団体優勝
スキー	優勝	学生選手権…小田桐世公大回転	合気道
			学生選手権…乱取男子団体、鈴木盛善乱取優勝
			部
			戦績
			◆日本一へ、世界へ◆

※早稲田スポーツ編集長…岡部道雄	1979.4 ~ 1980.3					
	優勝					
	3位					
	2位					
	3位 (②、④)					
合気道	スケート	庭球	レスリング	スキー	水泳	競走
学生選手権…乱取男子団体、堀江一郎乱取優勝	優勝 学生選手権…千葉浩次500 ^{メートル}	勝 学生室内…立野彰一シングルス優勝	級優勝 学生選手権…太田章フリー82 ^{キロ}	学生選手権…出口沖彦回転優勝	学生選手権…男子Ⅱ榊谷博1000 ^{メートル} 平泳ぎ優勝。4000 ^{メートル} メドレーリレー優勝。乾敏晃飛板飛込み優勝	学生対校…男子Ⅱ瀬古利彦10000 ^{メートル} 、藤森良文110 ^{メートル} 障害、曾田裕重走り幅跳び優勝。4000 ^{メートル} リレー優勝
バレーボール					水泳	競走
安藤文彦銅メダル					博松本敬充1000 ^{メートル} 背泳ぎ、榊谷博1000 ^{メートル} 平泳ぎ優勝	瀬古利彦福岡国際マラソン2連覇。日本選手権…男子4000 ^{メートル} リレー、1600 ^{メートル} リレー優勝

昭和55年度		年度	野球	ラグビー	競走	レスリング…太田章が全日本選手権制覇。ハンドボールは学生選手権優勝					
※早稲田スポーツ編集長…児玉恵司 ◎大学スポーツランキング◎ ①日大 191ポイント ⑥早大 106ポイント		1980.4～1981.3									
		4位		春秋	野球						
		4位		対抗戦	ラグビー						
		3位		箱根駅伝	競走						
		5位 (⑥、⑤)									
合気道	スキー	競走	漕艇	庭球	ハンドボール	部	戦績	◆学生王者への戦い◆			
学生選手権…演武男子、佐藤忠之乱取男子優勝	学生選手権…男子Ⅱ藤倉千秋回転優勝	学生対校…男子Ⅱ山崎博仁 400メートル、200メートル優勝	学生選手権…ダブルスカル優勝	学生選手権…立野彰一シングルス、白戸仁・大西儀朋ダブルス優勝。学生室内…白戸仁シングルス優勝	学生選手権…優勝						
レスリング						部	戦績	◆日本一へ、世界へ◆			
							全日本選手権…太田章フリー82キ級優勝				

※早稲田スポーツ編集長…中村広志		◎大学スポーツランキング◎ ①日大 158ポイント ⑤早大 100ポイント		1981.4 ~ 1982.3			昭和56年度	山岳…K2登頂に成功。 ラグビー早明戦の観衆6万6999人は国立競技場史上最多。
				3位				
				4位				
				優勝				
				5位 (⑤、①)				
野球	合気道	自動車	フェンシング	水泳	競走			
六大学…春秋とも東大に勝ち点献上 (史上初)	学生選手権…乱取男子団体優勝	学生運動競技大会…優勝	学生選手権…遠藤聡一エペ個人優勝	400メートル個人メドレー優勝 学生選手権…男子II小林聡	学生対校…男子II遠藤司 1500メートル、礒繁雄110メートル障害、大森重宜400メートル障害優勝			
山岳				ヨット	競走			
K2登頂成功				全日本選手権…小池・石渡組個人スナイプ級優勝	日本選手権…大森重宜400メートル障害優勝			

1982.4 ~ 1983.3						年度	昭和57年度 競走…大森重宜、4000メートル障害インカレ、日本選手権2連覇達成。 野球、ラグビーは100周年記念V
						春秋	
						対抗戦	
						箱根駅伝	
						競走	
2位 (②、①)						部	◆学生王者への戦い◆
2位 優勝 優勝						戦績	
※早稲田スポーツ編集長…織田健途 ◆大学創立100周年 ◎大学スポーツランキング① ①日大 156ポイント ⑥早大 75ポイント	合気道	航空	バドミントン	スキー	庭球	競走	◆日本一へ、世界へ◆
	学生選手権…乱取男子団体、小林哲也乱取優勝	学生選手権…飯田和雄優勝	学生選手権…蘭和真男子シングルス優勝	学生選手権…秋山兼範大回転、回転優勝	学生選手権…大西儀朋・大地重雄ダブルス優勝。学生室内…大地重雄・大西儀朋ダブルス優勝	学生対校…男子Ⅱ礒繁雄110メートル障害 大森重宜4000メートル障害 篠崎成志円盤投げ優勝	
	競走	部	部	部	部	部	
	戦績	戦績	戦績	戦績	戦績	戦績	
	日本選手権…大森重宜4000メートル障害2連覇	日本選手権…大森重宜4000メートル障害2連覇	日本選手権…大森重宜4000メートル障害2連覇	日本選手権…大森重宜4000メートル障害2連覇	日本選手権…大森重宜4000メートル障害2連覇	日本選手権…大森重宜4000メートル障害2連覇	

1984.4 ~ 1985.3		昭和59年度	1983.4 ~ 1984.3					昭和58年度
3位		競走部、箱根駅伝2連覇。 水泳…松田成利学生選手権3冠（100、2000メートル平泳ぎ、400メートルリレー）	5位					競走…箱根駅伝30年ぶり優勝。2区坂口泰から独走し往路、復路とも制す完全優勝
4位			4位					
2位			5位					
優勝（①、②）			優勝（①、①）					
競走			軟式野球	合気道	航空	スキー	競走	
学生対校…男子Ⅱ遠藤司5000メートル、木下哲彦30キロ優勝。箱根駅伝2連覇（遠藤司、川越学）			大学選抜…優勝	学生選手権…乱取男子団体、演武女子、宿谷信夫乱取優勝	学生選手権…団体優勝、飯田和雄個人優勝	学生選手権…我満嘉治大回転優勝	学生対校…1600メートルリレー優勝。箱根駅伝完全優勝（坂口泰、木下哲彦）	
漕艇	水泳		競走					
全日本軽量級…舵付フオア優勝	日本選手権…松田成利2000メートル個人メドレー優勝		日本選手権…男子1600メートルリレー（小野山大寿、北川博勝、鈴木俊彦、柴田実）優勝					

1984.4 ~ 1985.3						年度	昭和59年度
3位						春秋	競走部、箱根駅伝2連覇。 水泳…松田成利学生選手権3冠（100、200メートル平泳ぎ、400メートルリレー）
4位						野球	
2位						対抗戦	
優勝（①、②）						ラグビー	
						箱根駅伝	競走
自転車	軟式野球	庭球	スキー	弓道	水泳	部	◆学生王者への戦い◆
優勝 大学対抗…湯川和1 ^キ 速度競走	全日本学生…優勝（7—0札幌学院大）	学生室内…辻季之シングルス優勝	学生選手権…男子Ⅱ秋山兼範回転優勝	学生王座…団体優勝	学生選手権…男子Ⅱ奥野景介200 ^メ 自由形、松田成利100 ^メ 平泳ぎ、200 ^メ 平泳ぎ優勝。400 ^メ リレー優勝	戦績	
					水泳	部	◆日本一へ、世界へ◆
					奥野景介400 ^メ 自由形予選落ち、800 ^メ リレー予選落ち	戦績	〈ロサンゼルス五輪〉

1985.4 ~ 1986.3			昭和60年度	庭球…1年生土橋登志久、学生選手権シングルス制覇。競走…川越学、大学対校長距離2冠		◎大学スポーツランキング◎ ①日大 190ポイント ⑥早大 90ポイント ※早稲田スポーツ編集長…石黒秀樹			
2位			庭球…1年生土橋登志久、学生選手権シングルス制覇。競走…川越学、大学対校長距離2冠						
4位									
2位									
2位 (①、⑨)									
競走	水泳	庭球			合気道	航空			
学生対校…男子Ⅱ川越学5000メートル、10000メートル、斉藤篤史十種競技優勝	学生選手権…男子Ⅱ奥野景介200メートル自由形、400メートル自由形、松田成利200メートル個人メドレー、400メートル個人メドレー優勝、400メートルリレー、800メートルリレー、4000メートルメドレーリレー優勝	学生選手権…土橋登志久シングルス優勝。大学対抗…優勝(9-0中京大)。学生室内…土橋登志久シングルス、土橋登志久・布施俊ニダブルス優勝			学生選手権…乱取男子団体、関口晴功乱取優勝	学生選手権団体優勝、当間隆一郎個人優勝			
			水泳						
			日本選手権…松田成利2000メートル平泳ぎ優勝						

昭和60年度		庭球・・・1年生土橋登志久、学生選手権シングルス制覇。競走・・・川越学、大学対校長距離2冠	
年度	野球 ラグビー 競走	◆学生王者への戦い◆	
1985.4 ～ 1986.3	春	野	◆日本一へ、世界へ◆
	秋	球	
	対抗戦	ラグビー	
	箱根駅伝	競走	
2位	2位	部	部
4位	2位	戦績	
2位	2位 (①、⑨)	部	戦績
◎大学スポーツランキング◎ ①日大 179ポイント ②早大 103ポイント		部	
※早稲田スポーツ編集長・・・菅井暢浩	部		
昭和61年度	ア式蹴球・・・8年ぶり大学選手権制覇。バレーボール・・・33年ぶりリーグ戦優勝		
庭球		学生選手権・・・土橋登志久シングルス2連覇。大学対抗2連覇（8-1明大）。学生室内・・・土橋登志久シングルス、土橋登志久・布施俊二ダブルス優勝	
水泳		日本選手権・・・佐藤浩志100メートルバタフライ、松田成利200メートル個人メドレー優勝	
合気道		学生選手権・・・乱取男子団体、演武男子、小沢仁志乱取優勝	
軟式庭球		学生選手権・・・神崎公宏・浜田武徳組優勝	

1987.4 ~ 1988.3	昭和62年度	※早稲田スポーツ編集長…清水岳志	◆早慶レガッタ、初の同着	◎大学スポーツランキング◎ ①日大 176ポイント ②早大 106ポイント	1986.4 ~ 1987.3				
5位	ラグビー…雪の早明戦制す。東芝府中破って日本一。以降大学チームの日本一は出ていない				4位				
3位					5位				
優勝					2位				
9位 (⑤、⑭)					8位 (⑥、⑩)				
ラグビー			バレーボール	合気道	ア式蹴球	水泳			
大学選手権…優勝(19—10同大。 永田隆憲、今駒憲二)						学生選手権…男子Ⅱ奥野景介 200メートル自由形、400メートル自由 形、松田成利200メートル個人メドレ ー、400メートル個人メドレー優勝。 400メートルメドレーリレー優勝			
ラグビー									
(日本戦選手権…優勝 22—16東芝府中)			春季リーグ…優勝(33年ぶり)	学生選手権…乱取男子団体、徒 手男女、阿部直光乱取優勝	大学選手権…優勝(4—0東海大。 大榎克己、松山吉之)				

1987.4 ~ 1988.3						年度	昭和62年度
5位						春秋	野球
3位						対抗戦	ラグビー
優勝						箱根駅伝	競走
9位 (⑤、⑭)						部	◆学生王者への戦い◆
スキー	自転車	水泳			庭球	戦績	
学生選手権…柴雄大回転優勝	大学対抗…豊岡弘スプリント、佐々木一昭4 ^キ 速度競走優勝	学生選手権…男子Ⅱ藤原勝教50 ^メ 自由形、100 ^メ 自由形、佐藤浩志200 ^メ バタフライ、武田聡200 ^メ 個人メドレー、400 ^メ 個人メドレー優勝、400 ^メ リレー優勝。女子Ⅱ関戸直美200 ^メ 背泳ぎ、200 ^メ 個人メドレー優勝			学生選手権…土橋登志久シングルス3連覇、丸山淳一・森井大治ダブルス優勝。大学対抗…3連覇(6—3慶大)		
ワンダーフォーゲル		軟式庭球	漕艇	自転車	ホッケー	部	◆日本一へ、世界へ◆
パキスタン遠征		世界選手権…神崎公宏・小野寺剛銅メダル	全日本軽量級…舵無フオア優勝	全日本選手権…豊岡弘スプリント優勝	全日本選手権…優勝(天理大との決勝戦が降雪のため両チーム優勝)	戦績	

ラグビー…雪の早明戦制す。東芝府中破って日本一。以降大学チームの日本一は出ていない

1988.4 ~ 1989.3		昭和63年度	庭球…土橋登志久学生選手権シングルス4連覇。 スキー…荻原健司、学生選手権、ユニバーシード複合優勝	※早稲田スポーツ編集長…熊田明裕		◆安部球場閉幕。東伏見へ移転。競走部グラウンドも東伏見へ。この年競走部に初の女子部員入部		◆人間科学部が創設される。スポーツ特別選抜制度でバレー・堀江陽子らが合格		◎大学スポーツランキング◎ ①日大 152ポイント ③早大 108ポイント	
3位											
3位											
3位											
10位 (⑩、⑪)											
庭球	スキー	弓道	合気道	航空	軟式庭球	自動車					
学生選手権…土橋登志久シングルス4連覇 (90慶大)	学生選手権…荻原健司複合優勝	学生王座…女子団体優勝	学生選手権…乱取男子団体、武器男女、前平浩二乱取優勝	学生選手権…古市安利優勝	剛優勝 学生選手権…神崎公宏・小野寺	学生ジムカーナ大会…優勝					
自転車	スキー	水泳					〈ユニバーシード〉				
全日本選手権…豊岡弘スプリント、1キロタイムトライアル優勝	全日本選手権…白河三枝女子大回転優勝	松田成利100メートル平泳ぎ銅メダル 佐藤浩志・藤原勝教400メートルメドレーリレー銀メダル									

1988.4 ~ 1989.3					年度	昭和63年度
3位					春	野球 庭球…土橋登志久学生選手権シングルス4連覇。 スキー…荻原健司、学生選手権、ユニバーシアード複合優勝
3位					秋	
3位					対抗戦	
10位 (⑩、⑪)					箱根駅伝	競走
軟式庭球	ハンドボール	レスリング	競走	水泳	部	◆学生王者への戦い◆
学生選手権…団体優勝、新坂・川西組優勝	学生選手権…優勝	学生選手権…石沢常光フリー82キ級優勝	学生対校…男子Ⅱ池田克美5000メートル優勝	学生選手権…男子Ⅱ藤原勝教100メートル自由形、末次勝200メートル平泳ぎ、佐藤浩志1000メートルバタフライ優勝。女子Ⅱ関戸直美200メートル背泳ぎ、200メートル個人メドレー優勝	戦績	
水泳		漕艇	庭球	〈ソウル五輪〉	漕艇	部
選落ち		石川順康エイト9位	土橋登志久シングルス1回戦敗退、ダブルス1回戦敗退		全日本軽量級エイト優勝	◆日本一へ、世界へ◆
武田聡2000メートルバタフライ予選落ち、2000メートル個人メドレー予選落ち。渡辺健司1000メートル平泳ぎ予選落ち					戦績	

1989.4 ～ 1990.3		平成元年度	ボクシング…三谷大和、関政明が全日本チャンピオン	※早稲田スポーツ編集長…上田守英	◎大学スポーツランキング◎ ①日大 161ポイント ②早大 122ポイント	◆箱根駅伝名物、伴走車消える				
2位										
3位										
2位										
9位 (⑤、⑫)										
アーチェリー		ウエイトリフティング						合気道	航空	
体育局加入		学生選手権…岡田純一 90 ^キ 級優勝						学生選手権…乱取男子団体、徒手男子、武器女子優勝	学生選手権…団体優勝、古市安利個人優勝	
水泳	漕艇	スキー	自転車	フェンシング	競走					
自由形優勝 日本選手権…藤原勝教 100 ^{メートル}	全日本選手権…舵無フオア優勝、クオドルプル優勝。全日本軽量級…エイト優勝	荻原健司複合個人金メダル、団体銅メダル。河野孝典複合個人銀メダル、団体銅メダル	〈冬季ユニバーシアード〉 佐々木一昭 4000 ^{メートル} 団体追抜予選敗退。豊岡弘 1000 ^{メートル} タイムトライアル 16位	出野晴信フルーレ団体予選敗退	大沢知宏 100 ^{メートル} 予選落ち					

平成元年度

ボクシング…三谷大和、関政明が全日本チャンピオン

1989.4 ~ 1990.3						年度	野球
2位						春秋	対抗戦
3位						箱根駅伝	競走
2位						部	戦績
9位 (⑤、⑫)						◆学生王者への戦い◆	
庭球	自転車		水泳	漕艇	ソフトボール	部	
学生選手権…森井大治シングルス優勝。学生対抗…5連覇(9—3日大)	大学対抗…豊岡弘スプリント、4人団体速度競走優勝。学生選手権…高橋隆晃スプリント、織田康弘4人速度優勝	400メートルリレー、400メートルメドレーリレー優勝	学生選手権…男子Ⅱ総合優勝。渡辺健司200メートル平泳ぎ、藤本隆宏200メートル個人メドレー、400メートル個人メドレー優勝。400メートルリレー、400メートルメドレーリレー優勝	学生選手権…舵無へア優勝、市川敬シングルスカル優勝	体育局加入	◆日本一へ、世界へ◆	
ボクシング					自転車	部	戦績
全日本選手権…三谷大和フェザー級、関政明ウェルター級優勝					全日本選手権…佐々木一昭4人個人追抜き優勝		

早稲田スポーツ編集長…鈴木一成	◎大学スポーツランキング◎ ①日大 204ポイント ②早大 114ポイント						
合気道	ウエイトリフティング	レスリング	スキー	競走	ラグビー		
学生選手権…乱取男子団体、徒手男子、武器男子、谷繁強志乱取優勝	学生選手権…岡田純一 90 ^キ 級優勝	学生選手権…石沢常光フリー級2連覇、水野将嘉フリー級優勝	学生選手権…河野孝典複合優勝	学生対校…男子Ⅱ池田克美 5000 ^{メートル} 、10000 ^{メートル} 優勝	大学選手権…優勝 (45—14日体大。清宮克幸)		

1990.4 ~ 1991.3						年度	平成02年度
優勝						春	野球 ラグビー 対抗戦 箱根駅伝
4位						秋	
優勝						対抗戦	
11 位 (⑩、⑫)						箱根駅伝	競走
スキー	自転車	競走	水泳		漕艇	部	◆学生王者への戦い◆
学生選手権…河野孝典複合優勝	走優勝 大学対抗…スプリント2連覇。学生選手権…桐岡真佐子3キロ速度競走優勝	勝 学生対校…男子Ⅱ渡辺高博400メートル、山本聡ハナマー投げ優勝	優勝 リレー、400メートルメドレーリレー 勝。400メートル個人メドレー優勝。400メートル個人メドレー優勝。400メートル個人メドレー優勝。		学生選手権…舵無ペア優勝	戦績	
フェンシング		自転車	競走	水泳	漕艇	部	◆日本一へ、世界へ◆
個人優勝 全日本選手権…出野晴信フルール		優勝 全日本選手権…豊岡弘スプリント、塩原正長タンデムスプリント	優勝 日本選手権…渡辺高博400メートル	日本選手権…糸井統100メートル、200メートル背泳ぎ、渡辺健司200メートル平泳ぎ、藤本隆宏400メートル個人メドレー優勝	勝 全日本女子選手権…舵無ペア優勝	戦績	

野球…15季ぶり六大学優勝(春)。
ラグビー…早明戦で2度目の引き分け。終了寸前今泉清80メートルトライ

※早稲田スポーツ編集長…中居英一	◎大学スポーツランキング◎ ①日大 188ポイント ②早大 136ポイント					
ラグビー	合気道	自動車	レスリング	卓球	アイスホッケー	
早明戦終了寸前、今泉清80メートルトライ、24―24で引き分け、対抗戦3季ぶり優勝	学生選手権…乱取男子団体、武器男子、柴田健乱取、永井恵美乱取優勝	学生ジムカーナ…優勝、学生運転競技…優勝	学生選手権…石沢常光フリー82キログラム級3連覇、水野将嘉フリー52キログラム級2連覇	学生選手権…鷺見剛・大矢剛ダブルス優勝	学生選手権…優勝（4―3明大）	
スキー			〈冬季ユニバーシアード〉	スケート	ボクシング	
荻原健司複合個人金メダル。河野孝典複合個人銀メダル				全日本スプリント…佐藤睦浩1000メートル優勝	全日本選手権…三谷大和フェザー級、関政明ウェルター級優勝	

1991.4 ~ 1992.3					年度	平成03年度
4位					春秋	野球
4位					対抗戦	ラグビー
2位					箱根駅伝	競走
6位 (②、⑨)					部	◆学生王者への戦い◆
庭球	漕艇	水泳		日本拳法	戦績	
大学対抗…優勝(8-1慶大)	学生選手権…男女舵無しフォア優勝	学生選手権…男子Ⅱ大野元50 トル自由形、山本雅志4000 トル自由形、バンデワレ泰広1000 トル背泳ぎ、2000トル背泳ぎ、渡辺 健司2000トル平泳ぎ、藤本隆宏 2000トル個人メドレー、4000 トル個人メドレー優勝。4000 トルメドレーリレー優勝		体育局加入		
卓球	フェンシング	ボクシング	水泳	漕艇	部	◆日本一へ、世界へ◆
全日本選手権…大野知子混合ダブルス優勝	全日本選手権…出野晴信フルレー個人2連覇	全日本選手権…関政明ウエルター級優勝	日本選手権…糸井統1000トル、2000トル背泳ぎ2連覇	全日本女子…ダブルスカル優勝	戦績	

※早稲田スポーツ編集長…庄子真憲 ②早大 122ポイント ①日大 190ポイント ◎大学スポーツランキング◎							
自転車	自動車	ア式蹴球	スキー	競走			
大学対抗…松村健50 ^キ ポイント 1ス優勝。学生選手権…高橋隆 晃スプリント、松村健30 ^キ 優勝	学生ジムカーナ大会…優勝	大学選手権…優勝 (1—1PK4—2東海大)	学生選手権…荻原次晴複合優勝	大学対校…男子Ⅱ武井隆次 5000 ^メ 、10000 ^メ 、山 本聡ハンマー投げ優勝			
水泳			競走	スキー			
藤本隆宏4000 ^メ 個人メドレー金 メダル、2000 ^メ 個人メドレー銅 メダル			武井隆次100000 ^メ 銀メダル	〈ユニバーシアード〉 荻原健司複合団体金メダル、複合 個人7位	〈アルペールビル冬季五輪〉		

1992.4 ~ 1993.3				年度	平成04年度
3位				春秋	野球 競走…箱根駅伝完全優勝、全日本大学駅伝も制す。 フィギュア…八木沼純子、冬季ユニバーシアード金メダル
2位				対抗戦	
2位				箱根駅伝	
優勝 (①、①)				競走	◆学生王者への戦い◆
競走	漕艇	水泳		部	
全日本大学駅伝…優勝。学生対校…渡辺高博400 ^{メートル} 、榑部静二1000 ^{メートル} 優勝。箱根駅伝完全優勝 (榑部静二、渡辺康幸)	学生選手権…舵付ペア、女子ダブルスカル優勝	学生選手権…総合優勝。山本雅志400 ^{メートル} 自由形、バンデワール泰広100 ^{メートル} 背泳ぎ、糸井統200 ^{メートル} 背泳ぎ、100 ^{メートル} バタフライ、藤本隆宏200 ^{メートル} 個人メドレー、400 ^{メートル} 個人メドレー優勝。800 ^{メートル} リレー、400 ^{メートル} メドレーリレー優勝		戦績	
卓球	ボクシング	漕艇	水泳	部	◆日本一へ、世界へ◆
全日本選手権…大野知子混合ダブルス優勝	全日本選手権…三谷大和フェザー級、関政明ウエルター級優勝	全日本選手権…舵付ペア優勝。全日本女子ダブルスカル優勝	日本選手権…糸井統100 ^{メートル} 、200 ^{メートル} 背泳ぎ3連覇。中野勉100 ^{メートル} 自由形優勝	戦績	

バドミントン	自転車	レスリング	スキー	庭球	
学生選手権…団体優勝	学生選手権…五味さおり ¹ 、タ イムトリアル、3 ^キ 個人追捕ぎ、 塩原正長・広島和彦、タムス プリント優勝	74 ^キ 優勝 学生選手権…級荻田剛志、フリー	学生選手権…男子Ⅱクロスカント リリー、優勝。女子Ⅱ丸井有 紀、大回戦優勝	学生選手権…松下晃・原田夏 希、ダブルス優勝。大学対抗…2 連覇（5—4日大）。学生室内 勝…松下晃・原田夏希、ダブルス優 勝	
フィギュア		漕艇	競走	水泳	
八木沼純子、シングル金メダル	〈冬季ユニバーシアード〉	山兎和久、エイト13位	渡辺高博、400 ^メ 予選落ち、 1600 ^メ トルリレー準決勝	藤本隆宏、400 ^メ 個人メドレー8 位、200 ^メ 個人メドレー予選落 ち。糸井統、200 ^メ 背泳ぎ4位、 100 ^メ 背泳ぎ12位、400 ^メ メドレーリレー8位。中野勉、50 ^メ 自由形予選落ち、100 ^メ 自 由形予選落ち、400 ^メ メドレー リレー8位。	〈バルセロナ五輪〉

平成04年度		年度	野球	競走	競走…箱根駅伝完全優勝、全日本大学駅伝も制す。 フィギュア…八木沼純子、冬季ユニバーシアード金メダル	
1992.4 ~ 1993.3		春秋	対抗戦	箱根駅伝	◆学生王者への戦い◆	
3位		春秋	対抗戦	箱根駅伝	◆学生王者への戦い◆	
2位		春秋	対抗戦	箱根駅伝	◆学生王者への戦い◆	
2位		春秋	対抗戦	箱根駅伝	◆学生王者への戦い◆	
優勝（①、①）		春秋	対抗戦	箱根駅伝	◆学生王者への戦い◆	
◎大学スポーツランキング◎ ①日大 196ポイント ③早大 113ポイント		航空		部	スキー	
※早稲田スポーツ編集長…高橋俊博		学生選手権…徒手男子、武器 女子優勝		戦績	荻原次晴複合個人銅メダル	
平成05年度		合気道		部	部	
野球…仁志敏久、春の早慶戦でサヨナラ満塁本塁打。水泳…糸井統、日本選手権背泳ぎ4連覇		学生選手権…徒手男子、武器 女子優勝		戦績	荻原次晴複合個人銅メダル	
競走		庭球		部	部	
全日本大学駅伝…2連覇（渡辺康幸、武井隆次）。学生対校…男子Ⅱ花田勝彦5000分優勝		大学対抗…3連覇（5—4日大）		戦績	全日本選手権…及川忠弘シング ル優勝	
漕艇		フィギュア		部	部	
全日本選手権…洪田紀子シング ルスカル優勝		全日本選手権…及川忠弘シング ル優勝		戦績	荻原次晴複合個人銅メダル	

1993.4 ~ 1994.3						
2位						
優勝						
2位						
2位 (②、②)						
射撃	自転車	バドミントン	野球	ア式蹴球	水泳	
学生選手権…SBP団体優勝	大学対抗…塩原正長1 ^キ ロタイムトライアル、池崎元令5 ^キ ポイントレース優勝。学生選手権…五味さおり3 ^キ 追抜き優勝	学生選手権…団体2連覇	春季六大学…仁志敏久早慶戦満塁サヨナラ本塁打。シーズン6本塁打	大学選手権…優勝(3—1同大。相馬直樹、原田武男)	学生選手権…男子Ⅱ山本雅志1500 ^メ 自由形優勝。400 ^メ メドレーリレー優勝。女子Ⅱ川島政江400 ^メ 自由形優勝	
庭球			水泳	競走		水泳
原田夏希混合ダブルス金メダル			漢人陽子1000 ^メ バタフライ、200 ^メ バタフライ金メダル、400 ^メ メドレーリレー銀メダル。	渡辺康幸100000 ^メ 銀メダル	〈ユニバーシアード〉	日本選手権…糸井統100 ^メ 、200 ^メ 背泳ぎ4連覇

[illegible]

※早稲田スポーツ編集長…藤田恭輔	◎大学スポーツランキング◎ ①日大 180ポイント ④早大 114ポイント	1994.4 ～ 1995.3					
		4位					
		4位					
		2位					
		2位 (①、⑥)					
合気道		自動車	自転車	ゴルフ	レスリング	ア式蹴球	
学生選手権…乱取男子団体、武器男子、若松伴睦乱取優勝		学生ジムカーナ…優勝。学生運転競技…優勝	学生選手権…広島和彦…百々敦史タンDEMトラリアル優勝	学生選手権…金沢鈴華優勝	学生選手権…杉田健吾フリー62 ^キ 級、天谷満博フリー68 ^キ 級優勝	大学選手権…2連覇(1—1PK4—1駒大。斉藤俊秀)	

◎ 大学スポーツランキング◎ ① 日大 181ポイント ⑥ 早大 95ポイント	1995.4 ~ 1996.3				年度	平成07年度
	3位				春	野球
	4位				秋	ラグビー
	2位				対抗戦	競走
	2位 (①、⑤)				箱根駅伝	競走
庭球	合気道	漕艇	水泳	競走	部	◆ 学生王者への戦い ◆
ダブルス優勝 学生室内…長谷川寛・喜多涉	優勝 学生選手権…三木裕美子乱取	学生選手権…クオドルプル優勝	学生選手権…女子Ⅱ粕谷恭子 100メートル平泳ぎ、2000メートル平泳ぎ、黒鳥文絵2000メートル個人メドレー、4000メートル個人メドレー 優勝	全日本大学駅伝…4連覇（小林雅幸、渡辺康幸）。大学対校…男子Ⅱ渡辺康幸5000メートル優勝	戦績	
ア式蹴球	水泳	競走	ゴルフ	水泳	自転車	部
斉藤俊秀金メダル	銅メダル 黒鳥文絵2000メートル個人メドレー、4000メートル個人メドレー金メダル。粕谷恭子2000メートル平泳ぎ	渡辺康幸10000メートル金メダル	〈ユニバーシアード〉 日本女子アママッチプレー…中島真弓優勝	日本選手権…黒鳥文絵4000メートル個人メドレー優勝	全日本選手権…塩原正長・広島和彦タンデムスプリント優勝	戦績

水泳…黒鳥文絵、学生選手権、日本選手権、ユニバーシアード個人メドレー優勝。
競走…大学対抗駅伝4連覇

1996.4 ～ 1997.3					平成08年度	ゴルフ…中島真弓、日本女子アマ、日本女子マッチプレー2冠。 野球…三沢興一、アトランタ五輪銀メダル	※早稲田スポーツ編集長…辰口虎之介	
2位								
3位								
2位								
5位 (④、⑤)								
バドミントン	合気道	漕艇	水泳		競走			
学生選手権…山田英孝 シングルス優勝	学生選手権…乱取男子団体、 谷口秀和乱取優勝	学生選手権…エイト、舵無しフ ォア、舵付ペア、ダブルスカル優 勝	学生選手権…女子Ⅱ粕谷恭子 1000メートル平泳ぎ、2000メートル平 泳ぎ、黒島文絵2000メートル個人 メドレー、4000メートル個人メドレ ー優勝		学生対校…男子Ⅱ小林雅幸 10000メートル優勝			
カヌー	漕艇	野球	スキー	水泳	ゴルフ	野球		
22位 持田雅誠カナディアンシングル	吉田理子軽量級ダブルスカル13 位。	三沢興一銀メダル		全日本フリースタイル…松井 陽子エアリアル優勝	日本選手権…黒島文絵2000 メートル、4000メートル個人メドレー優勝	日本女子アママッチプレー…中 島真弓2連覇。日本女子アマ… 中島真弓優勝	三沢興一・中村壽博銅メダル	
〈アトランタ五輪〉								

平成08年度		年度	◆学生王者への戦い◆			
ゴルフ…中島真弓、日本女子アマ、日本女子マッチプレー2冠。 野球…三沢興一、アトラント五輪銀メダル	野球	対抗戦	箱根駅伝	部	戦績	◆日本一へ、世界へ◆
	野球	ラグビー	競走			
	春秋					
1996.4 ～ 1997.3						
2位		春秋				
3位		対抗戦				
2位						
5位（④、⑤）		箱根駅伝				
		部				
		戦績				

1997.4 ~ 1998.3						平成09年度
4位						水泳…黒鳥文絵、学生選手権4年連続2冠。粕谷恭子も100メートル平泳ぎ4連覇。 自転車…佐藤琢磨学生選手権優勝
3位						
2位						
6位 (③、⑩)						
スキー	野球	水泳	ゴルフ	競走	漕艇	
優勝 学生選手権…岡田利修大回転	6本塁打 秋季六大学…矢口健一シーズン	学生選手権…稲田法子100メートル背泳ぎ、200メートル背泳ぎ、粕谷恭子100メートル平泳ぎ、黒鳥文絵200メートル個人メドレー、400メートル個人メドレー優勝。女子400メートルメドレーリレー優勝	学生選手権…中島真弓優勝	学生対校…男子11400メートルリレー優勝	学生選手権…男女総合優勝。舵無しフオア、女子シングルスカル、女子ダブルスカル優勝	
水泳			ゴルフ	競走	漕艇	
稲田法子100メートル背泳ぎ、400メートルメドレーリレー金メダル、2000メートル背泳ぎ銀メダル。黒鳥文絵400メートル個人メドレー金メダル			日本女子アマ…中島真弓優勝	日本選手権…男子400メートルリレー（鍛冶健太郎・馬塚貴弘・田村和宏・高橋和裕）優勝	全日本選手権…舵無しフオア優勝。全日本軽量級…舵無しフオア、女子シングルスカル、ダブルスカル優勝	
〈ユニバーシアード〉						

平成09年度			平成10年度		
水泳…黒鳥文絵、学生選手権4年連続2冠。粕谷恭子も100メートル平泳ぎ4連覇。 自転車…佐藤琢磨学生選手権優勝			競走…400メートル女子日本一		
年度 野球 ラグビー 対抗戦 箱根駅伝			競走 競走 競走		
◎大学スポーツランキング◎ ①日大197ポイント ⑦早大80ポイント			※早稲田スポーツ編集長…小西啓樹		
◆水泳…黒鳥文絵が2種目(200、400メートル個人メドレー)でインカレ4連覇。黒鳥同様複数書目で4連覇を達成したのが昭和51年、53年の柳館毅。黒鳥同様個人メドレー2種目のほかメドレーリレーでも4連勝し3種目で4連覇を達成した			◆水泳…黒鳥文絵が2種目(200、400メートル個人メドレー)でインカレ4連覇。黒鳥同様複数書目で4連覇を達成したのが昭和51年、53年の柳館毅。黒鳥同様個人メドレー2種目のほかメドレーリレーでも4連勝し3種目で4連覇を達成した		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		
部 戦績			部 戦績		

1999.4 ～ 2000.3			平成11年度	水泳…稲田法子、ユニバーシアード2大会連続金メダル	※早稲田スポーツ編集長…渡辺泰央		◎大学スポーツランキング◎ ①日大 167ポイント ⑦早大 95ポイント				
優勝											
3位											
4位											
6位 (⑥、⑤)											
スキー	競走	庭球	庭球	合気道	射撃	航空					
学生選手権…男子Ⅱ 複合優勝	学生対校…男子Ⅱ 100メートル優勝。400メートル 優勝。女子Ⅱ信岡沙希重 200メートル優勝	学生選手権…高瀬礼美 ス優勝	学生室内…高瀬礼美 優勝	学生選手権…乱取男子団体、 徒手男子優勝	学生選手権…SBP団体優勝	学生選手権…小宮孝之優勝					
水泳		スキー	競走	スキー		ワンダーフォーゲル					
稲田法子100メートル背泳ぎ、 400メートルドレーリール金メダル。 前川紀子200メートルバタフライ銅メダル		〈ユニバーシアード〉 全日本選手権…岡田利集男子 大回転優勝	日本選手権…男女400メートル 優勝	鶴田高之ジャンプ団体優勝		〈冬季ユニバーシアード〉 アフリカ遠征					

平成12年度			平成11年度		
			水泳…稲田法子、ユニバーシアード2大会連続金メダル		
			◆学生王者への戦い◆		
			◆日本一へ、世界へ◆		
野球 ラグビー 競走			1999.4 ~ 2000.3 優勝 3位 4位 6位 (⑥、⑤)		
春 秋 対抗戦 箱根駅伝			①大学スポーツランキング⑥ ②日大 182ポイント ⑤早大 84ポイント ※早稲田スポーツ編集長…竹本達哉		
合気道 バレーボール 漕艇			学生選手権…徒手男子優勝 東日本選手権優勝 (3—0順大) 学生選手権…女子ダブルスカル 優勝		
部 戦績			部 戦績		
庭球 学生室内…宮崎雅俊・堂野大 和ダブルス優勝			水球 日本選手権…優勝(9—3仙台大)		
スキー 学生選手権…男子Ⅱ畠山陽輔 複合優勝			水泳 日本選手権…田渕晋400メートル 個人メドレー優勝		
競走 学生対校…男子400メートルリレー 優勝			競走 日本選手権…男子400メートルリレー 優勝		
フィギュア…村主章枝、全日本選手権優勝。水球…日本選手権制す			平成12年度		

2001.4 ~ 2002.3		平成13年度	フィギュア…村主章枝が全日本選手権2連覇。野球…鳥谷敬、春季リーグ3冠王		2000.4 ~ 2001.3	
2位					3位	
4位					4位	
優勝					3位	
3位 (④、②)					10位 (⑪、⑤)	
庭球	ラクロス					
学生選手権…大見映理・波形純理ダブルス優勝。大学対抗…男子団体優勝。学生室内…宮崎雅俊シングルス、清水健・糟屋春隆ダブルス優勝	体育局加入					
競走	水泳	漕艇	競走	水泳	フィギュア	
日本選手権…男子400メートルリレー優勝	日本選手権…田淵晋400メートル個人メドレー2連覇。大槻枝美高飛込優勝。世界選手権…大槻枝美高飛込銅メダル	岩本亜希子ダブルスカル14位	小島茂之1000メートル予選落ち、400メートルリレー6位	稲田法子1000メートル背泳ぎ5位。田淵晋2000メートル個人メドレー予選落ち、4000メートル個人メドレー予選落ち	全日本選手権…村主章枝シングル優勝	
〈シドニー五輪〉						

平成14年度		野球…春秋連覇。和田毅は通算476奪三振。米式蹴球…初の甲子園ボウル出場	
※早稲田スポーツ編集長…佐藤健介		◎大学スポーツランキング◎ ①日大 176ポイント ⑥早大 92ポイント	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2位		2001.4 ~ 2002.3	
4位		2001.4 ~ 2002.3	
優勝		2001.4 ~ 2002.3	
3位 (④、②)		2001.4 ~ 2002.3	
箱根駅伝		2001.4 ~ 2002.3	
競走		2001.4 ~ 2002.3	
対抗戦		2001.4 ~ 2002.3	
ラグビー		2001.4 ~ 2002.3	
野球		2001.4 ~ 2002.3	
春		2001.4 ~ 2002.3	
秋		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	
2001.4 ~ 2002.3		2001.4 ~ 2002.3	

※早稲田スポーツ編集長…寿美陽介		◆ラグビー部グラウンドが上井草に移転	◎大学スポーツランキング◎ ①日大 155ポイント ③早大 121ポイント	2002.4 ~ 2003.3					
				優勝					
				優勝					
				優勝					
				15 位 (⑩、⑯)					
潜艇	米式蹴球	合気道	自動車	庭球	スキー	野球	ラグビー		
大学選手権…女子ダブルスカル2連覇、女子舵付クオドルプル優勝	関東選手権優勝。甲子園ボウル出場 (14—51立命大)	全日本学生…女子乱取団体優勝	全日本学生ダートトライアル…優勝	大学対抗…男子団体優勝	学生選手権…男子Ⅱ畠山陽輔複合優勝	六大学リーグ春秋連覇。和田毅リーグ通算476奪三振(歴代1位)	大学選手権…優勝 (27—22関東学院大。山下大悟)		
フィギュア	スキー	〈ユニバーシアード〉	フィギュア			競走	水泳		
荒川静香シングル金メダル	畠山陽輔複合団体金メダル		世界選手権…村主章枝シングル銀メダル			日本選手権…男子4000メートルリレー優勝	日本選手権…明部洋明100メートル自由形優勝		

平成15年度					野球部…史上初の4季連続優勝。フィギュア…荒川静香、世界選手権金メダル	
2003.4 ~ 2004.3					年度	野球
優勝					春秋	ラグビー
優勝					対抗戦	箱根駅伝
優勝					箱根駅伝	競走
16位 (⑮、⑯)					部	◆学生王者への戦い◆
競走	レスリング	漕艇	庭球	野球	戦績	
学生対校…男子Ⅱ篠浦辰徳 3000メートル障害優勝。400 メートルリレー優勝	大学選手権…佐藤吏フリー66キ 級優勝	大学選手権…女子ダブルスカル 3連覇、女子舵付クオドルプル 2連覇	学生選手権…宮尾祥慈・金山 敦思ダブルス優勝。学生室内… 宮尾祥慈・金山敦思ダブルス優 勝	六大学リーグ4連覇 (史上初。鳥谷敬、青木宣親)		
ア式蹴球			競走	漕艇	フィギュア	部
山崎さやか・渡辺真奈銀メダル			日本選手権…男子400メートルリ レー優勝	全日本選手権…女子舵付クオド ルプル優勝	世界選手権…荒川静香シングル 金メダル	戦績
			〈ユニバーシアード〉		◆日本一へ、世界へ◆	

2004.4 ~ 2005.3			平成16年度	水泳…三田真希、学生選手権で5冠（200メートル自由形、200メートルバタフライ、リレー3種目）	◆4月、体育局が改組され、競技スポーツセンター発足		
4位					◎大学スポーツランキング◎ ①日大 201ポイント ③早大 94ポイント		
3位							
優勝					※早稲田スポーツ編集長…茂野聡士		
11位（⑮、⑧）							
漕艇	水泳		ラグビー	水泳	スキー		
3連覇 4連覇、女子舵付クオドルプル 大学選手権…女子ダブルスカル	板飛込み、高飛込み優勝 400メートルリレー、400メートルメドレーリレー優勝。山下美沙子飛		（31—19関東学院大。諸岡省吾） 大学選手権…優勝 学生選手権…女子Ⅱ三田真希 200メートル自由形、200メートルバタフライ、三輪芳美100メートル平泳ぎ優勝。200メートルリレー、400メートルリレー、400メートルメドレーリレー優勝。山下美沙子飛	子飛板飛込み優勝 400メートルリレー優勝。山下美沙子飛板飛込み優勝	学生選手権…男子Ⅱ成瀬野生 スプリント優勝 学生選手権…男子Ⅱ崎本浩成 100メートル平泳ぎ優勝。女子Ⅱ三田真希100メートルバタフライ、200メートルバタフライ優勝。400メートルリレー優勝。山下美沙子飛		
ア式蹴球	競走	水泳	漕艇				
徳永悠平1次リーグ敗退	（アテネ五輪） 日本選手権…男子400メートルリレー優勝	日本選手権…三輪芳美50メートル平泳ぎ優勝	全日本選手権…女子舵付クオドルプル2連覇				

2004.4 ～ 2005.3					年度	平成16年度
4位					春	野球
3位					秋	野球
優勝					対抗戦	ラグビー
11 位 (⑮、⑧)					箱根駅伝	競走
フィギュア	スキー	競走	庭球	野球	部	◆学生王者への戦い◆
学生選手権…中野友加里シング ル優勝	学生選手権…男子Ⅱ関谷則和 30 ^キ 、薄井智行複合優勝。女 子Ⅱ大類美咲5 ^キ 、スプリント 優勝	学生対校…男子Ⅱ北村和也 100 ^{メートル} 優勝。400 ^{メートル} リ レー優勝	学生選手権…波形純理シング ルス優勝。学生室内…酒井祐樹シ ングルス優勝	田中浩康1、4年のリーグ戦全 試合出場	戦績	
		ショートトラック	スキー			部
		末吉隼人男子5000 ^{メートル} リレー 銅メダル。鵜沢真理子女子 3000 ^{メートル} リレー銀メダル。	薄井智行複合団体銀メダル	〈冬季ユニバーシアード〉		戦績
						◆日本一へ、世界へ◆
						◆学生選手権で5冠 (200 ^{メートル} 自由形、200 ^{メートル} バタフライ、リレー3種目)

水泳…三田真希、学生選手権で5冠(200^{メートル}自由形、200^{メートル}バタフライ、リレー3種目)

2005.4 ～ 2006.3		平成17年度	ラグビー…関東学院破って大学選手権2連覇、日本選手権でもトヨタ破って4強	※早稲田スポーツ編集長…斎藤健司		◎大学スポーツランキング◎ ①日大 210ポイント ②早大 134ポイント					
優勝											
2位											
優勝											
13位 (⑨、⑮)											
水泳		ラグビー		合気道	弓道	卓球	レスリング				
学生選手権…女子三輪芳美100メートル平泳ぎ優勝。200メートル平泳ぎ優勝。400メートル平泳ぎ優勝。山下美沙子飛板飛込み、高飛込み優勝		大学選手権…2連覇(41―5関東学院大。佐々木隆道)		学生選手権…女子団体優勝	学生選手権…男子団体優勝	大学対抗…団体優勝。学生選手権…中野祐介・下山隆敬ダブルス優勝	学生選手権…佐藤吏フリー66キ級優勝。大学選手権…佐藤吏フリー66キ級優勝				
競走		漕艇									
日本選手権…下平芳弘8000メートル優勝。男子4000メートル平泳ぎ優勝		全日本選手権…女子舵付クオドルブル3連覇、ダブルスカル優勝									

平成17年度									
2005.4 ~ 2006.3									
優勝									
2位									
優勝									
13 位 (⑨、⑮)									
卓球		ア式蹴球	庭球	漕艇	競走		部	戦績	◆学生王者への戦い◆
学生選手権…下山隆敬シングルス、下山隆敬・中野祐介ダブルス優勝		大学選手権…女子優勝 (2—1 東京女子体大)	学生選手権…成瀬広亮シングルス優勝。大学対抗…男子団体優勝。学生室内…成瀬広亮シングルス、江戸寛・前原健太郎ダブルス優勝	大学選手権…女子ダブルスカル5連覇、女子舵付クオドルブル4連覇	学生対校…男子Ⅱ下平芳弘800メートル優勝				
競争	ショートトラック		スキー	スキー		レスリング	部	戦績	◆日本一へ、世界へ◆
相川誠也、北村和也400メートル銀メダル	(ユニバーシアード)		成瀬野生15キロクラシカル42位、15キロ+15キロ59位、50キロ棄権	(トリノ冬季五輪)		全日本選手権…佐藤吏フリー66キロ級優勝			
	末吉隼人1500メートル予選落ち、5000メートルリレー失格			全日本選手権…成瀬野生50キロフリー優勝					

ラグビー…関東学院破って大学選手権2連覇、日本選手権でもトヨタ破って4強

合気道	ソフトボール	バドミントン	フィギュア	スケート	スキー	レスリング	
学生選手権…女子団体2連覇	大学選手権…優勝 (12—0 国際武道大)	学生選手権…平山優女子シングルス優勝	学生選手権…中野友加里シングル優勝	学生選手権…土井慎悟1500メートル優勝	学生選手権…男子Ⅱ成瀬野生スプリント、30 ^キ 優勝。40 ^キ リレー優勝。女子Ⅱ大類美咲10 ^キ 、スプリント優勝	学生選手権…佐藤吏フリー66 ^キ 級優勝。大学選手権…佐藤吏フリー66 ^キ 級優勝	
					ア式蹴球	体操	
					時久省吾、徳永悠平、兵藤慎剛男子金メダル 河田優、渡辺夏奈、岸星美、佐藤衣里子女子銅メダル	馬場亮輔男子団体金メダル	

平成17年度					ラグビー…関東学院破って大学選手権2連覇、日本選手権でもトヨタ破って4強	
年度	野球	ラグビー	競走			
2005.4 ~ 2006.3	春	野球	対抗戦	箱根駅伝		
	秋	ラグビー				
優勝						
2位						
優勝						
13位 (⑨、⑮)						
◎大学スポーツランキング◎ ①日大 211ポイント ②早大 158ポイント						
◆野球部・応武篤良新監督が就任、春のシーズンでいきなり優勝した。野球部はこの50年で9人の監督が就任しているが、そのうち5人が就任の春に優勝している。昭和39年石井藤吉郎、49年石山建一、54年宮崎康之、平成11年野村徹、17年応武篤良の各監督						
※早稲田スポーツ編集長…五島悠一						
剣道	フェンシング	ウエイトリフティング	自動車	部		
全日本学生…準優勝	学生王座…フルーレ優勝	大学対抗…女子団体優勝。 内史子75 [*] 超級、松本萌波58 [*] 級優勝	全日本総合杯…優勝	戦績	◆学生王者への戦い◆	
				部	◆日本一へ、世界へ◆	
				戦績		

2006.4 ~ 2007.3					平成18年度
2位					スキー…学生選手権で40年ぶり総合優勝。競走…男子リレーで日本選手権10連覇。 レスリング…佐藤史3年連続2冠
優勝					
優勝					
6位 (④、⑩)					
卓球	水泳	漕艇	庭球	スキー	
学生選手権…下山隆敬シングルス2連覇	学生選手権…女子400メートルメドレーリレー優勝	学生選手権…女子総合優勝。女子ダブルスカル6連覇、女子舵付クオドルプル5連覇	学生選手権…佐藤文平シングルス、宮村美紀シングルス、宮村美紀・木川由奈ダブルス優勝。大学対抗…男子2連覇、女子優勝。学生室内…男子2佐藤文平・小山慶大ダブルス優勝。女子福井恵実シングルス、宮村美紀・木川由奈ダブルス優勝	学生選手権…男子2総合優勝(40年ぶり)。成瀬野生10キ、木村正哉スプリント、松野尾佳吾スベシャルジャンプ、水口雄太大回転優勝。女子2大類美咲スプリント優勝。15キリレー優勝	
ウエイトリフティング	競走	フィギュア	水泳	漕艇	
全日本女子…城内史子75キ超級優勝	日本選手権…男子400メートルリレー優勝	世界選手権…中野友加里シングルス5位	日本選手権…崎本浩成50メートル平泳ぎ、三輪芳美50メートル平泳ぎ、北川麻美200メートル個人メドレー優勝	全日本選手権…女子クオドルプル4連覇、ダブルスカル2連覇。全日本軽量級…女子ダブルスカル優勝。女子総合優勝	

2006.4 ~ 2007.3					年度	平成18年度
2位				春	野球	スキー…学生選手権で40年ぶり総合優勝。競走…男子リレーで日本選手権10連覇。 レスリング…佐藤史3年連続2冠
優勝				秋	ラグビー	
優勝				対抗戦	箱根駅伝	
6位 (④、⑩)				箱根駅伝	競走	
				部	戦績	
レスリング	ハンドボール	フィギュア	ソフトボール	部	戦績	◆学生王者への戦い◆
学生選手権…佐藤史フリー66 120級3連覇。安田伊織グレコ …佐藤史フリー66級4連覇	学生選手権…準優勝	学生選手権…中野友加里シング ル優勝	大学選手権…女子優勝 (7-0日体大)			
ショートトラック	スキー	ボクシング	カヌー	部	戦績	◆日本一へ、世界へ◆
酒井裕唯3000メートルリレー銀メ ダル	高尾康平複合団体銅メダル	全日本選手権…大久保賢児ラ イトフライ級優勝	日本選抜…谷口和也カヤックシ ングル優勝			

ウエイトリフティング	ヨット	射撃	自動車	馬術	バドミントン	
大学対抗女子…団体優勝。 城 内史子75 ^キ 超級、松本萌波 58 ^キ 級、菊田裕子75 ^キ 級優勝	学生選手権…準優勝	学生選抜…町田京介50 ^{メートル} ライフル伏射優勝	学生運転競技…中島希光男子 小型貨物優勝	全日本障害馬術…佐藤泰中障 害D飛越優勝	学生選手権…平山優女子シング ルス優勝	

平成19年度		平成18年度	
	野球	2006.4 ~ 2007.3	年度
		2位	春秋
		優勝	野球
		優勝	ラグビー
		6位 (④、⑩)	対抗戦
			箱根駅伝
			競走
野球	相撲	ラクロス	合気道
春季六大学・斎藤佑樹、1年春の開幕投手デビュー。春開幕投手で勝ち投手(80年ぶり)。大学選手権優勝。田中幸長3冠王。	学生体重別・川端洋介3位	関東リーグ優勝	学生選手権・男子団体優勝、女子団体3連覇。塩沢一樹男子個人優勝、海浪麻由美女子個人優勝
水泳			スケート
優勝			学生選手権・若林勇太1000メートル優勝
			パレーボール
			大学選手権・男子3位
			戦績
			◆学生王者への戦い◆
			部
			戦績
			◆日本一へ、世界へ◆
			スキー・学生選手権で40年ぶり総合優勝。競走・男子リレーで日本選手権10連覇。レスリング・佐藤史3年連続2冠

2007.4 ~ 2008.3						
優勝						
優勝						
優勝						
2位 (①、③)						
漕艇	競走	卓球	ア式蹴球	ラグビー	庭球	
学生選手権…女子舵付クオドルプル6連覇、男子舵無ペア優勝	学生対校…江里口匡史1000m、竹沢健介5000m優勝	学生選手権…久保田隆三シングルス優勝。大学対抗…男子団体優勝(3-1青森大)。大学選抜…下山隆敬シングルス優勝	大学選手権…優勝(2-0法大)。兵藤慎剛、渡辺千真	大学選手権…優勝(26-6慶大。権丈太郎)	学生選手権…吉備雄也シングルス優勝、宮村美紀シングルス2連覇。大学対抗…男子3連覇、女子2連覇	
卓球	ボクシング	スキー	フェンシング	漕艇	フィギュア	
全日本選手権…照井萌美・福原愛ダブルス優勝。世界選手権…福原愛団体銅メダル	全日本選手権…大久保賢児ライトフライ級優勝	全日本選手権…男子チームスプリント優勝、女子クロスカントリリーレー優勝	全日本選手権…男子エペ団体優勝	全日本選手権…女子舵付クオドルプル5連覇、舵無ペア優勝。全日本軽量級…若井江利シングルスカル優勝	全日本選手権…中野友加里3位	

2007.4 ~ 2008.3					年度	平成19年度
優勝					春	野球…斎藤佑樹、1年生春の開幕投手デビュー。 春秋リーグ制覇、大学選手権も33年ぶり優勝
優勝					秋	
優勝					対抗戦	
2位 (①、③)					箱根駅伝	
ショートトラック	フィギュア	スケート	新体操	水泳	部	◆学生王者への戦い◆
学生選手権…古屋健吾1500 メダル優勝	優勝 学生選手権…武田奈也シングルの優勝	学生選手権…若林勇太1000 メダル、由井拓実50000メダル優勝	学生選手権…井上実美個人総合優勝	学生選手権…男子Ⅱ古賀淳也1000メダル背泳ぎ、藤井拓郎2000メダル個人メドレー優勝。女子Ⅱ北川麻美2000メダル個人メドレー優勝	戦績	
		フェンシング	水泳	卓球	部	◆日本一へ、世界へ◆
		松本瞳フルーレ団体銀メダル	古賀淳也50メダル背泳ぎ銀メダル	時吉佑一、下山隆敬団体銅メダル、照井萌美団体銀メダル	戦績 〈ユニバーシアード〉	

平成19年度					年度	野球	
2007.4 ~ 2008.3					春	野球	野球…斎藤佑樹、1年生春の開幕投手デビュー。 春秋リーグ制覇、大学選手権も33年ぶり優勝
					秋	ラグビー	
					対抗戦	箱根駅伝	
					2位 (①、③)	競走	
スキー		剣道	ウエイトリフティング	自転車	航空	部	◆学生王者への戦い◆
◆野球の六大学、ラグビーの対抗戦、競走の箱根駅伝が同一年度にすべて優勝というのはこの50年間、一度もない。この年は野球が春秋連覇、ラグビーが対抗戦7連覇、箱根駅伝も往路優勝を飾ったが、復路で逆転され、「3部完全制覇」の夢はまたしても潰えた。		全日本学生…高原和彦3位	大学女子選手権…松本萌波58 ^キ 級優勝	大学対抗…工藤薫・安福洋徳 タンデムスプリント優勝	全日本学生グライダー…団体優勝	戦績	
学生選手権…男子Ⅱ木村正哉10 ^キ 、30 ^キ 、柏原暢仁スプリント、宮本康希コンバインド優勝。 女子Ⅱ小林由貴10 ^キ 優勝。15 ^キ リレー優勝						部	◆日本一へ、世界へ◆
						戦績	

2008.4 ～ 2009.3			平成20年度	スキー…渡辺曉斗、世界選手権複合団体金メダル。 漕艇…女子舵付クオドルブル学生選手権7連覇	※早稲田スポーツ編集長…八木圭太	◎大学スポーツランキング◎ ①日大 165ポイント ②早大 152ポイント	
2位							
優勝							
2位							
2位 (②、②)							
漕艇	ラグビー	庭球		ソフトボール	合気道		
学生選手権…女子舵付クオドルブル7連覇	大学選手権…2連覇 (20—10帝京大。豊田将万)	学生選手権…吉備雄也・片山翔ダ ス2連覇。吉備雄也・片山翔ダ ブルス優勝。井上明里・シング ルス優勝、青山修子・川村美夏 ブルス優勝。大学王座…男子4 連覇、女子3連覇		東日本選手権…優勝 (10—1国武大)	学生選手権…女子武器演武優勝		
スキー		競走	水泳				
世界選手権…渡辺曉斗複合団体金メダル。全日本選手権…柏原暢仁クロスカントリースプリント優勝。男子団体スプリント優勝。小林由貴10 _キ 優勝。		日本選手権…男子4000 _{メートル} リレー優勝	日本選手権…北川麻美200 _{メートル} 個人メドレー優勝				

2008.4 ~ 2009.3					年度	平成20年度
2位				春秋	野球	スキー…渡辺曉斗、世界選手権複合団体金メダル。 漕艇…女子舵付クオドルブル学生選手権7連覇
優勝				対抗戦	ラグビー	
2位				箱根駅伝	競走	
2位 (②、②)				部	◆学生王者への戦い◆	
レスリング 学生王座…優勝 (4—3日体大)				戦績		
水泳 学生選手権…女子Ⅱ北川麻美 200メートル個人メドレー優勝				柔道	全日本学生…女子団体準優勝	
競走 学生対校…男子Ⅱ江里口匡史 100メートル、飯田将之110メートル 障害、堀池靖幸走り幅跳び優勝。 400メートルリレー優勝				部		
カヌー				部	◆日本一へ、世界へ◆	
ショートトラック 全日本選手権…酒井裕唯5000メートル優勝。桜井美馬1500メートル優勝				戦績		
漕艇 全日本軽量級…女子舵付クオドルブル優勝				軟式庭球	全日本選手権…塩崎弘騎・鹿島鉄平組優勝	
竹下百合子カヤックシングル4位				レスリング	全日本女子…中田絵理子59キロ級準優勝	
〈北京五輪〉						

ウエイトリフティング	自転車	軟式庭球	馬術	スキー			
大学女子選手権・松本萌波 8級優勝	大学対抗・チームスプリント優勝。工藤薫・岡本光由タンデムスプリント優勝	大学対抗・男子団体優勝（3—1日体大）	全日本学生・佐藤泰障害飛越優勝	柏原暢仁クロスカントリースプリント優勝。40キロレーン優勝。女子小林由貴10キロ、水口かおりスーパー大会転優勝		学生選手権・男子総合優勝。木村正哉30キロ、渡部暁斗複合スプリント、複合グランドセージン。	
フィギュア	アイス蹴球	新体操	卓球	水泳	競走		
武田奈也女子シングル銀メダル	(冬季ユニバーシアード) 吉田麻也1次リーグ敗退。安田理大1次リーグ敗退	坪井保菜美団体予選敗退	福原愛団体4位、シングルス4回戦	北川麻美100メートル平泳ぎ8位、200メートル個人メドレー6位、400メートルメドレーリレー6位、400メートルリレー予選落ち	竹沢健介5000メートル予選落ち、10000メートル28位		

2008.4 ~ 2009.3						年度	平成20年度
2位						春	野球 ラグビー 競走 ◆学生王者への戦い◆
優勝						秋	
2位						対抗戦	
2位 (②、②)						箱根駅伝	
弓道	航空	自動車	フィギュア	ヨット	バドミントン	部	◆日本一へ、世界へ◆
学生王座…女子団体優勝	学生グライダー…団体優勝	学生運転競技…中島希光小型貨物優勝。学生ダート…団体優勝。ジムカーナ…団体優勝。中島希光個人優勝	学生選手権…武田奈也女子シングル優勝	学生選手権…総合優勝	学生選手権…上田拓馬・嘉村健士ダブルス優勝、関谷真由シングルス優勝	戦績	
スキー						部	◆日本一へ、世界へ◆
畠山長太複合団体金メダル、複合個人銀メダル。柏原暢仁クロスカントリースプリント銀メダル。木村正哉・立崎幹人クロスカントリーリレー銀メダル						戦績	

スキー…渡辺曉斗、世界選手権複合団体金メダル。
漕艇…女子舵付クオドルブル学生選手権7連覇

2009.4 ～ 2010.3		平成21年度	水泳…古賀淳也、世界選手権1000メートル背泳ぎ金メダル。 競走…江里口匡史は日本選手権、学生対校1000メートル優勝		※早稲田スポーツ編集長…二敷晃成	◆野球部主将・上本博紀は1年春からレギュラー出場、4年秋まで全試合フルイニング出場した。4年先輩の田中浩康も全試合に出場している。他の部では、ラグビー部・本城和彦（昭和58年卒）が4年間、対抗戦、大学選手権等の公式戦全試合（43試合）に出場した	◎大学スポーツランキング◎ ①早大 167ポイント ②日大 142ポイント	
2位								
競走		庭球	卓球	合気道	日本拳法	フェンシング		
学生対校…男子Ⅱ江里口匡史100メートル、有間佳一郎十種競技、笹瀬弘樹棒高跳び優勝。400メートルリレー優勝。女子Ⅱ桑原千紘400メートル、紫村仁美1000メートル障害優勝。16000メートルリレー優勝		学生選手権…男子Ⅱ片山翔男子シングルス優勝、佐野紘一・富崎優也ダブルス優勝	関東学生リーグ…男女団体優勝。女子は史上初	学生選手権…女子乱取団体、徒手演武優勝	学生選手権…中川翔太優勝。東日本選手権…女子団体優勝	学生選手権…寺本朋代フルーレ優勝。大学対抗…男子エペ団体優勝		
競走		水泳						
日本選手権…江里口匡史1000メートル優勝		日本選手権…古賀淳也50メートル、1000メートル背泳ぎ優勝。北川麻美2000メートル個人メドレー優勝。世界選手権…古賀淳也1000メートル背泳ぎ金メダル、50メートル背泳ぎ銀メダル						

2009.4 ~ 2010.3				年度	平成21年度
2位				春	野球 対抗戦 箱根駅伝 部 戦績
4位				秋	
				ラグビー	
				競走	◆学生王者への戦い◆
				競走	
				競走	
ウエイトリフティング				部	◆日本一へ、世界へ◆
柔道				部	
自転車				部	
漕艇				部	◆日本一へ、世界へ◆
学生選抜…平原孝人男子85 ^キ 級優勝。学生選抜…和田大河 69 ^キ 級優勝。前田咲野子48 ^キ 級優勝				戦績	
全日本学生…女子団体3位				戦績	
学生選権…佐々木龍4000 ^メ 個人追抜優勝				戦績	
学生選権…女子総合優勝。 女子舵付きクオドルブル8連覇				戦績	
水泳				部	◆日本一へ、世界へ◆
レスリング				部	
漕艇				部	
古賀淳也50 ^メ 背泳ぎ金メダル、 100 ^メ 背泳ぎ銅メダル。北 川麻美200 ^メ 個人メドレー、 400 ^メ リレー銀メダル				戦績	
全日本女子…西のどか48 ^キ 級 3位				戦績	
全日本選権…女子舵付きクオド ルブル優勝。全日本軽量級…女 子舵付きクオドルブル優勝				戦績	

※早稲田スポーツ編集長…中島直樹 ◆ラグビー部が初の大学選手権3連覇に挑む。これまで40、41年度、45、46年度、48、49年度、平成16、17年度と2連覇は4度あるがいずれも3連覇がかかった大会では決勝で敗退している。大学選手権3連覇は57、59年度の同大のみ						
少林寺拳法	ホッケー	馬術	アーチェリー	レスリング	水泳	
競技スポーツセンター加入。関東学生…大岡史弥・浅利圭介3位	男子関東リーグ…優勝。 東日本学生女子…優勝 (2—0駿河台大)	関東学生…障害飛越団体優勝	女子学生王座…3位	学生選手権…藤元洋平55 ^キ 級、石田智嗣66 ^キ 級優勝	学生選手権…男子IIメドレーリレー優勝。女子II星奈津美100 ^メ 、200 ^メ バタフライ優勝	
		ア式蹴球	卓球	庭球	競走	
		中川裕平男子銅メダル。高畑志帆、島田知佳、小野瞳、小山季絵、臼井理恵、大滝麻未女子銀メダル	照井萌美シングルス、ダブルス、団体銅メダル	青山修子ダブルス銅メダル。井上明星コンソレーションシングルス金メダル	江里口匡史100 ^メ 銅メダル	

エピソード

『早稲田スポーツ』の歴史には、伝えたい宝物が富士山ほどもあった。しかし、編集の時間と能力は小山ほどしかなかった。そのために置き去りにしたままの宝石類が、まだ、無尽蔵にある。今回の書籍が、宝物をさらに掘り起こす手がかりになってくれればと、後進に託すばかりだ。

社史、校史、部史の類は、どれを見ても初期の頃がおもしろい。そして、「迷ったら原点に戻れ」というビジネス格言があるくらいだから、「昔話」には、いまに生かすべきヒントが多々あるはず。創刊の頃にページを割いた理由でもある。

編集前には、できるだけ多くの運動部を取り上げようと構想していた。ところが、いざ進行的してみると、とてもその余裕はなく、年表で紹介するのが精一杯だった。その点で、失望される運動部、新聞会OBの方も多いのではないかと思う。非力ゆえの限界とお許しいただきたい。しかし、今回ほど詳しい早稲田のスポーツ年表は、おそらく存在していないだろう。なにかにつけ、利用価値の高いものではないかと自負している。

第二部は、年数的に第一部の4倍ほどあるため、あまり細部を追わず、早スポ部員と取材活

動のつながりを時間の経過に沿って展開した。一部と構成が違うゆえんである。

第一部では、(因)縁を感じさせる場面がいくつかある。本文では書ききれなかったが、早スポOBには、縁が絆にまで深まっている人間関係があるように思う。絆を持ち出すとは、なんと古臭いと忌避する人がいるかもしれない。しかし、厳しく、激変する社会で、古い組織(会社)が生き延びている最大の理由は、組織内の人たちがある種の絆で結ばれているからではないか。日本人が言葉にする絆には、心、志が含まれている。絆にあたる英語、BOND(S)は契約、接着剤の意味合いが強く、絆のニュアンスは表現できない。欧米お手本のベンチャー企業が、少し逆風が吹いただけで、いとも簡単に崩壊していくのは、人が、志という絆ではなく、金銭や利害関係で接着されているだけだからだ。利害やエゴのない、志でできた絆ほど強いものはないと思う。

人間形成のうえで、最も大切な大学時代を、同じ志で過ごした仲間がいることは、実には、得たいものだ。早稲田スポーツ新聞会が、さらに永続していくために、たまたまの縁が絆になっていくような人間関係を社会に出ても築いていくことが必要かもしれない。

記憶は嘘をつくという。10年もたてば、記憶は美化され、誇張され、あるいは矮小化され、やがては風化してしまう。一代、30年前の記憶など、誰も正確には呼び出せない。この50年史を編集しながら、「記憶は嘘をつく」の真実を何度も味わった。疑問が残りながら、検証しきれなかった部分もこの本にはある。だから、記憶に残すのではなく、記録に残しておくこと

が大切なのだと改めて思う。

第一部には、「故人」、「没」、という文字がしばしば出てくる。この文字を見るたびに、50年の長さとしさを感ぜずにはいられなかった。実は、ここまで書いてこなかったが、創刊編集長だった松井盈も07年に、66歳で亡くなっている。50周年を見届けられなかったのはさぞかし無念だろう。松井は40周年記念誌に、こんな思いを残している。

『『燈々無尽』(ローソクの灯火を絶やさぬよう先輩から後輩に、親から子へ、子から孫へと受け継がれるという意味)の気持ちを忘れずに『早稲田スポーツ新聞』が継続されるように心から念願する次第です』

『早稲田スポーツ』も、すでに子の代は過ぎ、孫の代に入ろうとしている。

4人でスタートし、6人で創刊した『早稲田スポーツ』も部員が1000人を超える大所帯になっている。やがて100周年を迎えるときは、この50周年の節目に立ち合った2009年在籍組の129人が、自分たちの「古い」歴史を伝えることになるだろう。

50周年を機に、若い人たちは伝えるべき歴史をいまからしっかり記録しておいてほしい。

さて、いまから100年史が楽しみだ(生きてないって)。

【2009年卒(48期)】17名

伊藤奈緒美(政経)、大倉麻美(一文)、長田洋平(教育)、釜谷美穂(一文)、菊地梨絵子(二文)、

寒河江真奈(商)、千田幸平(一文)、富永俊矢(社会学)、服部愛子(スポ科)、濱中征司(政経)、藤田絢子(スポ科)、堀和彦(人科)、本間裕二(政経)、八木圭太(教育)、山田崇代(スポ科)、山田豊(社会学)、渡邊りさ(一文)。

【4年(49期)24名】

青木現(教育)、坪萌奈(スポ)、飯田唯(スポ)、石川祥子(スポ)、今泉博敬(政経)、藤咲耶(文)、小早川啓介(二文)、斉藤純(文)、坂本香織(法)、篠田将成(理工)、菅田早希(スポ)、菅原輝波子(スポ)、田中友恵(商)、千葉亮太(政経)、二敷晃成(スポ)、西村佳恵(社会学)、平野麻理子(政経)、松浦哲也(文)、水上大輔(法)、峰村晴香(教育)、宮沢直樹(文)、本木秀明(スポ)、本濱遙(スポ)、山本崇敬(文)。

【3年(50期)16名】

一橋孝顕(教育)、伊藤元輝(法)、稲葉友美(教育)、岡野宏美(基理)、亀本勇也(政経)、小島恭介(文構)、小南祐太(教育)、関口香奈子(文)、高井伸彰(教育)、高杉沙樹(スポ)、中島直輝(教育)、中根祐樹(政経)、林修史(文構)、見村恭央(教育)、村上万純(スポ)、矢崎佐代子(桜美林大)。

【2年(51期)31名】

池谷優憲(政経)、大坂尚子(文)、沖瀧めいアリスン(文構)、大賀愛理沙(文構)、春日みわ(人科)、金子真也(文構)、神戸恵(文構)、菊池瑞(政経)、佐々木智美(社)、島田崇弘(政経)、高森静香(政経)、竹内宏介(政経)、竹内悠(政経)、田村航平(法)、地原星太郎(政経)、塚本一成(政経)、

辻佳亮(法)、中丸明日香(政経)、中村尚(人科)、西尾貴仁(商)、能智春花(政経)、萩尾仁(政経)、長谷部翔大(政経)、原敬寛(文構)、平尾梓(文)、堀彩香(政経)、前納拡(文)、村木友美(人科)、森野穰(文構)、山口俊大(政経)、山中太裕(スポ)。

【1年(52期)41名】

伊沢浩志(人科)、伊野香澄(政経)、岩崎光紀(創理)、植田伸也(教育)、内海裕子(政経)、及川侑子(政経)、大賀慎也(文)、尾崎睦(社)、梶川奈々子(文構)、片貝早輝子(政経)、葛宮亜未(教育)、亀井未希(文)、金賢智(政経)、隈井達也(社)、郡司輝彦(スポ)、河野祐樹(政経)、近藤裕也(商)、佐藤啓太(政経)、柴崎望美(社)、島田貴弘(教育)、杉山幸美(文構)、高崎皓輔(政経)、高畑章(政経)、谷口奈津希(スポ)、田端亮介(政経)、千葉太一(教育)、戸張遥(文構)、奈良圭(教育)、半澤孝至(商)、日南亜依子(政経)、福田士朗(商)、藤井海(教育)、堀部遥(社)、巻幡美穂(国教)、真下信幸(政経)、峰岸史織(人科)、森絵里花(文)、森美咲紀(教)、矢内雄真(政経)、山崎晴香(政経)、渡部拓真(スポ)。

『早稲田スポーツ』は、旧体育局、競技スポーツセンター、各運動部の先輩・現役のみなさん、広告主の方々、神奈川新聞社、日刊スポーツ印刷社をはじめとして多くの人たちの支えがあって50年の歴史を刻むことができた。心から感謝申し上げます。

また、創刊のとき全面的にご協力いただいた板野寿夫(69年没・61歳)、安井俊雄(83年没・82歳)

氏ははじめ、清原健司(77年没・59歳)、大西鐵之祐(95年没・79歳)、日比野弘、宮内孝知の歴代早稲田スポーツ新聞会会長の各氏には、感謝の意を表しきれないほどのご指導とご尽力をいただいた。改めて心からの御礼を申し上げたい。指導者に恵まれていたというのも『早稲田スポーツ』の大きいなる幸せであり、財産であろう。

2009年11月14日

『早稲田スポーツ』50周年記念書籍刊行委員会

江口 拓(66年卒)、児玉恵司(82年卒)

中本顕二(83年卒)、清水岳志(88年卒)

* *

引用などは、必ずしも原文のままではありません。文脈がわかりづらいところ、明らかな誤字、不適切な表現、事実に反する部分、使用法の間違いなどは訂正しました。また、基本的なデータは過去の『早稲田スポーツ』に依っているため、そこに間違いがあるとチェックしきれない部分があるかもしれません。お気づきの点がありましたら、早稲田スポーツ新聞会まで、お知らせください。なお、文中の敬称は略しましたので、ご了承ください。

「早稲田スポーツ」の50年

学生たちは大学スポーツをどう伝えてきたか

『早稲田スポーツ』50周年記念書籍刊行委員会

2009年11月14日第1刷発行

発行者—早稲田スポーツ新聞会

〒162-0052 東京都新宿区戸山1-24-1
早稲田大学学生会館

電話 (03) 3207-9829

デザイン——有限会社ネオドゥー（若月清一郎）

印刷・製本——モリモト印刷

禁無断転載・複製

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

ISBN978-4-9904941-0-0